

文化庁委託事業報告書

東日本大震災において危機的状況が
危惧される方言の実態に関する調査研究
(岩手県)

別冊・被災地の言語文化資料

平成 25 年 (2013 年) 3 月

文化庁委託事業報告書
東日本大震災において危機的状況が
危惧される方言の実態に関する調査研究
(岩手県)
別冊・被災地の言語文化資料

目 次

第Ⅰ部

『釜石 須知ナヨさんの語る昔話』…………… 1

第Ⅱ部

『白濱とも子さんの聞き伝える 山田の伝説と昔話』…………… 67

第 I 部

『釜石 須知ナヨ氏の語る昔話』

まえがき

須知ナヨ氏は、昔話の語り手として高名な菊池力松氏の末娘として、昭和六年五月に遠野に生まれた。姉たちには、やはり語り手として全国に知られる鈴木サツ氏、正部家ミヤ氏、菊池ヤヨ氏がいらっしゃる。姉たちと同様に、幼少時代は父の力松氏から昔話を聞かされて育った。十六歳の頃に釜石の須知家に養子に入られ、後ろ髪をひかれる思いで遠野を後にした経緯については、石井正己氏の『昔話と観光—語り部の肖像—』（平成二四年・三弥井書店）に詳しく記されている。

家庭の中で子供に昔話を語って聞かせることはあったものの、姉たちのような語り部としての活動をするのではなく、煙草販売関係のご家業にいそしんでおられたそうだが、ある時、姉たちが遠野の語り部であることが広く知れてしまい、その時から釜石での語り手の活動が始まった。

「釜石民話の会」での活動を経て、現在では、昔話を語り伝える「漁火（いさりび）の会」のリーダーとして、娘時代に遠野から持ち伝えた話を中心に、六十年以上に及ぶ釜石での暮らしの中で出会った話を加えて、語り手としての活動を続けておられる。震災後には、仮設住宅を訪問して昔話を語るボランティア活動にも熱心に取り組んでいらっしゃる。

また、この間に、ご自分の語っていらした多くの話を、味わい豊かな地域方言による語り口もそのままに、二冊のノートに書き溜めてこられた。この報告書は、そのノートの内容をもとに、須知さんの語り口を反映させ、地域の言語資産としてあらためてまとめさせていただいたものである。連想をたどって次々と関連したお話が展開していくので、あえて話順の整理はしなかった。

また、他地域の方にはわかりにくいかもしれないが、すべての表現を須知さんの語る地域方言そのままで表記した。厳密にいうと須知さんは遠野出身だが、六十年も過ぎすとやはり釜石弁に染まってきているという。また、その昔に「遠野郷」というときは、遠野だけでなく、大槌や釜石まで広く視野に入れた呼称であったことは、柳田国男『遠野物語』所収の地図によっても知ることができる。広く一つの文化圏を構成しているということができよう。

地域の言葉は地域の文化を支える重要な柱であって、須知さんの語り伝える昔話においては、昔ながらの地域の言葉で物語が次々と紡ぎ出されていく。地域の言葉が次世代にむけて継承されていくためには、地域に暮らす方々が地域の文化について、自分たちの言葉で語ることをやめないことが前提となる。地域の言葉は、言葉だけで存在するのではなく、言葉を語って何かを伝えようとする地域の人たちの活動があって、はじめて存在することができる。昔話を語るという活動は、地域言語を次世代に継承するに当たって、あたかも肥沃な土壌の役割を果たしているように思われる。

いまはインフラや産業の復興が最優先されるときだが、やがては心の復興が地域の課題となる日が来ることであろう。昔話の語りの伝承活動が、釜石の未来に明るい光を投げかけることを願ってやまない。

（岩手大学 大野眞男、 国立国語研究所 竹田晃子）

[付記]

本報告書に収めた昔話は、すべて須地ナヨさんが語り伝えてきたものである。今回、平成二十四年度文化庁委託事業「東日本大震災において危機的な状況が危惧される方言の実態に関する調査研究（岩手県）」に御理解をいただき、事業報告書別冊・被災地の言語文化資料として大野・竹田が編集させていただいた。本報告書から転載等をされる場合には、その旨を明記されるようお願いする。

なお、昔話という資料の性格上、現代社会では差別的にひびきかねない表現も一部にあるが、方言や語り口を含めて継承されてきた言語伝承を尊重し、そのまま記録した。

- 一 貧乏神ど福の神
- 二 上方テンポ
- 三 豆穀太鼓
- 四 くも息子
- 五 笛吹峠
- 六 わらすど地藏さま
- 七 東禅寺の大釜
- 八 川うそど猿
- 九 馬ふん三つ
- 一〇 尻かき歌
- 一一 猿地藏
- 一二 糠餅ど地藏さま
- 一三 河童淵
- 一四 指勘定
- 一五 鼻の無(ね)い男ど髪が無え女ご
- 一六 寒戸の婆さま
- 一七 食わず女房
- 一八 猿ど蟹の餅つぎ
- 一九 豆腐どこんにゃぐ
- 二〇 三人旅
- 二一 極楽見で来た婆さま
- 二二 出雲の神さま
- 二三 かつこうとほととぎす
- 二四 あてがはずれだ占い師
- 二五 正直親子ど泥棒
- 二六 一つ覚え
- 二七 不思議な掛け図
- 二八 和尚さまどネゴ
- 二九 法話
- 三〇 貧乏な木こり
- 三一 古ギツネ
- 三二 鶴の恩返し
- 三三 うぐいすの一文銭
- 三四 禅問答
- 三五 言葉のきたねえ娘
- 三六 ウグイスの声
- 三七 雉子娘
- 三十八 白蛇と八雲伝説
- 三九 迷い家
- 四〇 古屋の漏り

- 四一 貧乏神と福の神
- 四二 河童の証文
- 四三 上河原淵(わっからぶち)のカッパ
- 四四 穴淵の犬
- 四五 なげーなげー綱っこ
- 四六 うり子姫子
- 四七 海の水はなぜ辛い
- 四八 竜神のお告げ
- 四九 毒梨
- 五〇 観音さまのお授けのへら
- 五一 せやみ
- 五二 種なし柿
- 五三 片輪の十五夜
- 五四 メガネどカミソリ
- 五五 上の爺ど下の爺
- 五六 お月お星

一 貧乏神ど福の神

むが一す、あつたずもな。

あるどごに、なにもかにも、夫婦仲のごど良（い）がったつずが、あまり稼ぎたぐもねえ夫婦まり、居だつたど。

その家に、とつても、いい息子、居だずもな。

そして、ある時、お嫁さん、もらつて来だずもな。

さあ、そのお嫁さん、なにもかにも稼ぐお嫁さんで、家の中の掃き掃除がら、何がらかにまで、一生懸命稼ぐお嫁さんだつたずもな。

ある時、神棚掃除しだどごろ、まるつきりホコリだらけの物、ボタッと降（お）つて来たんだど。

「アヤー、これえ、なんだべなあ」ど思つて見だどごろ、モコモコど、動いたんだど。ネズミでもねえ、なんだべなあど思つて、「お前さん、ほだら、なんだます」つて聞いて見だど。

そしたどごろ、「俺、この家さ、長ぐ住みついでだ貧乏神だ」つて言つたずもな。

その嫁ご、たんまげだど。

「そんだら、いつのあたりがら住んでました」つて言つてば、「いやー、俺え、先祖代々がら住み付いでだども、これくらい住みやすいどご、ねかつたます」つて言つたど。

「神棚の掃除はすねえ、くもの巣だらけのどごで、だまつて今までくらすて来た。ほだども、お前、来てがらどいうもの、俺え、居つとご無ぐなつた。

見ろ、これえ、くもの巣はねえ。ホゴリは一つもなぐなつた。俺え、居つとごなぐなつたがら、そろそろ、どごさが出はつて行くべがなあど思つてよ」つたずもな。

そしてば、その嫁ご、とつても気のやさしい嫁ごだつたずがら、「なんだら、今まで先祖代々、そごさ住み付いでいだもの。俺家（おらえ）の守りの神さまなんだがら、今まで通り、どうが、こごさお住みやつておくれんせ」つて、神棚さほごり払つてがら、上げだずもな。

そしてらつたずが、ある年の正月、神棚掃除すべがなあど思つたどごろ、神棚の中がらピガピガど、後光がさしてる福の神さま、居だつたど。

「アヤ、いづがら福の神さま、こごにお出んしたつたど」。

そしてば、その福の神さま、ニカニカ笑つて、

「いいや、俺、お前に助けられで、こごさ拾つて上げられだ貧乏神だ。そだども、あんなに皆して稼ぐす、こんな家に、今までの姿でとつてもいかねで、この通り福の神さまに姿変えだがら、なじよにが、今まで通りおいでけろ」つて言つたんだど。

そごで、先祖代々住み付いでだ貧乏神さまが、福の神さまになつて、それがら孫末代まで、その家を守り栄えだんだどさ。

ドンドハレ

二 上方テンポ

むが一す、あつたずもな。

上方に、なにもかにも、空（から）ボンガ（大ぼら）吹ぐ男、あつたずもな。

どごさが行って、誰がど腕くらべして見でかつたど。そして、その男、東北たでで（目指して）、来たずもな。

そしたどごろ、盛岡に、で一ほ一でい（たいした）空ボンガ吹ぐ男、居ること聞いた。

その男、そごさ行つたずもな。

そして「誰それ、居だべが」って言つてば、中がら、ぺえこな女ごわらす出はつて来たがら、その上方テンポ、「じえじえ、親父、居だが」ってば、

そのわらす、「俺家の親父が」つたずもな。

上方テンポ、「うん親父よ」ってば、そのわらす「俺えの親父、今、岩手山、転ぶどごだつて、苧がら三本持つて、つっぱりけさ行つた」つたど。

上方テンポ、「そんだら、おふぐろ、居だが」ってば、

そのわらす、「ああ、俺家のおふぐろ、海の水越えるどごで、鍋のふた持つて行つたや」。

上方テンポ、この腐れがぎど思つて、俺れも大きな、空ボンガ吹ぐ気になつて、「そんだら、お前しらねが」つたど。

そのわらす、「何よ」つたど。

上方テンポ、「この間の大風吹きに、奈良の大仏の釣り鐘飛んだずが、どごさ飛んでつたが知らねが」つたど。

そしてば、そのわらす、「ああ、あれだな」つたど。

「俺家の前の、梨の木の蜘蛛の巣さ引つかがつて、四半日鳴つてらつたが、どごさが、飛んでつてすまつたや」つたずもな。

さあ、その上方テンポ、「こりゃ大変だど思つたど、こなな、ぺえこなわらすでせい、こんなに空ボンガ吹ぐもの、親父だのおふぐろに会つたら、何言われつかほでねえ（わけがわからない）ど思つて、会わねで帰つたんだどさ。

ドンドハレ

三 豆殻太鼓

むが一す、あつたずもな。

あるどごに、豪家な百姓家があつたんだど。

そごに先妻の子ども、後妻（アドガガ）の子ども、美ぐす娘っ子二人、あつたずもな。

常に、そのまま母、先妻の子ども憎くつて憎くつて、なんとがして、こらしめでやりていど思つてらつたずども、何も出来ねくつていだつたずが、春になつて、豆蒔ぎ時になつたずもな。

そして、それ大農家だがら、ケヤド（道路）分げで、片方に何町歩、又、片方にも何町歩どいう大きな畠、あつたんだど。

それで、そのがが（母）さま、われ娘さ蒔がせる豆は、立派な豆、先妻の子どもに蒔がせる豆は、一晚ががりて、その豆えらんだんだど、おえね（生えない）ように。そして、何町歩だかの畠さ植えさせだずもな。

そして、あどががの娘のは、立派な豆だがら、みんな芽コ出だんだど。
とごろ、先妻の子の蒔いだ豆、いっこう芽コ出ねがったずもな。
その内に、どうゆうはずみだったんだが、たった一本芽コ出だんだど。
その、たった一本出だ豆の木が、大きくなるが、なるが、なって、その同じ反別さ蒔
いだ、あとががの子の穀数ど、その一本の豆がら取れだ穀数が、同じだったどさ。
それを記念して、その一本の豆がらを胴にして、豆殻太鼓どして作ってあるずごと聞
いたが、誰も見ただごどねあんだどさ。
ドンドハレ

四 くも息子

むが一す、あったずもな。
あるどごに爺さまど、娘ど、居だったずもな。
その家、なにもかにも貧乏だったんだど。
そして、爺さま、毎日山さ行って、木切ったり、青物取ったりして、町ちゃ持ってっ
てがら、それ売って、暮らす、立ででだずもな。
ある年の春だったずが、その爺さま、風邪引いですまっただずもな。
山さ行げなぐなっただがら、娘、かわりに山さ青物取りさ行っただずもな。
そして、一生懸命、わらびだの、蕨だの、取ってらったずが、そごさ、立派な、えな
様来て、その嫁さ、「何してら」って声かけたずもな。
娘、「爺さまの代わりに青物取ってら」って言ったんだど。
そしてば、そのえな様「そんだら、その青物取ったの、なじよにする」って聞いたず
もな。
その娘、「これ、町さ持ってっ、売って、米だの味噌、買って来る」。
そしたどごろ、そのえな様、「それ売った銭っこ、なんぼになる」って聞いたずもな。
その娘、「そうだな、十五文か十六文になる」ったど。
そしてば、そのえな様、「それぐれいの銭っこば、俺れ、けっから、俺れど、話っこす
ねが」。
なんと、立派なえな様だがら、おもせがったずもな。
話っこ、すてらったずが、いづの間にな、腹っこ、大きくなっただど。
なにもかにも、その娘、たまげたずもな。
そのえな様さ、「俺、腹こ大きくなってすまっただや」ったずもな。
そしたどごろ、そのえな様、「そうが、えがった。俺、はじめがら、望んでらったぢや。
俺、本当の事、蜘蛛（くも）だ。人でねえ。ほだがら、生まれだ童子、大事におがせ。
かならず、お前達の役に立つはずだがら」って、しゃべったったずが、
大きな蜘蛛になって、のそ、のそど、山さ入って行がれだんだど。
その娘、たまげてすまって、泣きながら、家さ来たずもな。
そして、爺さまさ、しゃべったど。
娘、「大事に育てろって、しゃべられだ。」だど。

爺さま、「ほならば、大事におがす（育てる）べす」。
そして、生まれで来るわらす、待たずもな。
生まれで来たんだど。
そうしたごころ、上半分は人だったずが、下半分は、蜘蛛息子だったんだど。
たまげたずもな。
ほだとも、「大事におがせて言われでるがら、大事におがすべす。」って、爺さまに
しゃべられるがら、大事におがすてらど。
そして、その童子、十（とお）ぐれいになった頃、その爺さまさ、「爺さま、爺さま、俺、
手仕事していがら、上り口さ穴っこ付けてけろ」ったど。
その上り口の穴さ入れば、人なんだど。
下半分は蜘蛛なために、そして、そこさねまって（座って）、爺さまがら木っばず、も
らって、しゃぐす作ったり、へら作ったりして、皆さ、けだずもな。
ある時、おもちゃも作ったんだど。
そして、辺りのわらすどさ、けだずもな。
親達も喜ごんで、なんだりかんだり、持って来るようになんたがら、なんぼか暮らす
も、よぐなつて来たずもな。
そうしたごころ、村一番の長者どんの娘、病気になってすまんたんだど。
それ医者だ、占い師だつて頼んでも、ながなが治ねがったど。
長者どんでも困って、「なじよにしたらいがんべ、病むに病むす」。
そしたらごころ、クモ息子、「ハハア」って、聞いてらったずが、「向げい山のわきさ
行つて見れば、岩と岩の間がら水わいではずだ。その水、汲んで来て、その病んで
るどごさ付けたり、娘さ飲ませれば、あの病気、治るがな」ったんだど。
なんと、それ聞いた、辺りの人達、「どごに、あの化げ者息子、なにおぼえで」って、
しゃべったずども、長者どんの旦那さま、藁をもつかむ気持ちながら、
使いの者やつて見だごころ、本当に蜘蛛息子がしゃべった通り、岩ど岩の間、水っこ、
チョロチョロ、流れでいだんだど。
使いの者、その水汲んで来て、娘の痛いどこさ付けたり、飲ませだごころ、その娘、
たちごころに治ったんだど。
長者どんで、たいした喜んで、「いいこど教えでもらった」。
そして、娘もたちまず元気になったので、どっさりお礼を持って来たんだど。
それ聞いた人達まで、なんたら当たるべ、さあ、次がら次ど、近郷近在まで聞き付け
で、そして、蜘蛛息子のおがげで、長者をしのご金持ちになったんだどさ。
ドンドハレ

五 笛吹峠

むが一す、あつたずもな。
遠野がら釜石さ越える峠に、笛吹峠あるが、そごあ、青笹のず一つと山奥で、むがす、
その山のふもどに、一軒の百姓家、あつたずもな。
その家に、なんともやれねえ（言われぬ）、めごけえ男わらすっこ、あつたつたど。

そのわらすっこあ、なにかにも稼ぐわらすっこで、朝間（あさま）早ぐ起ぎで、そこえらの掃き掃除がら、馬屋のごどがら、馬のごどまで、一人すて稼ぐんだど。

さあ、隣あたりの人達あ、それ見で、「なんたら、めごけえわらすっこだべ。なんたら稼ぐわらすっこだべ。」って、ほめるんだど。

そだども、そのわらすっこあ、家の人達がらは、いっこ（一向）褒められだごど、ながったんだど。

それ、なにしてがってば、そのわらすっこ、ままっ子だつたど。

ままっ子だがら、なんぼ稼いで、なんぼええごとしても、いっこ褒められねがったど。

ほだがら、つまらねえような、おもしろぐねえようなつら（顔）っこぼり、してらつたが、そだども、そのわらすっこ、たった一つ、楽すみあつたがな。

笛っこ吹ぐのあ、なにより好きで、上手で、山さ行くどぎも笛っこ吹いで、そして、喜んでいらずもな。

また、そのわらすっこの、笛っこ吹ぐどぎのつら（顔）っこたら、なんとも言われねえ、めごけがたつたがな。

好きだす、上手だず、なんとも言われねえ、めごけがたつたど。

隣あたりの人達、「なんたら上手だべ、なんたらめごけがべ」って、ほれるんだど。

そごのごげがが（継母）、わらすっこ、ほめられれば、ほめられるくれない、そのわらす、えらすぐながた（にくたらしかた）ずもな。

なんたにがしてしめえてがたつたど。

そしてらつたが、秋も半ばすぎで、草っこも色っこつぐ、木の葉さも色このつぐあたりだつたが、そごのごげがが、そのわらすっこさ、「これあ、これあ、このわらすっこ。今に、雪なんど降って来れば、馬さ腹いっぺい草も食せられねが、今の内に山さ馬引っぱって、馬さ腹いっぺい草食せでこ。」って言たつたがな。

そのわらすっこ、返答一つもすたごどのねえ、わらすっこだがら、「はい」って、まや（馬屋）がら引っぱり出して、山さ上がつたがな。

そーすつと、そごのごげがが、そのわらすっこの後姿見で、「よーす、殺すどぎ、今だ」ど、思たつたがな。

そして、家の中さ走せごまって入って、火打ず石持って、そのわらすっこのあど追つて、上がつたがな。

そのわらすっこ、山さ行き着いでがら、それ、木の葉こ赤ぐなつたり、草も色付ぎころだがら、「どごがに、うまそうな草、ねべが」ど思つて、そつつ見、こつつ見すて、ようやく青えどご見つけで、馬っこ放して草食せで、われ、そばで笛っこ吹き始めだつたがな。

そーすつと、そごのごげがが、その童子のあど追つて、山さ上つて来て、その笛っこ目当てに、四方がら、火、付けだつたがな。

そしたどごろ、萱野さ火付けだもの、めらめらど燃えだもんだがら、そのわらすっこ、「山火事だ。まんつ、俺、ここで笛っこ吹いでれば、誰が助けさ来てくれる人もあるごつた」ど思つて、一生懸命吹いだずども、誰も助けさ来る人、居なくつて、そのまんま、わらすっこ、笛っこ吹きながら、その山で火にまがれで死んですまつたど。

それがらなんだど。
いっつも風の吹きようで、ある時は高く、また、ある時は低く、ある時は、淋しぐ、
笛の音が聞えるんだど。
春、わらびだの、ふぎ、取りに行った人も聞いた。
秋、きのごだの、栗、ひろいに行った人も聞いた。
また、そご歩く人達も、今日も笛の音するな。
風の吹きようで、ある時は悲しぐ、また、あるときは淋しぐ、笛の音するんだど。
そこで、その山を笛吹峠と言うんだどさ。
ドンドハレ

六 わらすど地蔵さま

むが一す、あつたずもな。
ある日、庄屋の甚平、散歩してらつたずもな。
そしたどごろ、村のわらすども、ケヤド(道)ばだの地蔵さんを引ぎずりたおして、代
わる代わる馬のりになって、遊んでいるのに出くわしたずもな。
甚平、それごそ、頭がら湯気出して、「こらっ、なんと言うバチあたりなこどするんだ、
このふとどき者。」って、大した怒りつけで、わらす達追っばらつたど。
そしだどごろ、その夜だつたど。
甚平の夢の中に昼間のお地蔵さんが現れで、甚平は、てっきりお地蔵さんからほめら
れるど思つたずもな。
とごろ、「人がせつがぐ、わらすど楽しぐ遊んでらつたのに、よげい事するでない」と、
逆にくられで（おこられて）すまんたんだど。
くられだ甚平、「ああ、お地蔵さんは、やっぱりわらすらの神さまなんだ。」ど、
思い知らされだんだどさ。
ドンドハレ

七 東禅寺の大釜

むが一す、あつたずもな、
附馬牛の山奥に、無尽和尚が開いだ東禅寺どいうお寺、あつたずもな。
大ぜいの雲水が修行していだんだど。
でどこ（台所）では、大きな釜で粥が炊がれ、雲水達のお膳に。
釜は二つあって、大きい方を雄釜、少し小さい方を雌(めす)釜と呼んで、くりや番の
お坊さんたち、大事に使つていだつたずもな。
とごろ、ある時、寺を盛岡に移す事になつたずもな。
この大釜を運び出す事になつたずもな。
とごろ、重だくつて、なかなか動がせねがつたど。

何人もかがって、大釜をやっと持ち上げだすもな。

「きっと、この山がら離れだぐねえんだべ。」と、お坊さん達が語ってらったが、とにかく、ようやく峠まで運び上げて、ひと休みするべどした時、大釜、気味悪ぐうなり声あげながら、今来た山道、転がり落ちですまっただもな。

大釜は、東禅寺の境内まで転がり、石につまずいたはずみで、近ぐの沼にドボンと飛び込んで、そのまんま、姿見えねぐなっただもな。

寺にあった雌釜、嘆き悲しんで、ウオンウオンと、しばらぐうなり続けだんだ。

それがら、その雌釜、軽ぐなっただもな、やすやすと担ぎ上げられ、盛岡まで運ばれで行ったどさ。

ドンドハレ

八 川うそど狐

むが一す、あつたずもな。

ある時、狐ど川うそどして、たんげ（互い）に呼ばって、御馳走するこど約束したずもな。

そごで、川うそ、「そんだら、今夜、俺、ご馳走するがら、おでれ」って、呼んだずもな。

川うそ、いっぺい、ざっこ取って来て、ご馳走したずもな。

狐、たらふぐ食って、喜んで帰って行つたど。

そして、狐、「うんで、明日の晩んげ、俺家（おらえ）さおでれ」つたずもな。

川うそ、「何を食わせるのがなあ」ど、わくわくして狐の家さ行つたずもな。

そしたどごろ、支度どころが、なんにもなぐ、川うそ、「じえじえ、狐どの、遠慮なく来だじえ」つたど。

とごろ、狐、返事もすねで、一生懸命、空の方ばり見でるんだど。

川うそ、「一体何したんだ」って聞いたどごろ、狐、やっど気付いだように、「川うそどの、本当に申しわけねえが、今夜、空守り役、当たってさ。こうして、空ばり見でねばねんだ。今夜、許してけでや」つたずもな。

川うそ、「今まで聞いたこどもねえ、へんな役もあつたもんだな。」ど思いながら、帰つたずもな。

次の晩も、川うそ、狐の家さ来たずもな。

「じえじえ、狐どの、今夜も来たちゃ」って、入って行つたずもな。

狐、返事もすねで、黙って下の方ばり見でらつたずもな。

川うそ、「狐どの、一体、何すたんだ」つたど。

狐、やっど気付いだように、「川うそどの、まごどに申し訳ねえ。今夜、地守り役、当たって、こうして、下の方ばり見でねえばねえがら、今夜も許してけろ」。

そごで、お人好しの川うそも、「これはしたり」ど思つたずもな。

とごろ、その次の晩、狐、ひょっこり、川うその家さ来て、「今夜、川うそどのさ、ご馳走してがら、魚の取り方教えてけろ」つたど。

川うそも、ごしえやいでらながら、「いがべ」って。
そんたら、俺、教えっから、なァに、ざっこ（雑魚）取るのなんか、ぞうさもねえ話だ」。

狐、「なんたな事、しえんばいいのや」ったど。
川うそ、「そうだな、うんと寒い晩によ、川さ行ってよ、お前のおっぺ（しっぽ）、水さ垂らしてみろ。そうすっと、いろんな魚が寄って来るがら、頃合いを見計って、おっぺ、ソロッと引き上げろ。頃合いが大事だがらな」。

狐、最後まで聞かねえで、「川うそのバガ。大事な秘伝を教えるなんて」。

小鼻、ピクピクさせながら、大喜びで帰ったずもな。
そして、うんど寒い夜、川うそに教えられたようにして、川さ行ってがら、おっぺを水に浸けでおいだずもな。
そしたどごろ、川上の方から薄氷が流れで来て、狐のおっぺさ、ピタッピタッと、くつつぎはじめだど。

狐、これを、「ハハアン、これは、きっと魚だ。やった、やった、やったぞ」と、喜んで、その内にだんだん重くなってきたがら、いっぺい魚が付いだど思って、喜んでる内に、夜、明けできたがら、おっ尾（ぺ）、引き上げるべえとしたども、おっぺ、抜けねがったど。
そうこうしてる内に、人に見つかり、棍棒で叩がれた上に、おっぺは、ひっむぐれで、命からがら逃げだんだどさ。
ドンドハレ

九 馬ふん三つ

むが一す、あつたずもな。
あるどごに、大金持ちの爺さま、あつたずもな。
爺さまに、三人の息子、居だつたど。
俺が死んだ後、誰がしっかりした者さ、やるべど思って、ある時、息子三人呼んで、聞いて見だど。
三番目の息子がら聞いだど。そしたどごろ、三番目の息子、「日本国中、皿、ねがせで、大判小判、いっぺい並べでもんだ。」ったど。
爺さま、「うーん感心感心」。
次は、二番目の息子さ聞いだど。
そしたどごろ、「海がら水引いで、日本国中、田んぼにしてもんだ。」つたずもな。
爺さま、「なるほどこれも感心感心」って、ほめだずもな。
最後に長男に、「お前は」つたずもな。
そしたどごろ、その長男「馬のくそ、三つもあればいい。」つたずもな。
爺さま、たんまげだど。
その長男、「大きな事ばりぬがす、第二人の口ど、俺のどご、ばがにする爺さまの口さ、一つづづ入れでもんだ。」って言つたど。

爺さま、「さすが、ばがでも総領だ。」だどさ。
ドンドハレ

一〇 尻搔き歌

むが一す、あつたずもな
あるどごに、あまり利口でねえ娘、居だったど。
親父、隣さ遊びさ行った時、隣の娘、文（ふみ）を書いであつたずもな。
あまり見事なので、思わず近づいたどごろ、机の下に置いてだ硯箱のふたを、踏んで
すまただど。
あわでで謝ると、娘こんな歌を詠んだんだど。
「書く（欠く）べきための硯箱、
文書いた（踏み欠いた）とて、とがになるまい」。
感心した親父、家さ帰って、
「本当に隣のような娘を持ったら、なんぼいいんだが」ったど。
そしたどごろ、娘、いぎなり立ち上がって、親父の前で、グエラリど、着物の裾をま
ぐり、片手でガリガリと尻を搔き始めだど。
親父、カンカンに怒ったど。
そしたどごろ、次のような歌を詠んだんだど。
「搔くべきための十の指、
けつを搔いたて、とがじゃあるまい。」だどさ。
ドンドハレ

一一 猿地藏

むが一す、あつたずもな。
爺と婆どあつたずもな。
爺、畑さ行って、稼いでだどころ、どっからどもなく、さわぐ声聞えで来たずもな。
見だどごろ、猿、遠畑の大根、「むしゃ、むしゃ」。
爺、「しっしっ」って、追ばらったずども、すぐもどって来て、又、「むしゃ、むしゃ、
むしゃ」。
爺、家さ来て、「婆、婆、いはずらする猿をつかまえる、何がいい考え、ねべがなあ」。
そしたどごろ、婆、「そうだなあ。お地藏さまに化げで、畑さ座っていただら、なじよだ
べ。お地藏さまがいれば、猿達も、悪さしながらんべ。体にベタベタベタ、お地藏さま
にナーレ。お地藏さまにナーレ。ベタ、ベタ。ほーら、これならお地藏さまにそっく
りじゃ」。
爺、畑さどっかり座りごんでいだどごろ、猿達、山がらやって来て、「あれれ、こんな
どころに、お地藏さまが座ってござる。本物のお地藏さまか、試してみよう」。

猿達、爺のお腹を、こちょ、こちょ。

背中を、こちょ、こちょ。

くすぐったいが、爺、がまんがまんのすまし顔。

「本物だ。本物のお地蔵さまだ。もったいない。もったいない。川の向こうのお堂の中へ、お移ししようぜ」。

猿達、寄ってたがって、爺をかつぎ上げると、川の中へ、じゃぶ、じゃぶ。

「やっこら、やっこら、やっこらせ。お猿のおしりは濡らすとも、地蔵さんのおしりは、濡らすなよ」。

爺、「猿達、おかしな歌を歌いよる」。

おかしいのを、がまんしてると、体がぐらり。

「おととと。お地蔵さまが、ころげるぞ」。

猿達、小判の箱を運んで来て、その上に爺をのせると、爺の体が反対がわへ、ぐらり。

「おとととと、もう一つ、小判の箱を持って来い」。

そうこうしてる内に、岸に着いで、「お地蔵さま、お地蔵さま、ここがお堂でございませう。お地蔵さま、お地蔵さま、どうか、これをお召し上り下さい」。

お供物が、次から次へ運ばれで、「お地蔵さまが、ころがり落ちたりしないように、小判の箱を置いて行こう」。

「それがいい、それがいい。なんまいだぶ、なんまいだぶ」。

猿達、爺を拝むど、山の方へ行ってしまった。

爺、喜んで、小判の箱をかついで、やっこらよっこらど、家さ来て、「婆さんや、婆さんや、今帰って来たぞ」。

婆さん、たんまげで、「あれれ、小判がどっさり」。

その様子を、窓がらのぞいでいたのは、隣の欲ばり婆さん。

「なにになに。山の猿がらもらった。これはいい事、聞いたわい」。

欲ばり婆さん、家さ来て、糊を作りながら、「さあさあ、お爺さん、糊をぬってやるから、はだかにおなり」。

爺、「うまい事、小判が手に入るかなあ」。

「大丈夫、大丈夫。さあ、お地蔵さんにナーレ。ベダベダ。お地蔵さまにナーレ。ベダ、ベダベダ」。

「やれやれ、とうとうお地蔵さまにされてしまった。うわア、寒い。ハックション」。そうしてる内に、山がら猿達おりで来て、「おや、おや、また、お地蔵さまが座ってござる。それ、みんな、このお地蔵さまも、お堂へお運び」。

猿達、お爺さんを担いで川の中へ、じゃぶ、じゃぶ。

「やっこら、やっこら、やっこらせ。お猿のおしりは濡らしても、地蔵さんのおしりは濡らすなよ。うんとこどっこい、よっこらさ」。

「そうが、そうが。ここで体をゆらせばいいんだな」。

爺さん、わざど体をぐらっぐら。

「おととと、と。小判の箱を持って来い」。

また、ぐら、ぐら。

「あれれ、また、小判の箱を持って来い」。

お爺さん、喜んで、「うわァ、小判の箱が、三つも手に入ったぞ。あっはっはっは」。
爺さま、大きな声で笑ってすまっただ。
猿達、「これは、にせ者だ。そうだ、そうだ。こんな者はほうり出せ」。
猿達、爺さんを川の中へ、どぶん。
そうとは知らねい婆さん、屋根さのぼって、爺さんの帰り、待ってらずもな。
そうしたごころ、爺、帰って来たがら、喜んで見れば、爺、びしょぬれになって、泣きながら、帰って来たんだど。
それ見だ婆さま、屋根がらころがりおちだんだどさ。
ドンドハレ

一二 糠餅ど地蔵さま

むが一す、あつたずもな。
あるどごに、まじめで正直な若者、居だつたずもな。
なんぼ稼いでも稼いでも、貧乏な若者だつたど。
ある年だつたずが、正月来たども、餅米もねえす、お供えもこしやれねえす、仕方ねえがら、糠でお供え、こしやだずもな。
そして、年神様さ上げ申して、次の朝間（あさま）、若水汲みさ行く時、「さでさで、お水神さまさも、お供え上げべがなあ」ど思つたずもな。
そして、糠でお供え、こしやで、お供え、ふとごころさ入れで、行つたずもな。
桶、天秤棒でかづいで、若水汲みさ、かど（川戸）さ行つたずもな。
そして、汲む前に、お水神さんさ上げべど思つたごころ、ふとごころさ手入れでば、なんぼ探しても、お供え、ねがつたど。
さでまず、なぐしたわけねえが、なじよになつたべど思つたど。
もす、ここで落としたりどせいば、せぎさ流れで行つたごつた、ど思つたずもな。
そして、せぎのまま、流れにそつて行つてば、お地蔵さまが居だつたど。
「ああ、とうで（尊い）、とうで」って、手合せで拜んでがら、「地蔵さま、申す、地蔵さま、申す。ごごさ、お供え、流れで来ながつたますか。」って、聞いたずもな。
そしてば、そのお地蔵さま、ニカニカど笑つて、「流れで来たつたども、俺ご馳走になつた」つたど。
その若者、「ああいいます、いいます。地蔵さまがお上げたらば、いいます、いいます」って。
「ああとうで、ああとうで。」って拜んで、かどさ行つて、両方の桶さ水汲んで、かづいで、家さ行くべど思つて、上つて来たずもな。
そしたごころ、途中まで来てば、何もかにも重だぐなつたずもな。
「おがすな、いっつも水、こんなに重でいど思つたごど、ねえが。まず、おがすな。」ど思つて、にわ（土間）さ入つて、桶、まがつて見だずもな。
そしてば、前の桶さば、大判小判が入つて、サンサンど光つてらつたど。
あれエ、まんつ、そんだらど思つて、後の桶見れば、米がら酒がら魚まで、いっぺい

入ってらったずもな。

その若者、まず、米入ってらながら、さっそぐ米の飯炊いで、酒飲みながら魚食ってらど。

そしたどごろ、隣の欲の深い婆さま、「隣の貧ぼう野郎、なんたな正月してだべ」ど思って、まがって見だど。

そしてば、それ、ギガギガず米の飯食って、酒まで飲んでだもんだがら、「おがす、こんなわけあるはずねえ」ど思ったがら、中さ入って行っただ。

そして、「こりゃ、こりゃ。お前、なんじよなごどだ。そんなな、酒がら魚まで、ギガギガず飯、食ってだ」って言っただ。

そしてば、その若者、正直だがら、「実はなあ、俺、お供えこしゃる餅米もねえがら、糠でお供えこしゃで、お水神さまさ上げべど、ふとごろさ入れでってば、なぐしたんだが、落どしたんだが、探して行っれば、地藏さまがお上げたって。そして、帰りに水汲んで来てば、こりゃ、こんなに宝授がってよ」って言っただ。

そ一すっと、その隣の婆さま、家さ来てがら、「爺さまな、爺さま。俺も、糠でお供えこしゃるがら、かどさ行って、水汲んでおでれ」っただ。

そして、その爺さまさ、糠でお供えっここしゃげで、ふとごろさ入れでやっただずもな。

その爺さま、かどさ行っただずども、ふとごろがらお供え、ねぐなんねがっただ。

爺さま、ごしえやげだがら、ふとごろから取って投げだずもな。

そうしたっけ、いがにも、せぎさ流れで行っただがら、「よす、よす、これで地藏さま、お上げるもんだ。」ど思っただ。

どごろ、なんぼしても地藏さま、お上げねえがっただずもな。

ごしえやいだ爺さま、地藏さまの口さ、ねずりごんだずもな。

そしたどごろ、地藏さま、ぷーと、ふぐれだっただ。

俺も食せだがら、俺さも宝、授がるもんだど思って、かどさ行って、水、両方の桶さ汲んで、上がって来たずもな。

やっぱり、桶重だぐなっただ。

「それぞれ、いがべ。俺さも、宝、授がった」ど思って、家さ来て見れば、なんの、小判も米もあらばの事よ。

前の桶さば、馬の骨やら瀬戸物のかげら、いっぺい入ってる。

後の桶さば、牛（ベゴ）のふんやら馬のふんが、のんこり入ってらっただ。

ほだがら、宝物ずうものは、その人に授がったもので、人のまねしたって、わがねんだどさ。

ドンドハレ

一三 河童淵

むが一す、あっただずもな。

土淵の新家ずう家だずが、むが一す、その家の裏になんとも言われね、深けえ大きな淵のある川、あっただずもな。

ある夏だったずが、うんと、ぬげい日、若者、馬屋の中に居る馬、足ほでるど思って、馬っこ引っぱって、川さ、馬、冷やすさ行っただもな。

そして、腹っこさ水っこかけだり、背中こすったりしてらったずが、その若者、一時間（いっときま）、馬の首たさ、たずなかけで、わればり、おが（陸）さあがったずもな。

そーすっと、その馬、何がにずるずる深けえどごさ、引っぱってがれだんだど。

そしてば、その馬、たんまげで、おがさガッタガッタど走せ上ったずもな。

そして、そのまんま、家の馬屋まで、走せごまってすまったど。

家の人達、なにして、まず、馬ばり来たべど思って、馬屋さ行って見でば、何にがたまげだが、前搔ぎして、きがなくなつてらずもな。

家の人達、「きてえ（奇態）だな。何してこの馬、こんなにきかなくなるべ」ど思って、馬屋の中、見でば、やだふね（飼葉槽）、がっばり引っくり返つてらったど。

「あや、なにして、ふね、引っくり返つてらべ」ど思って、ふねの方、見でば、ふねの下がら、童子の手っこみでな物、見だつたど。

さあ、家の人達、たんまげで、「それっ、ふねの下に何か居だがら、早く、ふね、引っくり返してみろ」って、ふね、引っくり返して見でば、ふねの下に、人でば七つが八つぐれいの、女子わらすっこみでな河童、手っこ合わせでらつたど。

それ見で、家の人達、大さわぎしたもんだがら、隣あだりの人達、「何出来たべ」ど思って、見さ来たずもな。

見でば、馬屋の中で、河童、手合わせでらがら、隣あだりの人達、その河童見で、「この河童、ろぐでねえ河童だがら、殺してしめえ、殺してしめい。」って、みんなして言つたずもな。

だども、そごの旦那どの、「そんだったら、この河童、ここさ、ねえさ来たのや」ど思って、その河童がら、聞いて見だずもな。

そしてば、その河童、「俺、本当のこと、馬、淵さ引っぱって行って、食うべど思って、引っぱつたども、馬の力の方、強くて、俺の方、引っぱられで来てすまった。」って言つたど。

今がら悪いこどさねえがら、助けでけろ」って、手っこ合わせでらつたど。

そごの家の旦那どの、河童見れば、さっぱり頭の皿っこに、水、ねぐなつてすまって、面つぎも、はあ、青ぐなつてすまって、すっきりがおつてらつたど。

「ほにさなあ、むぞやな」ど思って、その旦那さま、「そんだったら、助けでけっから、今がら、えれいいだずら、したらなんねえぞ。わがったが」。

そして、その河童、淵さ放してやつたんだど。

それがら、その河童、しばらく、そごの淵に居だたずが、「いづまでも、俺、ここ居れば、村の人達あ、やんた思いするべがら、それより、俺、ここに居ねえ方がいい」つて、奥の淵さ行って、それがらずもの、河童にいだずらされるこど、ながつたどさ。

ドンドハレ

むが一す、あつたずもな。

あるお寺に、和尚さんと、小僧っこと、居だつたずもな。

とっても忙しいお寺で、今日も、葬式が二ツも三ツも予定なので、お尚さん、小僧呼んで、こう言つたど。

「人がいっぱい来るので、忙しくなるがら、俺が指一本あげたら、米一升煮ろ。二本上げたら、二升だぞ」っと、かたぐ言い付けだずもな。

それがら何日が過ぎで、檀家の人達いっぱい来て、なにもかにも忙しがつたずもな。

そんな忙すい時、お尚さん、厠（かわや）さ行きたぐなつたど。

むぐす（漏れる）ようになったがら、走せで厠さ入つたど。

あんまり急いだがら、厠の板ふみはずすて、つぼさ、どんぶりど入つてすまつたずもな。

そして、「小僧、小僧」ど呼ばつたがら、走せで行つて見れば、お尚さん、くそつぼの中で、もろ手上げで、「助けでけろっ」て居だつたど。それ見だ小僧、指十本上げだがらど思つて、ぐれり、もどつて、大きな釜で、米一斗炊いだんだどさ。

ドンドハレ

一五 鼻の悪い男ど髪が無え女ご

むが一す、あつたずもな。

あるどごに、鼻の無え男、あつたずもな。

なんぼ、嫁ご、もらうべど思つても、鼻の無え男だから、嫁ごに来る人、ねがつたずもな。

そして、仲人たでで、あっちさ行き、こっちさ行き、たねだずもな。

そして、その仲人、あねっこ（嫁）、貰うこどにして来たずもな。

「ああー、いがべ、いがべ。ほんで、やっぱり俺さも、あねっこ、あるふんだ」つたど。

その仲人、鼻の無え男さ、「ご祝儀の日ばりも、ろうそぐで鼻こしゃで、まにあしえろ」つたずもな。

そんだがら、髪が無え女子、かづら、かぶつて来たど。

頭さ、それっ、ちょこんとのせで、来たずもな。

そして、ご祝儀どなつて、今、嫁ご来つから、婿どの、火鉢さあたつて、すましてらずもな。

そしてば、嫁ご、来たずもな。

嫁ご来て、そごさ座つてらずもな。

婿どの、火鉢さあだつてらがら、ろうそぐで鼻こしゃだもんだから、ダラ、ダラど、流れだずもな。

それ見れば、何もかにも、その嫁ご、おかすぐなつたずもな。

「アッハッハ、アッハッハ」つて、かぶりして、笑つたずもな。

そしたどごろ、われのかづら、取れですまったんだどさ。
ドンドハレ

一六 寒戸の婆さま

むが一す、あつたずもな。
松崎の寒戸ずう家ですが、その日、うんと寒い日だったど。
その家の七つになる女子（おなご）わらす、とげい（戸外）で遊んでいたずが、ゆまかだ（夕方）、暗ぐなつても、家さ帰つて来ねがつたど。
家の人達、あんずごど（心配）して、なんたら、いつまで遊んでるべど思つて、探しさ行つたずもな。
どご探しても、居ねがつたんだど。
あだりの人達も、たんねでけだずども、どごにも居ねがつたずもな。
そしたどごろ、家の前の梨の木の根っこさ、履いでらつた、赤い鼻緒の草履ど、持つて遊んでらヤヤボッコ（人形）があつたつたど。
ほだがら、何がにさらわれだんだど思つて、その日を命日に葬式出したんだど。
そして、毎年毎年、来る年も来る年も、その日を命日に、親類達だの、隣あだりの人達呼ばつて、功德してらつたずもな。
ある年だつたずが、三十年も経つてらつたずが、やっぱりその年も親類がら、あだりの人達集まつて、その童子（わらす）の功德、してらつたずもな。
そしたどごろ、その家の縁側（えんこ）さ、どっから来たがな、白髪頭のボロボロず、しえだん（着物）着た、すり切れ草履へいだ婆さま、来たずもな。
そして、えんこ（縁側）さ腰かけだがら、「婆さま、婆さま、お前、どっから来た。」つて、みんなで聞いてば、その婆さま、「俺があ。俺、三十年前に、こごの家がらさらわれでつた、この家の娘だあ」つて言つたど。
家の人達も親類達も、たんまげで、「そんだら、中さ入れ、中さ入れ」つて、引つぱつたずもな。
そして、みんなががりで、押えだずども、その婆さま、「いや、いや、俺、そうしてられね。家の人達も達者だす、親類達もみんな達者でらがら、俺、みんなのつらこせえ見ればいいがら、俺は行がねばねえ。」つて。
その日もうんと、寒う日だつたずが、その婆さま、どごさが行つてすまったんだど。
その日も、風は吹ぐ嵐だつたど。
そだがら、今でも寒い時、何時（いつ）までも、童子ど、とげいで遊んでれば、「こんな日、寒戸の婆さま、来るんだじゃ。」つて言うんだどさ。
ドンドハレ

一七 食わず女房

むが一す、あつたずもな。

あるどごに、男、あつたずもな。

年頃になったがら、「がが（嫁）もらえ、ががもらえ」っても、「飯食うががば、要らねます」って言つたずもな。

「飯食（か）ねががでば、もらうども、俺、飯食うががば、要らねます」。

人さ、もの食せたぐねえ男だつたど。

ある時、立派なおなご、来たずもな。

「俺、飯食（か）ねえがら、ががにしてけろ」って、言つたずもな。

そしてば、その男、「本当に食（か）ねが」ってば、「本当に食（か）ねます」って言つたど。

そして、旦那どのさば、仕度して食せだども、本当に食（か）ねがつたずもな。そして、居だつたずが、そのがが、飯食（か）ねわりに、なんだが、米の減りよう、いっぺいだつたずもな。

その男、ひとさ、もの食（か）せたぐねぐれいの男だがら、よす、このおなご、本当に飯食うが、食（か）ねが、今日試してみる気になって、町さ行つて来るふりしたずもな。

そして、その女ごさ、「今日、町さ行つて来つからな」てえば、「ハイ、ハイ、行つておでれ。そんだら、ニンニク三把、買うておでれ」つたずもな。

家、出はつて、そして、町さ行くふりして、まやけた（馬屋桁）さ上がつて、隠れでいだずもな。

そ一すつと、そのおなご、にわ（土間）の大きな釜さ、水入れだずもな。

そして、火炊いで、グラグラど、湯、煮だつて来たずもな。

そしてば、奥の部屋さ入つて、米、片馬（かたば・馬の背に付ける半分の量）、かづいで来たずもな。

そして、煮だつてだ釜さ、ざんわり入れで、その片馬の米、煮ですまつたど。

そして、飯になつてえば、そのおなご、立派な髪、ふぐした（ほぐした）どごろ、頭の中に大っきな口あつたど。

さァ、その女ご、その飯、握りっこににぎつて、頭の中の大きな口さ、にぎつては投げ込み、にぎつては投げ込み、片馬の米、すっかりその大きな口で、食つてすまつたずもな。

そのまやけたさ上つていた男、「さあ大変だ。こりゃ、まず、化けものだが、今度、俺、食（か）れですまるが」ど思つて、ブルブルど、ふるえだずもな。

そだども、いつまでも、まやけたにも居られねがら、町さ行つて来たふりして、「今、来たちや」つたずもな。

そうしてば、そのおなご、「早がつたなんす」って、その時、はあ、髪、立派に結つてらつたど。

旦那どのさ、仕度して、食（か）せで、その時、そのおなご、ニンニク三把、ペロツと食つてすまつたずもな。

そして寝だつたずが、そのおなご、夜中に、腹、痛み始めたずもな。

なにもがにも、そごいらじゅう、転んで痛み出したずもな。

そして、その男、「どら、どら、俺、まじないごど、してけるがらよ」って、その女ご、寝でだどごさ行って、「米片馬のただりが、ニンニク三把のたたりが」ったずもな。そうすつと、そのおなご、わがられだど思ったど。
その時、はあ、角、出でいだつたど。
そして、むっくり起き上って、その男、取って食うべどしたんだど。
その男、家の中、走せでだずども、外さ出だずもな。
外さ出でば、空（から）こが、あつたつたずがら、その男、空こがの中さ入って、隠れだど。
そーすつと、そのおなご、空こがさ男入れだまんま、担いで山さ走せ上つたど。ワラ、ワラど、走せ上がったずもな。
そしてる内に、林の中さ行つたど。
林の中だがら、木の枝っこ、パランパランと、こがの中さ入って来たずもな。
その内に、櫓の木の枝っこ、入って来たど。
その枝さ取っ付けで、その男、こがの中がら抜け出る事が出来だんだど。
そうとも知らねで、その化げもの、山さ上がって、こがを下ろして、食う気になつてば、男、いながつたど。
さあ、すぐつた（しくじつた）、逃げられだど思って、山がら下りで来たんだど。
髪はぶつっらげる、口は耳の脇まで裂けてる。
ワラ、ワラ、ワラど、下りで来たずもな。
そして、下りで来てば、人くせがつたずもな。
人くせいがら、こごいらだなあど思ったずども、なんぼすても、男、見つけられねがつたど。
その男、その時、こがの中がら抜け出だ時、菖蒲ど、ゆむぎ（蓬）の中さ隠れだんだど。
その化げもの、菖蒲ど、ゆむぎのにおいを嗅ぐど、腐れですまう化げものだつたど。
その男、菖蒲ど、ゆむぎのどごさ、入つたがら、助かつたんだど。
その日が、ちょうど、五月五日の節供だつたんだど。
それで、化けものの魔除げに、菖蒲ど、ゆむぎを軒下さ挿したり、お風呂に入れだり、魔物に会わねえで丈夫に育つようにつて、菖蒲湯たでで、入るんだどさ。
ドンドハレ

一八 猿ど蟹の餅つき

むがーす、あつたずもな。
猿ど蟹、仲良ぐ暮らしてらつたずもな。
そして、ある時、猿ど蟹、餅つきする事にすたずもな。
それー、猿、力持ちだがら、どすん、どすんと、一生懸命搗いだずす、蟹、ハア、餅ば搗けねがら、臼のふず（縁）さ、たがってがら、餅のこねり方したずもな。
ハイキタ、それきたつて、手合わせすてだど。

そしたどごろ、だんだん餅になってきてば、猿、蟹さ、食（か）せてぐねぐなつたすもな。

この餅、俺ばりして食つたら、なんぼ、えがべなあ一ど、思ったすもな。

そして、猿、いぎなり、「ワッ」つたすもな。

そ一すつと、蟹たまげで、臼がら、手、離したもんだがら、下さボツタリ落つですまつたど。

そしてば、猿、臼さ餅入れだまんま、臼かづいで、山さ、ワラワラど馳せ上つたすもな。

それ見で、蟹も手伝つたつもりだがら、「俺れさも食せろ」って、「猿どの、猿どの、待ってけろでば。猿どの、俺れさも食せろてば。」って、蟹、横にワサ、ワサ、ワサど、山さ上つてつたすもな。

そしたどごろ、けやど（道）ばださ、餅落ちでらつたど。

ゴミだの木の葉だの、いっぺい付けで、ホヤホヤど、湯気出して、落ちでらつたすもな。

蟹、そのゴミだの木の葉、ハサミではさみ、はさみ、口がら泡っこ吹き吹き、食つてらつたすもな。

それど知らね猿、臼かづいで行つてがら、餅食うべど思つてば、餅、ねがつたど。

猿、たまげで、飛んでおりで来たすもな。

そ一すつと、蟹、上っかのゴミ取り取り、「ヒツパレ、カツパレ、食（け）ば美味（うま）ござる」って、餅、ハサミではさみ、はさみ、食つてらつたど。

猿、おりで来て、「こりゃ、俺れの餅、よごせ」つたすもな。

そしたどごろ、蟹、上っかのゴミ、はだげで取つてらのを、団子に丸めで、猿のつらめがげで、ぶつけだど。

猿、ごしえやいで、餅、はがすべつと、いぎなり引っぱつたもんだがら、われのつらの皮、へいですまつたんだど。

ほだがら、猿の顔、今でも赤げんだどさ。

ドンドハレ

一九 豆腐どこんにゃぐ

むが一す、あつたすもな。

今でえば、豆腐どこんにゃぐ、同じ店さ並べでるが、昔、仲悪くて、てんでに暮らすていたつたど。

ある時、けやど（道）で、豆腐どこんにゃぐ、ぱつたり行き合つたすもな。

そ一すつと、豆腐、つらつき悪がつたど。

そごで、こんにゃぐ、聞いて見だど。

「豆腐どの、豆腐どの。お前、どごが、あんべえ悪うのが」って言つてば、豆腐、「いや、ぺえこ、あんべえ悪うがら、これがら薬屋が、医者どのさ行つて、見でもらうべど思つてら」。

そしたどごろ、こんにゃぐ、大声出すて笑ったずもな。

「こりゃ、こりゃ、豆腐どの。今さら、なんぼ薬飲んだって、医者さ、かがったたて、もとの豆にゃ戻ねんだじゃ。それは、無駄なんだがら、やめだ方、いいんだ。」つて、言っただずもな。

豆腐、ごしえやいで、「いつが、かたき取ってやんべえ」ど思っただずもな。

ある時、こんにゃぐ、まるっきり元気ねぐ、ベターとすてらのさ、行き合っただずもな。

豆腐、聞いて見だど。

「じえ、じえ、こんにゃぐどの、こんにゃぐどの。今日、どごさ行くどごだべ。」つて聞いてば、こんにゃぐ、「この間がら、なんとなく、体あんべえ悪くてよ。お寺参りでも、すたらええがど思って、出がげるとごだ」つて言っただずもな。

豆腐、この時どばりに、「こんにゃぐどの、そんな無駄なごど、やめだ方、ええんだ。どうせ、お前の体、あく（灰）で固めだ体だもの、お寺参りすたたて、治るわけねんだがら。」つて言っただど。

そごで、今まで仲悪がった豆腐どこんにゃぐ、考えだど。

「そうだ、そうだ。俺もお前も同じような体だがら、これがら仲よぐすんべ」と。今のように、豆腐どこんにゃぐ、仲良ぐ、店で並ぶようになったんだどさ。

ドンドハレ

二〇 三人旅

むが一す、あつたずもな。

ある時、和尚さんと、山伏ど、百姓ど、三人でお伊勢参りに出がげだずもな。

行くが、行くが、行くうちに、夏の日で、なにもかにも暑い日だつたど。

山伏、「今日は、あまり暑いがら、どうだ三人で歌でも詠んで、詠み負けだ者、荷物を持つこどにするべえ」つたど。

和尚さんの顔を、ちらりと横目で見ながら言うと、和尚さんも、「ようござる、そうしますべえ」と。

つまり無知な百姓に、二人の荷物を負わせる下心で。

そこで、まづ、和尚さんが先にどいうこどで、「この日本、はばかり程のこの頭、天地を笠に耳は隠れず」。

次に山伏、和尚に負けずと、「この日本、はばかり程の梅の木に、天地にひびく鶯の声」つたど。

そして、二人、顔見合わせで笑いながら、「さあさ、今度はお百姓、お前の番だ」と言うつと、百姓、「そんたら俺も詠むべえ」と言つて、「この日本、東に丸めて飲むならば、坊主、山伏、くそになりけり」と詠んだど。

百姓に、ただもの（一方的に）やられだんだどさ。

ドンドハレ

二一 極楽見できた婆さま

むが一す、あつたずもな。

あるどごに、仲のいい親子、暮らすてらつたずもな。

その息子も年頃になったがら、そつごつ探して、いい嫁さまもらつたずもな。

はじめの内、「お母さま、お母さま」って、仲良く暮らすていだだずが、その婆さま、だんだん年取つて来たどごろ、なにかにも、邪魔になつてすまつたずもな。

ある時、旦那どのさ、「えな（旦那）な、えなな、俺、とつても、あの婆さま、やんたや。どごさが、連れでつてけでげや」つたど。

息子、たんまげだど。

「なんぼなんでも、俺にや、たつた一人ある親だ。どごさ、やるわけにもいがねえがら、我慢すてけろ。」つて頼んだずもな。

それがら、すばらく、いがつたずが、「やつぱり、おら、あの婆さま、やんたます。あの婆さま、どごさも行がねば、俺あ実家さ行ぎます。」つて、聞かねがつたずもな。

その息子も、めげえ嫁ごに、居られなぐなられでえ困るがら、なじよにすたらいいべと思つて、相談すたずもな、嫁ごさ。

そしたどごろ、「なんでも婆さま、この間がら、極楽見でい、極楽見でいつて、しゃべつてらつてがら、極楽、見さ、連れでつたらなんだべ」つたずもな。

息子も、婆さまの行きていどごだら、いがんべと思つて、「そんだら、その極楽、どごにあんのや。」つて、聞いたずもな。

そうしてば、その嫁ごあ、「ねえさ、ねえさ、極楽なんど、どごにもねえのす。」つたど。

「そんだら、なんじょうにするのや。」つて聞いてば、「あれ、あれ、あの山奥にす、あの崖の下に、大きな淵、あるずがら、あそごさ連れでつて、『こつから、極楽、見えるず』つて、婆さま、突き飛ばすてくるべす。」つて。

息子たまげだど。

「なんぼなんだつて、俺にあ、たつた一人ある親だ。そんたな目に、あせたぐねえがら、それだけ許すてけろ」つてば、「そんでは、俺、実家さ行ぎます」つて、聞かねがつたど。

なんたにもされねえがら、「そんだらば、あそごまで、なんたにすて連れでぐのや。」つて聞いてば、その嫁ご、「俺、土方がら、もつこ借りで来ていだがら、あれさ入れて、二人で担いで行くべす」つて、言つたずもな。

息子、なんじよにもされねえがら、「そんだらば、いつ、連れでぐのや。」つて聞いてば、「そんたな事、早え方がいいんだがら、今日、連れでぐべす」つたど。

そすて、婆さまのどごさ行つてがら、「婆さま、婆さま、お前、極楽、見でい、極楽、見でいつて言つてらつて、今日、その極楽、見さ連れでぐがら。」つて、言つたずもな。

婆さま、喜んだど。

それど言うのも、一足先に、あの世さ行つた爺さまさ、みやげ話してがつたど。

「そんだら、その極楽、どごにあんのや。あまり遠くて、おらあ歩つて行げねじえ」つて。

そーすてば、その嫁ご、「ねえさ、ねえさ、婆さま、歩がせるような事など、させねえがら。俺どえな（旦那）どすて、もっこさ入れで担いで行くがら。」って、言ったど。婆さま、喜んで、もっこさ入れられで、担がれで行ったど。なんたら、いい嫁ごだべ、なんたら親孝行な息子だべど思って、担がれで行ったずもな。

行くが、行くが、山の上さ上がってって、こごいらだら、いがんべずどごさ、婆さま、下ろすたずもな。

そすて、「婆さま、婆さま。この下が、よーぐ極楽見えつつがら、よく見でおでれ」って、言ったずもな。

婆さま、乗り上がって見だど。

なんぼ見でも、なんにも見えねえがったずもな。

そーすつと、嫁ご、後の方がら、「婆さま、婆さま、見えますか。」って聞いたずもな。

婆さま、「さっぱり見えねえや」ったど。

そうすてば、今度、ぺえこ、押すてやったずもな。

「婆さま、婆さま、今度見えますか。」って聞いたど。

なんにも見えねがったど。

「さっぱり見えねえや。」って、言ったずもな。

そーすつと、その嫁ご、「そんだったら、それ、すっかり見でおでれ」ずしま、後がら、ドンと突き落どすてすまったど。

その婆さま、崖がら、ゴロゴロど転げ落ちながら、「あつ、この奴ら、俺を殺す気だな。こんななどごで、死んでいられねえ。」ど思ったがら、そごさ吊る下がってだ藤づるさ取っついで、助かったど。

それがら、何時間経ったがわがねえども、つら、岩にぶつかり、ばらには刺され、目も鼻もさっぱり見えねえくれい、血ぐるみになって、婆さま、崖、這え上がったど。上がって見でば、はア、すっかり日も暮れで、息子も嫁ごも居ねえがったずもな。

婆さま、さでさで、こごまで助かった。

だども、このままでえ、俺、こごで凍（し）み死んですまると、思ったずもな。

なんとがすて、助かんねばねど思って見だどごろ、そばにお堂があつたつたど。

今夜、そごさ泊めでもらう気になって、そごさ入ったずもな。

崖、上がって来たがら、すっかり疲れでらがら、ぐっすり寝込んですまったずもな。

それがら、なんぼぐれい、時間経ったがわがねえども、大すた賑やがな音で目覚すたずもな。

さで、さで、こごあどごだべな、ぜんてい、なんで俺、こんななどごさ、来てだべなあど思って、音のする方さ行って、まがって見だずもな。

そうすたどごろ、泥棒達、今日盗んで来た宝物の分けがだ、すてらつたど。

「ほれ、お前の取り前、これだ。われの取り前、これだ」って、分けでらつたど。

ご馳走食いながら、酒飲んで、そして、分けでらつたど。

それ見で、その婆さま、「さでさで、あの美すなもの、なんだべな。あのピカピカ光るもの、なんだべな。もっと、はっきり見でなあ。」ど思って、伸び上がったもんだがら、そごにあつた、ぶつかり障子ど一緒に、バダーッと、泥棒達のまん中さ出はってすまったど。

さあ、泥棒達、たまげだずもな。

まなぐも鼻もねえ、まっ黒なつらすて、白髪頭すたの、出はってきたがら、「それ、化げもの、来た。」ずしま、ご地走も宝物も、みんなされえ投げで、逃げですまったんだど。

その時、その婆さま、われのつら、見えねえがら、泥棒、なにすて逃げだがもわがんねす、まんつ、その辺さ散らがってだご地走ば、腹もへっていだがら、ご馳走になつたど。

それがら、その辺さ散らばってだ、宝物集めで、ドッコイど背負って、そすて、なんぼぐれい、かがったがわがんねえども、われ家さ急いだんだど。

家、着いで、見だごごろ、息子ど嫁ごどすて、「婆さま、今頃、極楽さ行ったべが、地獄さ行ったべが。」、しゃべってらつたど。

婆さま、知らねえふりして、ガラガラーつと戸開げで、「こりゃ、こりゃ、今帰ったじえ。」つたずもな。

さあ、嫁ごのたまげだごど、たまげだごど。

飛び上つたど、ガダガダどふるえで。

それ見だ、婆さま、そだべ、そだべど思つたど、「いや、いや、お前達の親孝行のおかげで、とつてもいいどごさ、行って来た。本当に、この世の中に極楽ずうどご、あるもんだなあ」って、言つたずもな。

嫁ごあ、「この婆さま、なにしゃべんべ」ど思つたんだど。

婆さま、背負つてだもの、下ろしたずもな。

「これ見ろ、こんなにおみやげまで、もらって来たが。」って、広げて見せだずもな。今度、嫁ご、欲っこ出すてすまつたど。

婆さま、一人行つてでせい、こんなにいっぺいもらって来たもの。おれど、えなど、二人行つたら、なんぼ、もらって来るにいかべど思つたずもな。

やんたがる、えなどのの手、引っ張って、昨日、婆さま捨てだごごまで、上がって行つたんだど。

そすて、こごいらだつたずどごさ立って、一、二の、三、ドボーンと、極楽、見さ行つたきり、戻って来ねがつたどさ。

ドンドハレ

二二 出雲の神さま

昔、あつたずもな

人ず者、生まれ落ちる時がら、縁ずもの、決まってるもんだずもな。

その事聞いだ、ある魚屋の男、出雲の神様の根太（ねだ）さもぐって、神様のしゃべるこど聞いでば、神様のしゃべるには、「今、生まれだ、このわらす、おがれば、魚屋の嫁になる。」って、しゃべつたずもな。

それ聞いだ、その男、ごしえやいで、いきなり根太がら飛び出して、今、生まれだわらす、ぶつとばすたずもな。

それがら何十年か経って、忘れでらころ、年頃におがったそのわらす、びっこ引き引ぎ、嫁に来たって。

探して来たんだどさ。

ドンドハレ

二三 かっこうどほととぎす

むがす、あつたずもな。

ある年だつたずが、なにもがにも、日照りつづぎで、田畑のもの、みんな枯れですまって、がすどす（飢饉の年）だつたずもな。

ある時、とつても仲いい姉妹が、山さホドッコ（ほど芋）堀りさ、行つたずもな。

そして、ホドッコ掘って、火焚いで、焼いで食つたずもな。

うまがつたど。

そして、姉娘、妹さ、うめいどごぼり食（か）せべど思つて、上（わ）っかの、芋焦げだどご、われ食つて、真ん中の、ホヤホヤずどご、妹さ食（か）せだずもな。

妹、それ食つてらつたずが、「おれさ、よごすどご、これくれいうめいもの。姉、もつとうめいどご、食つてらごつた。」ど思つたずもな。

そして、姉の腹さ、包丁かげですまつたど。

そしてば、姉、「おれ食つたどご、がっこだ、がっこだ、かでいどごだ」。

「がっこだ、がっこだ。」つて、かっこう鳥になつて、飛んで行つたんだと。

妹、姉の腹、割つて見でば、本当に、かでいどごばがり食つてらつたど。

妹、「こりゃ、けずな事した（失敗した）。悔すごどした。」ど思つて、妹の方、「包丁かげだが、包丁かげだが。」つて、ほととぎすになつて、飛んで行つたんだとさ。

ドンドハレ

二四 あでがはずれだ占い師

むがす、あつたずもな。

ある男、旅がら帰る時、こっそり伝書鳩を、ふとごろさ入れて帰つたずもな。

途中で一軒の宿屋に泊つて、次の朝、まだ暗え中に、立って行つたずもな。

宿の人達、お客さんが、そんな鳥、持つていだこど、知らねがつたど。

さて、その男、旅がら帰つて、さっそぐ伝書鳩飛ばし、旅がら帰る途中、必ず自分の御主人が泊つた宿屋宿屋をまわつて、えず、えず、中さ入りこんでは、出で行つたずもな。

当の宿では、見なれねえ、変な鳥が入り込んで、また、出で行つたがら、たんまげで、占い師のどごさ行つたずもな。

そして、「普通の鳩のようでもないし、と言つて、雀とも思われねす。妙な鳥が、

すうっと家さ飛び込んで来て、三度まわつて出で行つたが、一体、なんの前兆なんだ

べ。鳴き声は、まるで鈴をならすようで。」ったずもな。
占い師、まじめなつらつぎして、しきりど占っていただったずが、「ウーム、これは良くない前兆だ。近いうちに、大変な災いがやって来ると言う知らせだ。
しかし、心配するな。明日、わしが行って、よーく御祓いをしてやっから。」って、言
ったずもな。
そごで宿屋の旦那、たんまげで、次の日、占い師に来てもらって、御祓いをしてもら
うこどにすたずもな。
さて次の日、占い師が家さ入るなり、皆に向って、「さあ、いよいよ御祓いをしてやる
が、その前にこどわっておがなければならぬ。それは、なんでも私の言うこどは守
って、その通りにしなければならぬ、というこどだ。ええが、それでねば、かえっ
て、災いが大きくなるぞ。では始めよう。皆、よーく聞いていなさい」。
占い師、やおら居ずまいをなおして、エヘンと咳ばらいを一つして、「米を持って来い」
ったど。占い師の考へは、米をいっぱい出させる気になったずもな。
しかし、皆は占い師がら、自分の言う通りにしろと言われだのを、取りちがえで、
そのまんま、「米を持って来い」と、大声で口を揃えて叫んだずもな。
占い師、たまげで、今度、「反物を持って来い」って叫んだど。
皆は、そのまんま、「反物を持って来い」と、口を揃えて叫んだずもな。
占い師、あきれですまって、「こりゃどうしたのだ」。
占い師、うまぐ皆をだまして、米や反物をせしめようと思ったずども、計算がすっか
りはずれですまっただがら、痲癩おごして、逃げる気したどごろ、そのはずみに、頭、
鴨居さぶつけですまっただずもな。
それ見だ宿屋の人達、われ先ど、走せで行って、コツンコツン、頭、鴨居さぶつけだ
ど。
わらすども、背低ぐって届がねがら、梯子持って来て、それさのぼって、頭、鴨居さ
ぶつけだずもな。
占い師、あきれですまって、外さ飛び出だわけだ。
どごろ、たまたま、そごに牛のふんがあつたつたど。
そのふんを、踏んだから、たまつたもんでねえ、ツルリンどすべって、転んですまっ
たずもな。
「それ、今度は、すべって、転ぶんだ」。
みんな、またもや、われ先ど、牛のふんを踏んで、すべって転んだど。
占い師、もうあきれはでで、雲を霞ど、逃げですまったださ。
ドンドハレ

二五 正直親子と泥棒

むが一す、あつたずもな。
あるどごに、もの分がねえが、いたって正直な親子三人が、寺の門前で暮らしていだ
たずが、ある時、親父、銭百文持って、お尚さまのどごさ行って、「お尚さん、お尚さ

ん、なんでもいいがら、話っこ教えでけでげや。」って、頼んだど。
そしたっけ、お尚さん「うん、わがった。」って、「そろり、そろりと、来たわいな。」
って、これだけ教えだずもな。
次に、ががさま、銭百文持って、お尚さまのどごさ行って、「お尚さん、お尚さん、なんでもいいがら、話っこ教えでけでや。」って、同じこと頼んだんだど。
お尚さん、「うん、わがった、わがった。」って、「そのまま、そごで立っている。」って、これだけ教えだずもな。
最後に、息子、銭百文持って、「お尚さん、お尚さん、なんでもいいがら、話っこ教えでけでげや。」って。
そしたどごろ、お尚さん、「うん、わがった、わがった。」って、「その者、逃がすな、追っかけろ。ズデン、ズッテン。」と、教えだど。
そごで、もの知らねえ親子三人、毎日、毎晩、それをくり返すくり返す、練習していだだど。
とごろ、ある晩、その家さ、泥棒、入って来たずもな。
そしてば、親父、「そろり、そろりと、来たわいな。」って。
いぎなり言われた泥棒、たんまげでると、今度、ががさま、「そのまんま、そごさ立っている。」ってさがんだもんだがら、泥棒、気味悪くなると、今度、息子が、「その者、逃がすな、追っかけろ。ズデン、ズッテン。」ってさがんだずもな。
泥棒、何んにも取んねえで、逃げだどさ。
ドンドハレ

二六 一つ覚え

むが一す、あつたずもな。
あるどごに、少し頭の足りねえ息子、あつたずもな
ある時、伯父さんの家さ行ったずもな。
そしたっけ、鉄びんもらったずもな。
取っ手さ、縄結い付けで、ガラ、ガラ、ガラ、引っ張って来たずもな。
そしたどごろ、壊れですまって、取っ手だけになってすまったど。
息子、オイ、オイ、オイ、泣きながら、家さ来たずもな。
そしてば、おふぐろ、なだめすかして、「そうゆう時は、背負って来るもんだ」って、
教えだずもな。
次に、伯母さんの家さ行った時、すり鉢もらったど。
おふぐろの言葉、思い出して、縄で背負うべどしたっけ、すり鉢、縄がらすべり落ち
で、粉粉に砕げですまったずもな。
息子、また、オイ、オイ、オイど、泣きながら帰って来たずもな。
おふぐろ、また、なだめながら、「そうゆう時は、風呂敷に包んで持って来るもんだ」
って教えだど。
また、伯父さんの家さ行ったずもな。

そしたどごろ、大きな犬、もらったど。
おふぐろの言葉、思い出して、むりやり風呂敷さ包むべえどしたもんだがら、怒った犬に、尻、かぶりつかれですまったど。
息子、また、オイ、オイ、オイ、泣きながら、帰って来たずもな。
おふぐろ、また、なだめながら、「そうゆう時は、ニコニコ笑って、頭のひとつもなでやるもんだ」って教えだど。
また、次に、伯母さんの家に行く途中に、火事があったど。
息子、おふぐろの言葉、思い出して、「今日は、大へん暑い日ですね」って、ニコニコ笑いながら通ったずもな。
そしたっけ、火消しの人達にさんざん怒られ、ポカポカナぐられですまったど。
息子、また、オイ、オイ、オイ、泣きながら家さ来たずもな。
おふぐろ、なだめながら、「そうゆう時は、水をかけで助けるもんだ」って、教えだずもな。
また、ある日、けあど（道）歩ってらっけ、鍛冶屋の前さ来たずもな。
火、ドガドガど燃えでるがら、いぎなり水かけて、鍛冶屋の伯父さんに、ぶんなぐられですまったど。
おふぐろ、あざれですまって、「これがら、お前一人で出歩ぐなや」って、言ったどさ。
ドンドハレ

二七 不思議な掛け図

むが一す、あったずもな。
ある時、六部、旅して歩いてらどごろ、暗くなつてすまったど。
「どごさが泊まるどご、ねがなあ」と思つてば、大きな家あつたつたど。
そごの家さ行ってがら、「なんとが、一晚泊めでけろ」って、言ったずもな。
したどごろ、「いいども、いいども。俺家にや部屋もいっぺいあるす。なんたな事もしてけっから、泊まれ」。
そして、中へ入れられで、立派な座敷さ通されで、高足膳にご馳走並べられ、隣の部屋には、絹の布団敷いで、「このご馳走食べたら、ここさ寝でがんせ」って言われたんだど。
その六部、「俺、旅の途中なので、お礼にする物、何もね。銭こもねえがら、掛け図に描いでお礼したい」。
そして、笈がら真っ白な掛け図を出して、筆で、「爺が死んで婆が死んで、爺が死んで婆が死んで、と、びっしり書いて渡したんだど。
そしたどごろ、その家の旦那どの、「こんな縁起の悪いもの、要らねがら、さっさど、けづがれ。」って、たんだ、ぼん出されてすまったずもな。
さあ、その六部、「行く当でもねえ、どごさ泊めでもらつたらいがべ。」ど思つていだどごろ、灯火が見えだんだど。
そごさ行って、「一晚泊めでけでげや。」って言ったどごろ、「ほがの家で部屋数いっぺ

いあるんだども、俺家で見ると、たった二部屋だ。畳もねえがら、げんば（筵）敷いでら。こんなどごでよかつたら、泊まってげや。」ったずもな。

六部、「これで十分です」。

そして、泊まることになって、そしたどごろ、その家で、大きな鍋に栗いっぱいこしやで、ご馳走になったずもな。

そして、「ろくな布団もねえがら、こここの爺の布団さ寝てけろ」ったど。

そして、朝になったどごろ、その六部、「いや、夕べ、本当にありがとがんとした。何もお礼するものねえがら、掛け図に字を書いてあげます。」と言って、また、笈がら真っ白な掛け図を出して、「爺が死んで婆が死んで、爺が死んで婆が死んで」と、びっしり書いて渡したんだど。

そしてば、そごの家の人達、「こんな有りがでい物、初めて見だ。これは孫末代までも家の宝物にします」。

有りがたぐ、もらったんだど。

さで、こんななもの、要らねえがら、さっさどけづがれて、ぼん出した、長者どんの家で、さんざんな不幸続きで、みじめな死に方をしたんだど。

有りがどうってもらった貧乏家では、何事もなぐ幸せにくらしたんだどさ。

ドンドハレ

二八 和尚さまどネゴ

昔あったずもな。

ある山奥のお寺に、何年も、何代も、いっこう和尚さまが育だねえお寺、あったずもな。

ある時、ぺえこなネゴッコ連れだ和尚さま、来たったずが、お寺の上り口の人達、「また来たが、まず、お尚さん、今夜ぐれい命あんだが、明日になれば、命取られるが、おせだほ（教えたほう）ええ。」ど思つて、皆ががりて、おせだんだど。

あのお寺さ行って、「ぜってえ、今夜一晩命あるが、明日になれば命ねえがら、こっからもどれ。」たずども、そのお尚さん、「俺れは、修行した人に、おんかねものず事、あるはずねえど聞いてるがら、俺れは、ぜってえ行く。」ど言つて、そのネゴッコ連れで、行ったんだど。

したどごろ、その日は、いがにも何事もねぐ、そのお寺さ泊ったす。

お寺の中見でも、どご見でも、あえで変わったどご、ねがったずが、その日、和尚さん、眠たぐなつたがら、炉端さ昼寝してば、お尚さんさ、夢、見せだずもな。

「俺、明日お昼前は、手伝うが、お昼過ぎれば、すがた隠すがら、そう思つてけろ。そして、お昼すぎになれば、立派な和尚さま来るがら、その人、どごだりさ寝せでわがね。本堂さ寝せでけろ」。

こうゆう夢、見せだんだど。

和尚さん、「ちゃっ、へんな夢、見だな。」ど思つて、まなぐあいでは、ネゴッコ、そばで、スヤスヤど眠つてらったど。

「いがにも、本当だかも知れね。」ど思っていれば、次の日になってば、ほに、お尚さん、木、取りさ行けば、後（あど）ぼってぐ、水吸みさ行けば、水吸みに後ぼってぐ。歩いてらったずが、お昼すぎになってば、ずたツと、すがだ見せねぐなってすまったど。

うーん、きてい（奇態）だなアど思っでらったずもな。

そしでる内に、立派な和尚さまが来たったど。

そして、「ずずあ、こうゆうもんだ。今夜一晚、泊めでけろ。」ったど。

お尚さん、わがったがら、いがにもその通りだどなって、夕飯食わせで、本堂さ寝せだんだど。

さで、何がおぎるかも知れねえど思っで、灯り消して、寝ねで、待ってらずもな。

そしたとごころ、本堂で物すごい音、すたったど。

どどどん、それっ、何があるど思っで、和尚さんが行灯（あんどん）つけで行ってば、なんと、そのお客だず和尚さま、六尺もあるネズミ、マリ、マリて呼んでだネゴも六尺以上になって、この上の雲壁、横縦、飛んで歩いてらったど。

その時、和尚さん、行灯持って、マリ勝った、ネゴ勝ったって、声はがり（はりあげて）応援したんだど。

そして、戦って、戦って、とうどう、そのネズミ、食いげして（食い潰して）、和尚さんのそばさ来て、ニャゴーて泣いだきりで、そのネゴも死んですまったんだどさ。

ドンドハレ

二九 法話

むがーす、あったずもな。

ある村に、大そう偉いど評判の、坊さんが居だったど。

そのお坊さん、村の人達のために、毎月一回、寺で法話会を開いで、とごころが村の人達に、その話、よぐわがねがったずども、なにせ偉い坊さんの話なので、みんな、ありがたがって、集って来たんだど。

ある朝、お坊さんが、久しぶりに外の空気でも吸うがなあと思っで、散歩に出がげだずもな。

けあど（道）、てくてく、歩いてらっけ、向ごうがら、馬子の茂一が疲れた面（つら）して、歩いて来たったど。

お坊さん、「これこれ、茂一。どごが、あんべいでも悪いのが。」ったど。

そしたっけ、茂一、「いやいや、昨日のお坊のお話で、夜、ねむれなくって」。

それ聞いだお坊さん、自分の話が、この馬子にも、眠れねくれい感動したのがど、「そうが、そうが、それは、悪い事したな。で、一体、一晚中、何考へで居だのや」ったど。

そしたっけ、茂一、「いや、いや、昨日のお坊さんの話の時、ええ気持ちで眠ってすまって、昼にあれだけ寝ですまったがら、夜ねむれねがった。」たどさ。

ドンドハレ

三〇 貧乏な木こり

むが一す、あつたずもな。

ある時、貧乏な木こり、山の中でけあど（道）まづがって、すまっただ。

歩ぎまわったあげぐ、疲れですまって、なじよにしたらいがんべなあ、ど思った時、大きな家、見っけだずもな。

そして、そごさ行って、「今夜、一晩げ、泊めでげや」ってば、婆さま、出はて来たずもな。

婆さま、困った顔して考えでらったずが、「俺家（おらえ）はなあ、鬼達、博打する宿で、集った鬼ども、人を見つけど、食ってすまうがらな」たど。

すばらぐ、木こりも考へだど。

そしたどごろ、その婆さま、困ってる木こり見で、ひざをポンとただいで、「ああ、いい考へがある。この家の戸の口の上に、鶏小屋があるがら、そごさ上がって寝ろ。そしたらなあ、そごさ寝たら、鶏になって必ず、一番鶏、二番鶏、三番鶏のトキを歌うの、忘れるなよ。」つたずもな。

庭がら箕を持って来て、「この箕を、鶏の羽ばだぎに使うんだぞ。」って、教えだんだど。

木こり、「おっかねえなあ。」ど思ったずども、ほがに行くどごもねえがら、はしごかげで、箕持って、鶏小屋さ入ったずもな。

なかなか、寝つかれねえがったずもな。

そしてる内に、なんだが、そっちがらも、ざわめぎが聞こえて来たずもな。

おっかなびっくり、まがって見れば、赤鬼、青鬼達が集まって来たんだど。

その内の一匹の鬼、鼻ヒクヒクさせで、「なんだが、人くせいなあ」つたずもな。

そして、戸の口の鶏小屋、見上げだずもな。

木こり、おっかなくって、生きだ気しながったど。

そしてば、婆さま、気きかせで、「さあさあ、何も居ねがら、奥さ入ってけろ。」って、先に立って、家の中さ入れだんだど。

それがら、鬼ども、夜の更けるのも忘れて、博打に夢中なつてらずもな。

鶏小屋の木こり、婆さまに言われでらの思い出したんだど。

はじめに箕を使って、バダバダ羽ばだぎして、一番鶏を「コケッココー」たど。そしてば、鬼達、「まだまだ一番鶏だ。二番鶏まで、勝負、勝負、続けんべい。」つたずもな。

そして、また、木こり、二番鶏を「コケッココー」たど。

鬼ども、「まだ、まだ、二番鶏だ。三番鶏まで勝負だ。」って、夢中だつたど。

そうこうしてる内に、東の空が薄明るぐなり始めだずもな。

木こり、この時どばりに、一段、声はりあげ、羽ばだぎしながら、「コケッココーコケッココー」と、何回も叫んだんだど。

明るぐなった空に、鬼どもあわでで、取る物も取らずに、四方八方さ逃げで行つてす

まったど。

婆さま、鶏小屋さ、はしごかけながら、「みんな行ってすまたがら、降りて来一って」。おそろおそろ降りで見れば、なんと鬼ども、博打の後に、金の山が積まれであったど。

婆さま、その木こりさ、「お前、正直に世渡りして来たがら、神さまが授げでくれた宝だがら、持って帰れ。」ったずもな。

木こり、婆さまに言われながら、その宝物、持って帰って、大金持ちになったんださ。

ドンドハレ

三一 古ギツネ

むが一す、あつたずもな。

あるどごに源兵衛どいう、大した物持ちの男、居だつたど。

夫婦仲も好ぐ暮らして居だつたずが、ある時、そのががさま、さつとした風邪がもとで、ポックリ死んですまたずもな。

さあ、源兵衛、ががに死なれで、淋しく暮らして居だつたずが、ある日の事だつたど。

源兵衛、何時ものように、山の見廻りに山さ行つたずもな。

なにしろ財産家なもんだがら、隣村にも山あるがら、その山さ行き着いで、入りがげだ時、沢水汲んで、美しな女ご、居だつたど。

源兵衛、「俺さ、水飲ませでけろ。」って、声かけだずもな。

そしたっけ、その美しな女ご、ニッコリ笑って、「どうぞ、どうぞ」って、ひしゃぐさ水いっぱい汲んで、差し出したずもな。

その女ごの物腰、なんとも、やれねえくれい、いい女ごだつたど。

源兵衛、年がいもなく、たづまづ夢中になってすまたど。

聞けば、何年間前に旦那に死なれ、今、一人で山中の一軒屋で、機織りして暮らすてゐる、言つたど。

それがら、この二人、互いに思う仲になってすまたずもな。

源兵衛、持ち山さ、年に一回が二回しか行がねがったのが、この女ごに会つてがらは、それこそ、二三日おぎに、山さ出がげで行くようになったずもな。

さで、秋になり冬になつたどごろ、その年、なにもかにも雪の多い年で、さすがの源兵衛も、女ごのどごさ、行くごど出来ねがったど。

毎日、毎日、雪ばり恨んで暮らしてらつたずが、ある晩、もんもんとしてだ源兵衛の戸、叩ぐ者、居だつたど。

こんな夜更けに誰だべど思つて、開げれば、なんと、目の前、隣り村の女ご、笑いながら立ってらつたど。

そして、「あまり淋しく、愛しさのあまり、とうとう来ました」。

源兵衛、喜んで、「よぐ来た、よぐ来た。ようす、こうなつたら、雪とげるまで、ここに居るべす」つたど。

女ご、遠い雪道、歩いて来たもんだがら、着物もずぶぬれだったずがら、土間さ行って、洗い鉢で足洗うべとしたどごろ、源兵衛、あずがってだ犬、いぎなり、吠え出したど。

そして、女ごさ、咬みづくどごだったど。

かぐち（裏口）の馬もあばれ出すす、源兵衛、夜更けに知らねえ女ご来たがら、騒ぎ出したぐれえに思って、馬ど犬、なだめで、その夜は、そのまんま休んだずもな。

さで、朝になって、ぐっすり寝込んだ女ご、起きで来て、「旦那さま、この家の犬ど馬、おっかねや。」って言ったきり、座敷がら一步も出で来ながったど。

源兵衛も、「こりゃ、おがす。」ど思い始めだんだど。

念のため、占ってもらうべど思って、占ってもらったずもな。

そしてば、「この女ご、化げものだ。今の内に退治しねば、大へんな事になる」。源兵衛、たまげだど。

そして、その占い師、一枚のお守り札を出して、「これを、女ごの居る床の間に貼れ。

そして、馬屋がら馬を出し、犬小屋がら犬も出しておげ。吠えようが、あばれようが、ぜったい、はだぐな」。

源兵衛、恐る恐る家さ来て、占い師の言うように、お守りの札をこっそり貼ったずもな。

そーすっと、その女ご、急に青ぐなあって、座敷がら、あわでで逃げ出したど。

それを、待ってましたどばかり、土間の入口で犬が咬みつぎ、着物の裾に咬みつがれたがら、たまったもんでねえ。

とんずほぐれつすてる内に、馬屋がら飛び出した馬、女ごを蹄にかけで倒して、源兵衛、そばさ行って見でば、女ごは死んでらたずし、占い師の言った化げものでなく、やっぱり隣り村の女ごだったど。

「こりゃ、ていへんな事した。なんで、こんな事に・・・」。

源兵衛、半狂乱になってすまったど。

とごろ、次の朝になってば、その女ご、見るも恐す古ぎつねだったど。

それがら三ヶ月後、雪もとげ出す、源兵衛、隣り村さ行って見でば、かの、やもめの女ご、何も知らねで機織ってらったど。

そして、いそいそど、源兵衛をやさしく迎えだんだどさ。

ドンドハレ

三二 鶴の恩返し

むがーす、あったずもな。

あるどごに、嘉六ど、おっ母ど、仲好ぐ暮らすてらったずもな。

ある年の冬だったど、雪は降る、風は吹ぐ、で、なにもかにも寒い日だったど。

嘉六、「あー、寒うなあ。こんなに寒むど、おっ母、可愛そうだ。おっ母に、あったげえ布団でも買ってやるべ。」ど思って、町さ出がげだずもな。

そしたどごろ、鶴、罨に引っかがって、もがいで居だったど。

嘉六、「おーおー、可愛そうに。」ど思つて、畏しかげだ男さ、「ここには布団買う金あるから、鶴売ってけろ。」つて、その男さ金渡して、鶴、放してやっただもな。

鶴、羽の雪ふりはらつて、うれしそうに舞い上りながら、「コウ、コウ、コウ」と鳴きながら、空高く飛んで行つただもな。

嘉六、布団どごろが、金も無くなつたす、家さ来て、おつ母に、わけ話したどごろ、「なーに寒いのは、がまん出来る。ええ事してけだ」。

どごろ、その晩、トントンと戸ただぐがら、「誰だべ、夜も更けでるのに」ど思つて開げでば、見だ事もねえ、美す娘だつたど。

そして、その娘、「道に迷つた者です。一晚泊めで下さい。」つたど。

嘉六、「こんなどごで、えがつたら。」と言うどごで、それがら二、三日立つた、ある日だつたど。

その娘、「三日間、私は屏風のかげに入りますから、ぜつてい、まがつて見ではなりません。」と言つて、わけも言わずに、とじこもつてすまつただもな。

それがら、四日目の朝だつたど。

屏風のかげがら出で来て、「私が織つた織物です。どうぞ、これを売つて来て下さい。」と言われで、その織物持つて、町さ行つただもな。

たちまち、町中の大評判になつただもな。

うわさを聞いた殿様、嘉六を呼んで、「うーん、見事ぢや。高い値段で買い上げてやろう。ついでに同じ物を織つてくれ」。

嘉六、「ハイ、ハイ、かしこまりました」。

引き受けだものの、なじよにしたらえがべど思つて、帰つて来たずもな。

そして、その事を話したどごろ、「いいです。今度は、七日間お暇下さい。決して、のぞいてはなりません。」と言つて、にっこり笑つて、屏風に隠れだずもな。

三日も四日も食わねで、嘉六、だんだん心配になつたがら、七日目の朝、少しだらど思つて、中まがつて見で、たんまげだど。

なんと、鶴、自分の羽を抜いで、織つてらつたど。

そして、「私、あなたに助けられだ鶴です。恩返すのつもりで来ました。でも姿を見られでは、ここに居るわけには行きません。」と言つて、いぎなり舞い降りて来た鶴達にかごまれで、空高く飛び立つてすまつたどさ。

ドンドハレ

三三 うぐいすの一文銭

昔、あつたずもな。

あるどごに、稼いで稼いで、暮らす、ゆるぐねえ若者、あつたずもな。

その若者、考えで、考えだあげぐ、旅さ出がげだずもな。

行くが、行くが、行つてば、山の峠ささしかがった頃、日暮れで、林の中だす、足もとも見えねぐるす、仕方ねえがら、ねまつた（座つた）ずもな。

そしてば、近ぐに明がすっこ（明かり）、見えだつたど。

泊めでもらうべど思って、そごさ行って見でば、なんと、立派な家だったど。
そして、美ぐす娘、出で来て、立派な部屋さ通されで、泊ったずもな。
次の朝まに、夕べの礼して帰るべど思ったどごろ、その娘、「この家は、私一人です。
私は出掛けますので、留守番してで下さい。」って頼まれだど。
若者、行く先もあるわけでも、急ぐわけでもねえがら、留守番する事にしたずもな。
娘、毎朝、馬さ乗って、どごさが行くずもな。
そして、出がげる時、必ず、こう言ったんだど。
「食べ物、何でも戸棚に入ってるがら、いつでも食べなさい。但し一番奥の部屋だ
けは、決して開けてはいけません。」と、かたぐ、かたぐ、しゃべられだど。
若者、奥の部屋、見でかったずども、見るなって言（や）れながら、見ねでる内に、
一年立ってすまったど。
ひまけでけろ（暇をください）って、頼んでば、少しばかりのお礼だって、紙に包ん
だ物ど、白木綿一反もらったずもな。
若者、家さ帰ってがら、包み開げでば、今まで見だ事もねえ、妙な一文銭が入ってだ
ったど。
たんまげで、物知りの人さ見せでば、「これや、うぐいすの一文銭だ。俺さゆずれ。」
と言（や）れで、千両で買ってもらったがら、その男、大金持ちになっただずもな。
そしてば、その事聞いた隣りの親父、根ほり葉ほり聞いてがら、山の一軒屋探して行
ったずもな。
そして、開げで見るなって言われた奥の部屋、まがって見だれば、なんにも無え空っ
ぽの部屋だだど。
娘、帰って来てがら、「永い年月かげで、山々廻って、詠んだホケキョを納めで居だっ
たが、部屋を開げられだので、すっかり出ですまった」。
娘、怒るやら、なげぐやら。
さて、隣の親父は、気が付いで見でば、われ家だだどさ。
ドンドハレ

三四 禅問答

むが一す、あったずもな。
ある山奥の山寺に、禅寺があったずもな。そごの和尚さんと、山門にある一軒のコン
ニャクを売る茶店の親父、大した仲良しだだど。
ある日のこど、都の大本山から、大和尚さんが、問答がけにやって来る事になっただ
ずもな。
禅問答が苦手な和尚さんが、すっかり困ってすまったど。
茶店の親父、そんな和尚さんを見かねで、身代わりになろうと。
そして、二人は、着物を取り替え、和尚さんは茶店へ、茶店の親父は、本山から来た
大和尚さんの持つ寺へ。
やがて問答がけが始まり、大和尚が、「これいかに」と、指で丸い輪を作って、ニュッ

と出したどごろ、親父は両手を広げて答えだど。

次に、大和尚さんが、両手を広げて付き出すたずもな。

親父は片手を広げて付き出し、最後に大和尚さんが指三本付き出すと、なんと、親父、アカンベイを。

そしたどごろ、大和尚さんは、親父に深く一礼すて、満足そうにして、寺を出で行ったんだど。

ふもとの茶店へ、一休みに立ち寄った。

お尚さん、「この寺の和尚さんは、えらいお方じゃ。わしが、「日月」と尋ねると、「大海の如し」。「十万世界」はと聞くと、「五戒を保つ」。そして、「三界」はと問うと、「目の下にあり」と答えなさった。よくぞ、こんな山奥で学ばれたもんじゃ。」と誉めたずもな。

たんまげた和尚さん、親父の居る寺さ、飛んで帰ったど。

親父の言う事に、「さすが都の大和尚さんじゃ。わしがコンニャクを作って居る事を見ぬいで、指でコンニャク玉の形を作って、どうして作るのかと聞かれたので、両手で作るのだと答えた。次に、両手で十文かと聞かれたので、片手で五文ですのじゃと答え、すると、指三本で三文に負けろと言われたので、そんなに負けられるかと、赤んべえをしてやったんじゃ。」と答えだどさ。

ドンドハレ

三五 言葉のきたねえ娘

むが一す、あつたずもな。

あるどごに、言葉のきたねえ娘、あつたずもな。

ある時、ががさま、お前、まず言葉きたねえがら、ほがさ行ったら少し「オ」でも付けで、しゃべねえばねんだじえって、言つたずもな。

ある時、大風吹いで戸棚のからげ（播り鉢）、ゆれだつたずもな。

ガッタガッタど、鳴つたど。

そすてば、その娘わらす、「大風、お吹きえって、お棚のおからげ、おがつたり、おがつたりど、おほえあがる。」たど。

そしてば、ががさま、なんたらごつたつて、この娘わらす、かだごどだぢゃ。

あんまり「オ」付けるのも聞きづれがら、「オ」付けねえ方、いいんだぢゃ。」たど。

ある時、お客さんが来て、ご飯食つてば、顎（オドゲ）さ、ご飯くつたずもな。

そしてば、その娘あ、それ見で、「客のトゲさ、飯付いで、かす、かす。」つたどさ。

ドンドハレ

三六 ウグイスの声

むが一す、あつたずもな。

あるどごに、アホオ（鼻）みでな娘わらす、あつたずもな。
なんたらごつたつて、この娘わらす、嫁ごになる時、ウグイスのような声でしゃべねばねんだちゃ、つたずもな。
そしてば、お嫁さんになった時、しっこつまつたど。
「仲人ががさん、しっこつまつた、しっこつまつた。」て言つたどさ。
ドンドハレ

三七 雉子娘

むが一す、あつたずもな。
甲子村に、黒森屋敷と言われだ大地主があつたずもな。
その屋敷のあだりに、雉子川ず、流れの早え川あつたたど。
大地主なもんだがら、なんと、小作五十人、作男五人とが居だんだど。
ある時、若え者、地主たずねで来たずもな。
そして、地主の旦那さまさ、「俺、旦那さまの弟のせがれだが、なんとがごさ置いてけねべが。」たずもな。
そしたれば、旦那さま、つらしばらぐ見でらつたずが、「橋野のせがれだな。」たど。
そして、「なんぼ親戚の者でも、居候、置くわけに居がね。」と、言われだずもな。
何にしてがつてば、二年続ぎの凶作だつたずがら。
とにかぐ行くどごねえす、伯父をたよるしかねえがら、「俺、食うぐれえ稼ぐがら、なんとが置いてけでげや」。
拝むようにして頼んだずもな。
そしたどごろ、暗がりがら、まなぐちらちら光らせながら、じつと見でら者居だたど。
よぐよぐ見でば、蝙蝠（こうもり）だつたずもな。
その内に、人影立ち上つて、中座敷さ足ふみ入れだ小柄な婆さん、こっちを見で、「三番小屋が空いでるべ。」たど。
そしてば、伯父、「あア、そうだ。三番小屋が空いでるな。」たずもな。
そして、「小屋さ寝泊まりして、もちろん作男ど同じように、野良仕事してもらうがらな。」と言われだど。
これが、伯父ど伯母との初めでの出合いだつたんだど。
そう言うわけで、黒森屋敷の三番小屋に住む事になつたずもな。
作男達ど一緒に仕事するようになってがら、黒森屋敷の事、いろいろわがつて来たずもな。
二番小屋に住む源作爺がらは、仕事しながら教えでもらつたずす。
ある時、源作爺ど話してら時、女子（おなご）わらす、自分で編んだような草履へいで、青白い顔して来たずもな。
源作爺、「志保でねえが、起ぎ出したりして、風邪でも引いだらなじよにする」。
志保ど呼ばれだ娘、体が弱ぐ、寝でばり居るわらすだつたど。
志保、「そだつて、おら、お父に、山百合の根掘つて、煮付けでも作るべど思つて」と、

ボソッと云つてば、源作ぢい、「何言つてるんだ。屋敷の人達に見つかったら、大(てい)へんだ。この辺りの山、黒森屋敷のものだ。さっさと帰つて寝てろ。」っと。

それがら、ある時だつたが、作男達の集まりの日に、源作爺が来ながつたど。

真面目で働ぎ者の源作爺が、遅れた事などねがつたがら、何があつたのがも知れねえ、伯父に知られだら、言われなくてもいい事、しこたま言われると思つて、源作爺を迎えに行つたがらもな。

そしたどごろ、志保の枕もとで、じつと娘の顔(つら)こ、のぞぎ込んで居だつたど。

そして、「志保が悪くなるばかりだ。天上をにらんだまま、びくとも動がねえ、十日も口を聞かねえ。口を聞く気力もねんだべ」。

源作爺、志保の耳もとに口を寄せで、「志保、元気だせ。お父(どう)に出来る事、なんでもしてやるがらな」。

志保、「せめで、ひと口、白いおがゆ食いていなあ。」たがらもな。

「たあいのねえ事、言いやがる。十日ぶりに、やつと口を聞いたと思えば、白いおがゆだなんて、まったく、ほに。屋敷の土蔵の中には、白い米が入つてあるはずなのに、伯父が出してけるわけねえす・・・」。

その晩、土蔵の一つが破られ、米が一升盗まれたがらもな。

作男達、呼び出されで、本物の泥棒でば、米一升盗むわけねえ。俵一ぴょうは担いで行くはずだ。

とすれば、屋敷の中の誰が、となつたがらもな。

そして、伯父の代わりに、婆さん出て来だど。

婆さんの後がら、例の蝙蝠が、キイ、キイど、耳ざわりな声で鳴ぎながら、作男達の頭の上を飛び廻つて居だがらもな。

次がら次ど飛んで来る。

雪の上に体を伏せで、頭かがえ、蝙蝠を避けながら、緑側に立つ婆さん見でだれば、手にした数珠をもみながら、何が唱えでいるようだつたど。

この婆さん、蝙蝠占い師だつたがらもな。

何がわがつたのが、婆さん、蝙蝠さ手招ぎしながら、「帰つて来(こ)う」て云つてば、蝙蝠、あつと言う間に引き上げですまつたがらもな。

次の日、源作爺、雉子川に上半身突込むようにして、死んでらつたど。

そして、源作爺の喉仏に、一気に突き刺したような傷があつたがらもな。

それがら、志保、不思議な事にすっかり好ぐなり、年が明けでがら、屋敷の台所(でご)で下働ぎするようになったがらもな。

そして、暇があれば、雉子川の源作爺が死んでいだあたりで、いつも泣いでいだつたがら、それがら間もなく、一言も口聞かなくなつてすまつたがらもな。

春になつたある日、足、けがしてら雉子の面倒、見で居だたがら、雉子がすっかり好ぐなつたどごろ、どごに行くのも一緒、台所さ行く時も一緒、山さ行く時は、先になつたり、後(あど)になつたり、どごさ行く時も一緒だつたがらもな。

どごろ、ある日、雉子ど、例の蝙蝠が喧嘩して、いぎなりの喧嘩で、蝙蝠、一匹残らず雉子にやられですまつたがらもな。

婆さん、たんまげで泡吹いで、ひっくり返つてすまつたど。

それ聞いた伯父、鉄砲持ち出して、雉子をやっつける気になっただもな。

雉子、隠れで、姿現わさねがったど。

伯父、あきらめで、屋敷さ入りがげだ時、志保が、屋敷がら飛び出で来たずもな。

志保を見だ雉子、志保がやられると思ったのが、屋敷の屋根さ姿を現わし、一声高く泣いだんだど。

伯父は、この声で見当付けで、素早く引き金引いたもんだがら、雉子に命中して、屋根がら転がり落ちですまったど。

志保、走せ寄って、雉子を抱き上げ、頬ずりしてらったずが、何カ月ぶりで口を聞いたど。

「志保、お前、口を聞くようになったのが」。

そしたどごろ、志保、「私は白いおかゆが食いていと、お父(どう)に口を聞いた。お前は、ここに住ますと、私に口を聞いた。二人とも口を聞いたばかりに・・・」と泣いでらったずが、それがら志保、雉子になって、山つづずの花が咲いでる山合いの中に、消えで行ったんだどさ。

ドンドハレ

(この話は、井上ひさし『新釈遠野物語』中の「雉子娘」をもとにしている。井上氏が釜石を訪れた際に、須地ナヨさんが昔話につくり変えて語って聞かせたものである。)

三八 白蛇と八雲伝説

むが一す、あったずもな。

今がら三百年ほど前の事だずが、ある豪家の六代目の頃だったど。

屋敷内に一匹の白いぺっこな蛇、棲みついでいだったずもな。

むがすがら、白い蛇、神の使者だと言われでるんだど。

六代目の奥方、心の優しい人で、その蛇、可愛がって居だったど。

蛇、米びつさ入って、米食っても、べつに追い出したりすねでいだが、

そうこうしてる内に、蛇だんだん大きくなって、大蛇になってすまったど。

ある年の夏だったど。

六代目、うとうとど、昼寝してる時、夢にうなされで、ハッと目さまして、外見で、たんまげだど。

庭に大きな木あったたずが、その大木に大蛇ぐるぐると、七巻半巻ぎついで、頭をもだげで、じっと六代目見でらったど。

この大蛇にうなされだど思った六代目、すばやく鉄砲に玉を込め、大蛇めがげで打ったずもな。

弾は命中、それごそ、地ひびき立でで、どすんと、落ちだど。

そごで、村の人達、二十八人の手を借り、やっとかづいで川に捨てだんだど。

とごろ、川原に見だ事もねえキノコがおえ(生え)、さらに川には、名も知らねえ雑魚、

川底が見えねえくれえ増え続けだったど。

その事聞いた六代目、崇りを恐れ、大木の下に蛇塚を建て、お水神さまを祀ってがらは、何事もなぐ、平穩無事な年月が今も続いで栄えでるんだど。

さて、六代目に、雪のように肌の白い、美しい娘があったずもな。

娘の名前クラゴって、それは、それは、三国一の美人と噂されるくれえ、美しい娘だったど。

そして、クラゴ望まれで、別の豪家の八世に嫁ぎ、可愛い男の子をもうげで、幸せに暮らしてらったずが、急に八世が亡くなつてすまっただずもな。

若ぐ美しいクラゴ、残されだ忘れ形見、育で居だたずが、クラゴ三十七歳の春だったど、さつとした風邪から病気になる、日に日に重くなるばかり、今日、明日の命どなつたずもな。

さあ、家族、親せぎ、交替で看護してらったずが、三月十八日の夜だったど。

大暴風雨どなつて、それこそ嵐が吹きまぐり、不気味な夜だつたずもな。

皆、看護疲れで、睡魔におそわれ、うとうとど眠つてすまっただずもな。

丑三つ時過ぎだ頃だつたど。

ハッと目さましたとごころ、病人の姿は消え、寢床はもぬけのから。

皆がかりで探しても、見つからなぐ、そしたどころ、病人がいつも履いでだ草履が、裏口に北に向けで揃えであつたど。

村中の大騒ぎどなり、山がら川、海辺まで探しても、見つからながつたずもな。

そしたとごころ、水海、大槌、山田、宮古の人達、嵐の夜空、笛や太鼓のにぎやかな鳴りものが、北へ飛んでぐ不思議な音、聞いたず人達、いだんだど。

その鳴りものが、大蛇の住むど言われる、腹帯の淵で消えだず事だつたずもな。

そこで、宮古の人達、腹帯の主に誰が迎えられたのではと、噂になつたんだど。それがら、ある時、腹帯の淵のほどりで仕事してら若者、鉦、淵さ落してすまっただずもな。

鉦、探しさ、淵さ飛び込んだずもな。

そしたとごころ、淵の底に立派な家あつたど。

そして、美しい女の人が出で来たずもな。

そして、「何しに来ました」って、言つたずもな。

そしてば、その美しい人、「鉦は返してやるがら。私は、淵の主に見込まれで、釜石がらさらわれで来た者だが、ぜつたい人に言つてはなりません。もし他言すれば、淵の主命を取られますよ。」とくれぐれも注意されで、鉦、返してもらつて、帰つて来たずもな。

言うな、と言われれば、言いたくなるのが人情。

その若者、酒の席でしゃべつてすまっただど。

天罰てきめん、病にかかり、命を取られだんだど。

さて、残された男わらす、九才で比叡山に入り、天台の奥を極め、阿闍梨の称号を賜り、御仏（みほとけ）の力で淵の底に沈む母を救うため、腹帯の淵に行き、一念を込めて祈りをささげ、「精霊、ここにおわしますならば、願わくば姿を現し給え。」と、念じながら、陀羅尼経一卷を淵に投げ入れると、水煙が高ぐあがり、母の姿が現れだんだど。

そごで、母の霊をなぐさめるため、立派な法名を贈り、懇ろに弔いをしたんだど。

ドンドハレ

お祭りには、かならず涙の雨が降ると、言われています。

三九 迷い家

むが一す、あつたずもな。

あるどごの嫁（あね）っこ、春先に青物取りに、山さ行つたずもな。

いっぺいあるがら、一生懸命取って行つてば、なんとも言（や）れねえ立派な家の前さ出はつたずもな。

「はでな、まんつ、ごごにこんたな家、あつたはずねえが。」ど思つたずども、その嫁っこあ、「うんだらば、ごごに誰が居だべか。」ど思つて、開げで見れば、なんと、台所（でどご）さ火っこ焚（て）えで、釜、かげで、釜、つんつんと、煮だつてらつたど。

「あや、ほんだら、こつつの家の人達あ、どごさ行つたんだべ。」ど思つて、次の部屋開げれば、座敷の床の間には、立派な掛け軸が掛けで、そして次の部屋には、黒塗りのお膳や赤えお椀が、いっぺい用意されでらつたど。

今にも人が出て来そうだったずども、人の姿がどこまで行つても、いねがつたずもな。

さあ、その嫁っこ、山賊の家でねえべがど思つたずもな。

おっかなぐなつたがら、谷川ぞいに、けつまずぎながら、一目散に家さ帰つて来たずもな。

そして、家の人達さ、山の中の不思議な家のこど話したずども、旦那どのも、家の人達も、誰一人どして本気にすながつたど。

そうこうしてらつたずが、ある日だつたど。

嫁っこ、かど（川戸）で洗い物してら時、川上の方がら、赤えお椀が一つ洗れで来たつたど。

あんまり美すうがら、嫁っこ、拾つて来たずども、家の人達さば、しゃべねで居だずもな。

しゃべれば、また、何がしたつてしゃべられるど思つて、米びつの中さ隠して、

米、量つたり、麦、量つてがら、米も、麦も、減らねがつたど。

家の人達も、やつと気付いで、嫁っこさ聞いて見だど。

「こりゃ、こりゃ、嫁っこ。いつもだら、米無いどが、麦無いどがって言うが、なじよなごどだ。」たど。

嫁っこ、かどで洗い物してだ時、川上がら流れで来だごど、そして、このお椀で量つてだごど、話したずもな。

そしてば、家の人達も、今までの嫁っこの話、本当だつたど思つたんだど。

いずれ、この家、こんな事あつてがら、暮らし、よぐなつて、長者になつたんだど。

マヨイガに行き当だつた人は、必ず、その家の物を一つ、持つて帰つて来るものなんだど。

正直な嫁っこ、持つて来ながつたがら、お椀の方で洗れで来たんだとき。

ドンドハレ

四〇 古屋の漏り

むがす、あつたずもな。

あるどごに、爺さまと孫どあつたずもな。

その家で、一匹の馬っこめがげで、山がら、狼、下がって来たずもな。

そして、爺さまと孫、寝ならば、馬っこ食ってすまう気になつていだずもな。

そしたっけ、今度、泥棒も、その馬っこ、盗みさ来てらつたど。

そしてる内に、それ、ぶっかれ家だがら、爺さまと孫、寝ながら、何がしゃべる声、聞こえて来たずもな。

孫、「爺さま、爺さま。」たど。

「爺さま、一番、何、おっかねえ。」たずもな。

そして、「狼、おっかねえが。」つてば、爺さま、「何、狼など、おっかねはで。」つて言つたど。

「そんたら、泥棒が。」つてば、「ねえさ、泥棒など、何、おっかねはでえ。」つて、言つたずもな。

さあ、狼ど泥棒、たんまげだど。

俺(おら)よりおっかねもの、何んだべど思つたずもな。

孫、「そんたら、爺さま、爺さま。何、おっかねのよ。」てば、「古屋の漏りのくれえ、おっかねものねえじゃ。」たど。

そうしてる内に、ドヅバヅドヅど、大雨降りになつたずもな。

爺さま、「それ来た。古屋の漏りが来た。」たど。

「さあ、そっちさも来た。こっちさも来た。」

そしたどごろ、「さあていへんだ。おれよりおっかねもの、あるふんだ。逃げた方がいい。」

狼、逃げですまつたずす、泥棒も、「おれよりおっかねもの、こっちにもいだのが。何も盗つていられねえがら、逃げた方がいい。」

そして、逃げで行つたんだど。

その爺さまの、一番おっかねがつたのが、ぶっかれ家の雨漏りだつたどさ。

ドンドハレ

四一 貧乏神と福の神

むが一す、あつたずもな。

ある時、貧乏神と福の神、旅さ出はつたずもな。

行くが、行くが、行つたどごろ、大きな家、あつたつたど。

そしたどごろ、家の中がら、たいした大きな音、聞こえできたつたど。

「この馬鹿野郎。」だどが、「貧乏神。」だどがつて。

そして、貧乏神、「俺、呼んでらようだがら。」って、その家さ入っていったど。
さあ、福の神さま、貧乏神さま、入ってったもんだがら、一人てくてくど歩いてだど
ごろ、暗ぐもなつたす、どごさが泊まるどごねえがなあど思つてらつけ、いいなりな
家あつて、中がら笑い声がしたずもな。
そごさ行つて、「泊めでけでげや」。
泊まることにしたど。
そして、爺さま、薪、のがのがと焚いで、婆さま、何んにもねえがらつて、熱いお
湯、飲ませだずもな。
そごで、福の神さま、その家に住む事にしたんだどさ。
ドンドハレ

四二 河童の証文

むが一す、あつたずもな。
甲子川、お薬師さんだの、松原で、北に折れだり、南さ折れだり、淵になつたり、川
原になつたりしてらつたずが、その淵にカッパ棲みついでいだつたど。
松原に、何十代も続いだ長者どんのお屋敷、あつたずもな。
ある年の夏だつたずが、お屋敷の馬方、はがあがりして、川さ馬連れで来だずもな。
「赤、赤、疲れだべ。今日、までに洗つてやっからな。」て、川さザバザバと、入つて
たずもな。
「どう、どう、まっと中さ入れや。」ても、馬、足首折り曲げで進まながつたど。
馬、カッパおっかなくつて、入れねがつたずもな。
馬方、無理苦理、手綱引っぱたずもな。
そしたどごろ、ぼわり、ばかりど、淵の方がら、風吹いで来たつたど。
馬方、こんな日来るぞど思つて、わざわざ深けえどごで、馬の足洗つたり、背中流す
ながら、見でだども、カッパ、泳いで来ながつたど。
馬の立でがみ、さばぎながら、気付けで見でだれば、いつの間に来たもんだが、
カッパの皿見えだつたど。
馬方、今だど思つて、カッパの皿、づんがり押せ付けで、「とつつかめいだ、とつつか
めいだ。」て、叫んだもんだがら、馬、たまげで、「ひんひらひん。」て、上手さ馳せ上
つたずもな。
そして、カッパ、はア、馬の背中さぐるぐる巻ぎにされで、お屋敷さ連れでがれだど。
嬉石、松原、女坂の人達、「まさか。」「ほにが。」「ていしたもんだ。」って、集まつ
て、東前の方がらも見ねでられね（見ないでいられない）。
さあ、屋敷の庭、人山出来るくれい、集まつて来たど。
旦那さま、庭さ出で来て、「こりや、カッパ。俺家の赤、引っぱたずな」。
カッパ、ひざっこ突いで、しばれだ手、合わせで、「これがら、いはずらすねがら、堪
忍してけだんせ」。
旦那さま、「いや、許すわけにいがねえ」。

年より達がら、若者、女子達、馬何匹もやられでるがら、なじょに成敗されるんだべど思って、にらんでいだど。

そうこうしてる内に、カップの皿、かわいで来て、ヒトデの干したのみでいになつたずもな。

そしてば、カップ、「旦那さま、紙ど鉋、貸してけだんせ。」たど。

旦那さま、用意したどころ、カップ、いぎなり鉋で、指ぐっさり切って、ぽと、ぽと、落ちる血で、カップの字書いだんだど。

そして、「旦那さま、金輪際、人さも、馬さも、悪い事すねえど、書きやんした。なじょにが、許してけだんせ。」て、頭、土さ、すりづげで頼んだど。

旦那さまも、許してやるべど思って、嚙んで含めで聞かせだど。

「お前も、ががも、子もあるべ。孫さも、こんな、いたずら、させでなんねぞ。ええが、わがったが」。

そうしたっけ、河童、喜んで、背中のひれっこ、きゃっちゃむぐれにして、川さ入って、手合わせでらつたずが、それがらは、淵で河童に引ぎずられだりする事、なぐなつたんだどさ。

どんどはれ。

絵ども文字どもつかね、その書きもの、今も大事に納めであるんだど。

四三 上河原淵(わっからぶち)のカップ

むがす、あつたずもな。

小川に上河原(わっから) どの屋号の家、あつたずもな。

その家に、源七どいう力自慢の男、居だつたど。

ある時、源七、畑で仕事してらどごろ、背中をただぐ者、いだつたど。

振り返って見でば、カップだつたずもな。

そして、カップ、「源七父つあん、俺ど相撲すねが。」たずもな。

力自慢の源七にすれば、願つてもねえ事だつたど。

源七、「よ一す、相撲とるが。」たずもな。

そしてば、カップ、「もす、俺、勝つたら、この畑の胡瓜、みんなけろよ。」たずもな。

源七、今まで、甲子村で、負けだ事などねがつたずがら、カップなどに、負げるわけねえど思って、「よ一す、いかべ、俺、負けだら、胡瓜、みんなやるがらよ。」たずもな。

さあ来いどなつて、「ハッケヨイ、のこつた」。

相撲とつてみで、たんまげだど。

源七、押しでも引いでも、カップ、びくともしねえ。

それどごろが、反対に、投げられですまつたど。

源七、悔すがつたずども、何回とつても、勝ず事、出来なぐつて、ついに負けだ。「胡瓜、みんなやつからよ」。

それがら、カップ、上河原の淵に住むようになったんだど。

そして、源七父つぁんと、仲良くなり、畑仕事、山仕事、手伝ったがら、源七は、暮らすも楽になったんだど。

また、上河原淵で、溺れるわらす達、居れば、助けたり、村の人達ども仲良くなったんだどさ。

ドンドハレ

四四 穴淵の犬

むがす、あつたずもな。

小川の川に、穴淵どいう淵、あつたずもな。

この淵の底に、穴、開いでで、宮古の腹帯まで続いでるんだど、言われでいだんだど。ある時、小川のマダギ、愛犬連れで、淵の辺り散歩してる時だったずが、急に空がくもり、あつという間に嵐になったずもな。

さあ、雷は鳴り出すと同時に、淵がら大蛇現れだど。

マダギ、あわでで、大蛇めがげで、鉄砲うったずもな。

弾は、大蛇に命中。

そしたどころ、犬、大蛇に飛びががったもんだがら、大蛇もろとも、淵の底さ沈んですまっただど。

マダギ、淵がら、犬、上がって来るの、しばらく待ったずども、・・・ある日、部落の人、用足すに宮古さ出がげだずもな。

そして、宮古の人達のうわさ話、聞いだどごろ、腹帯の淵がら、大蛇の死骸ど、犬の死骸が浮がび上った、どいう話だっただど。

そごで、大蛇は腹帯の主であろうという事で、塚を立てで、大供養したどいう事だつたずもな。

その事、部落さ帰って話したどごろ、マダギ、その話聞き付けで、青ぐなってらつたずが、発狂してすまって、こんな事あつてがら、小川の穴淵ど、宮古の腹帯は、海の底で続いでるんだと、信ずるようになったんだどさ。

ドンドハレ

四五 なげーなげー綱っこ

むがす、あつたずもな。

ある時、弁天様の広場で、わらす達、陣取りしたり、縄跳びしたり、まりつぎしたり、遊んでだっただど。

そしたどごろ、天から、なげーなげー綱っこ、するすど、下がって来たずもな。わらす達、たまげで、その綱っこ、つかんで、「これあ、なんだべど思つて、引っぱつたり、ゆすつたりしながら、天の方見でば、ずっと、ずっと上に、赤え、まるい物見えだんだど。

「あれえ、あの赤えの、ホーズギだべが。あっ、下がって来たぞ。赤えまりっこがなあー、下がって来たぞ。あれア、雷のわらすっこだ。あっ、そうだ、そうだ。早く早く、降りてこ。遊ぶべす。早く降りてこー」。

皆、喜んで叫んだど。

雷のわらす、みんな遊んで居だどごさ、ぼんと、降りて来たぞもな。

雷のわらすこも、仲間さ入れて、弁天様の広場、ますます楽すぐ、夕ま方まで遊んでだどごろ、雷のわらす、天さ降りてぐなっただど。

わらす達みんなで、「俺家（おらえ）さ泊めっからよ。俺家さ泊まれ。」たずども、泣ぎやまねがっただど。

みんな、困ってすまっただどもな。

困って居だどごろ、天から長え長え綱っこ、するする下がって、雷のお父（どう）、降りて来たっただど。

雷のわらすのどごさ、ぼんと降りて来たぞもな。

雷のわらすあ、喜んだど。

みんなも大した喜んで、雷さまのお父も喜んで、「みんな、ありがとう、ありがとう。一緒に遊んでけで、ありがとう。ずっと前に、ほがの村さ遊びに行った時、そごのわらす達に、いじめられで、帰って来たごどあつたが、こごのわらす達、みんな仲よく遊んでけで、なんたら、いいわらす達だべ。また、来っから、遊んでけろよ」。

「うん、いいども、いいども。遊んでやっから、また、こよ。」

雷さまのお父ど、わらすあ、綱っこさつかまって、するする登りながら、「さよなら、さようなら、また、くっからな」。

まりのようになって、ホーズギのように小せぐなりながら、ピカピカ、ゴロゴロ、鳴らすながら、天に向かって帰って行ったんだどさ。

ドンドハレ

四六 うり子姫子

むがす、あつたぞもな。

あるどごに、爺ど婆、あつたぞもな。

ある時、婆、畑さ行ったれば、瓜、大きくなってだぞもな。

婆、「なんたら大きな瓜だべ。爺、山がら帰って来たら、食うべす」ど思っで、かど（川戸）さ、冷やしていだぞもな。

爺、帰って来たがら、「爺、今日、畑さ行っれば、大きな瓜あつたがら、冷してだがら、食うべす」。

そして、割ったどごろ、なんと、めんこい女子わらすだつただど。

爺ど婆ど、喜んで、瓜がら生まれだがら、瓜子姫子ど名前付けで、育ででいだぞもな。

年頃になつてば、ますます美すぐなつて、あつちがらも、こつちがらも、嫁にほしい、嫁にけろず人達、いだぞもな。

そして、嫁に行ぐ事になつたぞもな。

嫁仕度に、爺ど婆ど、町ちゃ買い物に行く時、瓜子姫子さ、「ぜってい、誰来ても、戸、開げでわがねえがらな。ぜってい開げるなよ」。

そう言って、出がげだずもな。

瓜子姫子、機織が上手で、いつも、トンカラリン、トンカラリンと、美しい音で機織りしてらずもな。

そしたどごろ、山母、山がら降りて来て、「瓜子姫子、戸開げろ。瓜子姫子、戸開げろ」。

「おらァ、やんた。爺ど婆に、戸開げるなって言われでるがら。」て言ったずもな。

そしてば、山母、「爪の入るくれい開げろ。」たずもな。

瓜子姫子、爪だけだらえがんべど思て、少し開げだどごろ、山母、いぎなり戸開げで中さ入って、瓜子姫子、殺してすまっただ。

そして、庭の臼の中さ入れで、山母、瓜子姫子に化げで、そして機織りしてだずもな。

爺ど婆ど帰って来たどごろ、なんだが機の織る音、おがすがっただ。

いつもだら、トンカラリン、トンカラリンと、美しい音してだのに、なんだが、ガダビツ、ガダビツと。

「今日の音、おがすな。」ど思ったずども、爺ど婆、「瓜子姫子、今帰ったぢゃ。」たど。

ガラガラ声で、返事したずもな。

そして、いよいよ瓜子姫子、お嫁さんに行く時来たがら、花嫁姿に、もよって（着飾って）、馬この背中さ乗せで、歩き出したどごろ、カラスが追いかげで来てがら、「瓜子姫子ば、のせねえで、山母のせだ、ガアガアガア。」ど。

どごまでも、カラス泣きながら、追って来たど。

よくよく聞いてば、カラス泣ぐ声、「瓜子姫子ば、のせねえで、山母のせだ。ガアガア、瓜子姫子は、臼の中」。

なんだが、おがすがらど思て、臼の中見でば、瓜子姫子、変わり果でだ姿になって……。馬がら、ずるずると山母引きずり降ろして、瓜子姫子のかだぎを取ったんだどさ。

ドンドハレ

四七 海の水はなぜ辛い

むがす、あつたずもな。

甲子村のあるどごに、金持ちの兄貴ど、貧乏な弟、いだつたずもな。

弟、母(がが)さまど二人で、田畑、一生懸命稼いでも、さっぱり楽になんねえがっただ。

ある年の夏だつたずが、日照り続きで、田の物も、畑の物も、すっかり枯れてすまっただ、食う物もねぐなつた。

弟、兄貴さ借りに行つたずもな。

「俺さ、米、借してけろ。」って。

そしたどごろ、欲張り兄貴、「お前さ借す米なんか、無え。ほがさ行って聞いて見ろ。」て言ったんだど。

弟、がっかりして歩いてらっけ、柴、かづいだお爺さんに、声かげられだずもな。

「何、そんなに困ってるのや。」て。

そごで、弟、これまでの事話したどごろ、爺さん、弟に、まんじゅう一つ、けだずもな。

そして、「これ持って、お堂の裏さ行って見ろ。ほら穴があるがら、そごに小人達いるが、小人達、まんじゅう欲しがるが、石の臼どなら取り替えでもいい、と言うんだぞ。」と言われで、お堂の裏さ行って見れば、本当に爺さんが言った通り、ほら穴があったど。

弟、まがって見れば、小人達、何やらワイワイワイ、大きわぎしてらったど。

弟、「ハハア、皆であのかやを運ぶつもりだな。どれどれ、俺が持ってってやるべ。」

弟、そっとかやをつまんで、運んでやったずもな。

小人達、大した喜んで、「ワー、なんでお前、でっかくて力持ちなんだ」と、言いながら見上げだとたん、小人達、まんじゅう見つけて、「あや、お前、いいもの持ってるな」。

爺さんの言ったどおり、小人達、まんじゅう欲しがったど。

「ぜひとも、これど取り替えでけろ。」と、小人達、それごそ、大判小判持って来て、弟の前さ並べだんだど。

弟、爺さんに教えられだどおり、「これは、俺の大事なまんじゅうだ。石臼どなら取り替えでもいいどもな。」たど。

小人達、「えっ、あの石の臼、大事な宝物。うんだども、仕方ねえ。取り替えっか。」

弟、臼を持って来たずもな。

爺さん待ってで、「おお、石の臼、もらって来たな。その臼は、右に回せば、なんでも出る。好きな物が出る。左さ回せば止まる。不思議な臼ぢや。」たど。

家さ帰った弟、さっそく、ががさまど、ためして見だずもな。

「米出ろ、米出ろ」。

ざくざく、米が出だど。

「魚出ろ、魚出ろ」。

そしてば、魚、ぴよんぴよん、いろいろ出で来つがら、すばらぐぶりで、腹いっぱい、ご馳走食ったど。

まるで長者になったようだど、大喜び。

「長者どんが、こんな、あばら屋にいるの、おがすんでねえが」。

そして、「家出ろ、家出ろ」。

そしたどごろ、長者どんのような家、出だど。

弟、村の人達呼んで、ご馳走する事にしたずもな。

もちろん、兄貴もお客さんとして呼ばったど。

「弟のやつめ、急に長者になって。これは何が、わけあるにきまつてる。今日は、しっかり見はってやるべ」。

その内に、弟が奥のへやさ入って行つたがら、兄貴、まがって見れば、弟、石の臼を回しながら、「お菓子出ろ、餅出ろ」。

さあ、お菓子も出れば、餅も出る。

へやいっぱい、お菓子だの餅で、兄貴、「ハハア、わがった。みんな、あの臼のやつ

た事だな。ええ物、手に入れたもんだ。あの臼せいあれば、俺も長者どんになれるんだ」。

その晩、兄貴、弟の家さしのび込み、こっそり臼を盗み、ついでに、お菓やら餅を、持でるだけ持って、走ったど走ったど。

やっと、浜に着いでば、船がつながってあったど。

兄き、うんこら、うんこらど、船を漕いで、「このままどごが、知らねえどごさ逃げよう。この臼さえあれば、皆、たまげる長者になれる。やれやれ急に腹へった」。

そこで兄き、背負って来たお菓子やら餅を、食った、食った。

あまり甘え物食ったがら、今度、塩かれい物がほしくなったがら、臼を回しながら、「塩出ろ、塩出ろ」。

そしたどごろ、出るわ、出るわ。

兄き、「なるほど、これは便利なもんだ」。

塩は、次がら次ど、どんどん出る。

「もうええ。止まれ、止まれ。そんなに要らねえ」。

兄貴、止め方知らねえもんだがら、臼は勝手に、ごろごろ回って、どんどん塩を出す。

その内に、その船、塩の山が出来、それでも塩はどんどん出る。

そして、とうとう、ずぶずぶ船は沈んで、今でも海の底で塩を出してるんだど。

それで海の水は、塩からいんだどさ。

ドンドハレ

四八 竜神のお告げ

むがす、あつたずもな。

ある雑魚釣り、毎日、海さ行って、雑魚釣りしてらずもな。

なんぼ何日行ったたって、雑魚一匹も釣れだ事なえくしえ、雑魚釣りの下手な人だったど。

さっぱり雑魚釣れねえがら、この若者、貧乏だったど。

それでも、人の物盗るわけでもねえ、ごまかすわけでもねえ、正直な人だったずもな。

そして、釣れろ釣れざれ、毎日行って、竿たらしってらったど。

そしたどごろ、ある時、竜神様、現われで、「これこれ、お前さ、ええ物授げっから、これで暮らし立でろ。」って、かめっこ持って来たずもな。

そして、「この中さ入ってら、水薬だがら、どごが病むず（痛いという）人来たら、これ付けでやれ。この水で治るがら」。

そのかめっこ、もらって帰って来たずもな。

そしたどごろ、ある時、辺りの人、手痛ぐしたんだど。

「どらどら、俺、治してけっから。」て、片脇の部屋さ行って、かめっこがら水出して来て、病むずどごさ、付けでけだずもな。

そしてば、すぐ治ったど。

さあ、辺りほどりの人達、「誰それ殿、ええ薬持ってら。」どなって、あっちがらも、

こっちがらも、治してけろって来たずもな。
姉っこも来れば、若者も来る、婆さまも、爺さまも来て、治していだったずもな。
そしてる内に、金もたまって来る。
喜んでらったずが、そごのががさま、「俺の親父、ほんだら、なんたな物付けて、治して
るんだべ。」ど思っつて、ある時、親父のいねえの見計らっつて、その部屋さ行っつて、か
めっこの蓋とっつて、まがっつて見だずもな。
そしだどごろ、美すな姉っこ、入っつてらったずもな。
そのがが、ごしえやげだずもな。
そして、かめ、庭の井戸端さ持っつて、投げだど。
かめっこは、こわれですまっつたず。
薬の水も、まがっつてすまっつたず。
さあ、その雑魚釣りの男、たいへんな事した、まんつ、なじょにしたらいかんべど思
っつて、また、海端さ行っつて、その男、「竜神さま、もす、竜神さま、もす」て呼んでば、
竜神さま出で来たがら、「俺(おりゃ)のががに、かめっこ、ぶっかされですまっつたが、
まんつ、人助けする事、出来ねぐなっつた。」て、言っつてば、
竜神さま、「どごさ投げだ。」て言うがら、「俺のがが、井戸端さ投げだず。」て言っつ
てば、竜神さま、「そんだらば、井戸端さ行っつて見ろ。きていな草、生えでるがら、今度、
それで、みんな治せ。それは、ゆむぎ(蓬)ず草だがら、天日に干してがら粉にして
れば、病むずどごさ、くっ付けで、火、付けで治せ。」て、教えだんだど。
そして、家さ来て、見でば、本当に井戸端さ、ゆむぎ生えでらっつたど。
教えられだがら、そのゆむぎ取っつて来て、干して、揉んで、モグサこしえで、病むず
どごさ付けで、火、付けでば、みんな治っつたんだど。
それが今のお灸で、竜神さまのお告げなんだどさ。
ドンドハレ

四九 毒梨

むがす、あっつたずもな。
ある山寺の庭に、熟した、うまそうな、梨の木あっつたずもな。
和尚さんが、「小僧、小僧、あれは毒梨だがら、食っつたら死ぬぞ。」と、堅ぐ、堅ぐ、
言っつてらっつたど。
とごろ、その和尚さん、そう言いながら、自分はこっそり食っつてらっつたど。
何も知らねえ小僧、和尚さんの話、本気にしてらっつたずもな。
ある時、和尚さんが、用足すに出がけだ時だっつたずが、小僧、なにげなしに、外なが
めでいだどごろ、鳥やっつて来て、毒梨つっついで、食っつてらっつたど。
ほだども、鳥、さっぱり死なながっつたずもな。
小僧、おがすなあど思っつて、落ちでだ梨、ひろっつて食っつて見だど。
とごろ、甘いなのんの、頭鳴るくれえ甘くて、うめえがっつたど。
小僧、和尚さんに騙されだど思っつたずもな。

梨、いっぺい食って、和尚さんの大事な壺割って、われの部屋さ行って、布団、頭が
らかぶって寝でながら、「こら、小僧。なんで寝でる。」たど。

そしたどごろ、小僧、「和尚さんの大事な壺、割ったがら、毒梨食って、今死ぬどごろ
です。」たどさ。

ドンドハレ

五〇 観音さまのお授けのへら

むがす、あつたずもな。

あるどごに、なんぼ稼いでも稼いでも、一向ええ事のねえ男、あつたずもな。

その男、観音さまさ、願かけだずもな。

「何が、俺さも、ええ事あるように。」て、願かけだど。

そして、十日願かけで、その日、ちょうど満願で、そして一生懸命拜んで、その男、
「なんたら、今日で満願だが、俺さば、何んにも、お授げも、お知らせもねんだな。」
ど思っで、観音さまがら降りで来たずもな。

そしてば、そごに、へらっこ、落ちでらつたずもな。

「なんだべ、まず、これ。」ど思っで、見でば、片方は赤くて、片方のほう黒れがつた
ずもな。

「おがすねもの、見つけだな。まんつ、ほだども、見つけだがら、家さ持つてくべ。」
ど思っで、持つて来たずもな。

そしてる内に、その若者、腹按配、悪ぐなつたがら、どごで用足すべ、ど思つたずも
な。

どごもねがら、畑の真ん中だがら、何んにも拭ぐ物ねがら、あれで拭ぐべがなど思っ
てがら、その黒れえ方のへらで、べらつと拭いだど。

どごろ、その男のケツツ（尻）、鳴り出したずもな。

うん、おっぽこ、ぽっぽこ、すってんねんずん、がだびづ、がだびづ、がだびづど、
鳴り出すたずもな。

その男、たんまげだずもな。

「ありや、これまず、困つた。なじよにしたら、えがべ。」ど思っで、「そんだら、こ
っちの方でも、こすつて見るべ。」ど思っで、赤げ方でこすつてば、止まつたずもな。
「よし、ええ事、おべだ（知つた）。どごさが行って、ためすて見るべ。」ど思つたず
もな。

そして、行ってば、そば屋の前さ、駄賃付け達、馬止めで、何が食つてらつたずもな。
そごさ行って、その馬の尻、黒れえ方で、べらつと、拭いたずもな。

さあ大変だ、その尻、鳴りだしたずもな。

大きな声で、「おっぽこ、ぽっぽこ、すってんねんずん、がだびづ、がだびづ、がだび
づ。」たずもな。

馬、たんまげで、跳ね歩つたずもな。

さあ、中がら、みんな、出はつて来て、大さわぎしたずもな。

その時、その男、知らねふりして、行って、今度、赤け方で、べらっと、こすってば、止まっただもな。

そしてだっただもな、ある時、その男、お寺さ行っただもな。

お寺さ行ってば、その日、お説経のある日で、お尚さま、お説経してらっただもな。そごさ、長者どんの娘が、お伴の人達に連れられで、お説経聞きに来てらっただもな。その男、長者どんの娘の後さ行って、座ってがらに、そのへらっこの柄で、ぽつんと突づいだど。

そうするど、その尻、鳴りだしただもな。

「おっぽこ、ぽっぽこ、すってんねんずん、がだびづ、がだびづ」ど。

さあ、その長者どんの娘、しょうすがる。

みんなも、お説経も何も聞かねで、その娘こぼり、見だだもな。

その娘、泣ぎながら、家さ帰ってすまっただど。

そして、それ、家さ来てがら、医者だ、何んだて、頼んでも、娘の病気、治ねがっただもな。

そごで、長者どんで、「娘の病気、治した者、婿にする。」と、立札、立でだだもな。その男、それ見でがら、「俺、今、立札見で来ました。俺、娘の病気、治すてけるがら」て、入って来たど。

そしてば、それ、小汚らすね若者だがら、そごにいだ人達、何、こんな者、入れだっただもな、立派な医者だの、何来たて治せねもの、こんなな者に治せるもんでねんだ。」て、追っばらたっただもな。

そしたどごろ、旦那どの出で来て、「いやいや、何んでもいい。治してける人だら何んでもいい。まず通して見ろ」。

そして、その男、中さ入れられだんだど。

そして、その娘っこ、寝でらどごさ、行っただ、ほれ、「おっぽこ、ぽっぽこ、すってんねんずん、がだびづ、がだびづ。」ど鳴ってらっただど。

「みんな、この部屋がら出でける。」ただもな。

そして、「そごさ、屏風、まわすてける」たど。

そして、本当のふりして、赤え方のへらっこで、べらっとこすっただど。

止まっただもな。

その娘、喜んで、「俺の一番しょうすどご、治すてけだがら、俺、この人、婿にもらいます。」て、その男、長者どんの婿になったどさ。

ドンドハレ

五一 せやみ

むがす、あっただもな。

もののたどえに、横の物、縦にもしたぐねずごど、あるんだが、その男、たでの物、横にも、したぐねえくれない、せやみ（ぶしょう者）だっただもな。

親父、それ見で、なんたらごっただもな。

「まず、このわらし達にも不足ねんだが、こなな、せやみなごどで、わがんねんだが、ぺっこ旅にでも出して見っかな。」ど思ったずもな。

そして、そのわらすさ、「こりゃこりゃ、このわらす。お前、そんなな、せやみなごつて、わがんねんだがら、旅さでも行って見たら、なじよだ。」って言っば、そのわらす、「アイ」って、旅さ行く事にしたずもな。

それ、どごのおふぐろだつて、おふぐろずやつ、馬鹿は、馬鹿なりに、安んずるがら、腹ばりもへらさせねど思ったがら、握りっこ、いっぺい、こしゃでけだずもな。

そのわらす、その握りっこ、どっこいしょど背負つて、ぶらつと、出で行ったずもな。

どごさ行くあでもねえ、なんとになる目的もなぐ、行ったずもな。

そして、行くが、行くが、行ったれば、腹へったつたど。

だども、背負つてだ握りっこ、一人で下ろしても、食いだぐねがったど。

誰が、腹へつたやつ来たら、下ろして食う気になって、待つてだずもな。

そしてば、それ、下(しも)の方がら、編み笠かぶつて、口、開えだ男、来たずもな。

その男、「あれだ、あれだ。」ど思ったど。

あれ、腹へつて、口、開げで来たようだがら、あれに下ろしてもらつて食う気になつて、待つてだずもな。

口、開げだ男、来たがら、「じよ、じよ、お前、腹へつてらべ。」つたど。

口、開いだ男、「何してよ。」たど。

「いや、口、開げで来たがらよ。腹へつてらつたら、俺の握りっこ、下ろしてけろ。二人で食うべす。」たど。

その、口、開げで来た男、「ねえさ、ねえさ、人の握りっこ、下ろすどごのさわぎでねえ。俺の笠のひも、とげだども、手出すて締めるのせやみして、口、開げで、おさえで来たつたど」。

せやみして、きりねんだど。

上に上、あつたつたどさ。

ドンドハレ

五二 種なし柿

むがす、あつたずもな。

あるどごに、柿の木、それごそ大事に育ででら、若げえ者、いだつたど。

ある年、たつた一つ、柿の実なつたつたずが、大きくなるが、なるが、人、ひとり入るぐれい、大きくなつたずもな。

こんなに大きくなつてば、中、空っぽだべど思つて、若げえ者、こつ、こつど、叩いで見でば、中がら、「待つた」ず声すだずもな。

たまげだ若げえ者、まがつて見でば、なんと、柿の中で、白いひげの爺さまど、若げえ男、五目並べしていだつたど。

五目の好きな若げえ者、われも、柿の中さ入つてみだぐなつたずもな。

入つて見でば、爺さま、若げえ男さ教へながら、先手を打つてだど。

その内に、側で見でだ若げえ者、「それ、ここを止めろ。せせば、お前の勝ずだ。」て、男さ教えてだずもな。
そしたどごろ、だんだん勝負面白ぐなって、三人は夢中になってすまっただずもな。そしたっけ、若げえ者のつら見だ爺さま、「さで、お前、教えだな。おれに勝でるわけねえはずだ。」たずもな。
その内に、三人で、喧嘩になってすまっただど。
若げえ者、気味悪ぐなったがら、逃げ出したど。
なんぼ走せでも、走せでも、後がら、白ど黒の碁石が飛んで来るす。
若げえ者、とうとう、草っ原で倒れですまっただずもな。
朝になって、目覚ますて見でば、あだりに白ど黒の柿の種が、いっぺい散らがってらったど。
その種、まいだどごろ、八年立ってば、見事な種なしの柿、山ほど取れだんだどさ。
ドンドハレ

五三 片輪の十五夜

むがす、あつたずもな。
あるどごに、古いお寺、あつたずもな。
そのお寺に和尚さんと、頓知にたげだ小僧っ子、いだつたずもな。
そっちこっちの昔話にあるように、その和尚さんも、けちな和尚さんで、檀家がらもらったもの、戸棚さ入れで、さっぱり小僧っ子さば、くれだり、喰せだりすねがったずもな。
ある年の正月だつたずが、たばこ時に、和尚さん、めずらしぐ、小僧っ子、炉端さ呼んで、世間話してらずもな。
その内に、手持ぢぶさたになった和尚さん、いつもの癖が出で、火箸であぐ（灰）の上さ、字、書きはじめだんだど。
そしてば、手許が狂って、夕べな、遅く食った餅の残りが、火箸の先にくつついで、姿現わしてすまっただど。
さあ、和尚さん、あわでで、あぐで隠すべえとしたずども、すばやぐ、それを見つけた小僧っ子、すかさず、「十五夜の月に片輪はあるものか」と一句読んで、和尚さんに問いかけだど。
なじよに、頓知な小僧、育ででる和尚さんだもの、すぐ、「雲に隠れて、ここに居た居た。」と、下の句を立派に付けだんだど。
それがらうもの、和尚さんと、小僧、楽しぐ、仲良ぐ、暮らしたんだどさ。
ドンドハレ

五四 メガネどカミソリ

むがす、あつたずもな。

ある山奥のお寺に、年取った和尚さんと、小僧っ子、いだずもな。

昔の和尚さん、仏に仕える身だという事で、生ぐせい物、食(か)ね事にしてだんだど。それでも、その和尚さん、こっそり小僧さ隠れで、卵食ったり、いわしを食ったりしてだずもな。

ある時、小僧に見つけられですまっただど。

そしてば、和尚さん、「これは、メガネどいうもので、わらしの食うもんでね。それがら、これは、カミソリどいって、大人だけ食うもんだ。」と、ごまかして、教えたずもな。

なんぼしたって、その小僧、メガネが卵で、カミソリがいわしぐれい、わがってるわけだ。

ある日、和尚さんが、「小僧、今、隣村の庄屋さんの法事に呼ばれでっから、一緒に付いで来い。」と、声かげだずもな。

小僧、小躍りして喜んだど。

人里さ行く事など、ねがったずがら、それに法事となれば、ご馳走も出る。

和尚さんを馬さ乗せで、小僧、シャン、シャンど、町目指して歩き出したずもな。

町さ、さしかがってば、小僧、大きな声出して叫んだど。

「和尚さん、和尚さん、あそこの店に、メガネ、いっぺい並んでるよ」。

卵屋の前で、卵、見で、メガネ、メガネと、言うんもんだがら、そご歩く人達、おがすね目で、お尚さんと小僧、ながめで行くずもな。

また、しばらく行つてば、今度、魚屋の前さ行つたずもな。

そしてば、小僧、「和尚さん、和尚さん。カミソリが、あれ、あれ、いっぺい並べでる」。

いわすを指さすもんだがら、そご歩く人達、くす、くす、笑つてぐす。

和尚さん、すっかりあわでで、「これ、これ、小僧、和尚の修行の中には、無言の行と言うものがある。これがらは、無言の行だ。隣村の庄屋さんに着ぐまでは、一切口を開いてはならん。」たずもな。

町過ぎで、山道さ、さしかがって来たずもな。

天気はいいし、あっちにも、こっちにも、山桜は咲いでるす、どごがらどなぐ、うぐいすの声は聞こえてくるわで、馬の背中に揺られでだ和尚さん、いつの間にか、こっくり、こっくり、ぬむかげ(いねむり)始めだずもな。

そしてらつたずが、後の荷ぐらに、ゆついで置いだ、袈裟包んだ風呂敷包みが、ポトリど落ちですまっただずもな。

小僧、落ちだの見ながら、知らねりして、馬の後、スタスタど付いて行つたずもな。

すばらく行つてがら、「ハッ」と目覚ました和尚さん、袈裟のねえのに気づいて、「小僧、小僧、袈裟がねえ。お前、落ちだの、気付がながつたのが。」たずもな。

そしてば、小僧、すましたもんで、「ハイ、気付きましたが、無言の行なので黙ってました。」たど。

お尚さん、「困つた小僧だ。これがらは、馬がら落ちる物は、なんでも拾うんだ。」たど。

そして、また、行つたずもな。

すばらく行けば、馬、尻尾上げで、馬ぐそ、たれ始めだずもな。
小僧、「和尚さん、和尚さん。早く、早く、笠、貸して下さい。」たずもな。
お尚さん、小僧のあわでだ声に、何も聞かねで、笠、取ってやっただずもな。
小僧、ぐるりど、馬の後さまわって、馬が気持ちよさそうにたれる馬ふんを、笠いっ
ぺいにして、「和尚さん、和尚さん。馬がら落ちました。」と、うやうやしく、差し出
したど。
さすがのお尚さんも、小僧の賢さに、おごるに、おごられねえ。
すっかり参ってすまたど。
それがらは、メガネもカミソリも、一緒に食って、いつまでも、いつまでも、山奥の
お寺で、仲良く暮らしたんだどさ。
ドンドハレ

五五 上の爺ど下の爺

むがす、あつたずもな。
あるどごに、上の爺ど、下の爺ど、隣同士で暮らしてだずもな。
ある時、上の爺ど、下の爺ど、二人して築っこかげするどごにして、川さ行って、築
っこかげしたずもな。
次朝ま早く、ざっこ（雑魚）獲りさ、上の爺の方、先ざさ行つたずもな。
そして、われの築っこ見では、われの築っこさ、木の根っこ入ってらつたど。
下の爺の築っこ見では、下の爺の築っこさ、いっぺい、ざっこ、入ってらたずもな。
上の爺、ごしえやいだずもな。
「人、ばがにわがれだ（ばかにしている）。おれさ、こんな木根っこきしえ、入っ
てらがら、よすぐそ、これ、下の爺の築っこの方さ、入れどぐべど思つて、下の爺の
築っこの中さ入ってらざっこば、われのはげご（魚籠）さ入れで、われさ入ってら木
の根っこ、下の爺の築っこさ入れで、知らねふりして、家さ来たずもな。
そしてば、下の爺、後がら行って、われの築っこ上げで見では、木の根っこ入ってら
がら、ああ、木の根っこ入ってらがら、「ええ、これ割つて、乾がすておげば、おづげ
っこぐれえ、煮るにえがんべ。」ど思つて、持つて来たずもな。
そして、乾がすで、割んべど思つて、鉦っこかげんべど思つてば、「爺、爺、さつさと
割れ。さつさと、割れ。」たど。
「おがすな。まず、なにが音っこすんが。」ど思つて、また、鉦っこかげんべどすてば、
「爺、爺、静がに割つてけろ。静がに割つてけろ」。
爺さま、たんまげだど。
ほだがら、木の根っこ、静がに割つたずもな。
そうすつと、中がら、ぺえこな、真つ白れえ犬っこ出はつたど。
その爺さま、犬っこ、おがすて（育てて）らつたずが、その犬っこ、きてえな犬っこ
で、米一粒食（か）しえれば、一粒だけ大きくなる。
二粒食しえれば、二粒だけ大きくなる。

また、今度、椀こで一つ食しえれば、椀このくれえ大きくなる。
そんだったらど思って、爺さま、今日、鍋で食しえで見るべど思って、鍋で食しえでば、なんにも、かんにも、大きくなったんだど。
それで、爺さま、ほれ、いつもの山さ、木、切りに行くがら、山さ木切りに行くべど思って、昼めし背負って、出るべどすてば、その犬、「爺さま、爺さま。今日、俺れも山さ行くがら、その昼めす俺さ付けろ。」たずもな。
すたども、爺さま、「ええじえ、ええじえ。俺、背負ってぐがら。」たずども、犬、聞かなかつたど。
すかだねえがら、昼めす付けでば、「鉋も鎌も付けろ。」たど。
その犬の言うとおりに、鉋も鎌も付けだずもな。
そしたっけ、その犬、先に立って、山さ上ってたど。
そして、山さ行き着いで、爺さま、いつ時、休むべど思てば、犬、チョコチョコど行てがらに、「爺さま、爺さま。俺、こごで、鹿っこ獲るがらよ。」たずもな。
爺さま、「なんじょにお前、鹿っこなど、獲れるはで。鉄砲も持って来すめ（来ないのに）。」てば、「ええがら、ええがら。」て言たずもな。
そして、犬、山の方、向がって、「あつつの鹿こも、飛んで来う。こつつの鹿こも、飛んで来う。」てば、あつつがらも、こつつがらも、鹿っこ、ポンポコポンポコど、跳ねて来たずもな。
そうしてば、その犬、走しえでって、のど笛、ガブリ。
そうすつと、鹿、ゴロと死んですまるど。
また、ポンポコポンポコど、走しえで来れば、行て、のど笛、ガブつと、かぶりつぐずもな。
また、ゴロつと死ぬんだど。
そして、鹿、いっぺい取つたど。
爺さま、「さあ大変だ。まず、これえ獲るごど獲つたが、持ってぐに、なんじょにすんべ。」ど思たずもな。
そしてば、その犬、「爺さま、爺さま。何も心配すんな。俺、背負ってぐがら。」て、言たずもな。
そして、その犬、その鹿、背負つたり、引っぱつたりして、家さ持って来たずもな。
そして、その鹿、売って、その爺さま、思いがけねえ銭こ、入たずもな。
そしてば、上の爺さま、それ聞いでがら、けずなされ（失敗した）ど思たど。俺れのさ入つた、木の根っこだつたがら、その宝物、取つ返されだど思たずもな。
「よし、よし。ほんならば、今度、その犬、俺、借りで来て、そして、鹿、獲てくる気になって、下の爺さま、上の爺さまさ、犬、借りさ来たずもな。
「犬、借してけじゃ。」ずがら、「ハイハイ」て、借してやつたずもな。
山さ、行きたがらね犬、しゃりむり、縄付けで、引っぱつたずもな。
そしてがら、その上の爺さま、「それ、鹿っこ、来うて、呼べ。鹿っこ、来うて、呼べ。」たずども、その犬、鹿っこ、来うて、じえつてい呼ばねがつたど。
そして、やんたがる犬、しゃりむり呼ばせつから、犬もごしえやいで、「あつつのスガリ（蜂）も、こつちや来う。こつつのスガリも、こつちや来う。」たど。

そしたどごろ、なんにも、かんにも、スガリ、ガンガンガンと、飛ん来たったど。
そして、その爺さま、ねえさ、ねえさ、顔も体も、あんたもんでね。
どっこも、スガリに、刺されですまっただもな。
そして、爺さまの、一番大事などごも、刺されですまっただもな。
さあ、爺さま、ごしえやいだずもな。
このくされ犬、人を、ごげにわがれで（こけにして）がらにって、その犬、殺すてすまっただもな。
そして、木の根っこさ、掘っこんだずもな。
そして、家さ来て、なにも、かにも、蜂に刺されで来たがら、せずながって、大事などごは、刺される、なんともやれね、せずなぐて寝でらずもな。
何日立っても、犬連れで来ねがら、下の爺、犬の迎げいに隣の上の爺の家さ行ったずもな。
そしてば、上の爺、寝でれがらに、「なに、なに。あんたな犬、殺して、山の木の根っこさ、掘っこんで来た。」たど。
それ、聞いた、下の爺さま、「なんとした、むぞやな。」ど思って、その山さ上ったずもな。
そして、木の根っこ見でば、ほに、土山になつてらがら、こごさ、掘っこまれだべど思って、その木、切って、家さ持って来たんだど。
そして、磨り臼（しるす）、こしゃだずもな。
しるす、こしゃでがら、爺さま、なんにも入れねで、「銭も金もガラガラ。」てば、銭こだの、宝物だの、それごそ、ザグザグザグど、しるす引ぐたんびに、降りたずもな。
そして、「米も酒もバラバラ。」てば、米だの酒、いっぺい出はって来たど。
そしたっけ、また、隣の上の爺さま、その話聞いで、そのしるす、借せって来たずもな。
下の爺、借すたぐながったずども、借したずもな。
上の爺さま、しるす借りでってがら、しるす、しぐべど思っても、何したって、引いだらええがしゃねえ（知らない）がら、それ、「馬の骨、ガラガラ。」てば、馬の骨、ガラガラど出はったずもな。
「ベゴのくそ、ベダベダ。」、ベゴのくそ、ベダベダど出だんだど。
上の爺さま、ごしえやいたずもな。
そのしるす、割って、火さ、くべですまっただもな。
下の爺の事にすれば、「今日持って来っか、今日持って来るが」ど、待ってらずども、持って来ながったど。
えっこ持って来ねがら、しるす、取りさ行っただもな。
そしてば、上の爺さま、ごしえやいでいだがら、「何、あんたな物、かまさ入れて、てえですまっただ」たど。
いだます事すたど思って、そのかまがら、あぐ（灰）、集めで来たずもな。
そして、夕ま方、あの雁の飛ぶあだり、屋根さ上って、「雁（がん）の目さ入れ、バラバラ。雁の目さ入れ、バラバラ。」ど、あぐ撒いたど。
そしてば、ボダボダど、雁が降りて来たずもな。

雁、町さ持って行って、思いがけぬ金になったど。
上の爺さま、それ見でがら、残ってらあぐ、持って、屋根さ上ったど。
そして、その爺さま、「爺さまの目さ入れ、バラバラ。爺さまの目さ入れ、バラバラ。」
と、あぐ撒いだもんだがら、爺さまの目さ入って、爺さま、われの目さ、あぐ入れで
すまんたんだど。
爺さま、目、見えねぐなって、屋根がら、足はずしたもんだがら、ゴロゴロど降りて
来たど。
そしてば、下で待ってだ婆さま、それ、雁が降りて来たど思って、そばにあるぼんぎ
り木、持ってって、ベダベダど叩いでだど。
そしたっけ、われの爺さまだったださ。
ドンドハレ

五六 お月お星

むがす、あつたずもな。
あるどごに、お月にお星って、とつても美す、姉妹（きょうだい）まり、あつたずも
な。
お月は、先の母の子で、お星は、われの子だっただど。
毎朝早く、火ぼど（囲炉裏）さ、火たぎながら、そのごげ母（継母）、「お月、お星、
起ぎろや。」てば、「ハイ」て、二人、チョロチョロど、起きで来たずもな。
それ見で、そのごげ母、「お月も美すが、お星も美す、お月せえ居ねがったら、お星、
なんぼ、めごがるに、えがんべ。」ど、思うようになったずもな。
そして、お星、呼んで、「お星、お星。今夜（こんにゃ）、姉っこさ、毒まんじゅうこし
ゃで、食（か）せっから、姉っこのまんじゅうなど、食うなよ。」たずもな。
そしてば、お星、姉思いだつたずがら、「姉っこ、姉っこ。今夜、お母（かあ）ける、
まんじゅう、食うなよ。おれの、まんじゅう食べす」。
お星、もらったまんじゅう、二人で食つたずもな。
それど知らね、まま母、毒まんじゅう食せだがら、お月は、死んだもんだど思って、
次の朝まも、「お月、お星、起ぎや。」たずもな。
「ハイ」て、二人、チョロチョロど、起ぎで来たずもな。
まま母、たんまげだど。
「毒まんじゅう食せでも死なね。これで、わがんね。」ど思つたがら、梁がら檜で突ぐ
気になったど。
そして、お星さ、「お星、お星。今夜、姉っこのそばさ、寝でなんねぞ。姉っこ、檜で
突ぐがら。」たずもな。
お星、「姉っこ、姉っこ。今夜、おれど一緒に寝るべす。姉っこの寝床さば、小豆俵で
も寝せで、布団でも掛けで置くべす」。
それど知らね、ごげ母、お月の布団めがげで、ぶすぶすと。
なんとなく、手ごたえあつたがら、お月は、死んだもんだど思って、次の朝まも、「お

月、お星、起ぎろや」。

「ハイ」て、チョロチョロ、起ぎで来だずもな。

ごげ母、「毒まんじゅう食せでも死なね、槍で突いても死なね。これで、わがんね」ど
思っ、山さ捨てる気になっだずもな。

そして、大工頼んで来て、箱、こしゃさせだんだど。

お星、それ見で、姉っこ、箱さ入れで、山さ捨てるどごだなど思っながら、大工に、
箱のすまっこさ、ぺっこな穴こ、こしゃさせだんだど。

そして、「お母、豆、煎ってけろ。米、煎ってけろ。餅、こしゃでけろ。団子、こしゃ
でけろ」。

お星の言うごどでは、なんでも聞ぐがら、いっぺい、こしえらせだずもな。

そして、箱さ、つめたずもな。

そして、姉っこさ、「姉っこ、姉っこ。けしの種、持だせっから、箱の穴っこがら、一
つずつ落して行げよ。そして、このけしの花咲いたら、迎えに行くがら、それまで達
者で居でけろ」。

そして、お月、山さ箱さ入れられで、連れて行がれだんだど。

そして、山奥さ捨てられだずもな。

いよいよ春になっながら、お星、けしの花たよりに、山さ上って行っだずもな。

そしたどごろ、花、時々、切れだっだど。

あっつにぼつり、こっつにぼつりど。

そごで、お星、こごえらでねべがなあど思っあだりて、土さぬだばって（這いつく
ばって）、「姉っこえ、姉っこえ」。

叫んでば、遠ぐの方で、「ハイ」つ、姉っこの声したんだど。

こごいらだど思っ、掘ってみだどごろ、箱、あつたっだど。

箱のふた、取って見でば、骨ど皮ばりの姉っこ、やっ息ついだばりて、すっかり、
やせごげだ姉、居だっだど。

そして、その姉おぶって、今来たケヤド（道）行げば、まま母にいじめられるがら、
山一つ越えだ、隣の村さ行っだずもな。

そしてば、大きな家あつたずがら、そごさ行って、「助けでけでげや」ってば、その家
のががさま、「なんとしたむぞやな」ど思っ、「まずまず中さばりも入れ」と言われ
て、お月の姿見で、そごのががさま、やせごげだお月さ、おがゆ食せだり、いろいろ
食せられで、お月も日に日に好ぐなっだずもな。

そして、そごの家で、お月とお星、世話になっ居だんだど。

どごろ、親父(とど)の居ねえ時だつたずがら、親父、帰ってば、お月もお星も居ねが
つたずがら、親父、お月とお星、たんねで、六部になっ、件数残らず（一軒残らず）、
たんねで歩つたずもな。

そして、「お月、お星、あるならば、どうしてこの鐘、はだぎましよう。がんがん。」
ど、泣ぎながら歩つながら、すっかり目もつぶれで、ざとうなっすまっだど。

ある時、お月とお星、世話になってる家の前で、「お月、お星、あるならば、どうして
この鐘、はだぎましよう。がんがん。」と、鐘はだえでば、そごのががさま、「あれえ、
あれえ。御経ねえ、御経だが。出で見ろ。」って言われで、出で見でば、親父だっだど。

お月も、お星も、たんまげで、「親父（とど）。」って、泣きながらすがってば、お月の涙、親父の右の目さ入り、お星の涙、親父の左の目さ入ってば、親父の目、ぱつぱつ開いだんだど。

そして、三人、そごで世話になってらったずが、ある時、火ぼどさ当たってだ時だっただど、釜のふた、ねがったずもな。

親父、「あや、釜のふた、ねえなあ。」って、まがって見でば、その釜の中さ入ってすまったど。

そして、お日さまになったど。

お月、親父、釜さ入ったたどごろ、お月も釜さ入って、お月さんになったど。

お星姉っこも、釜さ入ったてすまったたどごろ、お星も釜さ入って、お星さんになったずもな。

お月、えらすぐねくって（憎らしくて）、いじめだごげ母は、一生お日さまに当だれば死ぬ、モグラになって、土の中で暮すようになったんだどさ。

ドンドハレ

第Ⅱ部

『白濱とも子さんの聞き伝える 山田の伝説と昔話』

まえがき

白濱とも子氏は、山田町の関谷で生まれ育った方である。ご両親とも関谷のご出身で、お父様やお母様、近所のお年寄りの方々から伝説や昔話を聞いてお育ちになった。話を聞かせてくださった古老の方々の多くは、すでにご他界なさいったということである。白濱氏が子ども時代、御両親は山に入って炭焼きを生業とされていたことがあり、白濱氏は母親の実家に預けられて育った。そうした折りに、曾祖父に当たる方から地域の伝説や昔話を聞かされたのだそうである。

当時、若い人たちは働きに出て行ってしまうので、まわりには年寄りの方ばかりが残り、聞こうと思えばいくらでも昔の話を聞くことができたそうである。そんな昔のことを聞いてどうするのかという大人たちも多いご時世だったが、お母様も昔話を語る方だったこともあり、子ども時代の白濱氏は、お年寄りから昔話を聞くことが何よりも楽しみだったとおっしゃる。大人になってから、その頃のことを思い出し、もう亡くなってしまった方もあったが、少しずつお年寄りに聞き直してはノートにまとめていかれた。

関谷・関口地区には、見事なサイカチの巨樹が川沿いに並木のように続いている。そのサイカチ並木の一部が開発のために伐採されることを惜しんで、日々のサイカチの様子を手書きの文字でごく身近な知り合いに伝えようと、一九八八年の暮れから「さいかち通信」を始められた。その中で、関谷・関口の昔からの暮らしを語るものとして、ノートに書き溜めた昔話も一つずつ紹介された。

この報告書は、「さいかち通信」に書かれた話をまとめなおしたものである。まるで連想の糸をたどるように、次々と関連したお話が展開していくので、本報告書でもあえて話順の整理はしなかった。文字で書かれた歴史からは読むことのできない、山田に暮らす人々の昔からの思いが、伝説や昔話のかたちで聞き伝えられている。

地域の言葉は地域の文化を支える重要な柱であって、白濱氏の聞き伝える伝説・昔話の中でも、昔ながらの山田言葉が要所要所で生き活きと命が与えられている。地域の言葉がこれからも残っていくためには、地域の方々が地域の文化について、自分たちの言葉で語ることをやめないということが前提となる。地域の言葉は、言葉だけで存在するのではなく、言葉を使う地域の人たちの暮らしが大切な土台となっているのである。

いまはインフラや産業の復興が最優先される時だが、やがては目には見えない心の文化の回復が地域の課題となることと思われる。山田の言語文化資産として、白濱氏の聞き伝えた言語伝承が輝きを放つ日が訪れることを願ってやまない。

(岩手大学 大野眞男)

[付記]

本報告書に収めた昔話は、すべて白濱とも子さんが聞き集めたものである。今回、平成24年度文化庁委託事業「東日本大震災において危機的な状況が危惧される方言の実態に関する調査研究（岩手県）」に御理解をいただき、事業報告書別冊・被災地の言語文化資料として大野が編集をさせていただいた。本報

告書から転載等をされる場合には、その旨を明記されるようお願いする。

なお、伝説・昔話という資料の性格上、現代社会では差別的にひびきかぬない表現も一部にあるが、方言や語り口を含めて継承されてきた言語伝承を尊重し、そのまま記録した。

「神様の引っ越し」

ずっと昔 海に向かってひらけた山ひだの里に、一本の桂の樹木があった。この樹のそば近くに一軒の大きな屋敷があった、この屋敷は代々栄え、そこに何代もの世を暮らした。そのそばを川が流れていて、女どもは鍋を流し、洗濯をし、野ら仕事のよごれを洗ってたいそう重宝しておった。

しかし、雨が降り大水となるたびに、しだいに水が庭先を侵食し、やがては家の裾を洗い出した。家の主は身にせまる危険を感じ、川向こうの安全な土地へ移り住んだ。だが、新しい家に移ってからというもの、仕事も商いもうまくいかなかった。日々気がかりな事が次々とおこる主は、いたく心を痛めてはいたが、手のくだしようがなく、ただ日を送っていた。

そのうちに、ある夜、夢枕に一人の男が現れて言った。「これ、これ、主殿。そなたは引越しする時、私を残して行ってしまったのう・・・」。主はおどろき、つくづくながめたが、いっこうに見ず知らずの男の姿におそろおそろ、「そう言われ申しても、さっぱり知り申さぬお方のような気がいたしやんすが、はて、どごのどなたでござんしたか。」と首をかしげた。すると、その男はにっこり笑って、「わしは、そなたの家の守り神でえすが」と、なおも笑いながら答えた。主はたまげて、腰もぬかす思いで蒼くなった。「申し訳のねえごど、おらあ、なあどすべえ、かんにんして下さんせ」と言っただけで、いやいやと首をふり、「出来る事なら急いで迎えに来てはくれまいものがと思ってなみす」、と言われたところでぱったりと目が覚めた。

起きてみれば、美しい夜明けの輝きが空を染め、陽はまさにのぼらんとしている所であり、その明けの空をながめながら、今見た夢の事の重大さに、ただただ驚き、一本の絹の帯を片手に取るものも取りあえず、元の屋敷のあった桂の樹の下に立って、しばらく立ちつくした。そこは家の形があるわけではなく、草が生えているばかりで、朝露がそこそこに美しく光るばかりであった。主は、はたとひざをうって、家の床の間のあったあたりに立つと、声高に神様に向かって、「神様、お迎えにあがりやんした。さあ、どうぞ、おらの背中におでえって下さんせ。お連れ申しやんす。」と、両手を合わせ頭を下げてうやうやしく背中を向けて腰を落とした。すると、不思議なことに、目に見えぬ御姿は背中にずっしりと重たく、子供でも背負った時のように帯をかけ、やっとの思いで立ち上がると、よろめく足をふみしめて家路を急ぐのであった。背中の何と重いこと、帯は肩にくいこみ目から火が出るようであったが、新しい家の敷居をまたぎ床の間のあたりまで来ると、うその様に背中が軽くなり、それからというもの、この家は前にも増して末長く栄えたと伝う。

それゆえ、引越しする時は何はさておき、まずは神様からお移し申し上げなければならぬと、近在の人々は誰言うとなく言い合ったと伝えられている。

「子供と遊ぶ神様」

関口の山の端には様々な神々が祭られてあって、その中に八幡様、御神明様、熊野

権現様とある。

その昔、子供達は素足に草履を履いたがいい方で、川原から山野を着物をはしよりあげ、群れをなして遊び歩いた。村の畑をおしあるき、スグリの実をかすめ、山梨やグミの赤い実に群れて、金切り声で追い回すおふくろや近所の婆さまを尻目に、悪態つきつき、どこの山から切り取ったのか、腰には大小の木刀を脇差し、時として親もあきれ返るほどの悪たれぶりであった。しかしながら、しかしながら、七歳までは神につかれる神童と言われ、畑の南瓜をメッタ切りにしようが、イモ畑を荒らそうが、その場限りの大声でそのたびに山から山へ逃げ込み、あつという間に姿を隠してしまうのであった。

その日も、息を切らして駆け登った山の端には社があった。子供らは社の庭でひと遊びしているうちに、誰ともなく掛け金を外して御社の中にしのびこんだ。

この社は、八幡様であった。馬上の若武者は勇ましく弓を持ったお姿をしておられた。それからひととき、子供達は御神体と遊びたわむれ、ある子供は馬にまたがり、ある子供は弓を引くまねごとをし、それは大人の知らない子供の世界であった。心ゆくまで遊んだ子供達は帰り際に、一人は神様の御姿を、ある子供は馬と言うように、別々にひそかに持ち帰った。そうして誰にも知られることなく、台所のオトシ（冬の貯蔵庫）や部屋の隅にボロをかぶせて隠してしまった。そのうちに社の中の御神体がなくなったことに気付いた大人達は、たまげてしまった。御社の御姿を盗まれたなどと言うことは前代未聞な事であったから、はじめはこっそりと人に知れず探したが、そのうちにこの話は人に知れるところとなり、次第に騒ぎは大きくなっていった。はじめは、首をすくめて笑っていた子供達も大変な事になったと、ひそかに家から持ちより、御神明の社に御神体、その他の付属物を誰にも知られることなく隠し入れた。この時代も御神明様の別当は、田畑と号す家の主を村きち爺様と言った。

この村きち爺様が、ある明け方近くに夢をみた。どこかの板敷きの部屋に長い白髭の老人が弓を持った、たいそう見目（みめ）形のうるわしい若侍と、何かしら仲むつまじく一つ所に横たわり、さも楽しげに語り合っているのではないか。よくよく見れば、そこは我が家の氏神様のお社の板の間であるような……。

はてさてと首をかしげて、そこで目が覚めた。村きち爺様は朝飯の支度をしている娘に向かって、つぶやくように語った。「あんなあ、おらあ、今朝方にな、何だが不思議な夢え見でな。」と、しきりにいぶかった。娘は心配気に仕事の手を休めて、「何だあべ。やったあごど、なにも起きねえばいいが、ほに」。

それにしても不思議な夢であったと、村きち爺様は我が家の社を登って行った。戸をあけて驚いたのなんの。なんと八幡様が板の間にごろりと横になっているではないか、さては、ゆんべの夢は、これであったのかと思い、長い白髭の老人とは我が家の神様の御姿であったのかと、不思議なめぐり合わせに村きち爺様は灯明を明かして手を合わせた。

それから子供達は大変だ。したたかに大人達に怒られたのは言うまでもない。そのうちに御神馬も熊野権現様から見つかり、神様は無事もとの社に納められた。邪心のない子供のすることは罪にはならず、これにあまり腹を立てて子供を叱ると神様は申すという。「せっかく子供達と快く遊んでいたものを大人が来て邪魔をした。」と言う

ものだと伝えられ、無心で遊ぶ子供達が床の間や社でいたずらをして、あまり怒ったりせずに、やさしく言って聞かせてやるぐらいにとどめておかなければ、やがて禍となってわが身に返ってくると言い伝えられている。

「関口不動尊 一」

その昔、関口の孫三郎と言う人は木を切りに山奥へ入った。そして現在の奥の宮の付近を通りかかり、そこで神の御姿に遭遇した。その時から不動明王を、氏神様として祭り、信心深く日を暮らした。

「関口不動尊 二」

関口神社には、また別の話が近在の農民の間に伝承されている。

その昔、芋掘りに川原へ行った別当家の孫三郎と言う人は、土を掘り起こして、土の中から一体の御神体を掘り出した。そして氏神さまに祀り、旧暦五月二十八日を祭りと定めた。

祭りの日には、関口や関谷では、どこの家でも川原で芋を掘り、茹でたり煮染めに入れて食べるならわしがあり、お社の参道に並んだ茶屋では、この芋を竹串にさしたり、藁で編んで店頭で並べ、参詣人は帰りしなには必ず芋を買い求めたという。これを干しておいて粉にして飲むと痛みが消え、その皮をもって耳を掘れば耳の病も癒えると信じられていた。

別当家では参詣人に煮染めの芋を串にさしてふるまうものだったと伝う。また、前の川原では、大きな釜に湯を沸かし、イタコが笹の葉をこの湯に浸して参詣人の体にふりかけ、家内安全、無病息災を祈願する「お湯立て」が行われたり、「口寄せ」と言う一年の農作物の作柄を占ったり、その年のはやり病、秋の台風雨などを占ったものであったと伝う。

「如来観音像」

関谷には、如来様と呼ばれ人々に親しまれる如来観音像がある。

遠い昔、魚をとる漁師の網の中に入って引き上げられたと伝えられているこの観音様は、天からの授かりものの氏神様として祭り、永い歳月を祈り今日に至る。

如来観音は化粧が大好きで、いつもたっぷり白粉をつけている神様だった。女がこの神様の顔をなでて自分の顔にこすりつけると、見目うるわしい顔形になると言われ、女たちは参るたびに御顔をなでては、自分の顔や姿が美しくなるように祈った。また、咳をとめる神様とも言われ、子供の百日咳や流行風邪など近在の人々の信仰を集め、参る時は白粉をあげて拝んだと伝う。

「手長大明神」

関谷は、もと山田高校の跡地、川を隔てた向こう岸の山の端に手長大明神の社が祀られてある。

関谷街道は、遠い昔、この山岸近くを通っていたと伝えられていて、この神様は大そう礼儀正しく、参詣に参った人は無論のこと、そこを通る人々も、朝な、夕な、折り目正しく挨拶をせねば気に入らなかった。たとえば、馬に乗った男がすまして通り過ぎようとすれば、鳥帽子を飛ばされたり、いきなり馬が暴れだしたり、馬方が通れば、そこから先へは進まなくなったり、子供を背にした女が通れば、背中の子供が急に泣きだすといった具合で、その度、人々は明神様が御社から手を伸ばして懲らしめたのだと言いあつたと伝う。この街道を行く者は、侍も、馬方も、女、子供も、かぶり物をとって社に向かい、「ありがだす、神様。」と伏し拝み、素通りすることのないようにと戒められていた。

手長大明神は雨乞いの神と言われ、日照りが続くと村人たちは社に籠り、「どうか雨を降らせ賜え。」と神に祈ったと言う。

「おかぐらと着幕」

昔、神楽を舞う権現様は、舞い納めをした後、着幕（頭の後ろについた舞い用の一枚の布）をつけたままで神殿に祭られていた。

ある夜の夢に二体の権現様が空中に着幕をひるがえし、飛び回って、はげしくぶつかりあいながら戦う姿があつた。そのうちに、相互に一匹は耳を、一匹は舌を噛み切られた痛々しい姿であつた。

夢から覚めて社に行ってみれば、何と不思議なことに夢に見たとおり着幕も乱れた心痛む御姿であつたと伝う。

戦の根元は知る由もないが、空中を飛び交って戦った権現様に、人々はひどく心を痛め、その後、舞を始める時以外、着幕をつけるのをやめてしまったのだと言う。それゆえ、社に納めるときは着幕をつけたままで納めるものでないと言うのだそうである。

「霞露ヶ岳のオガロ様（大浦）」

霞露ヶ岳神社に参詣した祭りには、人々はその水を汲んで風呂を沸かし、身体を休めてくるのだそうだ。

ある時、一人の男がオガロ様へ行くことになった。すると嬢は一言、「お前さん、やめだ方がいいでねえべが。いどご（親戚）さ、わらすが生まれそうだが、まあ。」と言つたが、「何、生まれるたって、遠いどごでねえが。だいじょうぶでえすが。」とい

いつつ、近所の人たちと連れ立ってオガロ様に登った。人々は枯れ木を拾い集め、皆で風呂に入った。ところが、一緒に行った人々は気持ちよく入って楽しむのに、この男だけは風呂の水は濁ってくるし、なんとなく気が落ち着かない。そのうちに身体の具合も悪くなって、入っていられなくなってきたので、男は皆より先に家路に着いた。帰ってみると、嬢が言った通り、親戚に子供が生まれていた。

「乳神様」

豊間根には「ちっち神様」と呼ばれている神様が祀られている、石灰岩の乳房の形をした神様で、これをさすったり、子の石の滴を飲めば、乳が出たと伝えられている。また、子の横に男性のシンボルを形造った石があるという。この石を人々は、こうせい様（金勢様）と言うのだそうだ。夫婦になって、子宝に恵まれない人や、子を生みながら乳が出ない女は、この神様を御参りしたと伝う。

「天にのぼった娘（オシラ様 一）」

昔、ある村の大そうなお屋敷の馬屋で一頭の駿馬が生まれた。

その頃、この屋敷には一人の美しい娘があった。汚れを知らない瞳は深く澄み、その心は山懐に湧き出る清水のようであった。この娘が生まれた子馬を大そうかわいがり、大事に育て、馬草刈から敷藁、夏の水浴びまで人の手は借りずに心を尽くし、馬もまた娘を背に野を駆ける様は、この世の春を楽しむ生物の生気にみちみちて、大気の中に限りなく、力強く美しく雄々しい姿であった。娘が馬に語りかければ、馬もまた、その言葉が分かるのか、時には嬉しげにいななき、時には愁いにみちた瞳で答え、その有様は人馬の境をこえた心の通い合いを感じさせ、次第に人の口から口へと噂にのぼるほどであった。

これを聞いた親はあまりのことに心を痛み、何とか別のものに気を引こうとしたが、何物をもってしても娘の心をひくものはなく、何事にも目もくれなかった。馬もまた、この娘のそばでなければ夜も日も明けぬ有様であった。

その様子に親は激怒し、畜生の分際で人間の娘に惚れるとは何とも浅ましき不届き者めがと、姿形も並はずれて美しい若駒をたちまちのうちに殺し、その皮を剥ぐと屋敷の前にあった桑の木に晒した。娘はあまりの事に呆然と桑の木の前に立ち尽くし、やがてはその皮に取りすがり、身も世も無く鳴くのであった。すると不思議なことに、いつしか山の彼方からにわかには黒雲が沸き立ち、たちまちのうちに空いっぱい広がった。真昼と言うのにあたりは闇に包まれて、人々が恐れおののいていると、一陣の風が野面を駆け抜け、またたくうちに桑の木にかかると、晒し者の馬の皮がいきなり泣き続ける娘を包むなり、そのまま天に上ってしまった。それはほんの一時の出来事で、人々は為すすべもなく空の彼方へ見送ったのであった。

親の嘆きは察するにあまりあるものと人々は思えども、慰めの言葉も無く日は暮れ

て行った。そのうちに、ある夜、親の夢枕に娘が出た。晴れ晴れと笑顔を見せて、里帰りをしたいと告げた。親は座敷を掃き、御膳を仕つらえ、今か今かと待っていたが、いつまで待っても猫の子一匹も来はしなかった。そのうちに、玄関先に見たこともない虫が、二匹揃って入ってくる。親は、これが我が娘かと、あまりの情けなさに涙に暮れつつも、座敷内に招き入れ酒肴で祝ったが、何を出しても口にしなかった。人々は途方に暮れて、それではあの桑の葉でも食わせてみたらと言うことになり、桑の葉を摘んできた。するといくら何を進めても食べなかった虫は、はじめて桑の葉を口にした。

やがて日が経ち、この虫は口から細い細い糸を出して、わが身を包んで寝てしまった。この虫の吐いた糸は絹と言われ、娘はこうして親に恩を返したという。天にのぼった娘と馬の化身ゆえ、天の虫と書いて蚕と言う。別の名を御娘（オムスメ）とも言い、蚕を乗せておく棚を嫁棚（ヨメダナ）、オシラ様は桑の木でつくられ、この神様は必ず二体を祭り、その始まりは娘と馬であったと伝う。

「オシラ様 二」

オシラ様は、養蚕の神、目の神、火の神、家の守り神、病気治しの神、災難から守る神と伝えられている。

拝みに来る人々は、オシラ様に着せる一尺四方の布を持って来る。この布のことを「オシラ様の衣装」という。このお衣装を着せた二体のお姿を両手に持って、軽く躍らせながら神に祈る。これを、オシラ様を「ホーログ」という。また、オシラ様に着せたお衣装が何枚にも重なると、集まった人々に分け、それぞれ皆、さまざまなものに作りお守りとするのだと言う。集まる人々は主に親戚縁者で女の人が多い。

オシラ様伝承 その一

オシラ様を祭る家では、四足二足を食わないもので、もし食うなら「戸外（とげえ）で食え」と言われていた。その時は、萩の箸と木のお椀で食うものだそう。

同 その二

山田の地に移り住むことになった時、オシラ様に別れを告げて川に流した。すると川上にのぼりにのぼってきたので、主人は川から拾いあげ、山田の地に住むようになってからもオシラ様を祭るのだと伝う。

同 その三

オシラ様を祭る家では四足の動物を食べてはならないとされていた。しかし、凶作につぐ凶作で食うものにも困り果てた主人は、「死ぬわけにもいがないべ」とオシラ様を川に流すと、流れ下っていかずに川をのぼって来てしまった。主人は拾いなおして祭りなおしたと伝う。

「弁天様」

ずっと昔、「大浦のイルカ、小谷鳥のトド」と人が世にうたうほど、大浦ではイルカがたくさん獲れ、小谷鳥ではトドがたくさん網にかかり、大そう盛った時代があったと伝う。小谷鳥には倉を七つも持つほど、富み栄えた家もあり、村は活気にあふれ、買い付けに入る男たちでにぎわい、客をもてなす酒盛りがあつたりで大そうにぎわっていた。いつの頃であったのか、ある時、やはりその日も酒盛りで座敷はにぎわい、嬢だの若い娘たちや奉公人は、お酌やら何やらと客の接待に気を配り、忙しく立ち働いているうちに、座敷に上がった一人の娘がその家の大事な客の前で、なんとしたはずみだったのか屁を漏らしてしまった。

あまりの恥ずかしさに身の置場もなく、それは申し訳なさを通りすぎて罪とさえ思われ、恐怖となって五体を駆けめぐり、娘心はただただ恐ろしく、いつまでも細波を立てて打ち震え、大人達の慰めの言葉も耳に入らず、心は重たく沈むばかりだった。

娘は思い悩みその末に、悲しさにつぶれた胸を抱きしめて浜に立つと、内なる思いを胸に着物の袂に石を詰め、岩を蹴って海へ跳んだ。若い娘心は罪過を償わんとの一念で、わが心の証に、自らの身体を大海のわだつみの神に捧げたのだった。大海原はその大いなる懐に哀れな娘をかきいだし、その思いを遂げさせてやった。

あまりの哀れさ、潔さに、村人は娘の魂を弁天様に祀り上げたのだと伝う。近在の人々は、海上安全の願いをこめて、今に至るまで弁天様に祈ると言う。

「千体仏様」

千体仏様とは、旅に行く修験者がこの地に辿り来て行を重ねたところだった。関口の山中奥深く大槌境の峰に祀られていて、その昔、この山奥深く集まる修験者の数知れず、神仏に祈るその声は途絶えることがなく沢々に木霊し、千人の読経を聞くが如くであった。

やがて時は過ぎ世は移り、修験者の姿を見ることも無くなったが、この山の峰に立てば、沢底から今も経を読む人の声が、風に乗ってざわざわと湧き上がってくると言い伝えられ、獣を追うマタギの間には宮古方面の男たちにまで知られていたと伝う。

「びしゃもん様」

遠い昔、大海原に乗り出した船から、一人の男があやまって海に落ちてしまった。落ちた者は助けてくれと声を限りに波間から救いを求め、船の上にいる男たちは手をさしのべ、あらん限りを尽くしたが、波間に浮き沈みする相棒を海上から救うことが出来なかった。いまわの際の藁にもすがる思いで、潮に焼けて赤銅色もすさまじい塩辛声の荒くれ男達は、船べりで天を仰いで身をよじり、声をかぎりに、我が兄弟を助

け給えと身悶えして神に祈った。すると不思議なことに、大海原から何千匹、何万匹というイワシの大群が泳ぎより、重なり、もつれ合って、海へ沈み行かんとする男を持ちあげ救ったと伝えられ、毘沙門様がイワシを遣わして男を救ったのだと語り伝える。

それ以来、毘沙門様の縁日の三月三日には、イワシを食べてはならないものとされ、参詣に行く時なども、イワシを食わないものだそうである。

「オロクにオイシにオハヤの物語」

ある所に、オロク、オイシ、オハヤという姉妹があった。三人が年頃になると、父親は三つの山を指して、あのいずれかの山の主となって暮らすようにと、娘達を前に座らせて語った。すると、一番高い山をどの娘も望みとして仲違いをし、日々姉妹の仲は険悪になっていった。親はそんな三人を見るに見かねて、今夜お前達の寝ているうちに、その身に何か神のしらませ（前知らせ）があろうから、そのことをもって山の主になるようにと言って聞かせた。

その夜も更けて家の者は皆寝静まったが、ただ一人、末の娘のオハヤは、何事が起きるのかと思うと寝つかれず、寝返りばかりうっておったが、やがて睡魔におそわれてうとうとと眠りの中に入りかけて、はっと目を覚まし、つい一時の事のような気がしたが、起き上がって二人の姉の方を見やれば、一番上のオロクの安らかな寝息をたてる、その胸元には幣束が置かれているではないか。これこそ神の託宣に違いないと、音も無く起き上がると、姉の胸におかれた幣束を急いで自分の胸に置き換え、そしらぬ顔で二人の姉を起こし、夢に起こされて目覚めると自分の胸の上にはこのような品が置いてあった、と白をきった。姉はこの話を聞くといぶかしげに、不思議な事もあるものだ、私も夢の中で神の声を今しがた聞いた気がした、と言いながら妹に何度も聞き返し、はては自分があの山の主となって暮らすものと思ったは、夢であったかとおぼやくのであった。

妹のオハヤは、そんな姉の言葉には耳をかさず白を切り通し、終にはその高い山を自分の住处として山の主となった。

それが今の早池峰山となって残るのだと伝えられ、姉のオロクは六角牛山の主となったが、オイシの住处とはどの山なのか不明であるが、やはり山の主となり、この三姉妹は仲違いをしたまま別れてしまった。それゆえ、神と祭られてからも、この三山の山の神はたいへん仲が悪く、三山のうち、一つの山の頂に立てば、あとの二山には霧がたちこめて、その姿を隠してしまうのだといわれ、里人はその事を気かけ、心を痛めて、このままではないと、思案の末、三山に願掛けした。日暮れから明朝までの一夜のうちに、三山の山の神の社を駆足で詣で、なにとぞ仲むつまじく暮らしたまえと祈った。その時から、三山の峰は姿を隠すことがなくなったと伝う。

早池峰の神様は、先の話の中で嘘をついて白を切り通し、終いに山の主となってしまった末娘オハヤの所行ゆえ、人間のどんな嘘でも一生にただ一度なら罪とせず、お許しになるのだと伝う。

「オロクにオインにオハヤの物語 二（盗まれた苗）」

その昔、遠野では作物の不作が続き、ある年は春の始めの苗代からうまく育たなかった。ところがどうしたわけか、ある家の餅苗が人も羨むほどにうまく育ち、その苗代だけがあおあおと際立ち、主は鼻高々であった。妬ましく思った一人の男が腹立ちまぎれに、夜の闇にまぎれてひそかに苗を盗み、素知らぬ顔で自分の田に植えてしまった。

盗まれた男は大声でわめき散らし、またたくうちに植えつくされた人の田を見るや、真っ赤になって、「おめえ、この餅苗どっから持ってきた？」といきりたたったが、盗んだ男は何食わぬ顔で、「なあに、こりゃあ、おらの家で作った苗だがよ。それにな、おらの所のは粳苗だぞ。なにをしゃべるんだ。」と白をきり、出会うたびに罵り合って所かまわず、角つきあうのだった。そのうち、二人は秋の出穂を見ようではないかと言うことになり、夏もいつしか暮れて秋をむかえ、稲は実を結び頭をたれて、秋の陽に輝いて涼風に揺れた。それを見た盗まれた男は、「それ見ろ、おらの田の稲とおんなじ穂が出たでねえか。ぬしがなにをじよっばてもな、さまあ正直たあこの事よ。」と嘲笑い、盗んだ男は強気で、「何だと、臼に入れて搗いてみてから物を言え！」とは言ってはみるものの、夜も寝つかれず頭を抱えて、何かいい策はないものかと思っただけで、終いにはいい知恵が浮かぶでもなく、稲刈りも終わってしまった。当たり前なことではあるが、どこから見ても誰が見ても、双方の田の稲は同じ稲だと盗まれた男はわめき立て、盗んだ男は思案に暮れて座り込んでしまった。

しかし、そこで、はたと思い当たった事があった。秋の日のつるべ落としの陽が暮れ始めると、盗んだ男は人知れず身支度をして戸外へ出た。男の胸には、遠い昔から言い伝えられた早池峰山のオハヤの物語が、幼いころから染みついていた。

男は闇の中をひた走り早池峰神社の社に立つと、両手を打ち合わせ事の仔細を述べ、なにとぞあの米が臼に入れて搗いても、どうか餅になりませんようにと祈り、その夜のうちに三山に願をかけ、終いにはこの苦行をやり遂げた。

やがて、男はいつの日か人々を前に餅搗きをした。しかし、いくら搗いてもこの餅米は餅にならなかったと伝う。こうして終いに、その男は盗みの罪をまぬがれた。早池峰山の神のおかげと言われたと伝う。

「駒形神社 一 津軽石藤畑 つなぎの名馬」

昔、豊間根のつなぎに一頭の春駒が生まれた。姿形はもとより、その性格も素直に育ち、近在切つての名馬と噂も高く、主は大そう自慢に思い、口から口へ、人から人へと語られていった。ある時、一人の博労がその噂を耳にし、つなぎに立ち寄った。確かに人々が名馬と言うのもなるほどと、一目見るなり、たちまちその馬に惚れてしまった。博労は毎日足を運び、首を縦に振らない馬主を口の限り手の限りを尽くし、

目の前に大金を積んで、やっとのことで口説き落とした。大金を積んで手に入れた名馬、木戸木を外して外へ出そうとしたが、馬屋から出ようとしないう。家のものに手伝ってもらって、なんとか外へ引き出した。見れば見るほど惚れ惚れとするばかり、博労は、ためつすがめつ眺めて満足げに手綱をとった。馬は哀れにも名残惜しげに後を振り返りつつも、見も知らない男に手綱を取られて街道を山蔭に消えて行った。

さて、博労は宮古を通り区界の峠を越えて馬を引いて行った。途中の宿で薄い布団にくるまって寝ていると、馬が暴れて仕方ないから何とかしてくれと起こされた。馬屋へ行って馬に声をかけるが、馬はいきり立ち誰の言うことも聞かなかつた。息も荒く不思議な仕草で、馬屋の中を動き回る。さてはこの馬、人知れぬ癖を隠しおつたなと、博労は苦虫をかみつぶす思いで眺めていると、馬は口から泡を吹き敷藁をはりたぐり、蹴散らし、ただの一時もじっとしていない。

やれ、ひどい買い物をしたものと、くさりながら馬を眺めていると、馬は立ち止つては、時々博労を見つめた。その目が何とも悲しげで、人の情にすぎる畜生の言葉を知らぬ悲しさゆえか、その面には人の心を打つものがある。近寄つて何が言いたいのだと声をかけ、よくよく見れば、生まれ里へ帰りたいと蹄を使って書いているように思えて仕方がない。馬にして馬にあらずか、人の言葉を書いてその思いを伝えようなどとは、世にも稀なる名馬とは、このような秘め事があつたのか。きっと御神馬に相違いない。大金を積んで手に入れた馬だが、と思案の末に、それならばと馬の背をなでながら、馬に向かつて、「明日になったら、里へ帰してやろうほどに、今夜はゆっくりと休むがよい」。そう言うとも馬は聞き分けるのか、嬉しそうに鼻づらをすりよせ、やがてはおとなしくなつた。その夜のうちに宿の女将に事の次第を打ち明け、色美しい布で「けさがくし（馬の背にかける飾り布）」をつくらせ、たくさんのチャグチャグと鳴る、ひかひかと光る鈴コで、その裾を飾らせた。さて、一夜明けて、味のいい食い物をあてがい、その体を昨夜宿の女将が寝ないで作り上げたけさがくしを着せかけ、染め手綱も美しく、飾り帯も色鮮やかに、昨日通り来た街道へ向けて引き出した。馬は大きな体を震わせ、湧き出る喜びを抑えかねてか、一声高く嘶くと、博労や宿の人々に見送られて、ただ一匹、もと来た街道を誰にひかれるでなく帰り行く。後には、けさがくしの裾で揺れる鈴コの音色だけが、人々の胸に余韻を残し、いつまでも心をとらえて離さなかつた。

馬は見目うるわしい姿で、鈴の音も軽やかに街道を下り、道行く旅人は何事かと後を振り返り見送つた。

そして、とうとう、つなぎの生まれ里に辿り着いたのは、日もすでにどっぷりと暮れた夜のことだつた。懐かしい生まれ家の灯火を見ると、馬は思わず嬉し鳴きに嘶いて馬屋の木戸木を飛び越えて馬屋に踊りこんだ。

家では遅い夕飯をすませ、縄をなつたり藁を打つたり、夜なべ仕事に精を出して、夜仕事に取り掛かつたところだつた。子供達は、その回りで藁屑を拾い集めて縄をなう真似事をしたり、爺様に昔話をせがむと、爺様はめんどくさいものだから、「なげえ、なげえ話をしてやろう。」と言うと、子供達はその話は知っていると言うのをかまわずに爺様は始めた。「ある所にな、男があつたずもんな、男あ行つたずもんな、また来たずもんな、またまた行つたずもんな。」と、そればかり繰り返すものだから子供はさつ

ぱり面白くない。なおも爺様の膝にすがっては昔話をせがむが、一向に爺様は聞くそぶりも見せず、なげえ、なげえ話をするばかりだ。藁を打ち縄をないながら、大人達はそのやり取りを聞いて大笑いをしているところへ、いきなり耳もとで馬の嘶きを聞くと驚きあわてて皆外へ飛び出した。するとどうだ、馬屋の中にはぎよろぎよろと目ん玉のいっぱいある化け物が、馬の嘶きに似た声で吠えながら、人間よりもはるかに大きな体をゆすって、暗がりの中、月の光に、ぎがぎがと目ん玉あ光らせながら鼻息も荒々しく、馬屋の中に入っているではないか。家の者は腰もぬかさんばかりにたまげてしまった。「どっから降って湧いたが知らねえが、俺あ家の馬屋にや、大した化け物が、十も二十も目ん玉あひかひかどひからせでへえってらあ。」と、鉄鍋の底を打ちたたいて、大声で村の衆へ助けを求めた。

人々は、手に手に鎌や鍬を持って集まり、馬屋の化け物を外へ追い出すことになった。するとどうだ、化け物は集まった人々の頭上高く、馬屋の中から飛び出した。その姿のなんと大きいこと、体中に目玉がらんらんと月の光を受けて輝き、その恐ろしさはたとえようもなく、人間など一噛みにされそうな勢いに人々は愕然とした。このままにしたら村の者が皆、取り喰われてしまうに違いない。そう思った村の衆は、化け物を追い立て追い回し、やがて山へ追い上げた。村人はなおも追い続け草刈り場へ逃げ込んだのを確かめると、山裾から火を放った。火にまかれて逃げまどう化け物は、追いつめられ行き場を失って、山の頂から岩を蹴って暗い闇へとんで息絶えた。やがて夜は東の方からしらじらと明け初め、山裾に転がった大きなその死体は、憐れ一頭の美しく飾られた馬の姿であった。

あれほど村の衆を恐怖の底に陥れたその目玉は、けさがくしの裾を飾った銀の鈴の数々であった。追げまどって岩を蹴って飛んだ岩に、今も蹄の跡を残すと伝う。

「関谷深山大権現と関口熊野権現」

その昔、山田湾にオランダ船が漂着した時、この一報をもって山田から盛岡南部藩に「はやぶさ」(飛脚のこと)がとんだ。

ところが、オランダ船は、はやぶさが出立してから湾を出て行ってしまった。このままあの異国の船が山田の湾に戻らなければ、藩にほらを吹いた事になってしまい、どんなお咎めがあるかもしれないと、人々は恐れ、神仏に祈り、どうか船をもどしたまえと、関谷深山大権現、関口熊野権現の社にお籠りした。すると、靈験あらたかなること、たちまちのうちに神風が立って、不思議にも船はふたたび湾口に姿を見せた。当時の人々は、神の力は限りなく強いもので、山を駆ける獣も、空を飛ぶ鳥も、海上遙かに行く船でさえも、制止させることができると信じられていた。

「お稲荷さまとキツネ」

お稲荷さまは、支那の国から海を渡って日本の国へ来る時、お供にキツネを連れて

お越しになった。お稲荷さまは五穀を司る神とされ、キツネは稲穂を口にくわえて運んできた。その時の稲穂こそ、日本に初めてもたらされた稲であったとされている。織笠、白石の古田家の稲荷さまの御姿は、手に鎌を持つ姿で祀られている。その周りには、近在の村人によって奉納された品々の中に、たくさんのキツネがかしずいている。

「海を渡った者たち その一 猫と犬」

猫と犬は、もとは支那の国に住んでいた動物であった。日本という国はたいそう金持ちが多く、たいしたすばらしい国であると聞き及び、それでは行ってみようということになった。

二匹は海岸まで来てみると、海は果てしもなく続き、日本の国の影も見えなかった。心細くなった猫は、「おれは何と考えても、この海を泳いで渡れそうにないと思う。」と言うと、犬は、「なあに、おれの背中に乗って行けばいい、おれが乗せてあげるよ。そのかわりと言っては何だが、日本に着いたら、どこへ行こうと一緒に住みたいから、他国で離れ離れにならないように、必ず見捨てないでくれ。」と言うと、猫は約束するからと相互に固く誓い合い、犬は猫を背に日本海を力の限りに泳ぎ渡った。

しかし、日本に着いてみれば、猫は座敷にあげられ、主の膝もと近く可愛がられ、犬はどんなに泣いて頼んでも外へつながれる身の上となってしまった。猫は支那を渡るときの約束とは何のことかと、素知らぬ顔で邸の中をそっちに行ったり、こっちに来たりと、知らんぷりであった。この時のことを恨みに思って、猫をかたきと追い回すのだと伝う。

「海を渡った者たち その二 蛇と蛙」

ある日、蛇が日向ぼっこをしているところへ、一匹の蛙が跳ねてきた。そして言うことには、なんとも日本という国はいい国で暮らしやすいと聞いてきた。おれは今から日本へ行こうと思うが、お前さんも行かないかと誘った。

蛇は、行ってもいいが、おれの食うものが日本にあるだろうか、しきりに不安があった。すると蛙は、もし食うものが見つからないときは、おれの片足でも食えば言いさといった。そして二匹は打ち揃って海を渡った。その時の約束、因縁で、蛙は蛇に吞まれる運命になったのだと伝う。

「甚兵衛だんなと佐原の大蛇 宮古」

その昔、宮古の佐原の奥深い山中にいつも見回りに行く山主があった。その名を増坂甚兵衛といい、山の見回りは甚兵衛だんなの楽しみの一つだったから、何をおいても欠かしたことがなかった。天を突いて伸びる杉の巨木を、さもさもおしそうに

撫でさすっては太い樹々と語り合い、朝早くから握り飯を腰に下げて山路に行く姿は、人々に、「あれ、今日も甚兵衛だんなが、山さ行く。」と言われて見送られていた。

ところで、この甚衛さん、たいへんな醜男（ぶおとこ）であった。その醜男ぶりは並みのものではなかったが、当人はそう気にする風でもなく、その日も山を見回り、さてここで一服しようかと思えば、都合の良いことに、近くに大きな木がながながと地面に横たわっている。よしよし、あの木に座ってたばこにするべえと、どっかと座って腰から胴乱を抜き取ると、きせるにたばこを詰め込み、ゆっくりと腹の中まで吸いこんで、気分のいい一服に目を細めて空を見上げたそのとたん、何としたことか、大きな丸太と思って腰をかけたものがいきなり動きだしたものだからたまらない。きせるをとり落として大慌てで立ち上がり、ふりかえりざまに見下ろせば、自分が今まで座っていたのが見るも聞くも初めての一匹の大蛇であった。甚兵衛さんも慌てたが、大蛇も慌てて、何奴が俺の昼寝の邪魔したかと、鎌首をもたげて甚兵衛さんを睨みつけた。ところが、世にこんな醜男がいたかと大蛇は驚いて、あいた口がふさがらない。甚兵衛さんは大蛇に驚き、大蛇は甚兵衛さんの醜男ぶりに腰を抜かさんばかりにたまげてしまった。が、世の中、何が幸いするかわからない。一呑みにせんものと鎌首をもたげた大蛇だったが、顔を見たとたんすっかりその事を忘れてしまった。そのまま喰われもせず、命拾いして事なく分かれ、自ら好んで後の世までも語り草にしたと伝う。どっとはれ。

「犬と五徳の噺」

ずっと昔、犬には足が三本しかなかった。歩くのにも大した難儀をしていて、見るのも気の毒な有様であった。見かねた神様は、ある日犬をお呼び出しになり、その時一緒に呼び出されたものがあつた。それは、囲炉裏のほとりの火鉢の上で鉄瓶や土瓶を火にかける時に使う「五徳」というものであつたそう。

五徳は四つ足でいそいそと出かけ、犬は三本足の不自由に気ばかりせいでもままならず、ピョコタンピョコタンと、それでも精一杯急いで出かけて行き、やがて神様の御前にうやうやしくお言葉を待っていると、二人を並べて神様が申すには、「こらこら、五徳よ。そなたは毎日毎日火のそばで、ただじっとしておればよいのが役目であろう。三本足になったとて別に不自由はあるまい。見ての通り、犬は三本足で急ぐにも急げぬ大した難儀をして暮らしておる。どうだ、そなたの足を一本でいい、犬に分けてやってはもらえぬものかの。」と言うと、五徳は、それならばと気持ちよく、すぐさま犬に一本足を分け与え三本足になった。帰りは犬は大そう喜び、踊り跳ねながら、「こいつあ大したいいものだ。」と、いきつもどりつ大喜びで帰路についた。ところが癖と言うものは恐ろしいもので、昔、三本足だった犬は、四足になってからも小便をする時、思わずひょいと片足を上げて三本足になる。気をつけようと念じてはいるのだが、何とも治らない。それで今も、犬は小便をする時、片足をあげて三本足でするのである。

「ヨシキリ」

ヨシキリは、高く繁った葦の藪の中において、いつも口うるさく鳴いている。その昔、この鳥は酒屋の婆だったという。

ある所に、大酒のみの「ごんぞう爺」と呼ばれる男がおった。三度の飯より酒が大好きで、市の帰りにも、仕事のはかあがりにも、酒屋に立ち寄り酒を飲んで付けたし、また飲んで付けた行くにも来るにも、いい機嫌で日を暮らしておった。朝な夕なに酒屋を関所に通ううちに、金も払わずに飲むものだから、その金額は積もり積もって、ずい分とたまってしまった。

酒屋の婆は、何とかごんぞう爺から飲み代を取りたいものと、あの手この手と変えてみるが、ごんぞう爺はどこ吹く風と、そらっとぼけた顔でいつまでたっても返してくれない。酒屋の婆は、ごんぞう爺の姿を見るたび口汚く催促してののしり、終いには鳥になって飛び立ってしまった。それゆえ、今でも酒屋の婆は葦の茂みの中で声高に、毎年毎年けたたましい声で、「ごんぞう爺！ごんぞう爺！酒手、酒手。」と鳴いているのだと伝う。昔の人々はヨシキリが藪で騒げば、「おおっ、今日もごんぞう爺あ、酒手せえそくされでらあな。」と言ったそうだ。

「オットンドリ」

オットンドリは農家の嬢さまだった。意地の悪い上に、この女は情知らずの薄情者であった。ある日、夫が畑へ働きに行っているところへ、昼飯を飯台に入れて背負うと山の畑へのぼっていった。畑についてみると、夫が朝早くから野良仕事に精をだして働いたものだから大分仕事ははかどり、今しばらくで畑仕事は終わるところであった。嬢はあと一息、あと一畝と心の内に思いながら、木のかげで夫の働くのをながめながめ休んでおった。しかし、朝も暗いうちから鍬をとって、わき目も振らず汗水たらして稼いだ夫は、疲れているばかりでなく、たまらなく腹が減っていた。あまりの空腹に夫は畑の真ん中で力尽きてくずおれるようにうずくまると、そのまま息絶えてしまった。木のかげで見ていた嬢は、たまげて走りよると夫の身体にとりすがって、「これ！おどっつあん！これ！これ！」とゆさぶったが、夫はそれっきりだった。嬢は夫の亡骸を狂ったようにゆさぶり焼け、やがては鳥になって飛び去って樹立の中に消えてしまった。ブッポウソウの背中には白い毛があるのだという。が、この白い毛は嬢が背中に背負っていた昼飯だったという。

「カッコウとトドとホトトギス」

昔、カッコウとトドとホトトギスが、共同で山芋掘りをした。トドは腹が抜けるほど食って、いい声が出なくなってしまい、トド、トドとしか鳴けなくなってしまった。

カッコウが来た時はガワばかり残っていて、美味しいところは何もなくなっていた。一口も芋を食う事が出来なかったカッコウは怒って、ガワッコ、ガワッコと言っているうちに、ガッコとなり、ついにはカッコと鳴くようになった。

ホトトギスが来た時は、もうすでに何も残っていなかった。おらも掘ったけどなあと言っているうちに、ホタタケドモ、ホタタケドモと鳴いてくやしがっているのだそうである。

「オホ（ふくろう）」

オホは、その昔、染物屋だった。ある時、神様からの言いつけで、世の中の鳥の体を色別に染めなければならなくなった。それまで鳥は、どの鳥も同じ色で暮らしていた、まことに見分けにくいものであった。

鳥達は各自好みの色をオホに言って美しく染めてもらった。キジは、美しい深緑の輝くばかりの胸毛に染め変え、顔は遠目にも色鮮やかに勝ち誇り、草かげでけたたましくケーンケーンと鳴いていた。

めじろは、緑色の体に目もとも涼しく良い声でさえずれば、林の中では、かけすが枝にとまって、染め上げたばかりの羽根を自慢げに、林中に聞こえよがしにがなりたてて、そのそばでは、きつつきが、俺はここだと言いたげに太い枯れ木を嬉しそうにクルクル回りながら、コンコンと枯れ木をふるわせては所在を知らせていた。どこもかしこも、それはそれは、染めたばかりの飾り羽根をお天道様にあてて広げてみると、なかなかいそがしかった。

オホは朝早くから始めたのに、あとからあとからやってくる鳥の数と注文の色揃えに大わらわで、ねじり鉢巻でやっているのに、お天道様は山の彼方に落ちかけるし、もうくたくたで、目がくらくらしてきた頃のことだった。一匹の鳥がゆっくりとオホの目の前にやってきた。それは、からすだった。からすは、今見てきた鳥達の飾り羽根を思いだしては、ああでもない、こうでもないと言っては、なかなか決まらない。かけすのような羽根がほしいだの、さんこうちょうの飾り尾羽根が尾にほしいだの、いやいや、おしどりのあの色のどれがいいべかと、言いだしたらとどまる所を知らず、終いには誰よりもりっぱな、品のよい、見栄えのする、などというものだから、オホはその度に色桶を片手に行ったり来たりしていたが、何を思ったか、そのうちに物も言わずに色桶を一つ入れ物に入れ変えると、「なあ、からすどん、俺にまかせてくれ。こん中にゃあな、かけすの色も、めじろの目をくまどった白も、きじの色も、なにもかも全部入れてある。さぞかし、みごとな色染めが出来ると思うが。」と、にこりともしないで言うと、からすは、おお、それなればと言いつつ、どこらへんにその色をと、片羽根出しては首をかしげた。

オホは、ますます真面目な顔をして、「いやいや、からすどん、せっかく作ったいい色だ。そここなどと言わずに、一気に行きたいものだ。他の奴らを、あつと驚かしてやろうではないか。」などと言うものだから、からすもその気になって、「そんならお願い致す。」と言うことにはなり、オホは持った色桶を、からすの頭のとっぺんから

ざんぷりと力まかせにぶっかけた。そして言うことには、「何と見事な色合いだ。この色こそ鳥の中の鳥ぞ。誰も使わなかった色づかいだ。」と言ったものだから、ますますいい気になって、目もあけないうちから、これで俺がこの世で一番よと内心ほくそえみながら、嬉しさのあまり一声高く鳴いた。オホはきりりと結んだねじり鉢巻きを取りながら、「俺もこれで満足じゃあ。今日はほんに忙しい日じゃったわい。ほれ、からずどん、水鏡じゃ。映してみなされ。」と言いつつ、水をはった大きなたらいを指した。だが鏡に映して見るまでもなかった。からすは自分の姿の真黒なのに、目を開けたとたん気付いて、冷水を浴びせられてたように息を呑んで身震いしたが、もう遅かった。

これを恐って、からすはオホを追いかけ回し、孫子の代までも憎んでやると悪態をついた。オホは恐ろしくなって、夜しか飛ばなくなってしまったと言う。どっとはらい

「マァーオ鳥」

この鳥は、その昔、男わらしだったと伝う。一寸足りないところのある子供で、何か言いつけられても次から次と仕事をすることもなく、気がきかなくて言われた事しか出来なかった。親方はある時山につれていくと、馬の番をさせたが、何をしていたのか、夕方になると馬が見えなくなっていた。親方はかんかんになってどなり、男わらしは泣きながら山の本立の中を、馬を探してどこまでもさまよっている。やがて山奥に迷い込みながらも、声が潰れてしまうほど馬を呼んだ。「ウマー、オーイ、ウマァァー！」。そのうちに、「マァーオ、マァーオ」と啼きながら鳥になって飛び立ったと伝う。

「コッケイ」

この鳥は朝早くから鳴いている。その昔、毎夜茶屋あそびをしては、朝起きの悪い男があった。その家の近くに行くと朝も早くから、「オヤジ、ジョロカイ、ジョロカイ、オキロ、オキロ」と鳴くのだそうだ。ところが多少あわて者で、まじめな男のところへ飛んで行っても、女でも子供でも、みさかいもなく、「オヤジ、ジョロカイ、ジョロカイ」と鳴くものだから皆に笑われ、あ奴はコッケイな奴だと言われてしまった。その時からコッケイと呼ばれたそう。

「ジュウイチ」

ジュウイチという鳥がいると言う。その昔、男がいて、博奕が三度の飯よりも好きで、明けても暮れても入り浸る毎日であった。

その日も、この勝負なんとか勝ちたいものと、回された札を急いでのぞき見た時、とっさの事に、その札は十一の札だと思い入んで、ひたすら手に握って放さなかった。「この勝負、おれのものだ。こりゃあ一番いい所をやっつけべえ」と、はやる気持をおさえて最後の勝負を賭ける時、この十一を切り札に使うつもりで握りしめた。ところが、いざその時になってよく見ると、その札は十一ではなかったのに気がついたが、その時は終わりだった。たしかに十一だったと心の内に言いながら、唇を噛んで悔しさのあまり、「ジュウイチ！ジュウイチ！」と何度もくりかえしつつ、その男はいつしか鳥の姿になって飛び去り、今もジュウイチと鳴くと伝う。

「よいしょ鳥」

この鳥は沼のほとりや、樹木の茂った川べりの薄暗い所で曇った日に鳴くと言うが、あまり姿を見ることはないという。

その昔、この鳥は、樵（きこり）だったといわれている。ある時、木出し仕事に行って流れに材木を入れて川を流す時、どンドン木を出された。その木を夢中で、よいしょ、よいしょと、流れの中に押し出しているうちに、ついに鳥になってしまった。木の茂った川べりなどで、一步ごとに、よいしょ、よいしょと、鳴きながらあるくのだと言う。

「乳母杉 その由来」

関谷の一角に、その昔、乳母杉と呼ばれる巨杉がそびえていた。その根元は畳八丈もあったと伝えられている。

昔、昔、関谷の大地を安住の地と定め暮らした一行の中に、赤子に乳を飲ませる乳母がいた。その乳母が年老いて亡くなった時、一本の杉の木を植えた。この時の杉が、やがて天をつく大杉に成長した。

関谷の人々はこの杉を乳母杉と呼び、天にもとどくかと噂に高く、その先端は霞露ヶ丘からもくっきりと見え、「あれが関谷の乳母杉よ」と、杉の由来は近郷近在知らぬ者はなかった。とにかく際立っていたのである。

ある時、雷によって巨杉に点火した炎は、煙をあげて燃え出し、その様子は鯨の峰を越え行く旅人もながめ、その火は七日七夜燃え続け、誰も手のつけようもなかった。

ところが、近在の山々に煙をたなびかせて燃え続ける樹の内から、火と煙に燻されて何か生物がもがき苦しむ声が聞こえてきた。しかし誰も救い出すすべも知らず、やがては日が過ぎ火もおさまり、村人は杉の木に入っていた生物が何であったか初めて知ることが出来た。それは、この世にこれほど大きな蛇があろうかと思うほどの大蛇のむごい姿であった。七日七夜、火と煙にのたうち回り、やがて息絶えたあわれな死に際の声であった。

「白蛇の兜」

うんと昔、関谷には兜をかぶった白い蛇がいると信じられていた。この白蛇は関谷の人々の守り神でもあり、この蛇にいたずらをするものでない、もしもよからぬ事をする、たちまち災いと我身に返ってくるであろうとされていた。めったに見ることも、出会うこともないものとされてはいたが、もし出合った時は、女子は急いで腰巻をはずして、この蛇にかけろ、そうすれば、兜を置いて行ってしまうものだ、と言いつたえられていた。その兜こそ、この世の不思議な宝の一つとされ、床の間にそなえておけば、必ずやその家は繁盛すると伝えられ、この兜を家宝とする屋敷があると言うが、誰も知る人はいない。もし手にする事が出来たなら、ぜったい人に言っはならない。他言すれば、たちまちにして宝は力を失うと言われている。

「ながむしの話」

ながむしが家の中に入って来た時は、驚きあわてて急いで追い出したり、殺したりしてはならない。外の方に向けて静かに導き、「ただあ帰んなよ。何がいい物を置いていってくれよ。」などと言って出してやるものだ。

「ながむしの抜け殻」

ながむしの抜け殻は、頭から尾の先までそっくりな形のものは、まれにしかない珍しいものだと言っていた。

昔、兵隊さんが出征する時は、絹の胴着に真綿を入れて作り、その中にながむしの抜け殻をしのばせた。ながむしのように、這っでも生きて帰れとの親の願いが秘められていた。

「黒蛇の話」

ある時、山を行く道すがら、男は一匹の黒蛇を見つけた。こいつはいいぞと、つかまえて生かしたままで瓶詰めにして売りに出したが、何処へいっでも買手が無い。そのうちに、男の幼い倅が次第に目が見えなくなってきた。不思議にして、家の者はイタコに占いを見してもらった。するとイタコは、あの黒蛇は山の守り神であつたと告げて、すぐに山に帰してやれと言った。言われた通りにすると、倅の目は日が経つにつれて見えるようになったという。

「約束を違えた若者」

ある所に大きな屋敷があり、そこに大そう働き者の下男が使われていた。この若者は、働き者の上に、歌をうたう声が大そうよかった。草刈りに野山に出て歌う声は、澄んだ大気にとけては聞く者の心を、ある時は烈しくゆさぶり、ある時はしみじみとさせ、その巧みさは人の心をとらえて放さないのであった。若者が通う山の草刈り場のずっと上の山の頂近くは、大岩が重なり合い、今にも崩れ落ちるかと思うような所があり、めったに人は近づくこともなかったが、この大岩の割れ目奥深くに一匹の大蛇が住んでいて、山の細道を歌って通る若者を朝な夕なにながめ暮らし、その姿が見えなくなるまで、いつもじっと見送っていた。

ある時、その日も歌いながら、いい気分が暮れかかった道を下って来ると、野草の茂みをかき分けて一人の美しい娘が目の前にひょっこり出た。娘は恥じらいに頬を染め、伏し目がちに若者を見て笑いかけた。若者も、不思議に思いながらも笑いかえしつつ、心の中で「めんこい娘だな」と思うのであったが、近在で見知った娘ではなかった。が、なんとも言えないいい気分になって、なお一層声をはりあげるのであった。そんな事が二度三度と重なるうちに、話しを交わすようになった。やがて、娘が言うことには、「おまえさまの声のいいのに聞き惚れました。私をどうか、お前さまの家に連れていってくれないか」とせつなそうに打ち明けた。男は驚いて激しくかぶりをふると、「おらあ、下男奉公の身だ。女ごなど持つような身分でない。そんな事は夢のまた夢。仮りに連れていったところで一緒に暮らす家もない。」と言いつつ、持った手綱をにぎりしめて立ちすくんだ姿がいじらしい。女はなおも追いつがるように、「草葉のかげで雨露をしのぐとも、私はおまえさまと暮らしたいと、いつもそう願って・・・」と言うと、後は言葉を詰まらせて涙ぐんだ。やがて二人は、人知らず山懐に粗末な小屋を造り、女は小屋において若者は夜な夜な女の所へ通う日々が続いた。若い二人は一時の逢瀬に酔いしれ、醒めては澄み渡った野に出て風とともに歌った。

月は十六夜、野の花が夜に咲いたか、かぐわしい匂いがたちこめていた。はじめて知った喜びに心を重ね合わせるそのうちに、女は身籠ったことを男に告げた。そしてもう一部屋、子を産む部屋がほしいと言うと、男は、今のままで間に合わぬのかと、はじめは取り合わなかったが、女の言葉に負けて、産み月近くなる頃までには産部屋も出来た。やがて月満ちて、いよいよ始まると言う時、女は若者の前に座ると、私が子を産んで部屋から出て来るまで、どのような事があるとも部屋の中に入って来ないでくださいませ。お願いですから、この約束ごとを固く守ってくださいと言った。男は心配ながらも「よしよし。」と笑って安請け合いした。そんな男に、部屋に入って行きしなに、なおも念を押して、部屋の中に女の姿は隠れた。だが、「生まれ出る子は血を分けた俺の子、立ち寄るなと言うは、はなから無理というもの。」とつぶやいて、立ち去りかねて時は過ぎていった。

しばらくのち、手持無沙汰の若者がはやる心で座っていると、元気な産声があたり空気をかすかに揺すった。若者は跳ね起きると天を仰いで、「ありがたい、俺の子だ。やっと産まれたか。ほんとに待ちわびた。」と、喜び勇んで部屋へ一歩足を踏み入れて、はっと息をのんで立ちすくんだ。なんとそこには、一匹の大蛇がとぐろを巻いて、産

まれたばかりの赤子をかきよせるように守って、鎌首をもたげて若者を睨み見据えているのではないか。目は怒りに燃え、若者に向かって大きくあいた口は、恐ろしいほどに赤く見え、あまりの驚きに声すらなく、慌てて外へととびだした。もう、わけが分からなくなった頭の片隅で、今さっきかいま見たものを思い返した。確かにあれは蛇だった。それも見たこともない大蛇だった。あの女はとり喰らわれたものなのか、時が流れた。そこへ静かに女が立った。そして悲しげに若者を見ると、「あれほど見るなとお願いしたのものを、なんで守ってはくたさらなかったのか。」と言いつつ、大粒の涙をこぼした。声もない若者の前に女は、「さっき、おまえの見た蛇の姿が私の本当の姿です。おまえの歌声に聞き惚れ、叶わぬ願いと知りつつも、神に願いをかけて人間の姿に変えてもらった嬉しさも、今となっては水の泡と消え果てた。もはや一緒に暮らすことは、叶わぬ夢となりました。」とさみしげに言うと言葉を切った。やがて、山の頂へむけて去っていく姿を、ただぼんやりと見送る若者を白い霧が包みこんだ。霧は若者の頭の中まで立ち込め、たちまちのうちに白く染め上げてしまった。若者は自分が誰であるかさえ分からなくなっていた。

「ながすけとむすめ」

昔、ある大家の娘が年頃になった。この娘がまた、近在にないほどまことに美しく、気立てのいい娘で、親は我が娘ながら大そう自慢に思い、それはもう目に入れても痛くないといった可愛がりようだった。

村の人々は、どこの誰さ嫁こになるのかと蔭ながら楽しみにして、街道ですれ違っても、姿も美しく心優しく笑いかけてくれるこの娘を、あとふりかえりながら見送るのであった。誰に摘まれる花なのか、そのこぼれる笑みは野に咲く花にも似て、女の色とはかけ離れた美しさで匂ってゆれた。

親もまた、その思いは誰より強く、明日の日もまだ見えぬうちから長持などを取りそろえ、どこへ出しても恥ずかしくないようにと、娘のために大そうな支度を整えた。噂の花は人伝いに零れ咲き、嫁にほしいと訪ね来る人が続いたが、娘は笑って、「おらは、まだいぎたくね。今のママがいい。」と言うから、親は親で可愛さも手伝い、「ま、まあだ年こもいがねえし、この縁談でなくても、またいいのもあるべえ。」と思ったりして、にこにこと笑ってうなずき、娘の思うがままに断ってしまった。

ところが次々と降るように来る嫁もらいも、どんな所の男でも、娘は、「父さん、おらは、まだ・・・、気が進まね・・・」。親は心配になってきた。「そんたら、誰が好きな男でも」と聞いても、そんな者はいないという。そうして部屋の障子戸をびたりと閉めて誰も入れず、夜もどこかへ出て行くでもなかったから、親はいい男がいるわけでもなさそうだと訝しがって日はすぎて行った。

そのうち、たいした良家から嫁もらいが来た。親はこの時ぞ、この期を逃してはなるものかと、娘に向かって言うには、「おまえが、なんぼこの家でいつまでも暮らしたいと思ったところで、女ごは、みんな嫁こさ行くもんだ。家督になる男もあるごどだし、もらいっ人がたつうちが、女ごは花と言うもの。ここらでいいくらいにして、親

の言うことを聞いてごぜえ。返事こしてやんが、いいべな。」と教え諭して顔を寄せる
と、親を見上げる目にいっぱい涙をためて、「父さん、待ってくだんせ。おら、まだ行
きたくね。」と、親にとりすがり、見るも哀れなほどに泣き崩れ、その姿に途方に暮れ、
娘いとしさから、これほどまでに泣いて行きたくないというものを、嫁に出して何も
なければよいが、何かあっては先方様に申し訳が立つもんでねえし、娘のためにもな
るまいと、後に心は残りつつ、それから、ぜひにと何度も足を運ぶ客を断り続けた。
そのうちに、娘は白粉などをほしがったりして、誰が見てもただでさえ美しい娘が、
薄化粧をして綻びかけた春の花のように薄紅に染まった。

やがて、それからしばらく後に、娘はなんだか気分もすぐれない様子で、その顔色
に親は何事かと気が気ではない。そのうちに、いつしか娘は身重になっているようだ
と気付いた。

親は、やはりそうであったかと、胸をつかれる思いで、何としたことだ、これだも
の、行けるはずがないと、相手の男はどこ誰だと、目をつりあげて詰め寄ったが、
娘は泣いて首を振るばかりで、杳として相手のことを口にしなかった。やがて月日は
暮れて、娘がある日、身も世もなく苦しみにぬいた末に、やっとのことで産み落とした
赤子は、人間の子ではなかった。顔は人間の顔形をしていたが、体は蛇であった。生
み落とした娘は驚きのあまり絶句して、そのまま息絶えてしまった。

想う男が蛇の化身であったとは露ほども知らず、真心を尽くして毎夜明け方まで共
に過ごした楽しい日々が、あまりにも悲しい恋であった。嫁入りにと用意された長持
には、木の葉がきっちり詰められてしまっていた。娘には何に見えたのか、やさ
しい男に姿を変えたながすけの、いとしい娘に通う夜毎夜毎のみやげだったのか、見
れば夜な夜な、窓のてんごうし（明かりとりの窓）の間を抜けたのか、格子戸の間
には蛇のうろこがこびりついていた。親は、野に住む者に想いをかけられた憐れな我が
娘と、いとしい女に夜毎に通う生き物のおそろしい情の念に身をふるわせ、もしかし
て、このままこの子を育てたなら、ながすけが我が家に何かいたずらをするかも知れ
ない、いっその事、山に連れて行って置いてきた方がいいではないかということにな
り、産着にくるんで山に置いてきた。次の日に行くと見ると、赤子を置いてきた所
には何もなかったと伝う。

「夜毎にしのお男」

昔は農家の台所は大きな板敷きになっていて、食事から夜なべ仕事、近所の人がい
つとき仕事のあいまに立ち寄るのも、台所の板の間だった。この板の間は、女達によ
って朝に夕に磨かれ黒光りしていた。戸棚の棧木も柱も深みのある色艶で、その風合
いは「美しい」を通り越して「みごと」というものであった。台所には、きまって木
の桶があって、それで雑巾を洗っていた。夕暮れ時には、必ず終わった後の水をき
ちんと捨てておかなければならないと戒められていた。そのわけは、その昔、こんな
事があったからだと伝う。

ある家の娘が、親に何度言われても水を捨てずに、台所の隅にそのまま残しておく

ものであった。その夜も、いくら言われても水も捨てずにそのままにしておいた夜の事だった。皆、寝静まった夜中、何者かわからないが、その桶のあたりで水音がする。はじめのうちは、誰も気にも留めなかった。いつも猫が床下から出入りしているし、その猫が桶の水をびちゃびちゃ舐める音だと思っていたが、日が経つにつれて娘の様子はどうもおかしい。急に着物を気かけたり、白粉をほしがったり、好きな男でも出来た女のようなあんばいで、なんとも気ぜわしく、それも夜になるといっそうひどくなるが、誰もそのわけを知らなかった。

そのうちに、ある夜も深まった頃、台所の水桶のあたりで、その夜も水音がする。障子の破れ穴からこっそりのぞけば、見も知らない若い男が、今しも娘の部屋にしのび行くところである。家の者は声高に「野良犬めが」と大声で追い立て、泣く娘に諭して聞かせた。夜毎にあんな汚い桶の水で手足を洗うなど、人間とも思えない。まして近在で見知った男の中に、あんな男はいない。きっと何かの化身に違いない。化け物に心を許すなど、とんでもないことだと言ったが、聞きわけもなかった。

親は思案の末に、それなら、あの男がまた逢いにきたなら、着物の裾に針を縫いこんで、そのまま帰してみよ。人間ならば自分で抜くであろうから、と言った。娘はその夜、親に言われた通り長い針で着物の裾を縫い、針もそのままに別れた。すると次の夜から男はぴたりと逢いに来なかった。ある日、家の者が家の後ろに回って行って見ると、石垣の割れ目に大きなながむしが、体半分穴の中に入れてまま動けなくなつて苦しみがいていた。よく見れば、そのながむしの背中には、娘の縫いこんだ針がそのまま刺してあった。男は、このながむしの化身であったのである。

「伝五郎とカップ淵」

その昔、伝五郎という男が関口にいて、人々にカップと仇名されるほど釣りっこが大好きだった。三度の飯より魚釣りが好きだと自分で言う男で、話といえば何のことはない、いつも魚の話や釣竿の話で、街道を歩きながらも、細い竹こなど折り取っては、竿をたれる真似をし、それは、それは、本当に人にカップと仇名されるだけのことはあった。

いつも関口の淵にささって（入り浸って）おった。その頃、この淵には大そう魚がいると噂の高いところであったが、カップが出るとも言われていて、別の名をカップ淵とも言われていた。伝五郎は、その日もいつものように、このカップ淵の岩の上でんがり腰を据えて釣糸をたれていた。夕暮れがせまり来る頃で、山を下る人々は岩の上の伝五郎に一声かけて山を下りた。「カップに引かれんなエ、伝五郎。」と笑う。伝五郎も笑い返して、「俺あ、カップより、そなだのほうがおっかねえが。」とうそぶくのだった。「これから勝負よ、日暮にゃあ魚が釣れるぞ！」と、竿を握り返して水面を見つめた。その日も伝五郎の魚籠（びく）は魚でいっぱいだった。そんな姿をながめて、年老いた男が、「カップの分も残しとごぜえよ。」と言いつつ、里へ下って行った。

そのあたりから、釣糸をたれる岩のまわりを、一匹の小さな蜘蛛が行ったり来たり、

水の上を走り回った。岩の上には、伝五郎の横に、この前の大雨の時に流れ着いたのか、大きな根がひっかかっておったが、蜘蛛は水面に糸を張るのか、この木の根のあたりを歩きもどりつ、仕舞には伝五郎の足にも糸をかけ、何度も水面と足元を歩き来した。伝五郎は、さして気にも留めず、となりの木の根に蜘蛛の糸を取っては掛け、取っては掛けしていたが、魚を釣るのに夢中になって、そのうち蜘蛛のことなどうち忘れてしまっていた。蜘蛛は相変わらず水面を忙しく動いていた。そのうち不思議なことに、蜘蛛がちょろっと水面から消えたかと思うと、木の根は水中にがぼっと引きずり込まれて水飛沫をあげて落ちた。伝五郎は、はっと思ったが、もう後の祭りだった。伝五郎もカップにひかれて、水の中に消えていった。この時から、この淵を伝五郎淵と呼ぶようになったと伝う。

「孫助カップ」

関口の下新家という家の前には、その昔カップ淵と言われる所があった。子供たちは水遊びをするときも、ここへ行くことを固く戒められていて、子供の間でも、「遊びさ行けば、カップにストンダマア（しりこ玉）、抜がれっぞお。」と言いつつ合っていた。その近くにはいい草場があって、大人達は馬を連れて行っては、ここでよく馬に草を食ませ、水に入れて洗ってやったりしていた。

そんなある日、いつものように孫助家の馬は、この草場で草を食んでおった。そのうちに馬の様子が何かおかしい。よくよく見れば、一匹のカップが馬の手綱をほどいて、自分の体にぐるぐると巻きつけておった。そのままカップ淵の深みに引きずりこむつもりだったのであろうか、馬があんばいよくカップに気が付いた。いきなり一声嘶くと、そのまま手綱の先にカップをからめたまま走り出した。カップは草を引きずられ、街道の砂の上を引きずられ、やがて馬屋の中に土にまみれて入ってしまった。さて、カップというものは、水から上がって陽に当たっていれば、頭の皿の水が乾いて、神通力が無くなると伝えられておったが、まさにそうであったのか、馬の飼葉桶を頭からひっかぶって隠れておった。それを人々はひきずりだして、何のためにこのような悪さをしたのかと痛めつけて詰め寄った。「俺あ家の宝馬、引きずり込んべえとするどは、ふてえ野郎だ。」と言うと、カップは平謝りに謝って、終いには自分の指を喰いちぎり、出た指の血で、二度と悪いことはしないと証文を書いた。今後、このようなことは絶対しないと泣き泣き手を合わせ、命ばかりは助けてくれと懇願するのであった。それから下新家のカップ淵では、カップの姿を見ることがなかったと伝う。この時、カップの書いた証文が、関口のどこかの家に宝物になってしまっているそうだ。どっとはらい！

「ヌキホラカップ」

ずんと昔、関谷はヌキホラと号す家の馬が、毎夜誰も何もしないのに急に暴れだし

たり、朝に起きてみると木戸木がはずれていたり、口輪が曲がっていたりと、不思議なことが続いた。ヌキホラの人々は、さては盗人が馬泥棒に入って、馬に暴れられて連れ出せないでいるのでは、と思い、ある夜、荒縄を用意し、ねじり鉢巻で寝ずの番をしたが、あやしい人影など姿も見ることもなく、杳としてそのわけは分からないのであった。ところが、ある雨のそぼ降る日暮れに、家の前の馬の蹄あとの水たまりに、見たこともない小さな生き物がうごめいているのをみつけた。よく見れば、それは一匹のカップで、この家の前の淵に住み暮らすものだという。

それでは今まで畑の大根や胡瓜も、お前が盗んだのか、馬に悪戯をしていたのもお前だったのか、と言うと、泣き泣き、そうだと白状した。そこでヌキホラでは、これから悪いことは決してないと約束をさせ、酒をふるまい淵に帰してやった。それからというもの、この家では、どんないたずらもされたことがなかったと伝う。関口川がヌキホラの家の前を流れていたころの話だと伝う。

「大関谷沼のカップ」

現在の関口川は、大関谷と号す家からはかなり離れているが、その昔、ヌキホラの前が川だったころの話である。川は幾年もの間に流れを変え、川床だったと伝えられる所や、淵だったと伝えられる所が多く残る。淵はやがて沼となり、形を変えて残った。大関谷の沼も、その昔は川の淵であったのだと伝う。昭和に入ってから、この沼は種浸け池として利用され、早春には稲粃が浸けられていた

どこのカップも同じで、馬の飼葉桶をかぶって隠れていたのを、人々に見つけられ、もう二度といたずらはしないと誓わされ、証文を書かせて放してやった。その時の証文があるって言われだあもんだが、俺あまだ見だあごどがねえなあ

「後谷地の大うなぎ」

関口から豊間根に越えて行く境に、内野というところがある。ある年の、代掻きの最中に、この内野の牛が急に暴走し、あれよあれよと見るうちに、関口街道へ駆け下った。追いかける男達を尻目に、関谷もすぎ、やがてドロノキ坂までやってきた。

ドロノキ坂の下は谷地が続き、大小さまざまな沼があるところだった。内野の牛は、この沼に入って動けなくなってしまった。沼には主と呼ばれる怪物が棲んでいて、牛も、沼の主の大うなぎ、うなぎのふったつに取り喰らわれたのだった。

ここに元気な若者たちがいて、沼に主が棲むと聞くと大笑いに笑い出し、大人がとめるのも聞かず、この沼に毒を流しいれた。すると、その夜から若者たちは、いきなりものすごい腹痛をおこして転げまわった。何の薬も甲斐もなく、脂汗が体中からわきだし、助けてくれと見守る人の膝にすがってのたうち回り、その苦しみを見かねた人々は、イタコとともに神に祈った。すると、沼の主のたたりと言われ、それ以来、一命はとりとめたが、若者達は元気になって仕事をする事が出来なくなったと伝う。

沼の主のために人々は石碑を建てた。現在の浦辺製材所の裏手付近に、この石碑があったものだが、今はどうだかわからない。この牛は、街道を下って関谷でひと休みしたと伝えられ、その場所に牛頭天王塔の碑を今も残す。

「たのまれた手紙」

宮古から盛岡を目指す旅人は、閉伊川の河川を左に望む。山々はその裳裾を清冽な川の流に洗い、水はまた、時には激しく岩を咬み、時には緑なす淵に大きな渦を巻き、太古の昔より海へと下る。

その昔、一人の旅人がこの街道を盛岡へと上って行った。先はまだ遠く、細く長く続く街道をハラタイまで来た時、一息ついて汗をぬぐった。「ここはハラタイの淵と人が恐れる大きな淵があり、そこには主がいて街道を通る旅人や馬をひきこむと噂に高い所だな。」と、そんな事を心の片隅に思い出しながら、空行く雲をながめて座っていると、いつの間に来たのか、すぐ後に美しい女がにこ微笑みながら立っていた。そして言う事には、「見れば、旅人らしきお方。上に向って行かれるお方とお見受け致します。この先のオギナイの淵で出迎えている人があるはずゆえ、どうかこの手紙をその者まで届けては下さいませぬか、お願いでございます」と見れば、女の白い手にはひと巻の巻紙がにぎられている。男はそれを心よく二つ返事で引きうけると、女の匂うような美しさも手伝ってか、足どりも軽く街道をさらに盛岡へと上って行った。

しばらく行くと、向うから来る痩せ枯れた雲水姿の僧侶が、すれちがいざま、この男に一声。「しばらく待たれよ」。いきなりで驚いた男に、「見も知らぬ、そこを行かれるお人、そなたには一通りではない不思議な面影がただようておる。どこまでおいでになれるのじゃ。」と尋ねた。不思議な面持ちで、男は盛岡まで用足しに行く途中であるけれど、つい今しがた道の端で一人の女子にこんなものを頼まれましたと、急ぎ慌てて懐の手紙を出して見せた。すると雲水は、今まで杖とも頼るか、街道を引く音色も聞く人の心にしみいる錫杖の音もさらに大きくひとふり、痩せこけて落ち窪む眼光も鋭く、気魄をあたりにみなぎらせ呪文を唱えると、息を呑むいとまもなく地面にはっしと杖をつきたてて、男に手渡された巻紙を開いた。

そこには、世にも恐ろしや、この手紙を持って行く男こそ、そなたへの貢ぎの品、さぞかし美味しかろうと綴られているという。あまりの驚きに身の毛もよだち、へたへたと街道へ座りこんだ男に向かって、「心配致すでない。今から別の文をしたためるゆえに、それを持って行くがよい。」と言うなり、何やら墨の香にも心洗われる心地して、じっと見守る男の前で一筆したためると、札など無用と持たせてくれた。男は、何事もなければ互に言葉を交すこともなかったはずの街道で、神がひき合わせたか、仏の加護か、深々と感謝の心を面に、街道を下る名も知らぬ雲水を見送った。

川の水面は陽に輝き、何事も知らぬ気に流れていたが、男は色濃くうずまく胸の不安にさいなまれながらも、書きなおされた手紙をしっかりと懐に、やがてオギナイの淵に立った。そこには、先の女に言われた通り、待ち人はきちんと出て、「お待ち申し上げておりました。」と出迎えた。そして、手渡された手紙を読むなり、「こんなはずでは

ないが……。」と言いながら、ガタガタと身をふるわせながら、「お待ち下され。」と、しばらく後に一つの包物を男に渡した。それは世にも珍しい宝であったという。しかし男は帰る道中を安じて、この街道をふたたび国へ帰ることが出来なかった。盛岡は北上川のそばに住みつき、この時もらった不思議な宝のおかげで、行く末までも約束されて暮すことが出来たと伝う。

「ぬしに嫁入りした娘」

昔、釜石の甲子川には大きな淵があり、そばに大きな屋敷があって、たくさんの下男下女が動いていた。その中に、年の頃なら十六、七の気だてのいい可愛い娘が使われていた。

ある雨のそば降る日に、その娘の姿がどこへ行ったのかふいに掻き消すように見えなくなった。誰も行き先を知らない。皆で手分けして捜していると、近くの婆が、その娘だったら会ったと言う。何処へ行くと尋ねたら、今からハラタイの淵まで行かねばならないと言いおいて、行ってしまったという。ハラタイの淵とは何処にあるのだ、早く迎えに行つて来いという者があれば、いや、いや、ハラタイとは宮古を過ぎた遙か向こうの閉伊川沿いにあるそうな、と言う者もいて、大騒ぎになった。そんな遠方まで何故に、と人々は不思議にしたが、そのまま月日は暮れても娘は帰って来なかった。

だんなは、下女とはいえ捨ててもおけず、ハラタイとはどんな所であろうかと人づてに聞いてはみるが、ついぞ娘の噂もなく、ついに下男の一人を娘捜しに送り出した。ところが、その男はどうなったのか、行ったきり帰って来なかった。どいつもこいつも行ったきりとは、一体どういう訳だと怒鳴りちらした。

下男の中で威勢のいいのがいて、今度は俺が行つて来ると勇んで出かけた。見たこともないハラタイの淵を目指し、行くが行くが行くと、やがて辿りついたその淵は、緑なす水の色は底知れぬ深さを物語り、あたりは無気味に静まりかえっている。街道すじで尋ね聞いたこの淵の噂を思えば、身はふるえ、足もすくむ思いであったが、八百万の神々、この身を守りたまえと念じつつ、禪一つで深い淵に身を沈めた。水を割って水底近く降りて行くと、驚いたことに水の底には機（はた）が据えてあり、静まりかえったその中に、杼の手さばきもいそがしく、彼の娘がただ一人いて機を織っているではないか。

そのそば近くに立つと、男は、「おい」と一声、声をかけると、娘は、あまりの驚きに仕事の手をとめ、声もなく男を見つめた。だんなさまあ心配なさつて、俺をさがしに出したのだが、お前はこんな所で一体何ゆえに機など織っているのだ、と尋ねれば、甲子の淵のそば近くで仕事をしていると、見たこともないお方がそばに来て、お前はこれからハラタイの淵へ行け、そして、そのぬしの嫁になれと言われてここに来たのだ、と言う。そして続けて言うことには、ここで私に会ったことを、どうか誰にも言わないでほしいと念を押し、もし約束を守つてこのまま帰つてくれるならば、この先々おまえ様の生きる生涯、一日に塩を三俵使うような暮らしを約束するがどうする、と

言う。

一軒の家で一日に塩を三俵とは、これはまた、すごいことだ。俺のだんなも、下男を沢山使う大きなだんなだが、いかな一日に塩を三俵など使いはすまい。それなら、これからの俺の一生は、どんな金持になるのだろうと思えば、夢見る心地がして、獲らぬ狸の皮算用か、黙っていても顔がほころんでくるのが自分にも感じられて仕方がない。

あの娘のことは、口が裂けたって言うものか。淵まで行っては見たけれど、何処にもいなかったと言えよいいのだと思ひながら、やがて釜石の主のもとへ帰った。

ただいま帰りましたと、両手をついて、行く道中でも人にも聞いてみたし、ハラタイの淵までも行ってめえりゃんしたが、聞くところによれば恐い魔物の住処なのだから、もしかしたらもう生きてはいないのではないかと、まことしやかな嘘を並べ立てたから、だんなも、やるだけの事はやったのだという思いも手伝って、もうよい、という事になった。

さて、絶対他言しないと約束した男だったが、ある時、下男達がふるまい酒にあずかった。酒に酔った男は、ついうっかり本当の話しを口走ってしまった。その日を境に次第に体の不調を訴え、やがてあえなく終ってしまった。まよい魔神（魔物のようなもの）に会って、こんな事を言われたら、自分の胸にたたんで決して他言してはならない。あとの祟りが恐いものだ。

「内野沼のぬし」

その昔、祭ノ神峠あたりでもあったのか、大きな沼があったと伝う。人々は内野の沼と呼んでいた。この沼にはぬしが住んでいると言ひ伝えられていたが、人間にはあまりいたずらはするものではなかったという。

ある時、豊間根の方から山田へ一人の男が通りかかった。男はここまで来る街道端で一粒の鉄砲玉を拾った。歩きながら手のひらに転げる玉をもてあそびながら、「こんなもの拾ったところで。鉄砲も持たないこの俺が何にするわけでもねえがな。」と思ひながらも捨てきれず、懐のかくし（ポケット）に入れて先を急いだ。そのうち沼のあたりに来ると、内野の方から何者か無気味な声でうめきながら、こちらの方角へ近づいて来る者がある。目には何も見えないが、あたりは生臭く薄気味がわるかった。髪の毛は逆立ち、目は恐れに血走った。うろたえる男の心の片隅に、村の爺が話してくれた話しが浮かんだ。「まよい魔神の生き物に出会ったら、絶対下手に下るものでない。上りに逃げるものだ」。弾かれたように男は山へ駆け登ったが、自分のすぐそばを目にも見えぬものが通りぬけたかと思つたとたん体の力が抜けて、足をあげることも叶わないように立っていることも出来ない心持ちであった。

やっとの思いで目と鼻の先の内野の家へ辿り着き、助けてくれと戸をたたいた。事の顛末を聞いたその主は、それではクマン様にお祈り致せということで、男は一心に祈りを捧げ身を清めていただいた。主の言うことには、それはきつと沼のぬしが何処からか戻って来たのに出会ってしまったのであろう。よくぞ無事にここまで来たもん

だとしきりに感心した。まずは気を落ち着けて休んでから行くがよかろうと勧められ、一言二言話すうちに、道端で拾った鉄砲玉の話をする、主は、はたと膝をたたいて、おまえさまはその玉に助けられたにちがいない、という事になった。聞けば、鉄砲玉とか、山刀など、刃物を身につけた人間には手出しが出来ないのだという。それゆえ暗闇の山越えや長い道中に行く時は、必ずその懐には刃物を忍ばせるのだそうだ。狐、狸も、それに恐れて悪戯をしないという

「ふけつのけえと釣人」

ずっと昔、浪板の話である、ある日、男は船を沖に出した。その日は魚がよく釣れて大漁であった。あとからあとから釣れる魚に、船はいつしかいっぱいになったが、欲と道づれしたか、ひたすら竿を下し続けた。するといきなり釣糸は弓の弦の様にぴんとはったきり、ぴくりとも動かない。はて、さては根に針でもかかったかと思案の矢先、海面を割って現れたのは見たこともない大きな魚の尾鰭であった。それが陽をあびてきらめきながら水面を水音高く打ちすえて、ゆっくりと水中へかくれたが、釣糸は切れもしなければゆるみもしなかった。男は見たこともない魚の大きさに手に汗をにぎる思いで、波間に消えた尾鰭の巾を思いかえして肝をつぶした。何という大きな尾鰭であろう、あの尾の大きさでは、この釣糸ではもつわけがないと一人ごちて、それでも竿を放そうとはしなかった。

しかし船は少しずつ海の底に続く糸にひかれて動いている。このままではこんな小さな船、すぐにひっくりかえるぞと慌てる男の目の前に、船縁近く浮かび上った姿は、腰から下はびっしり鱗におおわれ、胴からは人間という奇怪な生き物が、濡れた黒髪を波間にひいて、釣糸をたぐり寄せながら無気味に笑い、銀鱗をきらめかせて大きな尾鰭は陽に輝いて、男は生きた心地もなく命からがら竿も魚もうちすてて浜へ逃げ帰った。年寄り達はそれあ、「ふけつのけえ」というものであろうと言い、この時からあまり魚が釣れると、終いにやふけつのけえにとられるもんだぞと言った。

「やどの内のまさかりどこ」

男がアブラメ釣りに出かけた。そこはいつも魚が沢山釣れる所で知られていた。その日もあまり釣れるものだから、無中になって帰るのも忘れて釣っていると、ゴモ（海藻の類）で編んだか、荒縄を片手に海中から船端へ化け物が出た。驚き慌てる男に、手にした縄をかけ海中に引き込もうとする。男は引かれてはならじと、とっさに船にあった鉞で力まかせに縄を切った。すると化物は悔しがって、「もうすこしだったあのに。」と言いながら、海へ沈んで行ったと伝う。その時からここを鉞所と呼ぶようになった。

「わらしを救った刃物」

ある所に、牛追いを仕事にしているわらしがいた。野山を、牛とともに草を求め、ただひとり風の音を聞き、空行く鳥や地を這う生き物を友として、暮らす日々であったが、川の淵の深く気味悪く静まりかえる水面を見ると、なぜか胸が騒ぎ、わけもなく身がすくむような心持になる時があった。

また、山に入れば何処とも知れない向こうから、得体の知れない物音に心せかされて、牛のそばに駆け寄れば、牛もまた、何を感じるのか草を食むのをやめて、彼方をじっと見すえる時などただ恐ろしく、雨や風はいとわねど、年端のいかぬわらしには、そんな日の辛さは骨身にしみて、人の知れない涙をこぼした。

そんなある日、大人達が刃物話しをしているのを小耳にはさんだ。刃物というものは、魔物から人の命を救ってくれるという。それを聞いたわらしは、せめて小さなものなりと刃のあるものを身につけたい、と一途に思い続けた。しばらく後に、刃物鍛冶の親方に出会った。わらしは、この人こそ俺を救ってくれる人なりと、子供心にも縋る思いで一声、実は、と、言葉を続け、思いの丈を語り、どうかお願い致します、と小さな手を合わせて頼んでみた。笑いながら聞いていた親方は、真面目な顔をしてしきりに頼む子供を見て、からかい半分に、それならば柴の大束を五十丸と取替えようと言いつつ去った。親方は冗談半分であったけれど、言われたわらしは本気だった。願った品をほしい一念で、牛を追って草を食ませながら、一生懸命、少しのいとまも惜しんで柴を集め、ついに五十丸の大束を積み上げた。

親方は、それを見ると、さても餓鬼とは言え一念とは大したもの、とわらしの顔を見直した。みあげた心よ、人に雇われ牛の番をしながらの柴集めは、さぞかし苦労なことであつたらう。それほどまでにほしいのなら、その心、あだやおろそかには出来まい。一つ、お前のために立派なものを打ってやる、と造りあげた刃物は、刃の短い「まきり」という刃物だった。そして一言、これは「魔切り」なのだと言いつつ手渡した。両手を重ねた掌に押し載くと、さっそく何処から持って来たのか粗末な木切れを柄にすえて、刃にはボロ布を巻き付け腰にさし、肌身はなさずいつも我が身の守りと大事に持ちあっていた。

牛を追いながら草を食ませるこの仕事は、道端の人の土手に行けば叱られ追われ、さりとは奥山にも草はなく、川岸を草を求めて登り行くうちに日も暮れて野宿となった。川のそばのやわらかい草の上に、牛をかたわらに、朽木を枕と横になれば、水音を子守唄にいつしか寝息をたて始めた。雲間からのぞく月明かりは異様なまでに赤く、風もない不気味な静けさの中に、川の深みから一匹の魔物が音もなく泳ぎ寄った。ぬめぬめとした体から水をしたたかせながら岸に上がると、寝ているわらしを一呑みにせんものと忍び寄れば、わらしの腰のあたりに月明かりをうけて何かが光を放った。その光に魔物は射竦められるように立ちどまった。身をひけば消え、消えたと思つて忍べば、また怪しく光を放つのであつた。まるでわらしは、その光に守られているようで、どう思つても目の前に眠るわらしのそばまで行くことが出来なかつた。やがて諦めて魔物は姿を消した。この時、子供の命を救つたものは、一念で造つてもらつた「まきり」だつたと伝う。

「大竜になった八郎太郎」

昔、豊間根に三人の仲の良い兄弟がいて、いつも山仕事に精を出して働いておった。山中に小屋をかけ朝早くから日の暮れまで、来る日も来る日も働いた。

末の弟は名を八郎太郎といい、まだ年端もいかなかったので兄達は、「八郎太郎、おめえは飯の支度でもせえ。」と言って、小屋に残して出かけて行った。

山に登って行く兄の背を見送りながら、弟は、「こっちが終わったら、俺も急いで行くすけえ。」と言っては、いそいそと後片付けに取りかかり、その日も、小屋のそばを流れる川で今朝食べた椀や鍋を洗うつもりで、急いで樹々の間を下って行くと、川にはイワナがうようよと泳いでいた。

「これあ、いいもんがいる。ひりいの飯のせえ（お昼のご飯のおかず）にちょうどいい。」と洗い物はほうりなげて釣りっこときめこんだ。なんと釣れること、釣れること、たちまちのうちに大した魚が針にかかり、桶はいっぱいになった。「大した大漁だ、大漁だ。」と小踊りしながら、大きいものから順番に並べてみたりして大喜びをした。それを大小とり混ぜて、三人分に分け竹串に刺して火をおこすと、囲炉裏の端からぐるりと並べた。大きいものから焼き出して、ながめて見ては収穫の多さにすっかり気を良くし、「兄さんだちゃあ、何んて言うべ。大した大漁だなあって言うべがなあ。それとも、早く飯盛れ、うんまそうだがっか（おいしそうじゃないか）って言うがな。」と一人言を言いながら、串に刺した魚を指っこで測ってみたり、「早く焼げろ、早く焼げろ。」と両手を打ちならして、人のいないのをいいことに、幼い頃のように浮かれて笑い踊るのだった。そのうちに、魚はあぶれて食い頃になって来ると、これが何ともたまらないほどいい匂いで、やもたてもたまらず、思わずつい手が出た。「俺んのがら一匹、食ってみるがな。味っこ、見もさねえばなんね。」と、誰にともなく言いわけしながら囲炉裏の灰から串を引きぬくと、一口、これが何ともたまらないほど美味しかった。

「うんめえのなんの。何んたら、うんめえざっこだあべ。」と言いつつ、何もかもうち忘れたように、次から次へと自分のも人のも見境なく喰い始めた。

「こりあ、あどんのは兄さんどうの分だがま。」と思いつつも、三人分に分けたはずの魚は知らず知らずのうちに、一匹、また一串と手をのぼし、気が付いて見ると囲炉裏の回りをぐるりと囲んでいた魚串は、一本もなくなって八郎太郎の横には空の串だけがちらばっていた。

「ありやあ、何とした……。一本もなくなつた……。」と口をおさえたが後の祭りで、「わりいごど、何とすべえ。」と言いつつも立ち上った。「ああ、水こが飲みてえ。」と一人ごちて、水桶のそばに立って柄杓を取った。こぼれんばかりに汲んだ水を息もつかずにがぶがぶ飲むと、いきなり柄杓を投げ捨てて、何を思ったか水桶をつかむなり、それに口をあてた。水は八郎太郎の口からあふれ、顔をぬらし胸元から身体をぬらした。桶の水はなくなったが、それでもまだ飲み足りなかった。口の中は渴きにかわいて、喉をかきむしるほどの苦しさをこらえかね、水を求めて外へ出た。川へ下る

細道を歩きながら、自分の腹が大きくふくらみ、身体の様子がどことなく変わったことに気が付いてはいたが、とにもかくにも水が欲しかった。やがて水辺近くに行行って映った己れの姿に息を呑み、色を失って立ちどまった。が、それも一時の事、川岸に腹這いになると、どっぷりと顔を水面につけたまま、身動きもしなかった。「ああ・・・、生きるようだ・・・」。うめく様に顔を上げ、またもや顔をつけて飲み出すと、一飲みするごとに川の水は少なくなっていく。

やがて昼飯時になった。いつもなら、昼飯を背に元気に山へ駆け登って来る弟が来ないものだから、二人の兄は何事が起きたかと不思議に思い、山から下って小屋の入口に下げた蓆をあげながら、「おい、ひりいはなあどなったあ。」と、中をのぞいて腰をぬかさんばかりにたまげてしまった。囲炉裏の端にうずくまった弟の姿は、もはや人間の姿ではなかった。戸口に立った兄達は弟の姿に恐れをなし、小屋の中へ入ることが出来ず、恐る恐る蓆の陰から顔だけ出して、「おめえ、何したあのさ。」と声をかけてみると、八郎太郎はうめくように今までのいきさつを語った。

「あのざっこを一人で全部喰ったば、何んだって水が飲みたくて飲みたくて・・・。俺が岸さのだばって水を飲んでえば、一飲みごとに川の水がなくなつてな。そのうちに俺の姿あ、二度と人中には出られねえようだ。兄さんど、早く山あ下りで行ってけろ。人間見るつど、とって喰いたくなるようだ。」と、顔を上げれば何とも恐ろしや、その顔は弟の形はすでにどこにもなく、額には二本の角が生え始め、口は大きく裂け、そのはしからはだらだらとゆだげ（よだれ）が流れ、目はらんらんと燃えて、今にも飛びかからんとする様子に、二人の兄は後も見ずに一目散に山を下って逃げ出した。

その後、八郎太郎は見るも恐ろしい一匹の巨大な竜となって、山の頂の大岩の上にとぐろを巻いて豊間根を見下した。つなぎのかすが山をかかちよに（足がかりに）、己れの身体を測ってみようとしたけれど、たて石の所に家が二軒あり、そこに大岩が二つもあって測りかねた。つなぎの山とかすが山の間を、石や土砂を積みあげてせきとめ、かつつの川と荒川の川に、そこいらのぺんこな川の水を合わせれば大した広い池が作れようと思案をしたが、たて石の大石がじゃまをして、どうしても豊間根には住めないものとあきらめた。住処を求めて黒雲にのって、空をあちらこちらとさまよう大竜に、人々は恐ろしくて木戸をぴったりと閉じてただただふるえ、野山にも畑にも人の姿もなかった。竜は黒雲に乗ってさまよいあるいたが、なかなかここぞと思い定めることが出来ず、なおも行くが行くが行くと、そのうちに大そう景色の良い気に入った沼を見つけることが出来た。

沼は水をなみなみとたたえ、大竜の巨体を入れてもあまりある水の量で、ここならば誰に邪魔されることもあるまいと、喜び勇んで水中深くおどりこめば、水の底から湧き出たか、一匹の竜が、「俺の住処を荒らすふとどき者め、どこの何奴。」と逆巻く水の中から現れた。それはこの沼の主であった。二匹は互いに譲らず、あたりは一面、黒雲がおおいつくし、天から降る雨か沼の水しぶきか、風の音もすぎまじく、草木を一面になぎたおし、黒雲をついて天にのぼる一匹に、また一匹が追いすがり、火を吐くと見るや、たちまちのうちに水中深く消えて、からみ合い、もつれ合って、天地をゆるがして荒れ狂うのであった。やがて八郎太郎は、ついにはこの戦に勝ってこの沼の主になることが出来た。どっとはらい

「かねのわらじと旅立つ小僧」

ある所に利発な男の子があった。気が利くだけではなく、人の心の痛みの分かるやさしい情をもち、ずい分と幼いながら、その気だての良さは人の噂にのぼるほどであった。その子供に目をとめたのが某とかいう和尚で、やがて小坊主として借り受けた。台所の手伝から本堂の板ふき、庭の掃除と、毎日は忙しく、その忙しさのうちにも経の稽古もせねばならず、和尚さんの後について経の稽古をするのであるが、この時になると何故か身が入らず、他のことは一心に真心をこめるのに、いくら教え諭して聞かせても、これだけはどういうわけか、毎日和尚の怒りをかうばかりで、和尚も、「これほどの利口な子供が・・・。」と、ほとほとあきれ顔で頭をひねって考えこんでしまった。

月日は流れ年を重ね暮らすそんなある日、何を思ったか、和尚は小坊主を後にいつものお勤めが終わると、しばらく後、座りなおして長い経を読み、墨も黒々と一巻の書をしたため、かねのわらじと、かねの杖をそれに添えて、本堂に小坊主を呼び寄せた。何かまた、お叱りの言葉をもたらすのかと気も重たく、和尚の前に両手を揃え深々と頭を下げた。その姿をつくづくながめて、和尚は静かに語り始めた。「ここにお前が来てから、はや幾年も暮れていった。今日まで仏の道を幾度も説いて聞かせて来たが、私はお前の行く道はこの道ではなかったものと思えて来たのだがどうであろう。」と言葉をきった。

小坊主は、板の間に揃えた両手の上に頭をこすりつけて、日頃の行いを詫びた。和尚はかたわらに置いた二品と一巻の書きものを引き寄せながら、「私は怒っているのではないのだ。」と言いつつ、小坊主の前にその品を置いた。「お前は、今日ただいまから、この寺を出るがよい。どう見てもお前はただの人間ではないような気がしてならぬから、このかねのわらじを履き、杖を持って旅立つがよい。やがてこの二品がすり切れた所が、己れの住家と定めよ。そして思う所へ住めない時は、この書きものをそこへ投げ入れれば、きっとお前の願いは叶うであろう」。

せきたてられて、言われるままに旅立ちの仕度をする、今日までの行いを深く詫びつつ、永のいとまを告げ、寺の者に見送られて旅立って行った。風の吹くまま足の向くままに、あてどもなく己れの住む所を求めてさまよい、山河を越え野を越え、夜は満天の星を頭上にいただき、秋草に月にかなでる虫の音も流浪の身には風情なく、野に凄む獣さながら地面を仮寝の草枕と暮らすうちに、頬はこけ落ち、身にまとった衣はすり切れ、杖にすぎるとその姿は街道に行く乞食坊主などというものでなく、見る者は一目とは見るが、身をよけておののき恐れるありさま、ものすごい形相を呈してさまよい行くのであった。しかし、行けども行けども我が住処と定むべき所を見出すことが出来ず、身も世もなくぼろの様にうずくまって、この身の苦行は何ゆえかと垢と埃にまみれ血のにじむ我が姿をうちながめつつ、心の仏に問うてみた。

どこまで来たのであろうか、いつしか街道をはずれて来てしまったと気が付いてみれば、血にぬれた、かねのわらじはすりきれ、すがり来た、かねの杖は短くなって、

見よ、目の前には水の色も怪し気な大沼が、静寂として水面には飛びかう虫けらもなく、地の底から湧きいずるか、時折ぶつぶつと泡が立つだけの、身の毛もよだつ悪気に満ちて静まりかえっているではないか。小坊主は愕然として、ここが己れの住処なるかとうちながめて息を呑んだ。その時、後の木立の中から、「道にまよいなされたか、御坊様、見れば旅の途中のようじゃ。悪い事は言わん、早く立ち去りなされ。この大沼には大蛇が住むと言われている所じゃ。誰も近寄る者としてないこの沼に、何の因果か気の毒に、早く上って来なされ。」と言いつつ、自らも恐ろし気に急いで姿を消してしまった。しかし、小坊主は思った。ここが己れの住処と定められているからには、大蛇が住むと言われようが、立ち去るわけにはゆくまい。長い間、肌身離さず大事に守って来た、和尚様の授けてくださったこの書き物を使う時こそ、今をおいてほかにはあるまいと、あたりの静けさを打ち破って天にも届けと経を読みつつ、沼のまん中めがけて水中深く沈み行けと力まかせに投げ入れた。

すると、たちまちにして一天にわかには搔き曇り、風が雲を呼ぶのか、雲が雨を呼んだか、重なり合う黒雲は天を覆いつくし、あたりは漆黒の闇となった。雨はさながら、岩の頂きから大地を打つ大滝のごとく飛沫をあげて、雷は天地をゆるがし、東の間の稲光が地上をなめるように這って大地を昭らし出すと、見よ、沼の水は今や津波のようにふくれ上がり、大波となってあたりを噛みつつ、水柱となって天をつくその中に、姿も恐ろしい一匹の大竜がのたうちまわりながら、一陣の黒雲に乗って空を翔る姿があった。

時が来て、あたりが元の静けさにもどった時、沼は満々と水をたたえた美しく大きな湖となっていた。これが今の十和田湖なのだと伝う。そして小坊主は湖に暮らす主となった。経文の力でここを追われる身となった元の主こそ、彼の豊間根で兄弟の分までも喰って大竜となった、八郎太郎の変わり果てた姿であった。八郎太郎は安住の地を求めてまたもや空を駆け、現在の八郎潟の主になった。だが、八郎潟は深い所ばかりではなく浅瀬が多かった。やがて人々はこの浅瀬を利用して、田を起し米を作るようになったから、またもや狭くなって来た。大きな体をもてあました八郎太郎は、広い住処を求めて川を下り、とうとう海へ出た。日本海を見渡す海原で大小さまざまな魚を食い放題、どんどん喰っているうちに身体はまたまた大きくなってしまったが、いつも思うのは生れ里や八郎潟で、日本海の波の間に間に見える陸の姿を恋しがったが、この身体を入れる所は陸にはもはやないものと、見果てぬ夢と思って暮らしたのか、ある時、イタコが神下しをして手を合わせた折りに、この大竜が現れ、帰りたいたいと願ったというが、そのあとは誰にも分からない。どっとはらい

「飯を食わない嫁っこ」

昔、ある所に、ずいぶん吝嗇（けち）なかか様があった。このかかさまには一人の息子がいて、そろそろ嫁こをもらう年頃になった。

そこで、かかさまは、嫁さがしに出かけた。行く所、会う人ごと、「仕事が何でも出来て、飯を食わねえ嫁こがほしい。」とふれ歩いた。人々は顔を見合せ、「可愛い娘、

そんな所へ、誰が嫁になんぞくれてやるものか。」と言い合った。そんな風だったから、いつまでたっても嫁の来手（きて）はなく、息子は母親と二人暮らしをしておった。

そんな、ある雨がしょぼしょぼと降る、だいぶ夜も更けた夜中、誰かが戸口に立って板戸をたたく音に目がさめた。一体、今時分、誰であろうといぶかしみながら戸を開けると、そこには雨の中、奇妙にも蓑笠も着けず全身ずぶぬれの女が、髪から滴をぼたぼたとしたたせながら立っているではないか。近在では見た事もない女だったので、二人が不思議にして何用かと尋ねると、「おらあ、この家の嫁こにしてもらいたくて来た。」と言う。かかさまは女を見上げ見下ろししながら、この家の嫁こになるにはこれこれこういう訳であるが、それでもよがらば、と言うと、女はそれでもよいと答えた。そんならばと言うことで、その夜から女は嫁としてこの家で暮らすことになった。

さて、次の日から、その女の稼ぐごど稼ぐごど、ほんとに何も食わず飲まずで、ただひたすら物も言わずに働き続けた。かかさまも息子も小踊りして喜んだ。願ってもないもんだ。こんなにも早ばやと、この家に向いた嫁こが来てくれるとは、なんとら嬉しい、これも神の引き合せ、ありがだす、ありがだす、と神や仏などついぞ思い出もしない暮らしであったのに、頭の上で手を合わせ、来る日も来る日も機嫌が良かった。

しかし、そのうちに不思議なことが起きた。米櫃の米が盗人も来た風もないのに、一夜の内に減ってしまった。そうでなくても、けちなかかさま、米の上には、いつもきっちりと自分の手形を残し、いっさい誰にも手もふれさせないのに、朝起きて見ると手形なんぞどこにもなく、ずずん、ずずんと米は減って行くばかりだ。とうとう、かかさまは、今夜こそ何者かつきとめてくれると物かげにひそんで、夜の深まるのを待っていた。夜も更けて物音とともに台所に立ったのは、何と働き者の嫁であった。嫁は、やがて大釜で飯炊きと始まった。飯が出来ると大っきなむすびを山ほど作り、にまにまと笑いながら、束ねた髪をふりほどくと、頭のとっぺんには大きな口があって、ぱっくりとひらいたその中に、山に積んだ大きなむすびを次から次へと投げ入れた。

物陰からその様子をすっかり見ていたかかさまは、おら家の嫁こは化け物だったのか、とぶったまげて歯の根も合わず、驚きのあまり物音をたててしまった。その音に気付いた化け物は恐ろしい顔で向きなおった。かかさまは、恐ろしさに振り返ることも出来ず、一目散に外に向かってあてもなく逃げ出した。どこまでも追いかけて来る化け物は、いつしか大きな「ふるだ」（がまがえる）に変わっていた。無我夢中で逃げているうちに、気が付けば目の前は大沼だった。前には沼、後には化け物と追いつめられたかかさまは、沼のまわりに生えているヨモギとショウブの茂みの中へ小さくなって身を寄せていると、化け物には、かかさまが見えないのか、そのまま沼の中へ入って行き、それきり上って来なかった。この時、かかさまが身を隠したヨモギとショウブを魔よけに使い暮らし、今日でも五月五日はショウブ湯に入り、門や窓や戸口などにこの二品をさして魔よけにする習わしが残っているのだと伝う。

「獵師と化け物」

昔、獵師の持物の一つに背負い縄があった。この縄は「さずなゑ（結界縄）」と呼ばれたそうだ。三尋、四尋、というように、きっちりと測って用意するものだ。半端など入れてはならない。

ある時、獵師が神棚に向かって手を合わせ、何とぞ今日も良い獲物にあたれますように、大物千頭小物千匹、授け給え叶え給えと祈って、炒り豆を食糧に奥山へと獲物を追った。そのうちに日は暮れかかり、獵師は山ふところを一夜の宿と心に決めた。

古老に伝えられた通り、獵師は腰に下げたさずなゑをほどくと、ふた抱えしても余りあるほどの巨木を見上げ、今夜一夜守り給えと心の内に祈り、樹の回りに縄をはりめぐらした。さずなゑとは、山の獣には、「おまえを撃ちとって、この縄をかけて背負って帰るぞ。」との意味をこめて腰に下げ、山中で夜を明かす時は、立樹の回りにこの縄をはり、樹木にも垂れ、前には火を燃やしながら夜明けを待つ大事な品、心せい。この縄の内側にはどんな魔性の生き物といえども入ることが出来ぬものなのだと、爺様に授かった命の綱なのだった。

あたりから枯木を集め、さらにあたりを見回し、つつじの柴を見つけては、折り集めて小脇に置き、どっかりと大樹の根元に腰を下した。やがて火はちょろちょろと燃えあがり、心の中をあたためた。炒り豆を飯代わりに樹にもたれて、昼間、山の峰を横っ飛びにかけて消えた鹿の、角のみごとさに想いを熱くしていると、どこからともなく樹立の陰から一人の女が現れ、なまめかしく笑いかけて、さずなゑのそばまで来ると、お前のそばに行って休みたいのに、この縄が邪魔をする、と立ちどまった。獵師が答えて言うには、これは俺の命の縄なのだ。そばに来たいと言うのなら、かがんですりぬけて来い、と言うと、それならば俺はここに座る、と縄の外側へ座った。これは「さどり」という山に住む人を喰らう化け物だった。二人は無言で縄の内と外で相対し、夜は更けて行く。

獵師は、時おり横に積んだ枯木を火にくべながら、つつじの生柴を折っては火に投げ入れた。折ってはくべ、くべては折るうちに、つつじの小枝は折った折り口から細い柴の破片が、一瞬にして化物の目につきささった。何気なく柴を折っているものと思っていたが、お前の本当の狙いはこれであったのか。今夜はお前の勝ちよ。これだけは俺も悟りかねた。と言って姿を消し、獵師はあやうい命をつなぐことが出来た。それだから、つつじの柴は人に向けて折るものでない。わるくすると人に怪我をさせてしまうことがあるものだ。どっとはらい。

「鯨山のカツラの樹」

鯨の山には、みごとなカツラの樹があった。幾重にも葉を広げ、巨木は並ぶものがない、惚れんばかりのみごとさで、近在で知らぬ人はなかった。その樹が、どこの家材となるのか、伐り出されることになった。やっとの事で伐り倒してはみたものの、不思議なことに丸太になったその先は、引いても押してもぴくりとも動かなかった。

人々は途方に暮れて神だのみとなった。そして、やっとのことで山道をそろりそろりと縄をかけて引きながら、どこまで来た時であったのか、丸太は勝手に動き出し、あれよと見る間に見送る男達を尻目に、山をものすごい勢いで下ると、行くも行ったり、浦の浜の沼へ、へえってしまった。

ずぶずぶと沼深くしずんだ丸太は、それきり浮いては来なかった。人々は、「なんぼなんでも、浦の浜まで行くわけがねえ。あのカツラの木は、本当は生き物で大蛇の生まれ変わりだったのでねえか。」と噂となり、「ありゃあ、たぶん浦の浜の主になったんだべ。」と語り合ったというが、ついにこの巨木は浦の浜の沼から上ることはなかったそうだ。

「人間にだまされたキツネ」

ある村の男が、隣村へ行った帰り、暗い夜道をほろ酔い機嫌で歩いていた。ちょうちんを持って行くようにと、訪ねた家の嬢さんにもすすめられたが、男は、「何、夜道とは言え、月ももうじき昇るし、化け物が出るでもあるまい。」と笑い飛ばして、夜道を帰途についた。山の峠を越えると村の灯りも見えてきた。やがて村はずれの地蔵のそばまで来ると、地蔵の裏で何やら、ぼしょぼしょと話し声がした。誰かと思ってそっと覗いて見ると、二匹のキツネが何やら話しをしている。男は地蔵のそばに隠れてこっそり立ち聞きをした。

北「おや、そこへ行くのは、やっぱり南のキツネどんでねえのがい。」

南「そうだが……。そう言うおめえさんは、ありゃあ、北のキツネどんでねえが。今頃どごさ行ぐどごでえす。」

北「いやいや、うまい話こがあるもんでな、おめえもなじょだべど思ってな、さそいに来てみだあのよ。」

南「何の話こだあのさ、俺にも聞かせでけろぞ。」

北「あのな、となりの町でな、明日、馬のお競（せ）りがあるんだどよ。それでな、俺あ、おめえを誘ってな、二人して銭もうげすべえど思っただのさ。」

南「ふん、ふん、それあいい、それでさ。」

北「おめえ馬に化げろ、俺あ人間に化げっからよ。そうしてな、お競りさ行ぐべしよ。おめえ、ひとりっぱな馬こに化げでけろ。俺あ、そしたら高値で売りたいぐっからよ。」

南「分かった。分かった。うんと名馬に化げっからな。」

地蔵のかげでそれを聞いてた男が喜んだ。よしそれなら、北のキツネのあとをつけ穴に蓋をしてしまえ。明日になったら、この俺さまが人間に化けたふりをしてやるべえ。売った銭こは、みんな俺の丸儲け、と胸の内に思っただからたまらない。やがて別れる二匹のキツネ、北のキツネの後をこっそりつけた。そうとは知らない北のキツネは、明日のことを思えば楽しくて、銭こはなんぼになるか、俺あどんな男に化けべえか、南のキツネがりっぱな馬こに化げればいいかと、そればかり気にするもんだから、人間に後をつけられているなんざあ、つゆほども知らない。そうして着いた北のキツ

ネの穴は、ちょうどいいあんばいにすぐ上に大っきな岩のような石があった。穴に入ったキツネを見計らって、男は遠まわりにまわって大石の上手に立つと、両手にぺっぺっつばをはき、物も言わずに満身の力をこめて、やっとのことで大石を転がして、すっかり穴をふさいでしまった。

さて、次の日、南のキツネの所へ行くと男は、
男「おい、早くせえ、日は昇るぞ、遅ぐなんがよ。」

南のキツネは顔を出し、
南「ありゃあ早えごど、俺あまあだ仕度が出来でねえがよ。よしよし、そんたら早えごど化げっからよ。」と言いながら、あつと言う間にりっぱな馬こに化げて出て来て、男を見ると、

南「おめえ、大したうまぐ化げで来たもんだなみす。どっから見でも人間だ。声まで変わった。」と、しきりに感心するのを笑いもせず、

男「いいんや、おめえも大したりっぱな馬こになってよ、これなら銭こになるぞ。」とうそぶいて、二人連れだってお競りに出かけた。

競りに行くと人間の目には馬でも、動物の目にはキツネに見えるから、犬は騒ぎまわるし馬は鼻息もあらく落着かないから、ますますキツネの化けた馬は名馬に見える。それから競りが始まって、思っていたとおりの馬は大そういい値で売れ、男は大金を懐にほくほく顔で家路についた。売られた馬も、夜中すぎ、元のキツネになって、これもまた何も知らず、道すがら、「北のキツネどん、半分銭こをもらわにゃならん。あれほどの銭になって、これで酒も油揚も買えるぞ。」と思うと、知らず知らずに足はひとりで急ぎがちになる。とうとう息せききって北のキツネの住処に来てみると、穴の中で北のキツネがもがいていた。

南「おい、キツネどん。何のまねだべ。俺あ、銭こをもらいに来た。」と言う。

北「何もかにもねえもんだ。上から大石が落ちで来てよ、出られなくなつてな、助けでけろ。」と泣き声である。不思議にして、

南「そんたらおめえ、今日はお競りさば行がながったのが。」と慌てた。

北「行くもなにも、見でけろ、この通りだ。なじょうにして行くのよ。」

南「そんたらあの者は一体誰だったんだべ」と、そこで初めて二匹は誰がにたぐばられた（だまされた）事に気が付いた。だけど、もうあとのまつりであった。どつとはらい。

「大槌のとりあげ婆様」

その昔、大槌には大した上手なとりあげ婆様がおつてな、何十人もの赤子を無事にとりあげ、大そう近在の人々に有難がられていたそうだ。婆様の手にかかればどんな難産でも助けてもらえると、その評判は近在に知れ渡っておった。ある夜、いきなり戸をたたく者があった。出て見れば、見たこともない男が二人、息をきらせて戸口に立っていた。

「おぼんでござんす、夜道申し訳ねえども、お願い申しやんす。おらの嬢が難儀し

てで、見るのもかわいそうなようだ。」とはずむ息の下から、やっとの事でそれだけ言うと、何んぽか急いで来たものか、額の汗も流れるに任せて、肩であらい息をつきつき頭を下げた。

「それあ気の毒だが、どっから来てえみす。」と言うと、「おれあ、浪板の者でござんす。」ということで、さっそく仕度をすると、二人の男に案内されて夜道を大槌から浪板へ急いだ。道中浜を見れば、波が静かに寄せ返す浜辺は月の光がきらめいて、潮は遠くまでひいている様子、この分ではもうじきに潮はあげ潮になると、とりあげ婆様は胸の内につぶやいた。さっきの男がしきりに、「申し訳ねえ、遠い所をほんとに申し訳ねえ。」と、何度も申し訳をするのを首をふり、役に立てればそれで良いのだ、といいつつ、「なに、なに、案ずるでねえ。おらのことはかまわねえでいいども、それより産婦がなじょうなあんべえだが、それが心配だがまあ。」と案じながら道を急いだ。

男に案内されて行って見ると、なるほど、細面のめんこい女子が、額には玉のような汗をかべて苦しんでいる。とりあげ婆様を見ると、着物の裾に取りすがり、息も絶え絶えに消え入るような声で。「助けて下しゃんせ。おらあ、まだ死にたぐねえ。おらも、このわらしも、まだ死にたぐねえ。」とうわ言のように繰り返す。いつから苦しんでいるのか、見ればほんに難産だ。初産とはいえ気の毒な苦しみようであった。

それを襷がけをしながら、「女子に産はつぎものでえす。わらすが生(な)せながらば、なじよにする。これ、気い確かにもってがんばるもんでえす。よしよし、おらが今、見でやっからな。今すぐ終わる。もう少しだ。」と励ましつ、「何して、こんねえになるまで来ながった。」と眼をつりあげ、うろたえる男に、「それ、そごの男、湯は沸いだが。湯う、いっぺえ沸がせ。」と指図をして、気合も烈しく、産婦と一緒にって全身汗だくになりながら、励まし、励まし、やっとなんとか首尾よく母も子も一命をとりとめ、無事に終わった時は、夜はまだ明けてはいなかった。男は何度も頭を下げて有り難がり、遠い所を来てもらって本当にすまなかった、おかげで二人とも無事だった、と喜ぶのであった。いい仕事をしたあとの気持の良さに自らも浸りながら、いやいやと手をふって、「これも仕事でな、まずは二人とも無事でよがった。今だから言うがな、来て見だあ時は、これあ、むずがしいど思ったが。」と笑えば、男は何もないと、恥ずかしげにダンゴをみやげに、百円は今夜のお礼だと包んでくれ、途中まで送ってくれた。

「何んぽなんでも、こんねえに貰うんでながったが。よけいに貰いすぎだ。」と言うとりあげ婆様に、男は、まずいいがら、とっといてくれ、と押し戻し、別れぎわには深々と頭を下げ、お礼の言いようもない風であった。大槌の我が家近くで別れ、家に帰って一息ついて、夜が明けるのももうすぐと、着物のまま横になって仮り寝をした。

ところが朝になって驚いた。みやげにもらったダンゴは馬のクソではないか。あわてて懐の銭を出して見た。銭は確かに人間の使う銭であった。ゆんべの産婦は人間ではなかったのかと胸の内に、来た道をとって返した。しかし昨夜の家はどこにもなく、昨夜、子が産まれた家も無かった。だが確かに百円は本物の銭であった。この話を聞くと人々は、遠路夜道を来てくれたとりあげ婆様の心に感じ入り、キツネがせめてものお礼をしたのではないかと、とりあげ婆様の評判はますます高かったという事ことだ。

「船越は早川のおくりキツネ」

早川から小谷鳥へ越える細い山道があったという。今もあるかどうかは分からないが、そこに、その昔、一匹のキツネが住んでいた。男が通れば女子の声で、女子が通れば男の声で、なんともなまめかしく呼びかけ、つい立ち止まりたくなるものであった。そうでなくても峠越えはさみしいものだから、つい一声にほだされて、一人の時など誰か来たかとふとふりかえり、誰もいない時の薄気味の悪いさみしさは、夜更けなど、背筋が寒いものだった。それを気丈に聞きながして、立ちどまることなく歩けば、後から追いかけたり、行く先のすぐ前に何か大きな物音がしたり、時にはすすり泣く声になったり、この道を通る人々は大そうさみしく思うものであったと。そして、どんなことにも立ち止まることなく、ずんずん歩いて行けば、後で大きな物音がして、それっきりあとが無いものであったという。

「大沢は六角塔のおくりキツネ」

関谷や関口の者が、大沢に浜の仕事や親戚などに行き、あがり酒をふるまわれて、みやげに今日獲れた魚などをもらって通れば、六角塔のあたりから必ず「わごう」（キツネ）に後をつけられるものだった。ある時、関口の男がふるまい酒にほろ酔いきげんで、みやげの魚をぶらさげて六角塔にさしかかったら、案の定、後になったり先になったり、あまりうるさいので、「ねえさ、おめえなんとに魚あとられでたまっかい。」と言いながらどんどん行くと、松原の林の中から可愛い猫が出て来てしきりに足にからみつく。

「どらどら、魚あ、おめえさもけられねえがよ、すぐそごらにあキツネがいだっけぞ。とってかれねえうちに、家さ行げ。」などと声をかけ、通りすぎようとするれば、なおもからみつき、後になったり先になったりしながらついて来る。やがて金木林のあたりまで来ると、街道端に座って、ここから先へは行けないと言いたげに先へ行く男を見送った。

家に帰って魚を見ると、いつの間にやられたのか、魚の頭や尾がcaじられてなくなっていた。「めんこい猫だど思っていたば、わごうの奴あ、だましてけかったのか。」と頭をかけば、村の衆は笑って、「それあ、六角塔のおくりキツネに送られて来たあのでねえのがい。」と言い合うものだったとき。

「あぶなかつたざっこ」

関口の奥で炭焼きをしている父親が、明け方、山へ行きしな、息子に、「明日は日曜日だ。今日、学校が終わったら、今夜は山さ泊るようにあがって来い。」と言って山へ

向かった。十才の言われた息子は、学校帰りの街道を飛んで帰って来た。そして昼飯を急いでかきこむと、手製の釣竿を片手に父親の手伝いに駆け出した。炭焼小屋まではかなりある。大人が歩いて二時間もかかろうかと思う道程だ。急がなければ釣っどころか、ぐずぐずしていたら日も暮れる。

それでも、登って行く沢の途中でざっこを数匹、柳の小枝にあごを通してつなぎ、おさ橋（板の橋）を渡り、キンマ（木そり）の通るたんば木（そりを転がすコロ）の並んだ山道を、魚を片手に息子は嬉しくなって、すってでんぎ（ケンケン）をして飛んでみた。そしてひょいと顔を上げたら、たんば木の細い丸棒木の続く道の上で、鳩がぱさぱさと飛べない風でもがいていた。「鷹おどしだ！」と、とっさに思って、たんば木の上にざっこを置いて駆け寄った。「ありゃありゃ、やぶの中さへえってしまう。」と慌てたその時だった。「にゃあお。」と一声、猫が啼いた。ふりかえれば一匹の猫が、ざっこの方へ進んで行くところであった。「ありゃ、猫にざっこをやられる。」と、今度は慌ててざっこの方へ走り寄った。魚を通した柳の小枝をつかんで立ち上った時は、いつのまにか猫も鳩も消えて、あたりはしんと音も無かった。「ありゃあ、キツネにやられるどごだった。」と一人言を言いながら、父親の待つ小川沢の上ヶ岩の炭焼小屋まで一息に息も荒く駆け登った。

「漣磯のめっこタヌキ」

昔、漣磯の山の中に、タヌキが住んでいて、通る人を、夜毎、日毎、だましたり呼びとめたりして、大そうみんなが気味が悪い思いをしておったと。

ある時、漣磯に住んでいる爺様が、日暮れまでにあ帰りたいものと、大浦へと山道を急いでいた。その途中、一匹のタヌキに出会い、何言うもなく声をかけた。「おめえ、ここにいだのが。あんまりいはずらあ、すんなよ、終いにあ殺されるもんだがよ。」

ところで、この爺様は、何ゆえか左目が潰れためっこだった。タヌキは細い道は大浦へと下っていく爺様を見送っていたが、とんぼ返りを一つ、あつというまに、今、出合ったばかりの爺様に化けた。なんとも見事なこと、どこもかしこも爺様にうり二つ、ところがこのタヌキ、たった一つとんだ間違いをしてしまった。向かい合っただけのじいさまの目は、悪い方が左だったので、そこが畜生の浅知恵、向かい合ったそのまんま、つぶった片目はじいさまとは反対の右目だった。そんな落度には気付くはずもなく、今日もうまく化けたわいとほくそ笑むと、右目をつぶったそのまんま、留守居をしているばあさんの前に立った。

「おい、ばあさま、今来てえす。」と言われて、「何んたら早えごど」と思いながら、手仕事の手を休めて顔をあげておどろいた。じいさまの片目は、左ではなく右目がつぶれているではないか。一目見るなり、こりゃあタヌキの奴だなと見やぶったが、何食わぬ素振りで機嫌よく出迎えた。「ざあざあ、そんたら、いつものくせで、かますさへえんますべえ。」とばあさんが言うと、タヌキの化けた爺様も機嫌よく、「おうさ、おうさ。」と言いつつ立っている。ばあさんは、そばにあった、たあらがますの口を大きく開けてやると、「それ、へえっとごぜえ」と一声かけると、タヌキは間のぬけた

ことに、のそのそとかますの中にへえってしまった。

「そんだったら、はあ寝どごぜえ。」と言うと、そのまんま寝てしまった。ばあさんは、ここぞとばかり、かますの口をぎりぎり縄で縛ると、引きずって行って唐臼場のとり木にぶら下げた。やがて日も暮れ、ほどなくして本物のじいさまが、「ばあさま、今けえったがよ。」と、左目の不自由な姿を見せると、ばあさんは、「爺様だらけだあなあ。」と笑うのを見て、爺様はわけが分からず、「ばかたぐれが。」と怒っている。そんなじいさまの顔をながめながら、「とり木さも一人、爺様が包まってぶら下がっているが。」と言われて、何のことやら合点がいった。

草鞋をぬぎながら、「どらどら、その爺様あ、ここさ連れで来う。」と言いざま、婆さんと二人して唐臼場へ行くと、とり木から外して、二人がかりでタヌキの入ったかますを囲炉裏の上の火げだの棧にぶら下げた。そうして囲炉裏に生木混じりの煙ばかり出る木を、どかんどかんとくべたものだから、煙はもくもくと火げだから吊り下ったかますを、タヌキごといぶしたからたまったものではない。爺様はどっかりと座ると、キセルにきざみ煙草を詰め、気持よし気に吸いながら、ながながとひとくさり説教をしてから、かますの口を開けた。タヌキは苦しまぎれに声もとぎれとぎれに、「堪忍してけどごぜえ」。煙にむせんで、涙もみずっぱなもたらだと流しながら許しを乞うた。それからというもの、漣磯のタヌキのいたずらはばたりと聞かれることがなかったという。どっとはらい！

「木曾のたぬき」

木曾の山奥に杣人が入った。始めに木を一本切り倒し、その切株に、御幣を供え、赤い魚と御神酒あげをして、衿元を正して手を合せ、「今日から、この山に入ります。手足に怪我の無いように、息災で仕事が出来ますように、お守り下さい。」と、頭から順番に山の神に祈りを捧げ、その日のうちに細い立ち木を切り集め、茅を刈り、蓆を下げて小屋をかけ、夕方までには寝泊まりをする所をつくり、その夜は山の神に供えた赤い魚を吸物に、御神酒を酌み交わして山入れのささやかな祝をした。

明るる日から、日の出から日の入りまで、粒揃いの若者達は一心不乱に来る日も来る日も、力まかせに鉞をふり下し、鋸を引き、名木も巨木も斧をあてられてぶるぶるとふるえ、大地に倒れるたびに木霊は山々に響き渡った。髪は伸び、髭は顔を被い、さしもの強靱な若者達も日々の仕事に疲れ果て、野郎ばかりのむさい山暮らしに、次第に血が騒ぎ、女の色香も恋しくなり始めた。

そんなある日の夕暮、一日の仕事を終えて小屋に帰って来ると、山の中の小屋の戸口に、実に美しい若い女が立っているではないか。若者達は喜んで小屋の中に招き入れ、飯もそぞろに、俺のそばに來い、いや俺の横に座れと、一人の女をとり合い呼び合って、女に戯れじゃれ合ったが、その中の一人の若者はものも言わずに飯をかきこむと、女なんぞには目もくれず、仲間の笑う声もすておいて相手にせず、土間に下りて刃物を研ぎ始めた。それを見ると女は顔を曇らせ、「兄さん、そんな危ないものは外に出して、こっちに來て。」としきりに気にするが、そんな声には耳もかさず、砥石に

あてた刃物をゆっくり動かす手をとめなかった。

やがて夜も更けて、男達が床に着いた傍らに女も横になった。その頃には刃物研ぎも終わり、入口に下げた蓆を片手でかかげながら、今しがた研ぎ終えたばかりの鉞を手を外に出た。月の輝きを受け、鉞は冴えて光った。若者は片手に鉞の柄をしっかりと握り、ぴたりと入口の脇に身を寄せ、中の様子を身動きもせずに見つめた。囲炉裏の火も消えかけ、小屋の中はどこからともなくさし入む月の光に、ぼんやりと仲間の寝姿をながめた。どのくらい経った頃であろう、女は寝静まった男達の間を回りながら、一人一人に顔を近づけ何かしている。眼を凝らして見ていると、恐ろしや男達の舌を抜いて喰らっているではないか。たちまちの内に全部平らげると、舌なめずりをしながら戸口に向かって来る様子に、若者は戸口で息を殺して頭上にかまえた鉞をにぎりしめて、「今こそ思い知れ、仲間のかたき。」と言いざま、出て来た女に振り下ろし、一瞬のうちに美しい女を切り殺してしまった。

うら若い女の朱に染まって転がる姿をながめるにつけ、舌を抜かれて息もない姿の並ぶ様を見渡して身の毛もよだち、せめてもの心の支えにと囲炉裏にくべたかがり火にゆらめくは実に恐ろしい有様であった。若者はひたすら夜明けを待った。やがて夜は白み、天道様は山の頂を照り出すと、若者は血に濡れた女を引きずり出すと小屋の前にうち捨てた。天道様はさらに高くあたりを照らし、無造作に転がる女の身体にもさし始めた。すると不思議にも、女はいつしか一匹の古狸となって姿をあらわにした。

その姿をながめつつ、若者は家を出る時に爺様に言われた言葉を思い出していた。山奥では、まよい魔神のものが出る時があるものだから、油断するものでない。くれぐれも気を付けるように、と言われたのであった。女が本当の人間でないことを悟った若者だけが、生きて山を下ることが出来たという。

「さるのひと真似」

昔は、山田の山ん中にも、何処へ行っても猿もいれば、いのししも、日本鹿も、かわうそも、おいの（狼）も住んでいざど。そんな昔の話だど聞いた。農民は奥山まで入って焼畑を作り暮らした。樹を切り野焼をして、せっかく蒔いた小豆や蕎麦も実を結ばないうちに、野山に住んでいる生き物に食われて荒されて困るので、山ん中にししぼい小屋（鹿追い小屋）をかけて作物を守り育てておったそうだ。小屋のまわりに出没する猿は、樹木の枝に座ったりぶら下がったりして人間達のすることをながめ、キセルで煙草を吸えば、木の枝などを拾って口にくわえ、人が草取りをすれば、仕事の真似をしては喜んでいた。分けても、ちょっとのすきにも小屋の中まで入っていたずら放題なのには、ほとほと手をやき、皆、たいへん困っていた。

ある時、小屋の外の陽あたりで伸びほうけた髭を剃っていると、木の枝に座って、その様をじっとながめていた猿は、髭剃りの真似を始めた。男はしたり顔で猿によく見えるように、手に持った剃刀を大げさにふりまわし顔にあててみたり、喉にあててこすったり、手首にあててこすったり、体のそこかしこをこするまねをして見せると、木の上で猿も人の真似をしてしきりにやっている。しばらくして、座った所に剃刀を

そのままにして畑仕事に出かた。人の気配のなくなった小屋の前で、案の定、猿はいつもの悪戯心を出して剃刀を手にとると、さっき真似た通りやったものであったらしく、自分の胸や首をめった切りにして、その場所に死んでいたと伝う。

「さるを捕るにあ焼酎瓶がいいもんだ」

猿という動物は利口なようでいて、馬鹿なんだと伝う。一度手に握った物は絶対はなさないのだそうだ。だから、猿を捕まえる時にあ、鉄砲なんぞはなくても捕れる。昔は、焼酎は大きい瓶に入っておった。この瓶の口は体のわりには小さなもんでな、この瓶に、山でとった飴っこ（蜂蜜）なんとは最高にいい。この二品があつたら、まず来たもんだ。この瓶に、飴っこをぬりたぐった細くて丈夫な枝こを何本か入れて隠れる。猿はだんだん近づいて来て、中にへえってるものが、うんめえかまりがしてるのに気が付くと、すぐ手え入れで握るもんだ。そこさ、人は、すぐ姿あ見せで寄って行く。猿の奴あ、たまげだあやら、あわあくうやら、逃げるにも逃げられねえ、手は瓶の中の飴っこの枝こを握ったまんまだからさ、枝こは長いもんだから、ぺんこな口からは横になっては上って来ない。放せばよさそうなもんだが、猿は馬鹿だから枝こを握った手はそのままに、抜けない抜けないと泣きながら、あたりをぴよんぴよん飛びはねるが、焼酎瓶は重たいから動がねえもんだ。そのうちに人間に頭あスコンとただがれで、くたばってしまうのさ。おめえ、このやり方が、猿捕りにあ、馬鹿馬鹿しいようだが一番だったとよ。

「月夜に踊ったねこ」 関谷 さとう とらまつ 92才 42年死去

うつつぐすう二毛猫がいだんだあど。としより猫だったが、としよりきわ（年のとり方）がいいどごなの、食いもんがいいのが、毛並も、そのいろっぺえも、どごが並外れて、うつつぐすう猫だったど。その家のわらしが、いっつもめんこがり、この猫を相手に遊んでいだったんだあど。ある時な、何い思ったのが、わらしは、この猫さ、すっぽうかぶり（頬被り）をさせでな、両手え取って踊りこを踊らせでいだった。そのかっこうがなんと、これまた、おもっせえというが、おっかしねえどいうが、見でだ者あ、みんなして手えたでえで笑った。そんだあども、あるばんげに、この猫が化げで出た。そのかっこうは、わらしがさせだあ、そのまんま、すっぽうかぶりをして、まんまるこい月にうがれで、踊りこを踊り出した。おめえも、猫が手拭いですっぽうかぶりをして、踊りを踊ってるのを考えでもみどごぜえ、こっちゃんみすくて（うすらさみしくて）、きびがわりいもんでえす。二本足で猫が踊りこを踊って、手えあげ、足あげしてたら、便所さも行げねえべ。そんだがら、猫さ踊りい踊らせねえもんでえす。化げで出るどいう話した。

「かれいにされたせがれ」

昔、ある所に、親をめぬけにたてて（疎まれて）、どうしようもないせがれがあった。ささいな事でも親をなじり、少しもやさしい思いやりのかけらもなく、あまりにも情ないせがれに、見る者はおもわず顔をそむけるほどであった。親はそんなせがれにいつも気をつかい、顔色をうかがいつ、小さくなっているのが常であった。いつも、いつも、横目でにらみつけては、口ぎたなく罵るせがれを、とうとう見かねた神様は、魚の姿に変えて海へ放してしまった。それでも、まだまだにらんでいたの、終いには目が一つ所に寄ってしまい、体もあんなに平らたくなってしまうのだという。子供が親に叱られて、ぶっちょ面をして横目でにらんだりしているのを見られたりすると、よく言われたもんだ。「そんなあまなぐでにらんでろ、今に神様に、かれいにされでしまって、まなぐがくつついてしまうもんだがよ」と。

「なまこときんこのけんか」

ある時、海に住む、きんことなまこがけんかをした。「お前より、おらの方がずっとめんこい。」と片方が言えば、片方も負けじと、「おめえより、おらの方がもったきれいだ。」と自慢のしほうだいで、二匹ともあんまりじょっぱるもんだから、仲々勝負がつかなかった。すると、きんこは、やおら浜辺の小砂にくるまって、すつとんきょうな声をはりあげ、「きな粉もちいい。」と叫んで得意になった。それを見たなまこも、負けるもんかと、磯に片枝のぼした木の枝にぶら下って、きいろい声で、「フジの花あぁ。」と叫んだ。そうして、この勝負は、なまこの勝ちとなったんだと。どっとはらい。

「わらじかの敵討ち」

北の海には「わらじか」という細長い魚が住んでいる。薄塩をして干物にするとうまいと漁師さんは言う。だけどこの魚、食われた恨みを子でかえすのだそうだ。我が身は食われても、今に見ろ、喰らったお前の命も無いものぞ、と言ひ残し、この魚の卵を食べれば、たちまち七転八倒の苦しみにもだえ、やがては命も失ってしまうのだと伝う。親のかたきを子でとってやると言ひ残したゆえ、決してこの魚の卵を食べてはならないと言ひ残す。

「ムカデの使い」

うんと昔、お釈迦様が、加減が悪く医者と呼ばなければならなくなった。そば近くにおる者達は、誰が良かろう、早い者、急いで行ける者と呼ば、と思案した。そのあげく、誰が言い出したか、ムカデが良かろう、奴は足が沢山有る、あの足で駆けたな

ら、どんな者もかなうまい。と言う事で、選ばれたのはムカデであった。これこれしかじか、急いで医者を呼んで来ておくれと願われて、ムカデは取る物も取りあえず、「それでは、行ってまいります。」と座を立った。ところが、いくら待っても医者は来ず、まわりの者はいらいらしながら、何をしておるのだと玄関まで来てびっくり。そこには、足の数に履くムカデの草鞋は、履いても履いても履き出さず(吐き終わらず)、汗だくの最中であった。

これには、皆、がっかり。これでは日が暮れてしまう。皆を集めて、一番先に来た者を使いに出せということになり、一番先に来たのは、鼠だった。その後を牛が来、また、その後を虎が来た。動物は次々と駆けて来た。その中に猫がいて、何を思ったか一番先に駆けつけた鼠を、いきなりとり喰らってしまった。しかし、鼠が早く着いたので、医者への迎えは鼠ということになって、別の鼠が使いに出され、急いで出発した。この時に集まった動物の順が、そのまま十二支となって猫は鼠を喰ってしまったゆえ、この順の中に入ることが出来なかった。この時集まった動物は十二匹だったゆえ、一年は十二ヶ月と定められたのだと伝う。んだとさ。

「もぐら、天下を盗りそこなう」

昔、モグラは少ししか明りが見えず、地上に住みながらも、ぎんぎらと照るお天道様をまぶしがっては、いつもよまいごとを言っておった。

「こうまぶしくては、世の中もゆっくり歩いてもおれん。あのお天道様さえなければ、この世の天下は俺達のもの。」といつも言っておった。そんなある日、モグラは仲間を集め、お天道様を射落とす計画をしておった。「明日の夜明け前、あの山の頂に登って行き、弓をつがえてお天道様が顔を出すのを待とうではないか。顔を見せたらすぐさま、俺が弓を射て、再びこの世の中へ顔を出せないようにしてくれる。」と、てぐすね引いていきまけば、そばにいる者達は、やんやんやの拍手で、頼む頼むと声をそろえ、もうすぐ俺達あ天下びとと歌って、酒盛りをして歌い踊った。

ところが、そのにぎやかさを、通りかかったカエルが物陰からそっと盗み聞いてたまげた。お天道様がこの世から無くなったなら、俺達あ生きてはいけない。こりゃ大変な事になると、さっそく神様に、これこれしかじか一大事が起きると駆けつけた。神様はそれを聞くと、たいへん怒ってモグラを引き出し、それほど太陽の光が嫌いなら、そなたは地下で暮らすがよかろうと申され、この時からモグラは地面の下を住処とするようになり、生きて一生お天道様を拝めぬ身の上となってしまった。

神様はカエルに向かって言うことには、「そなたのおかげで、この世の大事も、事も無くおさまった。礼を申すぞ。何なりとほしい物を申せ、叶えてやろう。」と言えば、カエルはかしこみながらも、おそれながらと申し上げた。「実は、私が産をする春の彼岸はまだまだ寒く、水は身を切るように冷とうござります。その冷たい水の中に身体を入れて、産をしなければならぬ我が身の辛さはたとえようもなく、定めとは思ひ暮らしては来ましたなれど、毎年毎年難儀を致しております。勝手な事を申すようで心苦しゅうございませうが、せめてこの辛さからお救い下さればありがたいことでご

ざります。」と平伏した。すると神様はうなずきつつ、それは難儀なことであった。叶えてつかわそうと快く申され、その時から春の彼岸の頃には、ぬくい日が二、三日続き、山ではカエルが産をするのだとさ。どっとはらい。

「びっきの心配」

春、田んぼでは仕事が始まり、水が田の中に入ると、とたんにびっきが一斉に騒がしくなる。月夜にも、雨降る夜も、ゲコゲコグエッグエツと朝まで鳴き通す。田に近い所に住んでいたりすると、なんたらうるさいびっきだと、つい言いたくなるもんだ。朝になって田の畦などに立って見ると、水の中には、そっちにも、こっちにも、ゆんべびっき達が寝ないで産んだ卵が水の中でゆらゆらとしている。産んだのだから安心してゆっくり休めば良いもんだけれど、びっきはそうはいかないのだそうだ。それから後の夜になっても、やっぱり夜毎にびっきは朝まで鳴いている。そのうちに水はぬるみ、やがて水の中は、孵ったげえらご（おたまじゃくし）でいっぱいになる。その頃には、またまた、びっきの声は一段と高くにぎやかになる。なんで鳴くかと昔の人はびっきに尋ねててみたという。するとびっきは、心配顔で、「俺の産んだ卵からかえったげえらごは、足も無ければ手も無い生き物だ。泳ぐ姿は俺の姿にあ似ていない。ひょっとしたら、鱒になるのか、鮭になるのか、思えば寝ても寝つかれず、心配のあまり鳴き明かす。」と言ったのだそうだ。そのうちに時が来て、げえらごの尾の付け根から後足が出て、やがては前足も出て来る頃には、びっきは不思議と鳴かなくなる。それはなぜかと尋ねたら、にっこり笑って、「まぎあまぎで（血筋は血筋で）、おっぺがもげだ。やっぱりびっきの子はびっきになった。これでやっと安堵した。」と言ったとき。どっとはらい。

「あしながばちと神様の思案」

その昔、地上に生きる者達は、皆、その生きざま、暮らしぶり、食物から身に付けるものまで、神々に伺いをたて、その通りに事を運んで生きていた。ある時、あしながばちが神様の御前に平伏して住まいについて伺った。

「神様、おらあ、どんな所さ巢をかければよござんすべえ。なにとぞ、いい知恵を授けて下しゃんせ。末代までも永らえたいものでござんす。」と申し出た。すると神様は、いつになくなま返事で、うなったきり腕組みをなされた。その心の内はこうであった。強い風のあたらぬ、ぬくい所、それでいて雨も防げる所なら、子孫は末代までも富み栄えるであろうが、この者が、次から次と子を増やしたのではたまらんなあ。ちょっとの事にも腹立ちまぎれに、誰れ彼れかまわずチクリチクリと、あの痛い針でさしまくるのを思えば、この者にはうかつにもものは言えぬぞ。あまりこの世に増えてもらっても困るではないか。

さてどうしたものか、と思案のあげく、「あのな、今年は大風が吹くと思ったら、細

い枝の先の方さ巢をかける。また、今年は大雨だと思った年は、地面近く木の根元あたりや藪の下あたりに巢をかける。そうすれば、万事お前の願いはうまくいくであろう。」とそわったそうだ（おっしゃったそうだ）。あしながばちは、いつもいつも、どんな者にも平等に答えて下さる神様に深く感謝して、御前をあとに喜び勇んで帰って行った。

その年から、あしながばちは、大風の時は木の枝の先あたりに、大雨が降る年は木の根元や藪の中に巢を作った。しかし、大風の中で枝先に作った巢はたいそうゆれて、終いにはふっとんで行方しれず、大雨の中では根元にかけた巢はいつまでも濡れて乾かず、中の幼虫はみんな腐って巢ごとだめになった。そんな中で、ほんの少しだけ運のよいものが細々とこの世に生き続け、やたらと増えることもなく、さりとて死に絶えることもないのだというんだとさ。

「ほいどうとようぎいぜみ」

ちょっと昔、ほいどうというものがいた。ほいどうとは、山田弁で乞食のことだった。乞食は風呂にも入らず、くる日もくる日も人の家の戸口を数えて、食べ物ももらいながら橋の下などを住家として、寒くなれば南の方へ、暑くなれば北の方へ流れて歩くのであった。着るものは、もとの色など見分けもつかず汚れきって、その肌は垢が三寸もたまっていると人々は笑った。ある春の陽気に、男のほいどうが一人、いい気分で街道を歩いていた。街道の両脇は大きな樹の木立だった。どこまでも続く樹木の中で、やわらかな春の日に、若葉の茂みで、ようぎいぜみが何十、何百と鳴いて、静かな山の街道も頭上に降る蟬時雨、そこを歩いて行くうち、ふと男は立ち止まってしょんべんをした。牛のしょんべんみたいに、だらだらと一物を出してしょんべんをしていると、蟬時雨はますますはげしく、ヨウギィヨウギィと鳴いた。男にはそれがだんだんオッキィオッキィと聞こえて来た。自分の一物をながめてやけ気味にほいどうは言った。「おお、大っきいべえが、何せ垢べえもよ（垢だけでもな）」。

「ひぐらし」

この草は、とても生命力が強く、草取りをして一つ所に積み上げておいても、そこからまた這い出して、茎は節々ごとに根を下ろしながら地面を這いまわる。ほとんど手をやいた人間は、いがなごと、これならば生えることは出来まいと、地上高く木の枝にひっかけた。するとひぐらしは、「いがな三百六十五日、風の吹かねえ日もねえべえ。風が吹いて地面に落ちたら、先祖をつなぐことも出来よう。」と言った。ほんだと、今度は河原の石の上に持って行ってうち捨てた。夏の日照の焼けるような熱さにも、草は笑って、また、「いがな雨の降らねえ日もながべえ。雨が降ったら河原の石も湿って来よう。そしたら根を張る日も来る。四十八節あるうちにゃあ、いがな一節ぐらいは根も出るべえ。」と高笑いした。とうとう人間は閉口した。ひぐらしはこの通り、

枯れたように見えていても、雨にぬれたりすると一節一節から、知らないうちに根が出て地にはびこるやっかいな草だと言われている。

「すぎなは地獄のかぎづけだ。」

すぎなの根は、ずっと土の下まで伸びている。いくら掘っても掘っても、きりが無い。誰が行って見て来たのかは知らないが、すぎなの根を掘り、たどりたどり行けば、ずっと深い深い所にある地獄まで行ってしまう。地獄では、すぎなの根の先に鉤を付けて、鍋をかけてものを煮るのだそう。

「まうるしの最後」

ある所に、大きなうるしの木があった。人間はこの木から、遠い昔よりその乳白色の樹液を精製して塗料を作った。この樹液が人間の身体につくと、大変やっかいな事に皮膚はただれて、そのかゆさ、苦しさはたとえようもなく辛いものだ。ある時、大きなうるしの木が伐り倒されることになった。木挽きは地面に座ってゆっくり鋸を入れた。樹は白い涙をこぼしながら叫んだ。「今に見ておれ、このかたきは、きつときつととってやる。この命は終わろうと、子は千本になって仇をしてやる」。その言葉通り、地下を這った根から、伐り株から、あたり一面数えきれないほどの若い芽が出た。それは何年刈っても刈っても出て来て、漆でも採らないかぎり無用の長物、薪にして囲炉裏にくべても、その煙にさえかぶれてひどい目に合うのだそう。

「野花と仏」

娘が早死にをした。親は若くして黄泉路に先立つ哀れを思い、涙にぬれて悶絶した。月日は暮れ、歳月は流れても、笑顔こぼれる娘盛りを逝った娘が忘れられずに、野に咲き匂う美しい花を見ると、あの娘に届けと心に祈りつ、涙ながらに仏にたむけた。そんなある年、イタコにたのんで娘を黄泉の国から呼んでもらったところ、愛しい娘が言う事には、いつも野に咲く花を手向けてくれるのは嬉しいけれど、今を盛りと咲き匂う花を手折るなら、若くして死んだ自分と同じではないか。それよりも、野辺に咲く花には主が無い。野にあるそのままの姿に手を合わせ、思う人に届けと願えば、必ず願いは叶うから、野に咲く花は野辺において咲かせてやってくれ。私への想いは何処からでも届くから、と涙ながらに語ったという。野辺に咲く花には主がない。それゆえ誰が採っても良いのだ、という意味の「主がない」のではないのだと言いつける。

「蚕豆（そらまめ）」

昔、妻に先立たれた男がいた。この男には娘がいて、母の亡きあと、よく父親の面倒をみて、まだ年端もいかないながら、片親だけのさみしさも胸の内に、いつしか二人暮らしにもなれて、つつましいながらもそれなりに心安らかに暮らしていた。まだどこかに幼顔の残る娘の、いじらしいまでの働きぶりは、家の中の掃除、洗濯、畑仕事と精を出し、ぐちも言わず父親の後へ回っては肩をもみ、布団を敷いては早く休めといたわってくれる心を、可愛い娘よと思うにつけ、早々と冥途へ下った女房が思い出されて、涙ながらに仏に向かって手を合わせずにはいられなかった。やがて世話する者があって、男は二度目の妻をむかえ、娘には母が出来た。純真無垢な、世の中の人の心の裏も表も知らない娘は、一も二もなく喜び、産みの親にやさしく愛された日々を思い出し、亡き母のやさしい笑顔を新しい母親に重ねては、母さん、母さんと慕うのであった。

しかし、母が出来た喜びもつかのまの幸せ、男にはいい女房だったか知れないが、娘には情のかけらも見せない意地の悪い女で、何かにつけて口うるさく娘をいじめ、その度に娘は父親にも言えず物陰にかくれては、声もなくしのび泣いては涙をふいて、それでもいじらしく堪え難い胸の内を耐え忍んでさみしく暮らしていた。朝から夕べの日は落ちるまで、気に入ってもらいたさに懸命に働くのに、笑顔の一つもやさしい言葉の一つももらうことなく、それどころか女房の言葉にほだされて、父親までが、あろうことか娘を悪しざまに扱うようになっていった。

そんなある日、継母はいつになく機嫌のいい笑顔まで見せて、箆に入れた豆を指して、明日はこの豆を畑に蒔くようにと言いつけた。情に飢え、愛に焦がれて暮らす娘は、その思いがけない笑顔にすがりつきたい思いで、常の涙は胸の内におしとどめ、やすむことを忘れてしまった心のふるえをおさえて、健気にも笑顔をうかべて、「はい」と答えて、次の日は一心に夕暮れ近くまでかかって、やっとの思いで豆蒔きを終えた。ところが幾日たっても豆は芽を出さなかった。すると継母は、蒔いたふりをして、どこぞに隠れて喰らったのだろう。私が継母なために、世間の人、ろくな物も食わせていないのだろう、可哀相に畑で豆を食っていたと、いらぬ噂が立つにちがいないと、顔に手をあててさめざめと泣けば、今では女房可愛さに目がくらみ、娘の心などうち忘れた父親がひどい言葉でののしりまわり、娘は何日たっても芽を出さない豆畑に立って途方に暮れた。

ある夜、継母は真夜中に床から起き出すと、囲炉裏の火をおこして大鍋に豆を入れ、火にかけて煎り豆を作った。次の日、娘に向かって箆に入れた豆を出すと、今度こそは食わないで蒔いて来いと、立ちつくす娘の肩を押して畑へ送り出した。なんと、その豆こそ、昨夜ひそかに煎った、あの煎り豆だった。芽が出ぬのも道理、娘が一心に蒔いていたのは煎り豆だったのであった。そんな事とはつゆ知らず、今度も念には念を入れ、神様、何とぞ豆の芽が出ますようにと、にぎった鍬に思いをこめて土をかけて蒔いたのに、豆は一本も芽を出さなかった。明けても暮れても、娘は芽の出ない畑を上から下へ、下から上へ泣きながら毎日毎日、豆の芽をさがして回るのだった。ところが不思議なことに、畑の中ほどに、ただ一本、豆の芽が出た。娘は、たった一本だけ神様が授けてくれた豆の苗を、雨よけ日よけ大事に大事に守りそだてた。豆の苗

は日を追うごとに大きくなり、それは、それは、不思議なことに、いつしか豆らしからぬ大きさになって、今では一本の豆は畑一面をおおうほど枝先を広げて、まるで樹木のようなであった。やがて豆の木は花が咲き、ざらんざらんと実を付け始めた。ところが、この豆は、莢にいるうちから、煎り豆のように豆の皮がはじけて出て来たのだという。それが今の蚕豆なのだと言い伝える。

「みょうが」

ある所に、ずいぶん吝嗇（けち）なかかあが、これもまた、けちなおやじと旅籠をしておったそうだ。

そんな二人が、どこで聞いて来たのか、みょうがの子を食うと物事を忘れると小耳にはさんだ。二人は顔を見合わせ、手をたたいて喜んだ。これは良い事を聞かせてもらった。幸いにも、みょうがは裏の畑で今が盛りと顔を出し、白い花を咲かせている。かかあ、ぬかるでないぞ、今夜から客にみょうがをたらふく食わせてやれ。万が一に大金などでも忘れてくれたら、俺達あ、一生、左うちわで暮らせるかも知れねえと、捕らぬ狸のなんとやら、どんな着物も思いのままよと、首をすくめて、心も軽く、採ったみょうがが一斗箆にいっぱい来たもんだ。そこへ着いた客は、身なりもりっぱ。そうときまれば、酒の肴もみょうがなら、飯の菜に汁の実まで、これまた、みょうがづくし。変な宿だと客は思ったが、腹も減っていたし、何も言わずに一杯ひっかけて、食って寝た。

さて、次の朝、また、また、出されたみょうがにたまりかね、お前の家ではみょうがしかねえのかい、と言え、何せみょうがは今が一番美味な時、今をおいて、いつがみょうがの食べ時ぞと申します。と、かかあが前掛けの端をいじくり回しながら、可愛いくもない顔で、にまにまとうす気味悪いつくり笑いをするのを、客は妙な女もあるものと、こんな宿には長居は無用、先も急ぐし、そのまま、世話になったと草鞋をはいた。見送りもそこそこに、二人はそれっぽかりに客を泊めた部屋へ一諸に駆け込んだ。どこぞに大きな重たい財布でも、それとも何やら金目の品でもと、座布団をひっくり返し、布団を片づけ、ばたばたとさがし回ったが、何一つ見つからず、こんなはずではないと、目を皿にしてさがしたけれど、やっぱり何も残ってはいなかった。

がっかりして座りこんでいるうちに、何んだか知れないが何かおかしいと、首をかしげてよくよく考えて、二人ともはっと気が付いた。何とした、忘れも忘れて、俺達あ、宿賃をもらうのをすっかり忘れた、と気が付いたが後のまつりだった。何せ小さな旅籠の昔の事、それに合わせて、けちときた、客に出した汁の残りや、おかずやら、自分達もたらふく食ったのがいけなかった。左うちわが笑わせる。てめえが悪いとおやじが言え、もともとあんたのけちから出た不運と、目くそが鼻くそをなじり合い、とうとうその日はふて寝した。

「萩のうすの話」

昔、大浦と小谷鳥の水界の付近に、一本の萩の大木があったそうだ。萩とは細い柴だから、昔、萩の木と言ひ残された木が、本当は何の木だったのか、今となつては知る由も無いが、その木はたしかに萩の木だったと伝う。そして、この木のあつた水界という所は、その昔の、そのまた昔、大津波が沿岸を襲つた時、小谷鳥の浜から上つた波と大浦の浜から上つた波が、ここでぶつかり合つた水界なのだと聞いた。

この付近にあつた萩の木を切り出して、人々は元の方で臼を作り、次の丸太で、黒森神社に奉納する獅子頭を作つた。また、次の丸太では、一体のオシラ様を作り祀つたのだと伝う。

さて、このとき作られた臼の行方も、オシラ様も、よくは分からないが大浦のどこかの家にあるのだと伝えられている。その中の臼と、黒森神社に奉納された獅子頭の話である。黒森神社の神楽舞は、正月を過ぎると十二人の神楽男達によって巡業の旅に出て、今年は内陸、今年は沿岸と舞いを舞い、山田の釜谷洞にも神楽宿があり、その座敷で、毎年の事ながら男達は太鼓を打ちならし、庭で神楽を遊ばせた。大鼓を囃し、獅子頭が舞い始めると、不思議なことに、海の向こうの大浦の臼がひとりでに動き出し、ゴロゴロと、それはまるで踊り出すように見えたという。一本の木から造られた品々の、つながりの深さ、不思議さに、いつも人々は感心したものだと言ひ伝える。

「かみなりさまと桑の木」

その昔、ある年の夏は雨続きで、やたらと雨ばかりが多かつた。黒い雲の中で、ひまなしに雷がなり、樹木はそれに打たれて無惨にも倒れ、絶間なく降る雨に、畑地の肥えた土は、皆、次第に流れて、作物は育たず、人の命までも危うくなって来た。皆、たいへん困り果て、どうすれば良いのか思案に暮れた。

そんな時、ある所に桑原左近という侍がいて、その話を聞くと、やおら雨の中、襷がけで外に出て来て、人々の前に立ち、ねじり鉢巻をしながら、ひとつ自分がこれから雲の上の雷をこらしめてやろうと言ひ出した。皆、この話にはおつたまげた、今の今まで雷をこらしめようと言う人間などにはお目にかかつてことが無い。若い者から年寄りまで、口をあめぐり開けたまま返す言葉もない。村で一番大きな千年杉に雲がかかつたと見るや、いきなり抱き付いて登り出し、雲間に消えたかと思うと、天から雷を引きずり下ろして桑の木に括りつけた。それから恐しい勢いで、こっぴどくこらしめた。雷どんは、その時の事を思い出しては、時々こっそりと雷を鳴らすか、桑の木にはどかんと落ちなくなった。それゆえ家を建てる時は、必ずどこかに桑の木を使うようになった。たとえば床間の柱などに使つたり、農家では屋根の上に、桑の丸太を年がら年中ごろりと上げておいたりした。雷が屋根に落ちないまじないなのだという。また、夕立などに道の途中であつたりすると、道端の桑の一枝を取つて、雷避けに頭上にかかげて歩いたものだ。

「かしわと借金とり」

昔、どこかに大そう吝嗇（けち）な欲の皮のつっぱった金貸しがいた、なさけ容赦なく、取立ては昼となく夜となく、算盤ばかりはじいて暮らしておった。そんな奴とは知りながら、金が無ければ借りねばならない。米や味噌なら、となりの嬢にでも借りれば済むが、金となつては、おいそれと借してもらえるあてもない。まして借りるくらいだから、返すあてなどないような時だってある。もうかったらとは言うものの、これほど頼りないものはない。何かいい思案はないものかと、男が一人、考えあぐねてため息ついた。「よくなる時にあ、糞も味噌になり、悪くなる時にあ、味噌も糞になるっていうものだが、俺もこれで終えかなあ。」と、何を見るでもなく、縁側で、伸びほうけた、手入れもされない庭をながめてつぶやいた。

時は春、樹木は今年も芽吹き、若葉が目にも美しい日よりであった。さまざまな木の中に、かしわの木があって、その緑の葉に、男は、餅でも包んで喰ったならさぞかし美味しかろうと、何気なく思い浮かぶままに心を遊ばせていたが、何を思ったか、やおら後先も言わずに、「そうだ、これにかぎる。」と手を打って立ち上ると、その足でやって来たのが先の金貸しの門口だった。迷うことなく、そのまま奥へ進み、実はこれこれこのわけで、ぜひとも金が要ります。すぐに返せる当てなどないけれど、後日必ずお払い致します。耳を揃えて、きつときつと、かしわの葉の落ちる頃にはお返し致せると思います。必ずや、その時は、その時は……。と、もみ手をしながら、とうとう大金をけちな金貸しから借りて来た。

やがて季節は秋となり、山の木立も庭の木も、皆、風に木の葉を落とし始めたから、けちな金貸しは、今日は来るか、明日は来るかと、何日過ぎてもしっこうに顔も見せない彼の男にしびれを切らし、何がなんでも木の葉はとうの昔に落ちたわい、黙っていればいい気になって、俺から貸りたが百年目、何があろうが取らずにおくものかと、一人いきまいてやって来たのが男の家、恐ろしい剣幕で、わなわなと、「お前が金を貸りるとき言った言葉、よもや忘れたわけでもなからう。時節はうつり、木の葉が落ちる頃となり、今日か明日かと何も言わずに待っていれば、人のいいのを小馬鹿にするにも程がある。今じゃ木の葉も散りはてて、明日には雪も落ちて来る。お前の言ったその通り、今日は何がなんでも耳を揃えて返してもらおう。」とまくしたてれば、彼の男、愛想笑いで出迎えて、ほんに過日はお世話になった、おかげで商いもうまくいき、どうやら命もつながって、これもみんな貴方のおかげと、両手を揃えて折り目正しく頭を下げた。このままお帰ししたでは心が済まぬ。お茶など召し上がって下されと、招き入れたがあ庭の見える座敷だった。茶を進めながら、かしわの葉が落ちるまでと約束下された、あの日の御恩がありがたい。他の木の葉は落ちたけれど、かしわの葉だけはまだ落ちずに付いております。どうぞしばらく、もによもによと、しかつめらしくかしこまり、とうとうその日は借金取りをそのまま帰してしまった。さしものけちな金貸しも、こんなはずではなかったと、寝てもさめても寝覚めが悪い。

そのうち、とうとう春になり、青葉若葉がさし始めても、かしわの葉は地面に落ち

ずに、次の葉を出してしまったからたまらない。そんなわけで、けちな金貸しから借りた金、めぐりめぐった春夏秋冬、返す日などないものよ。かしわの葉が落ちるまでとは片腹痛い、うしろめたい気はすれど、ここは一番、俺の勝ち、と諸手をあげて喜んだ。いつしか巷に噂はながれ、かしわはあまり姿のいい木ではないけれど、商人などに好まれて、庭のどこかに植えられて大事にされることになったと伝う。「金は浮きもの、流れもの」などと言われ、金持ちがいつまでも金持ちとは限らない、まして商人などは、いつ、何が禍して、どんな浮目を見るか、知れたものではない。そんな人々が今日と変わらない明日を願い、枯葉になっても葉を落とさないかしわを植えるというのもうなずける。

「蕎麦の茎はなぜ赤い」

昔ある所に、おりこ姫こと呼ばれる娘があった。ほんとにめんこい娘で、親は、まなぐさ入れでも痛ぐねえほどの、めんこがりようだ。それも無理もねえ、気だてのいいのにもって、機織りが上手で、おりこ姫こと呼ばれるのも、ここらにあったんだべなあ。誰もがこの娘を呼ぶ時あ、「おりこひめっこ」と呼んだんだとき。娘もお天道さまみてえにぬくい笑顔で、大人にもわらしにも、あいあいと笑ってくれるもんだから、この娘っこに会うのが、皆、楽しみだったど。

そんな娘だったから、年頃になったれば、あれよあれよと見る間に、嫁の話が決まってな。親あ、嫁こに出す仕度をせねばなんなくなつたど。先ず町さ行って、着物の一枚も、何やらかにやら持だせてやりたいものだとの親心。町さ行く時には、戸をしっかりと閉めで、「誰が来ても開げでえなんねえぞ。」と念をおして出かけて行った。トンカラトンカラ、機の音に送られて、親あ町へ向がった。

陽気もよく、てらてらと、心持もほんとに良い日であったど。昼近くなつた頃、戸をたたく者がある。「おりこひめえっこ、あそんべ」。おりこ姫こは機の手え休めで、「おめえ誰だあ。」と聞いてみだれば、戸の外で、「おらあ、おめえど遊びてえ。ぺんこでいいがら戸っこ開げろ。」と言う。「いいんや、おらあ、誰が来ても、開げでえなんねえど言われでっから。」とかぶりをふると、外の者は重ねて、「そんでも、ぺんこでいいがら、ほんとにぺええんこよ。」とあんまりうるさいもんだがら、こころもちのいいおりこ姫こは、そんだらばと戸を少し開げで見だ。そしたら、そごにあな、赤い顔の、髪の毛あぼうぼうどなった、やまんばが、のっそりど立っていでな、細く開けだあ戸に手えかげで、ガラガラと音も高く、いっきに開げで、家の中さへえって来た。たまげで、ものも言えねえでふるってる、おりこ姫こを見ると、ゆだげえ（よだれ）、だらだらどたらしてな、「ああ、なんたら、うんまそうなおなんこだ。」ど言いながら、たちまち取り喰らってしまった。そうして、おりこ姫この着ていだ着物をひっかぶって、機の前さ座ると、何ともうまいあんばいに、おりこ姫こに化げだもんだ。

そのうちに陽も暮れかけで、親ももどって来た。「おりこ姫こいだが。」と声をかければ、めんこい声っこで、「いだみす、いだみす、今開げっから。」と言いつつ戸を開けだ。親は何も知らねえがら、てっきりこれがおりこ姫こだと思って、買って来た品々

を並べては、娘の喜ぶのを見て、自分らも嬉しがつておったが、次の朝、鶏が何とも不思議に、「唐臼場のすみっこを見ろええ、けけろっこう。」と鳴いだもんだ。はて、何して不思議に鳴くもんだと思ったが、親は嫁この姿あ作ったり、送り出すのに気がせいで、やまんばのおりこ姫この花嫁を、それぞれと馬こに乗せで、門から送り出した。

あだりは、そばの白い花盛り、ほんに日和もよい事よと、親はますます嬉しくなつた。そしたば、屋根の上で鶏が、「おりこ姫こ乗せねえで、やまんば乗せだあ、けけろっこう。」と何度も鳴くもんだがら、はっと気が付いて唐臼場を見だれば、骨がそごらにいっぱいある。馬で行ぐのはやまんばがど、草刈鎌を片手に追っかげで、たちまちのうちに殺してしまつた。やまんばは恐ろしい声を出してくたばつて、あだりのそば畑あ、やまんばの血が飛び散つた。白い花こも茎も血にぬれ、その時から何年経つても、そばの茎あ赤くなるんだと。

「まだかりでえごと御大国様」

十二月九日は御大国様の年とりの日なのだそうだ。この日は、農家では炒り豆を升に入れ、二本にまたがつた、いびつなみつももない形の大根を神棚に供える慣わしがある。その訳はこうだ。

ずんと昔、御大国様は修業の旅に出られた。その修業は遠く遠く、苦しいもので、それもまた修業ゆえと、何事もいとわなかつたが、ただ一つ、この神様には持病の癩があつたのだそうだ。この病は、いきなりさしこみにおそわれ、油汗をながして苦しみもだえるというやっかいなものだつたが、大根を食べるとなんとも不思議とよくなるものだつた。とは言え旅空の下、いつも大根があるわけでもなく、行脚の身には心細い思いがつきまどつていたのであろう。そんなある日、街道の端で、またもや病み出した持病の癩に息も出来ぬ有様、ただただ、「どこぞに大根があれば。」と、苦しい息の下で藁しべにもすがるおもいで、そればかりを念じて行く道すがら、ありがたいことに畑一面大根ばかりという所に出くわした。見れば一人の男が大根ぬきに精を出して働いている。並んだ大根の見事なこと。これこそ何ともありがたいと、苦しみがらも馳せ寄つて、畑の男に大根一本、わけを話して所望した。

ところが何とも意地の悪いこと、この男は上から下まで見上げ見下ろし話を聞いて立っていたが、横目でじろりと睨んだきりにべもなく、この畑の物あ俺のものではないと、旅に行く乞食坊主の難儀など俺あ知るかと、そつぽを向いて知らんぷりをきめこんだ。ほとほと困り果てた神様は、苦しまぎれに畑に取り残されて捨てられた変形した大根を、大根なら何でも良いと申されて食べたのだそうだ。この時の大根は、二本にまたがつた、いびつな形をしていたと言ひ伝えられ、まだかりでえごはその時の大根なのだと伝う。それから、この神様は耳が遠いお方で、炒り豆が好物であつたそうだ。豆を炒つて升に入れ、升のふちを音高たたきながら大きな声で、「御大国さん、御大国さん、豆でござんす。」とよばわりながら、神棚に供え無病息災を祈つた後、少しずつ分けて貰つた。この豆を食べると病気にかからないと伝う。

「梅と葦の話」

昔の人々は、「なぜ。」と聞きたくなるようなことを、たくさん知っている、それらの話は、「なぜかは知らないが・・・。」という言葉で始まることが多い。この話もそんなものだ。池というのは、掘る日はあっても埋める日は無いものだと言ふ。だから、遊び心で池など掘るものではない。先に言ったように、なぜかは知らないが、とにかくそうなのだと伝へる。手前勝手に造る時も、方角や事がらを、よく考えてから仕事にかからなければならない。そして、どんなわけがあつて埋めようとも、元の地面にもどす時には神様に祈り、何ゆえなのかを申して許しを乞ひ願ひ、今埋めようとする池に梅と葦を一枝入れてから、土を入れ始めなければいけないと言ひ伝えられている。

「あかい茎のよもぎ」

重茂半島の一角に、あかい茎のヨモギの生える所があるという。ヨモギは何処にでも生える草なのだが、そのヨモギだけが茎の随までもあかいのだという。このヨモギ、もともと赤かった訳ではなかつた。それにはこんなわけがある。

昔、この街道を旅人が急ぎ足で、物につかれたように先を急いでいた。人目を避け、忍ぶように急ぐのも道理、今の姿は人目をあざむく仮りの姿、もとを正せば侍の身の上であつた。戦にも敗れ、我が身一つで落ちて行く男は、成りを変え、刀さえも捨てて、人の目を避け、この街道を南へ下るつもりだつた。一時の腰を落ち着ける暇も、一口の水を味わう安らぎもなく、ただひたすら追手を恐れて先を急ぐ身の上は、執拗に追い迫る背後のまだ見えぬ影に追いたてられて迎る、見知らぬ街道の険しさ遠さに精も根もつきはてる思いで、男はついに立ち止まつた。山裾の崖の上で、万里の彼方から寄せ来る波頭の白さに目をやりながら、何処で果てる我が身ぞと、戦で受けた傷の疼きをこらえながら、見知らぬ土地に名も無く朽ちるために、目頭はいつしか熱い涙にぬれた。

ふと我に返つてふりかえる細道に、人の影が踊つた。無言の内に向き合つた足元から、荒磯の波の音が大地をゆるがし体をゆすぶる中で、低く重たい声が一言二言言い交わされただけで、一時の間に男は朱に塗れて転がっていた。その端で男の返血を浴びたか、ヨモギが血にぬれて陽に光っていた。季節はやがて秋となり、ヨモギは枯れ、大地は白い雪に被われた。めぐり来た春に芽吹いたヨモギは、この一角だけが茎の芯までもあかかつたと伝へる。

「松竹梅の話」

どんな大金持になって、何不自由ない身の上で暮らすようになったとしても、庭の内に松竹梅と全部揃えて植えるものではない。そのわけは、人の願いとは、誰もが百万長者を夢に見て、今よりもっと金持に、明日はもっと人より上の身分になりたいと、欲を道づれに働くのだという。この三品は、夢の成就を意味し、その先が無い。そこは登りつめた頂点で、目の前にあるのは下り坂。物のたとえにも、「登りあれば、下りある。」とは、よく伝え残す。後に来るのは我が世の黄昏があるばかり、それゆえ庭には松竹とか、梅松というように、必ず一品残して植え、後の世に残りの一品を託し、その心にこそ一味も二味も、味のある生き方を説き、仕事や人生に打ち込めと諭すという。

「糸によれなくなった藤蔓」

宮古の重茂半島の陸伝いに小さな漁村が点在する。その中の川代や石浜は、宮古へ出るより山田に出る方が船でも徒歩でもはるかに近く、村人は盆暮れの仕度などにも山田の市に船を出し、米のとれなかつた村の者達は磯辺で働く時の藁草履を作る稲藁を、豊間根の衆から魚や昆布と換えたり、時節の品々が海上を、又、陸路を往き来した。山田の商人も売物を背に、細く、くねくねと続く海沿いの山道を、野に住む生き物を話し相手に、潮騒を聞きながら、さぶかぜ峠を越えて商いに精を出して暮らしていた。さぶかぜ峠とは、いつ通っても風が立ち、どんなに海が凩る時でもこの峠にかかれば風がざわつきふきつけることから、誰言うとなくさぶかぜ峠と通る人々に言われる峠であった。

ある時、この街道を一人の旅の僧侶が通りかかった。その日もさぶかぜ峠は海から吹き上げる潮風がたえまなく吹きすさび、すりきれた僧侶の墨衣の裳裾や袖が風をはらんでひるがえった。遠くはてなく続く行脚に研ぎ澄まされてゆく内なるものとは裏腹に、衣はいつしかほつれ、裾のすりきれる姿は、戸口に立つ毎に様々な人の心を映し出した。ある者は深々と頭を垂れて伏し拝み、ある者は鈍鉢の鉄鉢に米粒など目をこらして見なければ見つからないほど、雑穀や海草の混じる飯をうやうやしくさし出し、旅の僧侶に功德を祈って手を合わせる者もあれば、乞食坊主とのしられ追い払われる日も、また多く人の心が鏡に映し出されるごとくに知れる旅空の下で、いかに旅のみそらとはいえ衣のほつれを繕いたいと、立ち止まった一軒の戸口で顔を出した婆に針と糸を貸してくれと願った。婆は顔も向けずに斜めにじろりとにらんだきり、どこの誰とも知れぬ旅の乞食に糸などともったいないにもほどがある、お前のような者にはこれでたくさんだと、犬畜生にでも与えるように投げつけたものが一本の藤蔓だった。

その頃の人々は、山から採って来た藤蔓を木槌などで打ちくだき、皮をさらに細く細く裂いて、糸にして使っては来たが、やはり布を縫うには藤の皮で作った糸では具合が悪かったことは言うまでもなかった。足元に落ちた藤蔓を拾うと、そのままじつと見つめて立っていたが、何も言わずに立ち去って行ったと婆が笑ったその後に、不思議なことにこの地一帯の山に自生する藤蔓は細工に全く使えなくなってしまった。

どんなに工夫しても一本の縫り糸にも出来なかつたばかりか、そのままの蔓で荷をし
ばろうとしてもぼきぼきと折れてしまうのだという。それはあの日の婆の所業ゆえだ
と誰言うともなく囁かれ、後の世までも語りつがれた。ここではその時から葛の茎を
使って荷を縛ったのだと伝う。この時の旅の僧侶こそ諸国行脚の旅に行く弘法大師だ
ったのだそうだと昔の人々は語り残す。

「いだぎの沢のへえだま（ハマナス）の花」

「よだ」つつうもんが、昔しゃああったんだあずうもんな。津波よりも恐ろしいも
んでな、音もなぐ引いで行った海あ見でる内に大っきな波になって、のこのこ陸さ
上って来んだあずう。昔の年寄はな、よだにやあ地震もあんまりねえもんだ、波あ大
川（関口川）まま大口あげでのぼってっ来るもんでえす。昔の人あ言ったもんだ。海
に千年生きる化け物のように、恐ろすねえもんなんだあずうみす。いつの頃の話なん
だか知らねえが、関谷あ水の底になってな、波あ二ツ森の腰さ行ってぶつつうだんだ
どさ（くだけちったんだそうだよ）。二ツ森の下にあいだぎあ沢つつう沢があつてな、
昔の津波にあ、ここさ船の板子が流れ寄っていでな、それっからど言うもの、板子が
いつの間にか「いだぎ」になったんだあずうみす。そうしてな、このいだぎにあな、
大津波に流れ寄って根え下ろしたあへえだま（ハマナス）の木があつてな、うつつぐ
すう赤え花こが咲ぐもんだつた。昭和の中ごろまでその木があつてな、花は咲がねが
つたあども、ばやばやど残っていだあもんでえす。

まだ大した昔にも大津波ああつてな、この時の波あ山田あ全部なぐなつたんだあず
う。生き物あみんな死に絶えだど思われだ。そんだがこの時には、この二ツ森のてっ
ぺんさ逃れだあカラスがひとつがいで、人間の夫婦が一組生き残り、山田の人間どカ
ラスあこの二組から今のように殖えだんだどよ。

「いだぎあさあ（板木の沢）のせいだが梨」

このいだぎには大きな年老いた梨の大樹があつた。その昔、ここは焼畑地であつた
から、主が梨の木を植え、それが野性のようになつていたとも言われている。ここの
梨は、そのせいかどこの山にある山梨の味とも一味ちがつていて、ほんとに味が良く、
小さな実が沢山成つた。秋になると、この梨の大樹の回りは落ちた梨の甘い香りがあ
たりいっぱい漂つた。いつしか焼畑地は牛馬のための草刈場と変わった。山仕事の
帰りや草刈の手を休めて一心地つけたり、子供達への山のみやげに背中あてや野良着
の袖にそつと入れて持ち帰つたり、一面に落ちた熟れた梨を近在の人々は吠をもつて
拾いに行つたりした。いだぎあさあのせいだか梨はほんとにうまいと皆に言われてい
たが、主もやがて変わり、時はうつり、ついに梨の木は切り倒された。今もあの味が
なつかしいと知る者は思い出している。

「滝につるされたおさな児」

ずっと昔、男がいて嫁をもらった。ところがこの男、女房にした女子が意に染まなかったのか、それともただの女子癖（おなごぐせ）が悪い男だったのか、外に妾をかこった。口達者で人の難儀を楽しみたがる人間があるのは世の常か、尾鰭が付いて秋風に木立がざわつく様に噂は世間に広まって、知らぬは女房ばかりとは誰が笑ったか、それも初めの頃のこと、男は公然と妾へ通うようになっていた。女房は今宵も帰らぬ夫を待ち侘びて、空の寢床をながめては涙で枕を濡らしつつ夜を明かし暮していた。そんな女房を知らぬ気に、色と欲が売りものの女とは馬鹿なもので、初めの内は通って来てくれるだけで事足りていたものを、一つの我儘が叶うと又一つと、やがて身の程を知らぬとは愚か者というべきか、情けないというべきか、きりも限りもなく我儘になって、その欲はとどまる所を知らなかった。甘い言葉にほだされて男は通い続け、囲われ女子はついに気丈にも女房の住む男の屋敷の敷居をまたいだ。

その日から女房とともに妾はひとつ家に住み、やがて男のわらしを生（な）した。女房は日々疎まれひとつ屋根の下で身の置場もない、いたたまれない屈辱に耐え暮らしていた。本妻とは言うものの子の無い悲しさ、日々強くなってゆく妾の力に、使用人までもが柳が風になびくように、女房の言うことより妾の言葉に重きをおいた。妾は、あわよくば、このままと思うのか、ある時は冷ややかに、又ある時は居丈高に、何かにつけて声高に、まるで女房など自分一人で沢山とばかり、自分の産んだわらしをもち出しては、この家の大事な一粒種よ、跡継ぎよと豪語してはばからなかった。その度に本妻は人知れず物陰に声も無くむせび泣いて、何ゆえ我はこの家に住み、何ゆえこの苦しみに耐えなければならないのかと、いつも心に問うてみても甲斐のない事。たまりかねて里の親に辛い思いを明かしたけれど、親はただ、男の馬鹿は女が忍ぶよりほかにはないもの、お前がほんとの女房なのだ、そんな気の弱い事でどうするとかえって叱られ、いつかきつと改心する日も来るもの、その日こそ我世の春と思えとは、何とも情けのないことか。

積もるせつなさ悲しさが、胸に渦巻き暮らす内、魔がさしたか女房は、ある日、愛くるしく無邪気に遊ぶ妾のわらしをさらっていった。人目をはばかり髪ふり乱すその様は、日頃の辛く苦しい女心か、嫉妬に狂う姿は見るもおぞましい形相で、胸に紅蓮の炎が燃え上がり、もはや常の心など葉先に宿る朝露のようにかき消えて、いつしか山道をもつれる足どりで辿る足には履物も無かった。片手には一本の藤蔓を長々と引いて、何処へ行くのか登って行く。唇をついて時おりぶつぶつとほとぼしる思いは何をや語る。何処までも登って行く先に滝の音がした。やがて開けた視界に滝は細く高く、飛沫はあたりを濡らしてはとうとうと、その汚れを知らぬ清水の流れをひたすらじっと見上げて立っていたが、やおら手にした藤蔓の片端を輪にするとわらしを引き寄せた。

時は流れた。いつ、どう何をしたのか、わらしは哀れにも滝に吊るされてすでに息絶えていた。女房は自らも全身濡れてわなわたとふるえ、がくがくと水の中に両膝を折って、くずおれるように身体を流れに浸した。今さらに己が罪の深さに愕然とし、

思わず手を合わせつつも、女の情念が心の底に逆巻きつつ、幼い亡骸に向ってうわ言のように一つ言葉を熱に浮かされたように言わせ続けた。「女子の怨みだと思ふな、男を怨め」。清らかな滝は、いつまでも止まることなく、吊るされた幼子をゆらしては流れ、憐れな女房の罪深い涙にぬれた身体を洗っては心よい音で流れ下った。後に誰が言ったか、この滝を、たまたれ滝と呼ぶ。また、たからあ滝とも言う。

「鬼を見たわらし」

その昔、母親に死に別れた男わらしがいた。父親と二人暮らしで、その日その日を送っていた。女のいない侘び住居は灯が消えたように薄ら寒く、まっとうがい（燈火として松を焚く台）のゆるる明かりの下で無言で食う夕飯は、とりわけたまらなくさびしかった。毎夜、囲炉裏の火ばかりながめて何も言わずに酒ばかり飲む父親の横で、わらしはいつ入れ替えたのかも忘れるほど入れ替えていない薄い藁布団にくるまって、いつしか寝息をたてては夢の中でおふくろの懐に抱かれていた。昼になれば牛を追いながら草に寝ころび、野を駆け、風に歌い、口から出まかせの歌を思いつくままに歌っては、日ごとにつのる寂しさをまぎらしていた。腰にはいつも細い竹笛をさし、歌でなければ、山の峠の岩の上や木の根元に座っては笛を吹き、ぼんやりと彼方を見つめる虚ろな眼から大粒の涙が頬をつたうのもしばしな幼児は母を忘れられなかった。

そのうちに、女子がいなくてはお前もこまるだろう、子も不憫と、人に言われて、男は後添いを迎えた。女子の業とはなんと罪深いものか、男に子が残されていることも、母親になってやらねばならないことも、百も承知の上で来ては見たものの、初めて見る女に母さんとも呼べずに、小さくなって座ってはちらりちらりと見るわらしの視線と、朝な夕なに今は亡き女房の仏に手を合わす男の後姿に、だんだんおかしい雲行きになってきた。小さな手を合わせ父親の真似をして行って来るよと、門を出る度にちんちんと「おさわり」（仏具の「りん」）のふちをたたいて、その音に送られて野に出ていく小さな姿が、いつの間にか何とも言えぬほど苦々しくて、積もり積もっていく心の有象無象の魔の声に、女はお前の惚れた男は今や私のもの、死んだ者などには渡さぬと、冥途へ行った女房にまで要らぬ悪態三昧で、日に日にわらしに辛くあたるのもその心ゆえに、夫のいないときなど日に三度の飯でさえ、その口をつもる（食べさせない）ようになった。

そうしているうちに、男は女とわらしを残して仕事に出かけ、何日も留守をすることになった。夫が家に居てさえ辛くあたる継母は、憎しみをあらわに、朝は暗い内から追い起し、お天道様が山の影に隠れても休めとも言わなかった。人々はそんな女をながめては、あれも生（な）さぬ仲のむずかしさよと、噂し合った。そんなある日、暮れかけた山道で牛を連れたこのわらしに出合った大人達は、早く帰れ、あんまり遅いと又おこられるぞと、継母との二人暮らしを不憫に思い、やさしくいたわりの声をかけると、小さな体をふるわせてぼつりと、「おらあ、おっかなくて家さば帰れねえ」と小さな声で言った。大人達はその顔色に胸をつまらせながら、「家さ行けなくてどこで寝る。はいはいって言ってれば何も無えもんだ。いいわらしでいろ。な、がまんしろ。」

と肩を抱けば、見上げた目に大粒の涙をためて、通りすがりの他人にもすがりつきたいわらしの一念が、家路を急ぐ大人たちの足をもとめた。声をつまらせながら、恐ろし気にあたりを見回し、「俺が寝でればな、夜中に鬼が来てな、俺を取って喰いてえって……。赤え角の二本ある大っきな大っきな化け物だ」。鬼とは又不思議な事があるものと、大人達は顔を見合わせ、牛追いの細い柴を両手に握りしめてべそをかくやせた身体を見下した。

幼いわらしの両の頬を伝う涙が、ぼたりぼたりとおとがいから滴るのをながめて、女達は言いようのないとおしさに、思わずその垢によごれた小さな手をにぎりしめた。大人達は道々手を引いて山を下ると、わらしの家の戸口に立った。実はこんなわけで途中泣いていたと訳を話すと、継母は夢でも見たんだべと声を立てて笑い、大の大人が「そんな話を本当にするとは……。」と言いながら、わらしに向かっていつにないやさしきで、早く飯にしろとは戸口に立った大人達への追従口か。

去り行く人の影を見送りながら口ぎたなく罵る言葉もきかざれなく（とてもきいていられない）、今夜も辛い夜になる、夢でも見てるのだろうと継母は笑ったけれど、その夜も深けた真夜中に、わらしは何者かに呼び起こされた。一目見るなり小さな両手を合わせ、訳もなくただひたすらに堪忍してくれ、助けてくれと、くりかえしつつうちふるえる幼い姿に化け物は奇っ怪な声をたてて笑い、あまりの恐ろしさに布団をかぶったまま身動きすら出来ないのであった。夜毎に続く化け物の執拗なまでの責め苦にさいなまれ、今やわらしは笑うことすら忘れ、抜け殻のようにふらふらと、笛を腰に行くさまは哀れをさそうばかりだった。

その日もお天道様は暮れはてて夜が深けた寝静みに、月明かりのさすてん格子（明かりとりの窓）の部屋で継母が起き出した。見れば、そこらをまさぐり取り出したのが二本の人参だった。両の額に角の様にさし、あがんざ（赤麻）の糸で織った蚊帳を身体にまとい、指という指には赤い南蛮（唐辛子）をさして、顔には髪ふりみだし真赤に耳まで裂けた大蛇の面をかぶり、継子の枕もとへ行くとゆすり起した。その声色のおぞましきは、その姿にも増して恐ろしく、夢うつつに聞く内は頭の奥で誰かに呼ばれていると思いつつ、はっと目覚めて、わらしはあまりの驚きに口さえきけず、ただただ物狂おしく外へ飛び出して闇に消えた。

人の子と生まれ母のぬくい懐に抱かれて育てられたはずの女も、一足踏み外した道の途中で人の情すら忘れ果て、海よりも深く山よりも高い親の教えも捨てきって、いつしか外道に落ちていく姿は犬畜生にも劣りはて、この世の何物にもたとえるべきも無い。継母は大声で笑いながら身に着けた物を外しにかかった。しかし何としたことか、大蛇の面は息苦しいまでに顔面にはりつき、身にまとった蚊帳は身体から外すことが出来なかった。狂ったように我身をかきむしる継母の頭にさした二本の人参は、いつしか本当の角となり見るも恐ろしい一匹の鬼に変わり、何処ともなく姿を消した。

その後、いつも峠に座ってわらしが笛を吹いていたあたりの岩に、笛が一つ風に歌っていると噂が流れた。あまりの哀れさに神がお召しなされたか、わらしの姿はふたび人の目にふれることは無かった。ただ一つ残された笛が風にむせぶこの峠を、いつしか人は「笛吹き峠」と誰言うもなく言い出した。今もこの峠路にかかれば、時折笛の音が聞こえて来るといふ。

「街道辻の二人の捨子」

その昔、幾年も凶作が続き、それに追い打ちをかけるように流行り病も村々をおそい、毎年毎年寄せては返す波に漂う木の葉の様に人々はなすすべを知らず、ひたすら神仏に祈り暮らしていた。風が運んだ噂では、何処から来たのか街道に見も知らぬ者が野垂れ死にしていたとか、行き倒れていたとか、何処ぞの村の衆は鍬をにぎる力も無くて、畑を這って鮑貝で土を掘って最後の種を蒔いたとか、何とも恐ろしい話が口から口へ伝わって不安な思いに打ちのめされ、明日の命は神様だけが御存知かと、噂話に身震いして暮らす毎日であった。

そんな中、ある村に二人の子供を抱え苦勞している母親がいた。男がいてさえ苦しい生活は、女子の細腕ではどうあがいてもその日の食べ物もままならず、腹が減ったと泣かれる度に女子は頭の奥のほうが悪くなるのだった。やつれた横顔も痛々しく目ばかりが異様なまでに不思議な輝きを放ち、いつも心に思うのは、せめて愛しい子供らに腹一杯とはいかないまでも、何か一口なりとも多く食物を与えてやりたいと、一心不乱に働けど春の雪解けはいつになく遅く、初夏の大地に山背の風が肌寒く、年の始めの親作（おやさく）のごしょ芋は今年も不作で、先のなり物はどうなるものかと暮らす日々。それでも春夏秋冬とそれまでは、草の芽木の実その根までもさまよい求め命をつないで来たけれど、蓄えとては何も無く、着のみ着のまま、やがて来る冬の寒さを考えていかになさんと思案のあげく、もうこれまでと心にきめて、無邪気に笑う子の手を引いて村を出たのが事の始まりだった。

筋もあらわな瘦せこけた手に、しっかりとぎった小さな手は、十月十日の腹痛め今日まで育てた我が子だけれど、死出の旅路の道ずれに連れて行くのは忍びない。どこかのお方に拾われて、命ながらえこの世の春を見てくれと、くずおれそうな胸の一念、我と我が身に叱咤して、たどり着いたのが笛吹き峠という峠の辻だった。この世に神や仏があるのならば、恥を忍んで申します。身勝手なれど精も根もつきはてた。この身は神に捧げます。我が身に代えるこの願い、きつときつと叶えてくださいませと、一途に祈り心の内に合わせた両手、年端もいかぬこの命、守りたまえと、ただそれだけの親心。

涙もかれて面やつれした母親が言う、言葉たくみな別れの一言に、二人の子供は一も二もなくうなずいた。「かっかあはな、今っから飴買いに町まで行ってくる。二人してこの峠で待っている。すぐ戻って来っからな」。目を輝かせ、にっこり笑った子供にうなずきかえし、乱れた髪をかきあげた。その横顔も目に痛く、後髪を引かれる想いを奥歯で噛んで去り行くを知るは、峠を渡る風ばかりか。無心な子供は二人して母の姿を見送って、峠の陽だまりで枯草に寝転び追いつ追われつもつれて遊ぶ。事の事態もつゆ知らず、とんと忘れかけてた飴の味が口の中によみがえり、生唾のみのみ今か今かと待つけれど、釣瓶落としの秋の陽はみるみる内に暮れかけて、街道辻で寒さにふるえている所に、遠野の方へ用足しに行った帰りでもあろうか、栗橋村は、よいふなぎのはしばの旦那が通りかかり、人気も無い街道辻でふるえて寄りそう二人の子供

を訝しみ、こんな所で何をしてると立ち止まった。

「俺のつかあが今飴を買いに行っているのを待っている所だ。」と、目を輝かせて見上げた二人に小首をかしげて、「はて、そんな飴屋は近くにあ何処にも無えぞ。」と言え、頭をふって、「そんだあって、買って来るって言ったもの。」、不安な心を打ち消すように頑なに。旦那は何も言わずに、そうかそうかと笑って通りすぎて家に帰って来たものの、あの街道で出合った子供が心にかかる。手足を洗って家に座ったころは、すでに闇は深くあたりを包み、寒さはすでに冬を告げ刻一刻と増すばかり。囲炉裏の端で遅い夕べの膳を取り、遠出の疲れも手伝って床に入って身体を長くはしたけれど、二人の子供が目にはらついて胸に逆巻く胸騒ぎ、ついに床を出た。

奉公人に明りを持たせ、今来た街道をとってかえした。はやる心で急ぎ行き峠の辻へ来て見れば、二人の子供は時すでに遅く、飢えと寒さに息も絶えて折り重なって死んでいた。兄は幼い弟をやさしくかばい、何んとも哀れを誘うその姿に旦那は涙を流し、今はかいもない事ながら、あの時出合ったその折に、拾って連れて帰っていれば何もないものを、何んとも惨い事をしてしまったと悔恨の情にさいなまれ、せめてもの手向けに石仏をたてて追善供養をしたと伝う。その供養石が笛吹峠の街道辻にあったと伝うが今はどうだが分らない。

「人身御供にされたほいどう」

その昔、ある村にこんな話があった。

流れる川は雨が降るたびあふれ、川岸近く住む者は作物を流され、家までも水に浸り、橋は幾度となく架けるのだが大水の度に流され、普請に出た人の命までも取られ、なすすべを知らなかった。ほとんど困り果てた村の衆は神々に祈ったが、その甲斐もなく何ゆえに願いも叶わぬのかと思案のあげく、いたこを頼んで神の御託宣を授かるうということになった。

いたこは八百万の神々を呼びながら大玉の数珠をじゃあらかじゃらとまさぐり、願いの聞き届けられない訳をうかがうのだった。ひとしきり大粒の汗を流して祈っていたが、やがてその手を休めて、後にひかえて手を合わせている村の衆にゆっくりとふりかえりざま申すには、元気なわらしを一人、人柱にして水に沈め、橋を架けよとの教えであると伝えた。これには村の衆も何んとも頭をかかえて声もなかった。神の御告げとはいえ、誰のわらしも大事な宝。三千世界を探したとて人身御供にさし出す者などあろうはずもなく、さりとしてこのままでは毎年皆苦しむ事になる。あそこのわらし、あの娘と、指おり数えてみるけれど、恐ろしさにうちふるえ、いかな神の御告げとは言え、命あるままに大川の水に沈め人柱にするなどと、そんな惨い事が出来ようかと、顔を寄せ顔つき合せて日毎夜毎に思安に暮れた。

そんなある日、盲のほいどうが一人の男わらしに手を引かれこの村を通りかかった。何処から来て何処へ流れ行くのか、盲は足元もおぼつかない気に、時々、丹蔵、丹蔵、と呼びながら、わらしの腰に巻いた縄の片はしをしっかりとぎって物乞いをしてまわる、親子らしい二人連れを村の者は目を釘づけにして見つめた。そして何という天の

恵み、これぞまさしく俺達のために神が遣わしたものにちがいないと、その親子を足の先から頭のとっぺんまで、くいいるようになってめつくした。丹蔵と呼ばれたわらしは、ぼろをまとい垢にまみれてはいるけれど、目はどこか涼し気に口元は一字に結び利発そうな子供だった。今夜はこの村に宿って行けと言いながら、村長は鼻に飯を握らせて親子を木蔭にいざない、きたなく汚れた手に握飯をにぎらせた。目の見えぬ親を連れての道中はさぞ辛かろうと声をかければ、顔色すらも変えず、ただ頭をふって物も言わず、思いがけない食物をむさぼり喰らう目は油断なくあたりを見回し、蔑まれ、こづき回され、世の片隅で人とも思えぬ生まれをして流れ行く者が自ら身につけるのか、狼のように身構え人目をうかがっては燃える瞳で後ずさりした。

その夜は言われた通り親子は宿をもらうことにした。村人も皆心よくそれをうけた。それもそのはず、これから凶る謀のために逃がしてはならない子供なれば、無気味なまでの気の使いよう。その内そっと物陰に盲（めしい）た親を呼んで金を握らせたが、何を約束したのや知らないが村の事情を話して聞かせ、何ともたくみに説き伏せた。ぼろをまとったほいどうを座敷内に召き入れ、その夜は村の衆が集まって酒肴でもてなした。何も知らない丹蔵は見たこともない食物に目を見張り、幼い心はいつしか心も緩み、親に進め我も食い、一時の天国を見たのであった。明ければその日は己が命の終りとも知らず、他人の笑顔がこんなに温いものであったかと、思わず笑い返しては、礼儀を知らぬ生まれにて貪り喰らうは憐れといえはあまりの憐れさ。やがて生まれてこの方食った事の無い食物で腹を満たし、夢に夢見る心地して、その後のことは鶏が鳴くまで何も知らずに過ごしたのであった。

しかし、その親は床にもつかず頭をたれて座ったままで夜を明かし、夜明けとともに村長に向かって両手をついて、先の話はなかったことにしてくれと願ったのだった。すると、そこの主の言うことには、大の大人が一度こうときめたこの大事、反古にするとは情けない。お前の生きる世界ではそんな話も通ろうが、おれの生きる世界ではそんな話は通らぬと、けんもほろろにはねつけた。涙ながらにほいどうは、身にまとったぼろを胸のあたりで搔き合わせ、こんななりはしていても、これでも人の子人の親、事の大事は分かっている、人を救うためならと、先には胸にいい聞かせてみたけれど、やっぱり出来ない相談だった。まして盲の我が身を思えば、この子を連れて行かれたら手足をものがれたも同じ事、この先どうして生きていけようか。どうかどうか、この話、水に流してくだされと、土に額をすりつけて盲（めしい）た目からながれる涙をふきもせず、ただひたすらに願うは親心。いかにひもじく喘ぐとも、我子の命を天秤にかけた愚かな心に気が付いたと、奈落の底に行くような絶望の淵で血を吐くような悲痛な声で懇願したが、取り付く島は更になく、あれよあれよと思う間に丹蔵は縄でくくられて、親を呼びつつ砂ぼこりの中を救ってくれと、悲痛な声が尾をひいて親の心を搔き乱す。

すべては我身のえて勝手、丹蔵許してくれと胸搔きむしる思いで声を頼りに追いつが、川のそばまで来たなれどああ情けない盲（めしい）いた目には声はすれども姿は見えず。水の中でもがき苦しみ泣き叫ぶ声に混じって、村人の念仏となえるその声にその場にはっと立ちすくみ、しばしの間声もなく盲（めしい）た目からはらはらと涙をこぼしていたけれど、村人達が祈り集まる目の前で、つい今しがた我が子の声が

消えた水中に身を躍らせた。丹蔵、と声をかぎりなほいどうの悲しい声が村人達の胸の中に逆巻いて、あっという間のただ一瞬の出来事に色を失い青褪めて息をのみ、つい事の成り行きで苦しまざれに出た思案、たかがほいどうと侮って人の命を軽んじた罪の深さに、肩を落として頭をたれて何とも慙愧に耐えないと、途方に暮れたその後村人はついにこの親子を神と祀り祈ったと伝う。この親子を祀った神を盲神様と言ひ伝え、目を病む者がこの神様の水で眼を洗うと御利益があると人は伝う。

「年寄のおしえ」

ある所に門構えの大そう立派な屋敷があった。ここの屋敷では、つい先日孫に嫁が来たばかりだった。広い座敷にたくさんの客を招いての酒盛で、目出度目出度と歌い祝う声が鶏がうたう迄にもぎやかに繰広げられて、近在の衆が大したお振る舞いよとうらやむほどだった。

さて、そんなにぎやかに歌い明かした祝事も終り、送ってきた里の者も皆帰ってしまった後のさみしさと不安な胸の内をおさえて、健気にも里を出る時親に言われた言葉を思い出し、姑や夫にいい嫁子よ、可愛い女房よ、と言われて暮らしたいものと念じつつも、勝手の不慣れな敷内でとまどうばかりだった。そんな孫嫁を、婆様が呼んでおりますと、台所から年もいかない奉公人がひょいと顔を出して声をかけた。この家の婆様はなかなか気の付くお方よ、情のある利口なお方と、人の噂も高い婆だった。薄化粧も初々しい嫁子が、この婆が座った黒びかりのする漆でもながしたかと思うほど磨き上げた板敷の間に両手をつくると、静かに若い嫁の顔をながめ、「お前は今日からこの家の女子になった。客ではないのだから働いてもらいます」と、たすきにしろと一本の布紐を手渡した。嫁子は、「はい」と返事も可愛く婆の前でたすきを掛けると、仕事は何をいたせばよいのでしょうかと手をついた。すると婆は、「釣瓶で水を汲んで風呂桶に水を入れでけどごぜえ」。

言いつけられたとおりの嫁子は井戸に行き、釣瓶で水を汲んでは手桶にあけて水を運んで来て驚いた。その風呂には栓がなく底には穴が開いていた。嫁子は何も言わずに栓の無い風呂桶に何度も水を汲み運んだが、昼になっても当然のことながら水は風呂桶にひとつも溜まらなかった。「昼飯になった。おめえも飯にしとごぜえ」と、婆が声をかけながら自らも昼飯の膳に向かうのだった。若い嫁子はその婆の横で先を案じながら、昼飯など喉も通らぬ心持ち。ふるえる思いで汗をあわせては、やっとの事で飯をのみこんだ。

午後になった。すると婆は、風呂桶にはびっちり栓をしたが、今度は釣瓶の桶に少し穴を開けた。しかし底を抜いた訳ではないから、水は漏れながらも桶の中に少しずつ残って上って来た。それを何度も手桶に入れて運び、やっとならば、風呂を沸かす頃までには風呂桶の中に水をいっぱいにすることが出来たのだった。小さな溜息をついて見上げた茜の空を、ねぐらへ帰るか鳥が鳴き鳴き飛んでいく。あの鳥の行く空の下は里の家、今頃親達は何をしてやらと、手桶片手につい涙ぐむ新妻を、我も仕事帰りの手づら（手や顔）を洗いながら、早く家に入れといたわる男に、つい泣けてきそう

な胸を必死にこらえてうなずいた。

その夜、婆はまた嫁子を呼んで前に座らせて言うことに、「何んたらきつい婆だど思ったべえども、先ず聞いてけどござえ。昼前に汲んだ穴のあいだ風呂桶はお前に例えだものでえす。何ぼ汲んでも一杯になんながったあべ。金もあのごとく、女子が湯水のように使えば、あつという間に穴がらも箆がらも出で行って、何んも無くなるものでえす。」と言いつつ、聞き耳立ててじっと座る嫁子に話を続けた。

「昼すぎの穴の少しあいだ桶は男でえす。ぺんこすか手桶には溜まんなかったあべあども、一生懸命汲んでる内に風呂あ夕方までに一杯になったはずだ。金もあのごとく、いつも口きりあるものでねえ、それを女子がやりくりして暮らして行くのが生きるどいう事。今日の事は一生忘れねえでけどござえ。そしてな、どんな所さ行っても男より少し早く帰って来て、飯の仕度をするものでえす。男が外がら帰って来た時、飯の仕度がちゃんと出来ているのが女子のつとめというもの。どんな男でも、男は男。お前の夫でえす。それを忘れねえで、夫婦仲良く男を立てて暮らしてけどござえ。今日はほんに御苦労だったなみす。早く休んどござえ。」と言いつつ、初めて見せたやさしく労う婆の笑顔にしみじみと胸に思いを抱きつつ、仕えた両手についこぼした一しずく、嫁子は夫の待つ部屋へと帰って行く。

「物は祝いがら句はつけよう」

ずっと昔、ある所にたくさん雇い人を使う大旦那がいた。広い田畑を持ち、畑には桑の木を何十となく植え、畑の境も垣根も桑の木で、家敷内には蚕を入れた木箱が嫁棚に何段も並べられ、男も女も毎日毎日、朝日より先に起き出し日の暮れるまで、来る日も来る日も桑の葉を摘み田畑を耕し土にまみれ、しぼるほどに流れる汗も何んのその、と立ち働いた。夜は、野山に降り注ぐ時雨のような、蚕が桑の葉を食（は）む音を子守唄に聞きながら、嫁棚近くに眠りについた。蚕が繭にあがりだす頃ともなれば、その忙しさは頂点を極め、桑の葉を食まなくなった蚕の体はうすいあめ色にすけて、口からは細い絹の糸を吐きながら、住まいと暮らした嫁棚の柱や箱の縁を、小さな頭をもたげてはさまよいだすのだった。それを虫の中から目敏く見つけて、「まぶし」という藁で作った巢にのせていく、蚕はそこで糸を紡いで白銀の俵形の繭となる。

小さな虫が吐き出す細いきらめく糸は、形造られた繭の内側で一心に昼も夜も通し、一生をかけた仕事にいじらしいほど没頭して働き、透けて見えていた小さな虫の体がいつしか見えなくなり、日数とともに虫はやがて蛹となって深い眠りへと誘われる。耳もとで蛹がコロコロと小さな音で揺れる頃、人々は「まぶし」から外しては、毛羽といわれる蚕が繭を造る時足場に張った最初に紡いだ糸を、一つ一つ剥いで行くその忙しさは猫の手も借りたいほどのもので、親指と人差し指はいつしか何十何百と続く毛羽取り作業で血が滲む。よく働いてくれるそれらの者達を主人が盆暮れの度に新しい仕事着や足袋や染の浴衣に銭を添えて労えば、奉公人も又主の心配りのお仕着せを押し戴いては、おれの旦那はいい旦那よ、いい奉公人よと、互いに愚痴もなく、正直な奉公人を持ったはこの家の宝よと嬉しがり、主は年毎に富み栄えていった。

ところが、そんな暮しを続けるうちに、ある年は凶作続き、田畑の作物は実らず、めぐり来た春もその夏も昨年にも増して不作な上に、それに重ねてその年は、たのみの綱の蚕なのに、来る日も来る日も、「なれえ風」という、生ぬるいねっとりとした息苦しい南の風が絶え間なく吹いて、戸を固く閉ざしても蚕は風を感じてか、小さな頭を空につき出しては首をふりふり桑の葉も食わずに這いまわり、繭をつくった虫は数少なく、みんな糸も吐かずに、主の祈りもむなしく死んで行った。

この年の繭造りは今までにないほど出来が悪かった。度重なる凶作と繭の出来の悪さに主はほとほと困り果て、暮れ頃ともなると頭をかかえるほどだった。しかし、奉公人達はいつもと変わらず精を出して働いてくれた。今年は田畑も蚕もだめだった、来年はきっと良い年になろう、堪忍してくれ、と言ったところで承知もすまいがと、一人ごちでいつものように奉公人を集めた庭先で事の仔細を語ってから、これは少ないが正月の小遣銭にしてくれと何がしかの金品を皆に手渡した。この日を楽しみに一生懸命働いて来た者達は、手渡されたものを見て慥然としてその場を去った。話は分かるが、それでも納得が出来ないと、額を寄せてその思案のあげく、新しい年を迎える仕度も美しく整った松飾りのある門口に、夜も更けた頃、皆の寝静みに若い者が声も無く集まると、取り出した物が何んと死者の野辺送りに使う葬具の竜頭だった。

年老いた者たちが止めるのも聞かず、ふりきって、ついに若い衆達は主の門の松飾りの上に、あろうことか彼の葬式具の竜頭をさして寝床にもどった。さて明ければめでたい元旦と、若水汲んで神々にそなえ、ありがだす天道様、今年はなにとぞ良い年でありますようにと拝むつもりで出た門で、年の始めに出会ったものは葬式に使うあの例の竜頭であったことは言うまでもない。

これには主も驚いた。揃って出てきた女房は一目見るなり気が遠くなり、何とも言えない縁起の悪さ、正月中から葬式道具を見ようとは、今年の我が家は何たる悪い年回り、この先何があるのやらと、あまりの驚きに開いた口はふさがらず、おまけに腰までぬけてへたへたと地べたに座り込んでしまった。

しかし主は気丈にも、ふるえる思いで竜頭に手をかけて両手にかかげ持つと、言った言葉が何ともよかった。「なんたら目出たい正月よ。誰がおいてくれたか知れないが、年の始めの今日の日に我が家は大した品をいただいた。竜は立つと言って縁起が良いもの、さっそく床の間へ持って行って神様に供えよう。『物は祝いながら句はつけよう』と言うものよ。こりゃあ目出たい目出たい。」と、待つておくれと止める女房には目もやらず、どうなる事かと戸のすき間や家の角からそっと若い衆が見守る中を、立身出世も願いのままよ、これほど目出たいものがあるかと、正月の明かりのとぼる床の間へどかんとおいて柏手も高らかに伏し拝んだからたまらない。

それを見ていた奉公人達は主の肝の太さにおったまげ、何ともすまないことをしたと、それからますます主のために、朝は鶏とともに跳ね起きて、日暮れにゃあ手元が見えなくなるまで働いた。主は主で、俺あ良い奉公人を持ったおかげで、あぶない年もきりぬけて今年も無事に暮らせたよと、明けては暮れる年月を重ね重ねるその度に、これからもこの家のために一生懸命働いてくれと、両手をついて頭をさげるのが使われ人には又嬉しい。やがて近在にないほど金持ちになったが、分を過ぎて奢ることもなく、人の情になお厚く、旦那、旦那と、奉公人に慕われ暮らし、「事の始めはあの竜

頭」と後の世までも語り残したと伝う。笑い話のようなほんとの噺は栗橋方面での話とか。

「旦那の酒醪（どぶろく）」

昔、どこかに大した大きな旦那が下男下女を何人も雇う暮らしをしていた。雇人というものは、いつも主の為に一生懸命働いてくれるものばかりではなかった。中には主や頭がいなくなったりすると、とたんに仕事を怠けては土手や木陰で鬼の居ぬ間の何とやらと油を売る不届き者も出たり、口ばかり達者な奴がいたりするもので、主も又、日を重ねる暮らしの中で、あの者は口ばかり、彼奴は気立ての良い働き者と、口には出さねども一人一人の気質を心にとめおき、うまく使って働かせて、人を使うとは難儀な事よと、時折溜息をついて腕組をしては常々思索しておったそう。

そうして考えているうちに時節は春となり、今年も田畑の仕事を始まった。霜柱に浮いた麦の芽を女達はぞろり並んでは、畑の端から端まで行ったり来たりを一足ごとにふみしめて麦をふみ、鍬を取り牛馬の為に野を焼いて土と煙や火埃をあびて、面あむろん鼻の穴までまっ黒になりながら働いた。仕事は日を送る毎に忙しく、お天道様あ早くから顔を出し、鶏が朝だと鳴く声にせきたてられては仕事をした。トドの早生蒔き、ホッタ（ホトトギス）の中手、カッコウの晩稲（おくて）と、季節の鳥の鳴く声に仕事を聞きながら畑仕事を進めて行くのだった。田はそんな中でいつしか水が入り、こね回し掻き回して水面が五月の空の青さを映しては、早苗があおあおと若葉の薫る大地に美しかった。早苗は日々天の恵みを受けて伸びて行き、田の草も又稲に負けじと競ってはびこるものだから、男も女子も五月雨のそば降る中を腸（はらわた）まで濡れながら、来る日も来る日も四つん這いになって稲苗の間を行ったり来たり、稲の根元の泥をこね草をむしり這いつくばっている内に、腰は痛くなるやら背骨は板でもそえた様にかたくなり、首も曲げられぬ程苦しいものだった。それだから仕事もついつい手抜きになり、畦から遠い田の中ほどともなればいかげんになる。いつもそうである事を主は知っていた。

その年も仕事頭が田の草取りがやっと終わったと言いに来た時、主は、「ご苦労だった。毎年の事とは言え、うざねをはかせた。今夜は身体を伸ばして休んでくれ。時に、田の中から何か出てきたであろう。」と何気なく問いかけた。頭が、はてそんな話は聞かなかったと小首をかしげれば、主も又、「いや、までに（丁寧に）仕事をしたのなら、きっと何か出て来たはずだ」。頭がなおも聞いてないと言うのを、笑って、「そんな事があるものか、仕事仕舞いに、俺あ、お前たちに飲ませようと酒醪（どぶろく）をひとつ、田の中ほどに埋めておいたはずだ。」と言い出した。頭はたまげて立ち帰り、奉公人にこの事を告げた。皆、顔を見合せ、それとばかりに田にもどり田の中程ほどまで行くと、言われた通り酒醪（どぶろく）が出て来た。奉公人達あその酒をふるまわれた。つい手抜きな仕事をしたことを少々恥ずかしく思いながら、旦那に一本とられたなあと言ひ合ひ、それからは仕事に精出して働いて、その者達あ思い出す度気恥ずかしい思いがして、誰もが二度と仕事の手をぬく事はなかったんだと。

「情け知らずの旦那の末路」

昔、三陸の海岸のどこぞの浜の村に構えのよい旦那がいた。何を生業として暮らしていたかは知らないが、浜に出、海を生活の場としていた事は言うまでもなかった。昔は胡貳（とど）や海豚を追い、海水を汲んでは塩も造り暮らしたと伝えられている。その家には大人からわらしまで奉公人がいて、それぞれが自分の持ち仕事を一生懸命立ち働いていた。主は奉公人や雇人は人とも思わぬか、小指ほどの間違いも目の色変えて怒鳴り散らし、事ある度に胸ぐらを鷲掴みにしては潮風にかれた塩辛（そがら）声をとどろかせた。主のそんな気質を諫める者もなく、雇人達はただもうびくびく暮らしていた。

主だけが肥え太った大きな家には間口の広い土間があり、板敷の間には上がり框の所に一本の柱が立っていた。柱は、四方から戸を建てつける事は八方ふさがりで縁起が悪いと言われ、必ず一方は壁に面して三方を使うのがこの地方の習いであったが、この家のその場所に立つ柱には何を目的としたのか四方ともに建てつける戸もなく、いかにもそこにある事が不思議な柱は、「家の建て損ないと嬢の取り損ないは一生取り返しがつかねえ」と譬え言葉に伝わるから、それは多分大工の図面のひき間違いだったのかもしれないが、一見何の役に立っている風もないその柱は囲炉裏のよこ座から向かいにあり、板の間の黒光りとともに磨き抜かれて黒々としていた。よこ座に座った主が酒を飲み飯を喰らい、酒のせいかわらぬに燃える火にあぶられてか、赤い顔に目の玉あぎよろつかせては土間に立たせた奉公人に罵声を浴びせては、あたりにある物を手当たり次第に投げつけるのが人には当たらず柱に時折当たっては落ちた。

ところで、この家には何処から連れてこられたのか、親もあったのか無かったのか、まだ歳もいかないうわらしが明けても暮れても小言しかくれない主に怯えながら日を送っていた。うまく切り抜ける言い訳など知らないわらしは、忙しくなればなるほど虫けらのように小突きまわされ哀れだった。人々は物陰からそれを見ては、金や力をかさにきて、よくも罰も当たらない。人でなしとはこの家の者達を言わずに誰を言おうかと、心の内に思っただけで暮す毎日であった。ある日、何が主の気に触ったものか、彼の男わらしを引きずり回し折檻した。堪忍してくれと泣いて合わせた両手も主の無情な目には何と映るのか、衿首を鷲掴みにつかんで家の中まで引きずりこむと、彼の上がり框の所の柱にふんじばったまま飯も食わせなければ湯も水も飲ませず、その柱のそばを通るたびに折檻をして、その男わらしはどうとうその場に息絶えた。

あな恐ろしや、人の皮をかぶったばかりの人非人とはあの者よ、今に祟りがあるにちがいないと噂話は口から口へ、人から人へさざ波の様に広がって、いつしか遠い彼方の村々まで聞こえていったその頃に、この家の者たちは一人減り、二人減りして、ついには全部死に絶えた。草むす家敷には訪れる者もなく、やがては誰の手で売られたものかは知らねど、見知らぬ他村へ遠く家材となって彼の柱とともに運ばれていった。後の人々はこの場所を呪われた土と忌み嫌い、家を建てる者も無いと伝う。

「仁兵衛という石工」

その昔、一人者の仁兵衛という石工が他人の軒下近くを借りて暮らしていたという。女房子供がいるでない侘び住居、さみしくないかと人が言うのも笑い流し、一人者の常にあるように色町へ通うでもなく博奕を楽しむでもなく、起きては石と相撲をとり、石と語り、夕暮れにはまっすぐ部屋に帰ってくるという真面目を絵に描いたような暮らしぶりであった。仕事をしては錢を貯め、それが何よりの楽しみでもあるのか、それとも心に期するものがあるものなのか、人に心の内を明かすこともない仁兵衛のことを、口さがない世間の者がいつも好き勝手に、夜毎に錢を数えて楽しんでいるのであろうよとか、大した小金を貯めているのであろうと、戯言を言うのであった。そんな人の話の度重なるうちに、ある者は錢の無心にすがりたがった。「女房子供のいない我が身一つを賄うおめえの暮しをみこんでの頼みだ。」と何度も言われても、この男、気にする風でもなく笑っては、出来ないかと相談と受け流し、今日も今日とて何が楽しゅうて一人暮らしの侘び住居、膝にあてた繕いの針目までもが一人暮らしを物語る。

その後、何年も歳月は明け暮れ、相も変わらず人の家の一部屋を我が家と暮らすうち、突然何がおこったのか誰に看取られるわけでもなく、いきなり、「くにがえり（死んでしまうこと）」をしてしまった。家主や近所の者達が集まり、大槌に身巻き（血筋の者）がいると聞き知っていたものがいて、そちらの方面にも手をうち、やがてさみしいながらも野辺の送りもすませ、主のいない部屋は人の手によって片付けられる事になったが、あれほど人の噂の種となり花を咲かせた仁兵衛の小金はどこからも出なかった。小遣いにでもしたのか、仕事着のかくしから垢にまみれた巾着の中に小錢がほんのわずか出たっきり、錢など不思議なほどどこにもないのであった。仁兵衛の常を見知る者は首をかしげたが、その訳を知る者は一人もなかった。

そのうちに出まかせ好きの世間が、家主が盗ったのであろうと誰言うとなく囁いた。見ている今に天罰が下るに違いない、神様あみんな知ってござるよ、と人の間に広まって言い合ううちに、何としたことか、ここの主が急にぼっくりとみまかった。野良着姿のまんま、畑仕事の途中でのことであった。噂は、それみろ後の罰はたちまちと言うもんだ。あそこの者あ、これからもきっと布団の上で死ねまいよ、と誰言うとなくうなずき合うのを九十もすぎた爺が聞いていたが、「古より人の怨みは七代までもと言うものだ。盗った話が本当ならば、これから先の世もきっと布団の上では死ねめえな。」とつぶやいた。

このことが本当か嘘かは誰も知る由もないが、この家の者は主となる者が若い働き盛り、弱くなったり急死すると言われ、仁兵衛の怨みであろうと言い伝えるという。その後も、この家の主は山仕事の汗にまみれた姿でかつぎこまれ、その数日後亡くなってしまった。昔の話を聞き知っている者は、何とも恐ろしいもんだと思ったと伝う。

「遺恨末代まで」

昔は日々の生活を楽しむ余裕など、誰も持てないほど貧しかった。朝日より早く起き、日暮れにあ一番星がまたたくまで働いた。人より遅くまで働く家の家号をその早く出る星に名づけ、某っ星（なにがしっぼし）が出るまで今日は働いたと、ついつい続けた仕事の手をおいて家路を急いだものだった。しかし、そんな者だけあるとも限らず、たか昼間（まっぴるま）一つ家に集まっては賭事に夢中になり、日に夜をついで遊びほうけるやからもいた。夜の深けるのも知らず朝日の昇るのも気付かないほど我を忘れ、負ければ元をとろうとやっきになり、勝てば勝ったで人の欲にはきりがなく、酒で景気をつけながら夜っぴて花札賭事に熱を入れ女房も子供も忘れる愚かさを、働き者は顔を見合わせ肘をつつき合って眉をひそめた。

博奕には男ばかりではなく女子衆の中にもそんな集まりがあつて、嫁や家の者が野良へ出て行くと年いきの女どもが集まれば、胴引きといわれる賭事に興じ、男顔負けのその有様については役人の知れるところとなり、村街道を後手に縛られて引かれていく者が出る始末。それでも博奕をする者は後を絶たなかった。

ある村の一角にいつも博奕場を開いている家があつて、近在から集まった者達が昼夜我を忘れて興じ、勝った負けたと大騒ぎをし、酒にてらてらと顔を赤らめて、仕事などせずとも金は稼げるわいと働き者をせせら笑って、どっぷり首までつかった博奕場から時折出てきてはお天道さんをまぶし気に見上げ、大欠伸をしながらながながとあたりの草むらに、牛のしょんべんのようにあたりかまわず小便をすると、出てきた木戸を開けてうす暗い中へ入って姿を消すのだった。

いつの頃からかはとんと誰も知らぬぐらい遠い昔、そんな博奕好きの男が道の端に冷たくなって転がった。それからしばらくして又一人、又又一人と時を置いて死人は後を絶たなかった。しかし手元を見聞きした者は誰もなく、その刃物傷が後ろから一突きというのを噂に聞いて、誰言うもなく博奕で儲けた者が殺られているのではあるまいか、懐には銭が一つも無いそうな、と目ひき袖ひき言い合った。

後ろから一突きに殺しては懐の銭を盗るのだと、人の口がきつとあの家の者よと言ひ合い暮れるうち、博奕場はいつしか寂れ果て出通う人も疎らとなり、ついには人影が途絶えた。傾いていく風返し（破風）をながめつつ、人々は口々に、恐ろしや恐ろしや、悪いことは出来ないものよと肩をひそめて、後々までも遺恨となって残るにちがいない噂は言草（ことぐさ）となって残り、身を粉にして働いても立ちゆかないこの世の定め、何んで遊び呆けて後の世に浄土の蓮華の上に座れようかと、働き者は瓜に灯をともし思いで細々と命の灯をともしつつ、土にまみれて暮らす日々。

それから時は流れ去り、山田の関口川の鮭の番家に、誰に何をされたのか子連れの子が、男はすでに事切れて、子は虫の息で転がっていると、通りすがった者が街道話に立ち聞いた。立ち寄ってみれば、なんとそれは彼の博奕場に最後に残った親子であった。まだ年もいかなない女子わらしを連れた男、今やその子も息は事切れて冷たい骸（むくろ）となって土の上に転がっていた。街道をとって返したその者は、村の旦那に事の次第を告げた。主は何人の生まれをしていようとも、その死ぎまは哀れな事よ、何処ぞの片隅にでも葬ってやろう、連れて帰れとその者に言いつけた。大八車に箆をしいて街道をひかれてきた身寄りのない親と子は、主の熱い情にその主の山裾を安住の地と定められる事となった。墓石も野辺の石をもってたてられ、後の世までも盆に

なれば人の手で花や香を手向けられるが、不思議なことにこの墓の前には野の草も生えないと伝う。

「呪う者と詛われる者」

ある時、二人の山主が山の峰に立ち、相互いに境を論じては言い争って一步も譲らず、片方がここが境といえ、片方は、いんや山の峰を下ってここまでが俺の山、と話はいつも物別れに終わって山を下るものだった。

そうした年も秋となり、はや山々には雪が粉をふりかけたように、ぱやりと降る頃となった。片方の山主の許しを受け、一人のマタギが鉄砲を背に罾を仕掛けてはテンやイタチを獲りに山に通っていた。獣の足跡をたどり罾を見回って歩くうちに、ある時ふと行く先に不思議なものを見て足を止めた。誰が置いていったのか、人も通らぬ山中に藁人形に五寸釘の打ち貫いたのが打ち捨ててあるのであった。「いったい誰が・・・。」と一人ごちて、呪いごとがかけてあるにちがいない一体の人形のもの、言わぬ姿の無気味さを初めて見て、思わず知らずぶるっと一つ身震いして、「何んの恨みで、何ゆえに・・・。」と、足元に見下ろして見つめているうちに、主の身体が安じられてならなかった。

不安な胸中をおさえて急ぎ山を下り、家敷内に主を訪ねた。何事ぞと顔を出した主に事の詳細を語ると、主が言うことには、「立ち止まってながめてきたとは何とも愚かな者よ。そんなものに出合った時あ、たんぺえ（唾）を吐いて急いでその場を立ち去るもんだ。二目と見るもんでねえ。誰がやったか大方の察しはつかぬでもない。気にするな、俺あこの通り元気にしてる。『正直の頭にやあ神が添う』と言うではねえか。捨てておけ。」と両腕を上下させて見せると、笑った後に真面目になって、よい機会だ聞いておけと男に語って聞かせた。

「人を呪わば穴二つと昔の人は言い残す。めったなことでも呪い事などするもんでねえ。呪いをかけるはたやすいもの、だが解くのは難しい。さりとして、そのまま打ち捨てておけば、呪いはやがて我が身にかえって仇をすると伝うものよ。」と言いながら、我が身を安じて猟も途中で急ぎ山を下りて来たらしい男の心根に、我もまた思いを深くして、温まって行けとあかく燃える囲炉裏の火を指した。それからしばらく後のことだった。風の便りに主の耳に、彼の言い争いをした山主の嬢が、家の階段踏み外し足の骨を折る大怪我をしたと聞いたのは。

「生き木に釘を打つもんでねえ」

ある時、何の呪（まじな）いだったのか、主の遠く離れて留守な土地の、一本の枝葉を広げて立つ樹木に、麻糸を巻きつけた五寸釘が打ってあった。それを見たものはどんな願いの秘事ぞと思えば、身もすくみ手にかけることが出来なかった。すると、そこへ一人の男が通りかかった。兄さん、兄さん、誰の仕業かこんなことがしてある、

と指し見せた。男は見るなり近寄り、「生き木にこんなことするもんでねえ。」と言わざま手をかけ、ねじりねじり、ついにはその釘をぬいてそのまま後も見ずに立ち去ってしまった。この時の男の気魄には、ただただ恐れ入るばかりだった。

「はや桶に入らなかった父親」

昔、ある村に膝の曲がらない不自由な父親がいた。貧しいながらも子供らも元気に育ち、やがて男わらしは父親の片腕となって粒揃いの若者となった頃、父親はまだ深歳（ふかどし、高齢のこと）でもなかったが死に足早く終ってしまった。何でいまから逝くのかと取り縋ったが、それも甲斐のないこととて、涙のうちにも嬢も娘も倅達も永の別れを惜しみつつ、野辺の送りの仕度をせねばならなかった。嬢は近所の女房達に手伝わねながら、ひと針ごとに思いをこめてお仕立をした。尻を留めない縫糸は縫返しもなく、糸尻を留めて縫ったり返し針を使うと死者はあの世へ旅立せず、この世へ縫い留められて苦しむのだと昔からこの地に言い伝えられ、集まった女子衆は、目尺ばかり指ばかりに長さを決め、そっちこっちから一つの布を取り合って縫うのもこの日限りと戒められていた。

こうして出来た死出の旅路の一重ねは、禪、肌着、襦袢、袴、黒羽織と心をつくし、汗ふき、手甲、脚絆、底なしの足袋に小遣い入れと穀入れの袋の巾着と続き、草鞋の足の裏にはしっかりと銭を縫い付けた。あの世で数多の無縁仏に巾着を盗られても、草鞋の裏に隠した銭は無縁仏に気付かれず、本人の使う銭になるのだと伝う。すべてが揃うと、肌着から羽織まで袖を通して重ね、袖畳みにして北枕に置かれた臥し所の足元の、逆さ屏風の上へのせられた箒の横へかけられる。縫い物というのは出来たらきっちり正しく畳み、針箱や鋏などを上におき、一時を置いてから肌身につけなければ、死出の門出の着物と同じになるのだと伝う。

やがて肉親に身体を洗ってもらい、髭剃りをし、棺に入れる時が来た。ところが気が付くと、父親は悲しいかな生前より膝の曲がらない不自由さ、早桶にはどうしても入れる事が出来なかった。その頃の棺は丸い桶の形をしていて、死者を座らせて葬ったのであるが、どうしても長く伸ばしたままの足が如何ともしがたかった。考えあぐねる人々の目の前で、早桶に入らない父親の膝は鉞をふりあげてたたき折られ、こうして父親は早桶の中に入ったのだ。人の心にその出来事は尾を引いて残った。やがて時は去り、これも現世の定めであったのか、逝った父親への非礼の所行ゆえか、四人の倅達は時をへだてて不運にも怪我や病気で足をひきづる片端になってしまったのだと伝う。

「呪（まじな）い事の解けなかった男」

世間には不思議な術や呪い事の出来る者がいるもので、昔は遠く彼方の海上に行く船を祈祷で止めたり、野を駆ける生き物の足を術で止めたり、人の心を見通したり、

先のことを読んだりする事の出来る者がいたのだという。

そんな力のある二人の男が互いに、自分が上だ、いや俺のほうが術が勝っていると
言い争ったあげく別れたが、おさまらない男が口惜しまぎれに呪文を唱え、遠く離れた
先の相手に呪いをかけた。ところが、人間にかけたつもりだったのだが、何の弾み
か、あろうことか相手の男の馬屋につないであつた馬にかかつてしまったのだ。馬は
わけもわからない病にのたうちまわり、医者も伯楽も、手の施しようもなかった。横
倒しになったきり荒い息で、全身に流れる滝のような汗のしたたりを、主は布で拭い
ながらすすすもなく、我も手に汗握って固唾を呑んで見守っては溜息をついた。一
つ屋根の下に暮す馬は血肉を分けた者にも等しく、片腕となって働く雄雄しい姿は兄
弟とも倅とも思い来たものを、わけもわからない病にとられる命なのか、しっかりし
てくれと声をかけては涙ながらに何も悪い食物も食わした気も無いのだがと、途方に
くれた。

やがてそのことは呪文をかけた男の耳にも届いた。俺としたことが罪科もない生き
物にかけてしまったと慌てふためいて解こうとしたのだが、何としたことか何度も祈
ってみたもののいっこうに術を解くことが出来なかった。思い悩んだ末に関谷の男を
思い出した。急ぎ来て事の仔細も言わずに、ただ知り合いの馬が実はこのような有様
で気の毒だ、何とかそなだの力で楽にしてやってくれと願ったのであつた。

不思議な眼力を持つその男の名を、とうぞう爺と言ひ、この男にかかれば腹病から
歯病までびたりと止めるとの噂も高かつた。入り口に立った男をまじまじと見つめて、
とうぞう爺が、「その馬あ病気ではあんめえ、誰か呪いをかけた者がいるな。」と言ひ
当てたからたまらない。男は身もすくむ思いで小さくなって、実はこれこれしかじか
と事の仔細を打ち明けた。そうだろう、愚か者とはお前のような者を言うのだと言っ
て叱ると、何やら祈っていたが、これでよい、お前が行き着く頃にはきっと元気にな
っている事だろう。見届けて来い、と言われて門を出た。老人の言ったとおりに、馬は
不思議な事に嘘のように元気を取り戻し、家の者は何がなんだかわからないまま安堵
の胸をなでおろしていた所に、男は行き着いたという。

「六部の話」

先に。六部とは六十六部の略なのだそう。全国六十六ヶ所の霊場に法華経を納め
る目的で廻国巡礼をする行脚僧であつたが、やがて江戸時代の頃には俗人も行ひ、男
女とも木綿の着物に手甲、腹掛け、股引、脚絆のいでたちで、死後の冥福を祈るため
鉦をたたき鈴を振り、家ごとに銭を乞ひ歩いたのだという。厨子を背に門口で家に背
を向けた姿で立ち、モガモガとなにやら唱え鉦を叩いたのを子供の頃に見たものだ。

その昔、ある家に一人の六部が回ってきて一夜の宿を乞うた。主は快く受けて囲炉
裏の火を大きくして、ささやかながら旅の僧を心からもてなした。心良い居心地の良
さは一膳の飯にもまして有難いものだったのか嬉しかったのか、一夜明けて上がり榎
に腰を下ろして草鞋のひもを結んでいたが、立ち上がると、又いつの日にかこの地に
巡って来た折は一宿願いたいと頭を下げた。主は笑いながら、こんなむさい所、何も

無い、炉の火が御馳走なこんな家で良ければいつなりと、と答えた。すると背にして来た厨子の中から金無垢の小さな観音様を取り出すと、願いついでにもう一つと主の両手を引き寄せて、預かっていてくれと、その御姿をただ驚き畏れる主の手の中におくと、別れを告げて立ち去っていった。

主は思いもかけない預かり品を何処に置くか迷ったが、床の間に置いて大事に心遣いながら日を送った。それからというもの、旅の僧は一年ごとに忘れずに必ずこの家に草鞋を脱いで歳月は暮れたが、彼の品は床の間に置かれたまま。主がその話をするたびに、又来るからと言いながら行脚僧は旅立っていくのだった。

この六部が来るようになってから不思議なほどに富み栄え、近在きっての大家となった。が、そのうちに人の命には限りがある。主は年老いて冥途へ旅立ってしまった。世代は倅の代となった。いつものように巡って来た僧の前に立ちはだかると、父親の亡くなったことを告げながら、この先この家を宿と思わないでくれとすげなく言葉を続けた。物も言わずにじっと聞き入っていたが、あい分かり申した。ついでには主に昔預けた品があるはず、あれを返して頂きたいと言った。六部はこうして観音様を受け取ると、何処とも無く立ち去って、再びこの家を訪れることはなかった。

後に、関口街道沿いにあった一本の大櫨の根元に、この六部が何者に殺られたのか冷たくなっていたが、その懐にも厨子の中にも何も無かった。それから月日は流れ流れた。彼の宿にした家は不幸が続き、途方に暮れてイタコに願って神おろしをしたところ、昔あずけられた観音様が出られ、この家に帰りたいと言ったのだが、杳としてその行方はわからなかった。うち続く不幸にたまりかね、またもや神おろしをすると、彼の行脚僧が出て供養してもらいたいと言ったのだと言う。そこでこの家では、関口の大櫨のそばに墓を立てて追善供養をした。この墓のあるところを土地の人々は、ほいどう墓所とよんだ。

「六部と虫封じ」

ある時、六部が戸口に立つと呪（まじな）い事を申した。そこの家の嬢が貧しいながらも米櫃から米をすくって皿に入れて差し出したのを、前に下げた頭陀袋の口をあけてさらさらと流し入れて、ひとしきり祈っていたが、祈り終わって戸口から家の中の板敷の間の親の足元で遊んでいる幼児をじっと見て、この娘は、と口を開いた。ずいぶん虫の強い童女のような、一つ呪（まじな）ってやろう、硯と筆を出せ、と言う。言われてみればその通りで、四つつになった娘は小さな頃より虫が強く、遊びの途中でもいきなり何やらわからない仕草をして正気を失い、板の間や地面に気を失って倒れこむ娘であった。そんな時は手のほどこしようもなく、そんな時あタワシのしたたれ水を飲ませろの、やれ舌をかまぬ様に箸をかませてやれのと、村の婆達が言うのだった。そんな時には慌ててゆすり起こしたりしないものだと言って、そっとしておくとかやがてぼんやりと夢からさめたように起き上がり、そのうちに何事もなかったように遊び始めるのだった。

常々心を痛めていた親は六部の眼力に驚き畏れ、言われた通り粗末ながらも硯と筆

を出してその前に置いた。家の横を流れるせせらぐ小川で筆をぬらすと、その一滴を硯の上にしたたらせ墨を何度か動かしていたが、当の娘を招き寄せると片手を出させ、手の平に呪文をととなえながら何度も何事かを書き重ねた。それが済むと、小さな指を一本ずつ折り曲げ、自分の大きな手の中にしっかりと包み込んでしばらくの間祈っていたが、やがてにぎりしめた両手の中から出した手を、今度は一本一本、何が始めなのか親指からでもなく小指というでもなく、次々と指を起こし、もみじ葉のような手に静かに長い息を吹きかけた。

何事をするのかと固唾を呑んで見つめる親の前で、見ている、この娘の指の先から虫が飛ぶと言いながら、さらに呪文を唱え続けると、なんとも不思議なことに娘の小さな指の爪先から猫の毛のような細い糸くずのようなものがゆらめきながら立ちのぼり、指の先を離れたと思うせつな、かき消すように見えなくなっては又動き出すのだった。ひとしきりそうやっていたが、この娘の虫の強いこと、これでもまだ足りないとつぶやいて、もう片手を出させて取ると同じ事をして祈っていたが、顔を上げると、今度こそ良い、もうだいじょうぶだと言いながら、戸口に立てかけておいた厨子を引き寄せると背負い、なんといいのやらまごつきながら、ただただ、おおきに、おおきにと言う親に、笑って見せてそのなりに行ってしまった。

それからというもの、その娘は二度と正体もなく倒れたり、わけもわからない仕草をすることもなくなり、親は安堵の胸をなでおろしては、あの名も知らぬ行きずりの行者を思い出した。そばで見ていた姉嬢も、この日の光景をいつまでも忘れずに思い出し、言草（ことぐさ）にもあの六部が又来たら何かお礼がしたいものと親とともに心に思っただけだったが、いくら待っても巡っては来なかった。年老いて、どこぞの空の下で亡くなったのか、二度と合い見ることはない彼の六部を思い出したたびに、年のいった人だったもの、死んだのかもしれないと言い合っただけで暮らしたのだという。

「まやまつりのはなし」

この地方には、まやまつりと人に呼ばれた祈禱師がいた。まやは馬屋のことで牛馬の畜舎を祭り、村から村を巡って旅に行く時には蒼前様の「幣」も切ったものだそう。巡ってくると、人の住む入り口ではなく馬屋の木戸口に立って、そこに住む牛馬に向かって祈るもので、この祈禱師も不思議な力と術をもって世を渡る者の一人として人々に畏れられていた。祈禱で牛馬の病を癒し、あわせてその家の繁盛を祈るとも言われていた。

が、ともすれば俗人もこの姿を真似て家の門に立って物乞いをするやからもあって、人々は見分けられないこの者達を、「触らぬ神に祟りなし」と、きめてかかって問いただす者もないのだった。すげなくすれば後が恐く、貧乏人が分を過ぎて施しをすれば、無くて有るふりをする愚か者と見抜くのだと伝えられ、人の心や腹の中を読むことに優っていたのだそう。それゆえに、六部同様、まやまつりが門に立ったら要らぬ口をかす（必要以上に話を交わす）ものでないと、いつも子供らも戒められたものだった。そんな子供らに親はこう言って聞かせた。「ほいどう（ものもらいに来るこじき）

か、まやまつりかは、わらしにはわからなくても、神様あちやんとわかってる。今日は誰もいないと言えば、帰って行くもんだ。」と。そんなある日、子供が馬屋の木戸口に立って呪（まじな）い事を申す彼の男に、今日は誰も人がいないと告げると、まじまじと見つめて、お前は人ではないかと笑って立ち去って行ったと昔話は語り残す。

ある時、そのまやまつりが木戸口に立った時、その家の主は酒に酔いしれて座っていた。俯きかげんに首うなだれていた面を、そのままに眈（まなじり）だけを斜にあげて睨（ね）めつけて、あろうことか、「人も我もわからぬ呪（まじな）い事など、この家にはいらぬ。早々に立ち去れ。」と、濁声も荒々しく言葉を投げつけた。虫の居所の悪い自棄（やけ）酒でもあおっていたのか、酒に呑まれる男であったのか、気難しくからむ主にやおら彼のまやまつりが主の言葉尻をつかんで、かつと見開いた眼光も鋭く目に口をついで、「おう、それならば要らぬようにしてくれよう。」と言いざま声高く、口早に何事か唱えた。その目つき、顔つきは、言葉以上のものをもって主の胸の奥底をえぐった。背筋も凍りつくような呪（まじな）いは、ほんの一時の出来事、身をひるがえしてその男はその家の門口をはなれ、暮れかけた夕もやの中に溶けるように見えなくなった。

空はおぼろな月が雲間に霞む春の日だった。主は一瞬の息つく間もない成り行きに持った盃をにぎりしめたが、気を取り直して、「勢いに祟り無し」と鼻っ先で「ふん」と一掃して一息に酒をあおった。しかしその年の暮れかかる頃、何の因果か不幸にも主はあっけなく身罷ってしまったのだった。

「織笠村のかっくれえ坊 一」

織笠のどこかにずっと昔、かっくれえ坊と人に呼ばれたぼさまがいた。ぼさまとは盲人のことで、かっくれえ坊は薄明かりぐらいは感じる事が出来たのか、丈をたよりに街道を行き来した。この男も不思議な力をもっていると人に言われ、人の家の門先に立っては物乞いをした。何か祝い事があると聞くと必ずや姿を見せ、一言の祝を申しては祝物の施しを受けて立ち去るのが常だった。すげなく断ると後に良からぬことが起きると誰言うともなく言い知られ、気丈に追い払う者など一人もいないのだったが、時にはその凶々しさに嫌気がさして良く思わない者もあった。そんな人の心は知ってか知らずか、いつも街道をふらりと行く姿は、足の向くまま気の向くままに頓着なしのおかまいなし。

そんなある時、ごんべえという男が新しく家を建てた。近所の衆が集まって手伝い屋根板を打ち、その上に青や赤と五色布をふきながし、女子の帯と櫛にその家の嬢の髪を建家の守りにおさめ、赤い魚や御神酒を供え、大皿に盛った豆とがらを箸でかき回し、末長くめで息災でありますようにと主や頭領が柏手の音も高々と頭をたれて神に祈った。そうして下で両の手を広げて待ち受ける者達に四方の隅から餅をまき、板囲いも未だな床に仮の板をならべて、手伝いの者達が座るとささやかな宴が始まった頃、風に吹かれたか、ふらりと来たのが彼のかっくれえ坊だった。祝も酣（たけなわ）な頃を見計らったように現れた彼の者に手伝いの女房どもも、家の者も、いやな

顔をして、こんな時ばかりと陰に隠れてぶつくさと口の中でも胸の内にも思いながら、そうは言っても追い返すわけにもいくまいとあしぎまに言いつつ、わずかな物を与えて追い払った。人の世に「目は口ほどに物を言う」と言うもので、そんな者達の心の内を見抜いたのか察するのか、帰り際に建家に向かって祈っていたが、何ともいやな物言いをした。

「ごんべえは家を建てて喜んで。末にあ川さ飛び込んべえ。」と言いつつ門を出て行った。何とも知れない後味の悪さ。祝の席に水を差されて、どの顔も聞いていた者は一味、胸元のあたりが、喉のあたりが妙な心持ちにはなったが、「あんなぼさまの言うことなど、いちいち心を痛めていたら・・・。」と、互いに打ち消して、目出た目出たの酒をつぎ、その日も何事も無く終わったのだった。日を重ね、ごんべえの家はすっかり出来上がり、新しい木の香もかぐわしい中で正月を迎え、次の年は春から大雨続きの長雨で、一雨ごとに川の水は嵩を増し岸边を洗った。川の淵に建てられていた彼のごんべえの家は、ごんべえもろとも大川の水に吞まれて跡形も無くなった。

かっくれえ坊の言った通り、ごんべえは水に命を盗られてしまったのだった。

「織笠村のかっくれえ坊 二」

ある時、海辺の何処かの村で船下ろしの祝があった。船下ろしとは新造船を始めて海上に浮かべる時の儀式のことで、御神酒やお供え物を神に捧げ船の上から餅をまき、船の大漁安全を神に祈願した。又、この時は、幼い女子わらしの髪の毛を御船霊（おふなだま）として祀るものだと伝えられていた。男だけ乗る船は、穢れない利発な女子わらしを守り神にすると吉相になり、船は大漁をするのだという。漁に出るとそのわらしも一人とみなされ、おかげで今日も大漁だったと必ず魚の分配が形だけでもあったと昔語りは伝えている。

主は船が出来るまで労苦を惜しむことなく働いた者達、丸太から一枚々の板を挽き割った木挽の頭や船大工の頭らに、親戚縁者を招いて酒をくみかわし歌い踊って祝の宴をする。その日の宴も酣（たけなわ）な頃、いつものことながら彼のかっくれえ坊が何処ともなく現れた。それを見て、それぞれ、かっくれえ坊さもやってけどごぜえと、そこの家の嬢さまは鏡餅を出してきたが、手伝いに来ていた女子どもは、あんな男にまるっこ（全部）やるのももったいないと、鏡餅を半分に切って片方だけかっくれえ坊に渡したそうだ。すると半分だけの餅を手にしていたが、「十五夜の月に三日月無し」と言って立っている。忙しい中にもそれを聞いたそこの嬢さまは急いで女子どもが半分残した餅を手を彼の坊主の前に行くと、笑顔もにこやかに応対して言った言葉がなんともよく思いついたもんだ。「雲にかっくれえて又一つ」と、その半分を先の半分の餅に重ねて満月に見立てた。するとにっこり笑って祝の言葉をのべて立ち去っていった。後にその船は沖へ出て行くたびに大漁旗をかかげてもどってくるものだったと伝う。

「百舌の串刺（くっさす）と大漁船」

モズの串刺しとは「モズのはやにえ」のことで、秋にキリキリと声高に鳴くモズがイナゴやカエル、イモリなどの小さな生き物を、小枝などに串刺しにしているのを見かける時があるが、その干涸びた死骸のことをモズのはやにえと言い、何故かは知らないがこれを見つけたときは、たとえ夫婦の仲とはいえかたく口を閉ざし、一人密かに誰に知れることなく船に入れ、人の足に踏まれない所へ祀れば、その船は大漁するのだと伝う。

「帰らなかった新造船」

昔、船下ろしがあって、招かれた皆の衆によって掛声もにぎやかに艇をかい網を引き、新造船を海上へ誘った。が、どうしたことか思う様に行かず、船が海辺に下りるまでの難儀ははしたなものではなかった（苦心さんたんたること）。集まった人々は苦勞の末にやっと船を海に浮かべたが、一抹の不安が胸をよぎり、何事もない様にと案じた。その後、船出したきりふたたび港へ戻らなかったと伝う。この船は鰹船だったそうだ。

「影が消えた母親と元気になったわらし」

昔、ある所に子が生まれた。待ちに待った男わらしに親は大いに喜び、これで跡取りも出来たと、毎日の仕事にも精が出る。が、生まれた子は弱く生まれついたのか、ぼんやりとふいた風にあてても、すぐ風邪だ熱だと医者通い。その上、何ゆえか夜通し泣いて、母親は床の上に座って赤子を抱いてはあやし、帯をとく暇もないのであった。畑仕事も夫の手伝いもなげうって、生まれたばかりの赤子を胸に抱いて無我夢中のうちに、身も心も疲れ果ててしまった。

ぼんやり日向に座って膝の子をあやししながら怪しい夢にさそわれた。何処かの細道を子を抱いて行くと、今は亡き爺に会って話をしたり、道端の石仏のあるあたりをぼんやりと行く自分に気がついて、何ゆえに此処にいるのだろうとあたりを見回すと、身体は家の板敷の間に子を抱いて座っているのであった。はて夢でも見たのかと、気を取り直して座っても、又少しすると浅い眠りの中にまどろむ心のように、彼方此方を子をあやしてさまよう心持ばかりして仕方がない。面やつれした顔は血の気も失せ、身体は物憂げに日々力が抜けていくような気がするが、夫の飯の仕度や子の世話と、泣く子をあやしては重い身体を引きずるように日を送った。

そんなある日、杖にすがって、生まれた曾孫の顔を見に来たと、遠路を船で婆様がやってきた。その日もお天道様はてかてかと照っていて、今洗ってかけたばかりの子供のしめし（おしめ）や夫の洗物が竿ではためく音もない。次々と干される洗い物を、赤子をあやしながらながめて座っていた婆が、子の親に声をかけた。「時に、おめえ、

ゆまぎをあでいでえすか（腰巻をしているのかい）。声をかけられた母親は、何と
いうことを言う婆かと目を大きく見開いて、「何たら事。」と言ったきり言葉を続ける
気にもなれず呆れ返って婆を見た。すると笑い顔も見せずに横を向いて、「あででいれ
ば良い。」と言ったきり口をつぐんだ。

また、しばらく念を押すように声をかけて、「本当にゆまぎをしてるみすか（してい
るのかい）。」と問う。母親はたまりかね、顔つきに物を言わせ、きつとして嘘か本当
か見せますと、着物の裾に手をかけてめくりあげようとするのを押しとどめ、してい
るのならそれで良い、言いたいことは別のことだと、眦（まなじり）をあげ語気も烈
しく言葉を続け、地面を指してこう言った。「この天道様の照る日中、干物の影は土の
上にくっきりあるのに、お前の影が何処にある。さがして見どごぜえ。影のねえのは
死人だけでえす。こんな弱いわらしをかかえて、あっち（冥途）さ片足、こっち（こ
の世）さ片足、そんな心で何とする。氣いしっかりもってふんばつとごぜえ。」と言わ
れて、母親は頭から冷水を浴びせられた気がして、全身を冷たいものがはしり膝はが
くがくとふるえ、立っていることも出来ず、まして涙で影など見定めることも出来な
かった。

こうして母親は婆に救われ日を送った。しかし、子供はいつまでたっても弱く夜も
昼も泣き明かした。そんなある日、医者へ行った帰りに親子は一人の女子に道連れし
た。その女子は道々こんな話を語ったのだった。「私の主が風の便りに聞き知って、あ
まりにお前様が気の毒と勝手ながら神々に祈っておりました」。固唾をのんで次の言葉
を待っていると、「お前様の身の周りの、このような所に行けば、きっと拾った刀があ
るはず。その刀がさわっております。」と言われてみれば、心に聞いたことがある。急
ぎ帰って夫に話し、そこに出向いて訳を話して祈禱してもらった。神の加護か、命俵
（いのちだわら）をもらって生まれてきたのか、弱いながらも日を送り十才にもなら
ないうちに元気になって、母子ともにあの頃の苦労が夢の事のようにだった。

「今生の暇乞いに出かけた婆」

ある家では婆様がよる年には勝てず、長寿とは言われながらも今日か明日かと子孫
に見守られ床についたときのことだった。

夜も深けて家々に灯る明かりも皆消えはてたが、床を囲んで誰も皆同じ思いに立ち
去りかねて、今一度声が聞けるか、眼を開けてくれるかと、薄れていく命を見守って
いたとき、婆様は大きなため息とともに目を開けて、どこか気持ちよさそうに薄笑い
を浮かべた。枕許から俵が覗き込んでどうしたと尋ねると、「いや、なになに、何ん
でもないが、今世の中を歩いてきたのだ。」と笑った。「この世の別れと思って、山田の
生まれ里の者達とひとこと言葉を交わしたいと揺すり起こしたが、何としたことか、
いくら呼んでも起きてくれない。終いにああまりの情けなさに腹が立ち、腹立ちまぎ
れに台所の水瓶の蓋を思いっきり鳴らしたら、案の定やつと気がついて、皆、何事が
起きたと跳ね起きてきたから、そりゃ見どごぜえど思ってな、ああ歩いだ歩いだ。ど
っこさも行ってきた。今こそ歩き終わってすっかり疲れたが、心持の良い事よ。」と笑

って見せた。

居合わせた一同、顔を見合わせて涙に暮れ、倅がさからわず上手に合わせ、そりゃあ良い事をした。安堵して眠って休む方が良い。体あ休ませるにあ眠るに限る。俺あ此処にいつか用があったら呼べばいいと、顔は涙でぬらしながら笑って受けた。それを聞くと頭をふって、「起きてなどいなくてよげえす。皆、眠どござえ、俺も眠んみすが。」と、笑ってみせて眼をつむり、何とそのまま秋霜に萩の葉がこぼれる如く世を去った。

涙ながらに人々は大往生だと言いつつ、葬式の仕度をしながら昨夜の婆の言葉を思い出し、何処へ行ってきた気持ちになっていたのやらと、年老いてなお望郷の念に駆られる女心を想う。何歳になっても女子は生まれた里が恋しいと見える。会いたい、見たいとも言わなかったがと、肩を落として頭をたれて、元気なうちに今一度連れて行ってやればよかったと、倅がつい落とした親思う涙が涙をさそう。

そのうちに知らせを聞いて未だ来ていなかった者達が、山田の婆の里からも寒風峠（川代から石浜へぬける峠）を越えて馳せ寄った。大往生だったと言いながら男泣きする倅に、百になってもこれで良い日は無いものと親の別れの悲しさをなぐさめながら、実は昨夜は、と切り出した。真夜中に水瓶の蓋が恐ろしいほどの音を立て家中の者が飛び起きて見たが、猫の仔一匹いるでなし。本当に不思議なこともあるものだと言うのを聞いて、顔見合わせて婆の言葉を思い出す。

「せつない別れをした男」

昔、女房に死に別れた男がいた。働き者の元気な女房だっただけに、急な嫁子の死は、舅、姑にも惜しまれ、まして当の亭主の落胆ぶりは見るも哀れな嘆きよう。残された子供らは、末は今生まれたばかりの赤子で、去り行く者も子供らに思いを残し、後ろ髪を引かれる思いで苦しい息の下から一言、わらしを頼むと事切れ、医者を呼ぶいとまもなく逝ってしまった。親類縁者が集まり、残された男と子供らが大きい順に頭をならべ、とりすがって泣くのを見ては皆もらい泣きして、その哀れさに家ん中では蜂の巣をつついた様な騒ぎだった。上を下への大騒ぎのうちに、あれよあれよと野辺の送りも済ませ、手伝いに来た者たちも皆去って、後には乳をほしがる赤子の泣き声ばかりが、胸の中にぽっかりと大口を開けた底なしの闇の中でたまらなく、男は物陰に涙をぬぐった。

途方に暮れながらも、残された者達は今日も明日も働かなければ生きていけない日が続く。その日も男達は山に行き、女子達は畑に出ていた。小昼（いっぷく）になって、畑仕事の女子達は姑の心づくしの一口に腰を休めていた時の事だった。弟嫁が彼方を眺めて、あれあ、そこにええな（義兄）さまが来たと立ち上がり、引いた荷車が重そうだと急いで迎えに出たのだった。家に続くその道は木立で見え隠れして、言われてはじめて彼方を眺めた者達の前で小走りに出て行った彼の弟嫁が、道の向こうを見たきり立ち竦んだように動かないのにどうしたと声をかけた。するとその嫁が、確かに荷車を引いて帰ってきたのを見た気がするが何処にも見えないと言いながら戻っ

てくるのを姑が聞いて、胸に思い当たるものがある、本当に見たのかと念を押し、こんな姿でこんな荷を積んでいた、と言うのを聞いて血相を変えた。

こうしてなどいられない、お前はこれから山に行き、あれがなにをしているのか見定めて来ておくれ。一人炭竈に炭を積みに行ったはず。もし今見た姿と同じ姿でいたならば、一部始終をつつみかくさず当人に打ち明けて気付け薬になって呉れ。きっと死んだ女房を想うあまり、あの世に片足入れてるにちがいない。それ急いで急いでと、倅の安否を気遣って親が口走るせかせせよう。弟嫁は山へ続く道すがら、何と言ったらいいのかと思案しながら登っていくと、炭竈のそばに今さっき座ってながめた姿で、荷車に積んだ荷もそのままに、竈の前に蓑を敷きぼんやりと横になっているではないか。

姑の言ったは本当かと背筋を冷たいものがぞくぞくと、心のうちに思案しつつ一声かけてそばに行き、実はこれこれしかじかで来たと言ってきたことを打ち明けて、気を取り直して呉れと涙ながらに語るのを、座りなおして、此のごろ自分が何処にいるのか、何をしてるか、わからなくなつて気がつけば、仕事をしていたり寝ていたりする。いつも睡魔に襲われて、今も荷は積んだものの、車を引く力も無くて休んでいたと涙をこぼした。押したり引いたり手伝いながら家に着くと、倅を案じた親は身代わりに当人の着物を風呂敷包みにして背負い、取るものも取りあえず、そのなり大沢目指して街道を馳せて、沢の家と号す家敷の巫女(いたこ)に真一文字に駆け入って神々に祈ってもらった。

親の心は有難い、その甲斐あつてか、男は当時四十を過ぎたばかりだったが、残された赤子も無事に育って嫁に行き、男の冥途の旅立ちは九十に手の届く頃だった。

「しばが窟(いわや)の髪なが仙人」

関口奥の、しばが窟のというところに、何時とも知れず一人の男が住みついた。深い山懐で己を鍛えていたのか、何処かの戦の残党だったのか、里人と話すことも少なく、誰ともさしたる関わりもなく、唯一人山に籠る余所者を、その風貌から人はいつしか髪なが仙人と渾名した。

ある時、この男の暮らす岩屋にひそかに忍び入り、あろうことか食い物を煮炊きする鍋に糞をたれて来た馬鹿者がいた。人の道から外れた所業に髪なが様は怒りをそのまま憎悪に燃え、里人に次々といたずらをするようになっていた。事の次第はどうであれ、そこが余所者の悲しさか、いたずらをした者を問いただすということも無く日を重ねてゆく内に、ああもされたこうもしたと悪く言われるのは髪なが様ばかりで、里の者達はそのいたずらにたまりかね、終にこの男を科人と捕え十手持ちに引き渡した。やがて大槌代官所から来た役人の手にかかり、境田の一角にあった人畜一つの屠殺場で処刑された。命の終わりにあっても己の名を言い残すことがなく一生をここに終えたものらしく、その石碑は境田に処刑された年号とともに、ただ髪長仙人と残るという。

「あんばさまという坊主」

関口の奥に、あんばさまと人に呼ばれた坊主が住んでいた。この坊主の大変な馬鹿力に人々はいつも恐れ脅え、それをいいことに人里へ出ては好き放題、浜に出ては漁師から海のを掠め盗り、たまりかねて小言を言えば船を流され、皆、ほとんど閉口しきっていた。

ある日、皆してよってたかって、やっとのことで捕まえてぐるぐると簀巻きにして海へぶん流した。それからというもの七日七夜も海が荒れ、船が海へ出せなかった。皆、困りはて、巫女に祈ってもらおうと、この坊主の祟りゆえ供養せよとのこと。その亡骸は湾の中にある大島にあがった。人々はその名もそのままに、あんばさまと呼んで供養した。その石碑が釜谷洞の街道端にあるという。又、関口奥にも小さいながらも石碑があったが、街道普請の時、無くなったという人もいるが定かではない。柳沢の一角に御堂を建て、釜谷洞の女子衆が集まって口説の念仏を申した。時を経て大杉神社の社が出来、九月十六日の祭りの宵宮には女子達が集まって御詠歌をあげて供養をしたのだそうだ。今は昔だが、大杉神社の祭りを、あんばさまの祭りと言うのはこのことからきている。

「棟上げ式（たてまえ）の帯と髪と櫛」

昔、何処かに大工の頭領がいたと伝う。弟子を沢山引き連れ、腕前の良さは列ぶ者がいないほど群を抜き、その界限ではこの頭領を知らぬ者はなかった。ある時、この頭領が大きな屋敷を建てることになった。

地固めから指揮をとり、忙しく働く日々が続いた。遠くまで風によって掛け声が、「あれもつつあこれいぐう（あのあたりにこれがいく）、えんやこらあどっこい。」と、男も女子も手伝いに集まり声をそろえて、どうづき石（どつき石）を吊った綱を四方に力任せに引いては、放す度に鈍く地響きがして次第に敷地は固まっていた。その傍らでは木挽が丸太から板を挽き割り、大工達が墨をうち、ほぞを彫り、様々な家材の上を鉋がすべるたびにひらひらと鉋屑が風に舞った。

仕事は滞りなく進んで、はや棟上げも近々となった頃、何をどう勘違いしたのか肝心要なところを切り違えてしまったことに気が付いた。このままではどうにも棟上げどころか家にならない。弘法も筆の誤り、猿も木から落ちるとか、誰にでも間違いはあるもの、しかしそこが職人氣質というものか、間違えましたと人の前に両手をつくのは死ぬほど辛く、男の面子が許さなかった。さりとて今の間違いを何とも仕様がなくて、日一日と迫り来る棟上げ式に夜も昼も頭領は頭を抱えて座り込んだ。

ところで、この頭領には一人の娘がいた。目ん中に入れても痛くないほどの可愛がりようで、娘も又、大そう利口者で気立てもよい女子であったそうな。親の難儀を見かねたか、人の目を忍んで切り違えた木材を眺めて思案した。そして、「父さん、父さん、あそこをこうすれば、何とかなるのではないか。」と、そっと耳打ちしたのだった。

言われてみればその通り、何と俺としたことが何ゆえにそこに気付かなかったか。ああ有難いと思いつつも、つまらない気質心が禍したか、愚かにも眦（まなじり）上げて、「女子だてらに男の仕事に口出しして、親の面あ汚した。」と、後にも先にも唯一人の一粒種を、物も言わさず手にかけて殺してしまった。

殺してしまったが涙ながらに手を合わせ、愚かな男と許しておくれ、お前の死は決して無駄にはしない。神として末代まで祀り上げる。これから先は神となり、仕事が終いまでうまく行くように守り神となってくれと、死んだ娘の帯と髪と櫛を祝いの棟上げ式の高い屋根におさめて拝んだことから、たてまえには女子の帯と髪と櫛を祀る習わしとなったのだと伝う。

「たてまえの夜の仕来り」

たてまえの祝い事の終わったその夜は、建家を空にしてはならない。柱に屋根板ばかりでは、さりとて泊る訳にもいかない。そんな時は、人間の代わりに臼と杵を運び入れ魔除とするのだと伝う。臼と杵は夫婦なのだと伝う。守り神なのだそうだ。

「隅っこ粥（けえ）」

さて新しい木の香も芳しい家が出来たら、隅っこ粥というのをやる、これは新しい家のひと部屋の四隅にそれぞれ座ってもらい、箸と一椀の粥を渡してまわり食べてもらう。一番早く食べ終わった人が立って、まだ食べている人達から次々と箸と椀を集めてまわる。椀の中の粥が残っていても、そのまま取るもんだと昔から言い伝えられるが、これも由来は分からないが、四隅を清める祝い事の一つとされる。それがとどこおりなく終わって家具を家の中に入れる時も、先ず臼と杵が始まりとされ、入口の土間の片隅に守り神として置くのだそうだ。もし不幸にして万に一つの災難の時、家具を外に出さなければならない時も、先ずはこの臼と杵から出せば願う通りの物は全て持ち出す事が叶うのだと伝う。

「家移り粥と神楽による逆木舞」

家の中の物も全部入った。今日から暮らしが始まる時には、家移り粥というのをやる。これも膳の上には一椀の粥のほかは何も無く、ただこれをすすりこんで箸を置き清めとする。又、日を改め神主や神楽などでも祝い清めてもらう家もあった。笛、太鼓、擦り鉦（てんびら鉦とも）で神楽が舞い込み、舞子は戸口の土間に置いてある臼と杵を庭（家の前）に出し、水につけておいた生の米を搗きながら逆木舞というのをやる。なぜ逆木なのかというと、材木を使う時は自然のまま根元を下に使うものと定められているのだそうだが、何処かに板の一枚ぐらいいは見誤って逆さに使用された木

があるものともいわれ、神にこの誤りの許しを請い何事もないようにと舞われるのだという。生米はいつしか生粉をこねたようにしっとりとなり、これをしとぎという。家の者も、見物に集まった村の衆も、無病息災を祈って眉間から鼻筋にかけて白粉を付けたように、神楽の舞子にしとぎを塗ってもらう。この日の逆木舞に使われる御幣の握りの木は、南向きに生える桃木の枝を使うのだと遙かな昔より言い伝える。

「桃の枝とはんでえ（飯を入れて運ぶ大きなおひつ）」

昔、関谷の大家で皆畑に出て仕事をしていた時の事、使われわらしが昼飯を運べと言いつけられた。大きなはんでえの両方の取手の穴に縄を通し、首から横腹あたりに来るように細工をして門を出た。その道々、何処で折り取ったか、一枝の桃の枝を片手に鼻唄まじりで何気なく調子をとって行く道、知らず知らずにはんでえの縁をたたいて唄っていた。すると何とも不思議にも、先年亡くなった仏様がおおりて来たのだという。それも道理、いたこにはその人なりに様々な道具があり、一つに弓を使ういたこがいるという。口寄の時は、このはんでえに弓をかけ、桃の枝でその縁をたたきながら呪文を唱え、天に御座す八百万の神々の声を聞き、時には冥途へ旅立った者達をこの世に呼ぶことが出来るのだという。先の出来事は、純真無垢なわらしの所業に誘われて、先代が今世恋しさが募って現れたものなのか。日々の生活の中でも、はんでえの縁をたたくもんでねえときつく言われた。

「雲水と上棟祝」

ある時、たてまえがあって、儀式も滞りなく終り、集まった者達は酒や肴で祝いたい、皆上機嫌で膳の小皿の縁を箸でたたいては調子を取り、腰つきもおもしろおかしく、飲む程に酔う程に座は益々賑やかに、祖先が伝えた謡で始まった祝い事は、「この家は如何なる大工が建てたやら、四ツの隅から黄金花咲く、おもしろやおもしろや、この家の建つぞや、昔は白銀にまして柱は黄金なるもの、おもしろやおもしろや」と延々と続き、賑やかな都からは遙かにはなれ、芸者や芸人のいない村里では、祝の度に自らが芸人となり、喉の良い者に手振りの良い者が合わせて座を盛り上げ、若い女子どもに酌をさせて花を添え続て行く。

そんな所へふらりと立ち寄った旅姿の雲水があった。それを見て、酒が言わせるか口々に、祝い事にさそわれて立ち寄ったか、さもしい坊主めがと好き放題に若い者が言いかけるのを、年嵩のいった者が諭し宥めて、雲水を招き呼び、お坊様なら口に合ぬ物もあろうけれど気にとって（気持がゆるすままに）、と膳をすすめた。すると雲水も又、それではと笠を取り、言われるままにその場に座して、仏の御心有難く頂戴すると深々と静かに合掌した。一同顔を見合せて、この不思議な成り行きに一時こそは何とも場違いな心持に駆られて皆神妙な面持ちであったが、いつしか旅の雲水もまじえて祝う祝いの席、酒にまかせて見知らぬ雲水に誰が言い出したか、こんな所で合

うたと言うのも何かの縁、今日の祝に一筆何んなりと書き残してくれと言い出し、周りの者もそうだそうだと言う事になった。大工は一枚板に鉋をかけて雲水の前にさし出した。すると、それではと墨も黒々と一くさり何事か書きあげた。横から覗きこんでいた男が、俺あ字が読めぬから何と書いたか教えてくれと言うと、頷いて衿を正して高々と、この家から千回葬式が出る様にと書いたのだと言う。

その言葉に一同色を失い、乞食坊主が何を言う恩を仇で返す気かとおつめ寄るのを眼光鋭くおしとどめ、「愚か者とはお前達のような者。気を静め、ま一度よく考えよ。一つの夫婦から子が生まれ、続き連なる世の習い。かりそめに一人愛し子を失ったとて、一代の内に出る葬式を指折り数えてみたならば、千回数えるその歳月は、子孫の続く限り末代までも栄えよう。」と言い残し、去り行く姿を両手をついて見送ったと伝う。これも弘法大師であった由。

「石の話」

宮古市、重茂半島の一角に石浜という漁村がある。真向を太平洋に面したこの荒磯の浜には、大小様ざまな丸い石が浜中を埋めつくしている。波にもてあそばれた石は角がとれて、つるつると磨きをかけたように滑らかだ。海の荒れた日は波が転がす石の音が潮騒に混じって、すさまじい勢いでゴロゴロガラガラと海中に轟く度に石は丸くなっていく。

この浜の石には不思議な言い伝えが語られる。ある時、旅に行く雲水がこの浜に立ち寄って、白黒（ゴマ石だったと伝う）の美しい、自然が生み出した丸い石に目を留めてながめつつ、一つの石を懐にして立ち去った。ところが、それからというもの、身体から力が失せていくような心持がして、足運びも重く行くが行く内に、ついに先へ進む事こと出来なくなった。巫女が神に祈っていたが、もしや今来た道中、何か懐に入れて来た物があるかと言われて、彼の浜で一つの石を拾ったと語ると、その石が禍の種と出た。このままではならぬと、今来た道を遠く引き返し、石をもとの浜に納めて旅立ったと言い伝える。

この浜を分断して細い川が海へ注ぐ、そのあたりを境に北と南と分け、漬物石や小使い石にするのなら南の浜から石はもらえ、北の浜の石は決して取ってはならないと昔より語られる。浜から石をもらうなら、この地に暮らす人々を見守るように御座す石神様（石浜神社）に御神酒や銭を持って詣で、これこれのわけで石を頂くと願わなければ神が祟るか身体に不調を来すと伝う。

「石の話 続編」

先の話石浜で話すと土地の人はその通りだと頷いて、近年こんな事があつたと語ってくれた。ここは浜の村だから魚にあ不自由はしないが、野菜類が少なく、車で物売りがよく来るが、ある時、そんな男が帰りがけの駄賃に思いついた商い心を出し

たのか、人の止めるのにも耳をかさずに浜に下り、手あたりしだいに手頃の石をかき集めた。なおも見ていた者達が、やめたが良いと何度も言って、昔からこんな話がこの石にはあるのだと人が言うのを笑いとぼして、後も見ずに行ってしまった。

ところが、それから幾日もしないで、彼の物売りが青い顔して一心に車から石を浜に下しているのに出くわして、何事だと聞いてみた。あれからというもの、帰りの道でも身体の具合がおかしかったが、夜になって布団に入ったら布団の上や腹の上を大きな石がゴロゴロと転げ回り、今こうして来る途中も腹の中に石が入っているような気がしてならなくて、これぞ神の祟りかと恐ろしくなって、取るものもとりあえず浜に石を返しに来た、と弱りきっているのを見て、それ見たことかと笑ったという。昭和も末の頃の話と聞いた。

*この神社の社には、大小様々の荒磯の浜の波が造った美しい石が祀られていて、その中の大石をながめる度に、人はどのようにして浜からこの社まで運んだのかと感心するという、目をみはる程の大きな石のまわりを守るように形の良い石が囲み、古の昔からこの地で海とともに生きた人々を守り続けて今に至る。

「海から来られた如来観音」

今は昔、この家の始まりは山田浦へ船を漕ぎ寄せて上陸した落人だった。この地にたどり来た二人の兄弟の内、兄は遠野に移り南部藩侯から姓を賜わったが、弟よりひらは、この地に止まり、名をあかす事もなく、その土地の名を我が名と定め暮らし、海に出て漁師を業としていた。いつの頃なのか、ある時、網の中で銀鱗のはねるのを力まかせにたぐり寄せると、その中に金無垢の仏像がかかっていた。美しく輝く御姿の如来観音を、主は両手に伏し拝み、天からの授かり物と飲んでみたが、その頃の庶民は黄金など持つことが許されなかった。さりとて我に舞い込んだ宝を、むざむざ人の手に渡してなるものかと思案のあげく、膝をたたいて立ち上がり金色の如来像をつかむと、いきなり「まっとうがい(燈火として松を燃やす台)」にかざしたのだった。

金色の御姿は次第に松火でいぶされて黒く焼け、今や元の輝きはどこにもなかった。

こうして、お家の宝と守り暮らしたが、どこで聞くのか盗人が絶えなくて、この観音様は何度も盗まれたが、不思議なことに盗人はいつも、ある時は道の端に行き倒れとなり、ある時は腹病をおこして七転八倒の憂き目にあうという。何とも奇怪な事が続き、その度に主のもとへ帰って来るものだった。人の間にも如来様の不思議はいつ言うともなく語り伝えられ今に至る。

遙かな昔の話ではあろうが、ある時京都の公卿が恋に落ちた。何ゆえかは知らないが、いつまでたってもその熱い想いを遂げられそうもなかった。二人は思いあまって、どうか願いが叶いますようにと二体の仏像を造って願をかけ、祈りをこめて海に流した。その内の一体が汐の流れに身をまかせたか、流れ流されて北上し、やがて来るも来たり、山田浦沖の漁師の網に入ったのであると昔話は語り伝える。

時が移り、この家が不運に見舞われた折、お家再興を願って主の手をはなれ、海を越えたこの如来観音は明治の時代蝦夷へと渡ったと伝えられていて、今は蝦夷の社で

国宝となって大事に祀られていると聞く。後に某の家では、救って下さった如来様に思いを深くし、身変わりの御姿を造り申し、今も祈り暮らすという。

*里の者は、この如来様に詣でる時は白粉をもって詣でる。その御顔に化粧をしてあげるのだという。ほかの里にも如来様に化粧をする慣習があるかどうかは分からないのだが、もしこの地だけに伝えられているものなら、きっと煙でいぶした御姿のあまりの気のどくさに、せめて顔だけでも美しくあれと始められた事だったのではないだろうか、ついついその勝手な随想が頭をよぎる。関谷では、あまりに白粉をぬりたくって化粧をする女を、如来様のような奴と笑う。

「坂上田村麻呂」

初めに、言うまでもなからうが、坂上田村麻呂は平安初期の武将で、征夷大將軍となり蝦夷を平定し、正三位大納言にのぼった方だという。人はこの三陸には来る事は無かったという方が多いというが、その名を騙る者がいて旅をしていたのかどうかは知らないが、この地にはこんな昔語りが残る。

坂上田村麻呂が仙台にかかった時、古川や小牛田のあたりに、おおたけ丸という豪族が住んでいた。そこに美しい娘がいて田村麻呂は、いつしかその娘に想いを寄せてやがて娘は子を宿した。

産み月が来ると、女子はお前様の子を何にも優る強い者にするために、二十一日の産屋（産の血を清めるための日数）が明けるまでこの部屋に入ってくれるな、と堅くかたく約束させて産屋に姿を消した。

しかし、約束はしたものの、産声を聞いてからはというものの気になって仕方が無い。見るなど言われれば見なくなるのが人心か、とうとうたまりかねて堅く閉ざした戸に手をかけて隙見をして息を呑んだ。あまりの驚きに両の眼玉あこぼれるほど見開き、声も無かった。それもそのはず、部屋の中にあ人の影も無くて、板敷の間には見た事もないほどの大蛇がとぐろを巻く、その中に、まるで生まれたばかりの赤子を愛しむようにかき抱いて、鎌首をもたげてながめているではないか。一体全体、俺が愛しんだ女子は何物かと身の毛もよだち、さしもの武将も気が動転した。

ややもあって、そこに現れたのは彼の女子の姿であったが、口をついで女子の言うには、あれほど約束したものをと、あだあだ（恨み恨み）とながめて見すえていたが、もはや別れの時が来たと武将に告げた。しかし別れる時になると女子は後をふりかえりつつ、伊豆沼に入って行きながら、見よ、その姿は見る見るうちに彼の蛇になって、それでも、せめてま一度顔を見てから別れたいと湖面を割って姿を現わせば、何んと十六の角をささえふりかざした、見るも恐ろしい竜ではないか。田村麻呂はあまりの女子の変わりとはてように驚き恐れて立ち去ったと伝う。

「大浦のオガロ様の鬼」

大浦にあオガロ様（山田湾の先端の霞露ヶ岳）にな、鬼が住んでいた。百六才にもなる奴で、雄、雌だったと伝う。近在の者は、大したこの鬼の悪戯にはこまっていたが、何ともならなかった。鬼あ、ものすごく大きくて、人間が束になってかがってもひとひねりなようなものだった。この鬼を退治したのも先の坂上田村麻呂だったそう。この出来事を後の世に残さんと、雌雄二つの面を彫らせ、関口は長次郎家に熊野権現を祀り奉納したのだと伝う。今もこのお宅には、その時の御面が残るといふ。

「宮古の鍬ヶ崎の鬼」

鍬ヶ崎の浜にあ、たこの浜と言う所があるそうだ。ここにも鬼が住んでいて、みな本当にこまって暮らしていた。

さても、さても、それは気のどく、退治してくれようと名乗りをあげたのも先の武将だったと伝う。ところが鬼の奴あ近づいて来る田村麻呂に先に気が付いた。風の便りに聞き知っていて恐れをなしたか、たちまちのうちに岩穴に隠れて、どんなにしてもなかなか穴から出なかった。すると勇猛果敢にも武将は岩に片足をふんばって、岩穴にへばりついている鬼を引ぎずん出して成敗したと伝う。

その時、片足かけてふんばった岩に田村麻呂の足形がついた。その足形が今も残るといふ。

「十二月十二日は山の神の年とり」

その昔、ある所の女子が十二人の子を生した。およそ女子の姿とははるかに遠く、着飾る事も忘れ、たすき掛けして真赤に力み、野山もいとわず働きづめに働き、艱難辛苦の末に子供を無事育てあげた。その一途な、なりふりかまわぬ、男も顔負けするいでたちと、その心根に感心した神々が、ついにはこの女子を山の神としたのだと当地では伝える。

それゆえ山の神に捧げる御供えの餅は、大きな三つ重ねを十二個の小さな小判形の餅に丸めて、一つの三方の中に全部寄り重ねて納めたり、小さな三つ重ねの御供えを十二、大きな重ね餅の囲りに並べたりしたもの。この山の神に供えた餅は、女子が食べると気性が荒くなるとか、十二人の子を生す、などと言われ、子供の時から嫁入り前の若い女子は鍋の中の味見も出来ないものとされ、形だけでも先ずは男が必ず一口なりとも先に食べて箸を置き、後に家族の者が食べることになっていて、年寄り達はその折も若い者たちに、わらしを十二人も生したらなじょうにすると行って笑ったものだと伝う。十二人の子供のために身を粉にして働き暮らした女子を偲び、そんな苦勞をしないようにと願った祈りから始まった仕来りだったのであろう。

「杣夫と山の神祝」

この日は山に入ることも、刃物を使うことも許されなかった。山の神祝は男だけの祝とされ、この日には山仕事の頭領の家に集まって少しばかりの金を出し合い、男達が背負い駕籠を背に町へ下って酒肴を買い求め、餅搗きをし、仕度には嬢も手伝ったりもしたが、男が先立って取り行った。大体の支度が終わると、関谷橋の袂の山の神、関口は内野へ向う街道端の山の神にて、一同揃って御神酒に「おさんご（お供え米）」をあげて息災を祈った。それから男達の出かけた後に、嬢さんの手ですっかり出来た座敷に上って、おふるまいとなる。床の間の大きなくちひさげ（片口の器）に酒をなみなみと注いで神に捧げ、一同柏手を打って頭をたれて祈った。

それから先ずは頭領と、くちひさげを頭領の前に置き、それから懐回しに御神酒は口がつけられ、一番の下座の者が呑み干す慣わしとなっており、下座の者が下戸だったりすると呑みきれなくて、四苦八苦しは一座の笑いの種となる。飲むほどに酔うほどに座は賑やかに進み、「生まれ落ちた時から、いや親の腹の中にいるうちから臍の穴から覗き聞くのさ。」と笑う。神楽囃子が小皿の縁で調子よくなって、うろおぼえの山の神の舞いを始める者がいたりして、一興をそえて盛りあがる。山仕事をしない家でも山の神の節句は必ずするものだった。

「山の神と神楽舞」

当地には今では黒森神楽しか来る事はないが、昔は御不動様（道の下宅）、早池峰様（坊ノ沢宅）、黒森様（堀合宅）と、小正月のあたりに巡って来た神楽の出し物の中に山の神舞があって、サンヤー、山の神、サンヤーと始まると、見物人は固唾をのんで舞子を見つめる。舞子は腰の刃の鞘と柄を両手で握り肩をいからし、烏帽子に真赤な面に色も鮮やかな着物を重ね、太々と締めたしごきの彩の美しさも人目を引く。昔、新妻は先を争って舞子に着物をさし出し、山の神にあやかるべく使ってもらったのだと聞く。着方も知れないが、着物がしごきと相俟ってひらひらと時には荒々しく、袴の裾さばきも見事に座敷いっぱい跳ねる舞手は、次第に肩で息をつき面を外して、御神酒を受ける頃には顔は赤くほてって汗が光る。舞子は面に開いた二つの目の穴を通して、自分の舞いが客をどれ程ひきつけるのかで踊りの上達を感じるのだと言い、始めから終いまで踊ったら小一時間はかかりますと男は語った。昔から出征兵士の門立ち、嫁が行く時や嫁取りの座敷で見よう見まねで舞い踊られたのは、この神様のように力の限りをつくせとの願いや祈りがこめられていたのにちがいない。

「浪板の長者」

その昔、浪板の、とある家の主は、元旦の朝は夜も明けきらぬ二時頃には起き出して、手づら（手や顔）を洗い清め身支度をし土間に下りて、草鞋を履くとしっかりと

紐を結んで立ち上がった。背中に小さな樽を一つ、若水汲みに外へ出た。遠い昔から若水汲みは鳥つばさが起きないうちに、明けの鳥が鳴かぬうちにと伝えられていたから、鯨の山の神山の清水を若水に迎えるにはこうもしなければ出来ないことだった。山道の暗い木立の中をぶらり提灯一つ伴に連れ、ひたすら一心の思いをこめて駆け登って清い水を我家の神々に捧げんものと、背中に大事に運び幾年もそうして暮らしていた。

今年も皆、家内安全、無病息災であるようにと、一途に祈り汲んだ樽の中の清水の音を聞きながら今来た細道をとって返したが、ある年の水は気が付けばいつのまにか水音が聞こえて来なくなっている。一体どうしたことか、ばちやりともしないが、樽はずっしりと重く感じられ、いぶかしみながらもやがて家に着き、樽を開けてみれば不思議にも樽いっぱい金に変わっていたと伝う。

「お伊勢参り」

伊勢参りに大家の娘達が誘い合って行くことになった。美しく着飾り、うち揃って旅立つ仕度を手伝いながら、その家に奉公する同じ年頃の娘が自分も参詣に行きたいものと思ったが、願いも叶わないものと自らを戒め、せめて我が願いをこめて賽銭をとどけてほしいと、行って来ると門に立つ娘に少ない小遣い銭を全部はたいて託したが、着飾った娘達は一途な奉公人の心をあざけり笑い、お前ごときが、何の願いがあってと蔑みながらも、銭を受け取って旅立った。

やがてお伊勢様に着くと、それぞれが自分勝手な理に合わない願いを山ほど神に祈り、物見遊山にふけては沢山の贅沢な土産をあれもこれもと集めながら、彼の奉公人の娘の事を思い出した。帰りがけにふと見れば人の家の軒先に魚の頭が風にゆれぶら下がっているではないか。大家の家の娘は彼の女子にはこれがちょうどと笑いながら、その頭を外して持って帰った。そして奉公人に向かって言うには、お前の上げた賽銭ではこれがやっとだったと、魚の頭を出した。しかし、その者にとってみれば祈りの心で託したものだから、そう言われれば何にも換えがたい有り難いものであった。魚の頭を柱に下げて朝な夕なに、伊勢の大神宮様、なにとぞ我が身を守りたまえと一心に祈る日々が続いた。

そのうちに誰が言うともなく、あの者が吊るした魚の頭が光っていると言うのを主が聞き咎め、問いただした。すると娘は、神様から頂いたあの魚の頭を朝夕に拝んでおりましたら、不思議なことに金になりましたと言う。そんな事があるものかと行って見れば本当に金無垢になっていたと伝う。神に祈る一念が通じたものであろうと人々は言い、正直者の頭には神が添うと譬え言葉にも残る。

「昔あったあど」

昔、ある所に爺さまど婆さまど孫があったあど

ある日、爺さまあ便所の掃除を、婆さまあ唐臼場の掃除をしたあど。そしたば豆が一粒、コロコロと転がって出た。そこで婆さまあ言うにあ、「爺さま、爺さま、豆え一粒めっけえだが、種にすべえが、昼飯にすべえが。」と聞いた。「なにになに、種ば今度の市に買うべし、昼飯にしとごぜえみす。」と爺さまあ言うもんだがら、婆さまあ、鍋さ一粒の豆え入れて火にかけだ。そうして炒ったっけえ、炒ったっけえ、ひと鍋になった。唐臼さ入れて搗うだっけえ、搗うだっけえ、一臼になったが、粉篩（こおろし）が見つからなかった。

そこで婆さまは、孫を呼んだ。そしたば孫あ、「隣にあ犬がいで、おっかねえけえ、俺あやった（いやだ）。」と言う。「そんだら、その隣さ行って来とごぜえ」。「その隣にあ、牛がいでンモーど啼ぐがら、俺あやった」。「そんだら、向こう隣さ行け、犬も牛もいんねえが。」と言うことになったが、このわらしあ、少しぼんやりな（少し足りない）わらしだったので、婆さまあ、「こりやあ、こりやあ、忘れてえなんねえが、『粉篩、粉篩』ど、しゃべりながら行けよ。」と、門を送り出した。言われた通り、わらしあ、『粉篩、粉篩』と口置かずに言いながら、行く道すがら小川があった。それをひとつ跳びに、どっこいと跳んだとたん、後あ、「どっこい、どっこい」と、そこから先は何処まで行っても「どっこい」で、向こう隣の戸口へ立って、大っきな声で『どっこい』を借してけどごぜえ（借しておくれ）。」と言ったからたまらない。言われた嬢は、何んぼ首をひねっても分からない。とうとう、「俺家にあ、どっこいど言う物あねえがみす。」と言うしか仕方が無い。

そのうち、わらしあ手ぶらで帰って来た。話を聞いて、案の定、役に立たなかったと、婆さまあ、がっかりしながらも、「いいが、いいが。そんだら爺さまあ禪でおろすべえ。」となって、そこで爺さまあ、禪の片端外して粉おろしとはかだった（始まった）。粉あだんだんいいあんばいにおりて、黄色い粉っこがたまってきた頃、爺さまあ、たれるもたれだり、大っきな屁え、ぼんがりたれだ。粉あ、ボーどとんで行って、向けえ山の木さ、ひったりくつついだあきり、ふんばってもふんばってもとれなくて、何んもかんもなぐなってしまったあど。どっとはらい！

*この時、木の股さ行ってひったりついた豆の粉が万作の花と伝う。

「馬鹿なせがれ」

一人の若者がいた。これが又、丁度ない（馬鹿な）奴で、おまけに人の前に出た事もない、外の暮らしなど知らないヤマドリ（野育ち）であった。ある時、この男に婿の口が決まって、婿に行く事になった。

さて、この男は漬物が大好きで、中でもたくわんとなると目が無いほどで、皿に出されればひと皿、井で出されればひと井と、人の分もあれなけれ、たいらげてしまうような行儀に、親はこれだけでも何とかしてから出してやりたいものと、行儀の悪さを案じて飯の後の湯を呑みながら、「これみす、ええな（こら、倅や）、あっちさ行ったら、おこうこ（つけもの）ば、ゆっくり湯っこさ入れて食うもんでえみす。そんねえに急いで食んねえもんでえす。」と言うと、うんうんと頷いて分かったと言う。

それから時が来て婿に行ったが、親は、なじょうなあんばいで暮らしているかと、寝ても起きても気になって仕方が無い。そのうちに里帰りとなった。親は、顔を見るなり駆け寄って、「ええな、ええな、なあど、なあど、よくて暮らすようでござんすと（倅や、倅や、どうだい、どうだい、楽しくやっつけていけるような様子かい）。」と聞くと、馬鹿な倅は、「なにになに、案ずるほどの事でもねえが、なんも、なんも、こねえだも俺あ、『おこうこば、湯っこさ入れて食うもんでえす』と言われだのを思い出してな。風呂さへえって、ゆっくりかんまあす（かき混ぜる）ながら食った。」と、涼しい顔をして笑った。「何んたら、ほに、情けねえ。」と言ったきり、親は顔がら火の出る思いがした。

「馬鹿な娘」

昔、馬鹿な娘がいて、親は哀れがりながら気ままに育てたものだから、野育ちなばかりでなく、躰など知らずに年頃になってしまった。親は行儀作法も知らない娘をながめ、こんな娘でもいつか嫁の口があるかも知れない、と思う度に先を案じて暮らしていた。そんなある日の節句に、すすりだんごを造った折りに、膳に向うやいなや、「あ、俺の好きなすすりだんごだ。」と言うなり座ると、丸い小さなだんごを箸につきさしては、ぱくりぱくりとほおぼり食い、喉につかえさせては目を白黒させてむせかえる姿を見ると、なんぼ娘可愛さの親の欲目で見ても見苦しく、箸を休めて一言。「これこれ、娘や、何んたら食い方をするのだ。すすりだんごというものは一口に食べねえもんでえす。」と言うと、娘もうなずいて分かったと言う。

万事そんな具合で月日は暮れて、やがてそのうちに、ほしいと言われて嫁に出した。その後は、なじょうに暮しているかと案じて気もそぞろであったが、そのうちに里帰りになって顔を見せた。親は取る物も取り合えず、「あんばいは、なじょうなもんでえす。」と、心配を顔にも見せてつめ寄った。が、娘はにっこりと笑って、「何んも案ずる事はねえ、俺あ言われだ通りにしてる。」と言う。親はますます不安になって来た。何を言われた通りにしたのかと聞けば、「せんどなあ（こないだは）、すすりだんごだったから、俺あかっかあ（母さん）に言われた通り、『一つづつ食んねえもんだあ』って言われだのを思い出してな、二つづつ箸にさして食った。」と言う。親は、一つのだんごを一口に食べないようにと言ったつもりだったが、馬鹿娘は、一つではだめなのだと思い違いをして、一口に箸に二個ずつさして食べたらしいのであった。親はあいた口もふさがらず、やっぱりかと、がっかりするしか仕方がなかったと伝う。

「かんだつ雨と旦那」

ある日、用を足して帰る街道で、大粒の雨に雷と、いきなり降り出したかんだつ雨。さっきから天道様あゴロゴロとなっていて、今来るか、まだ来るかと、先を急いでいたのに、雨避けするところも無い街道で、こりあいかんと思わず先へ向かって駆け出

した。すると、行く道端の大きな木の下に、雨宿りをして立っていた少し足りない者が一声かけた。「旦那さん、行く先も雨でござんす」。言われてみれば、それもそうだ、行けども雨宿りのあてのない街道で、なんぼ走っても濡れるなら、俺あお前より馬鹿だったと苦笑いして大木の下に雨宿りした。

「人は、なぜ一年中わらしが産せるようになったのか」

今の世に生きる生き物達にあ、それぞれに産月があって、熊あ冬に入った岩穴の中で仔を産して、春の野山に引き連れて出て来る。

とんびあ二月、三月から巣を造り、びっき(かえる)も早々と、げえらごの卵を産し、どんな生き物も後世を残すために、多くのものが定められた季節に仔を産すが、一年にあ一回きり、猫だって二回産せば終めえだが、人間くらい好い加減な者はない。何故そうになったのか、昔の人あこう言い残す。

その昔、お釈迦様に動物達が産み月をいつ頃にしたら良いかと伺いに集まった。それぞれが秋が良いか、春が良いものか、お釈迦様の申す通りにしようとする順番を待っておった。やがて、そのうちに番は馬に回って来た。

馬は恐れながらと御前に進み出て、かしこまってお言葉を待っておった。するとお釈迦様は馬の姿をながめて、こう申された。「立派な身体をしているお前のこと、いつ産んだとて、その仔は暑さ寒さにも堪えて元気に育つには相違あるまいが、やはり青葉のさす春が良かろう。」と季節を定めて下さった。馬はそれを聞くと大した嬉しがり、春ならば野山は若草がやわやわと顔を出す、生れたばかりの仔も美味しい草が腹いっぱい食べ、親の俺も若草をわりわりと食って乳もいっぱい出るにちがいない。お釈迦様の申す通り、仔を育てるにあ一年中で最も良い季節と、すっかり嬉しくなって思わず後足で立ち上がって、たてがみをふりふりひひんと嘶くと、そこら中を跳ねまわって喜んだあまり、まちがえてお釈迦様を蹴飛ばしてしまった。

その次にいたのは人間であった。人間は両手を前にかしこみかしこみ、ないとぞ、なにとぞ、私にもと平らたくなって頭を地べたにすりつけた。ところがお釈迦様あと言え、先の馬に蹴られた所は何にもたとえようのないほど痛くもあるし、腹も立っていた。そこへ進み出た人間の馬鹿ていねいな姿を見ていると、ますます腹が立ち、物を考えることもめんどろになって来た。どうにでもなれとばかりに「いつだり、かづだり、はずげ(いつなりとどうにでも勝手にしろ)。」と、すっかりへそをまげてしまわれた。それからというもの、人間は春夏秋冬いつでもわらしを産すようになったんだと。どっとはらい。

「分けぐるしいたなご汁」

昔、兄と弟がいた。ある時、二匹のたなごを鍋に入れて煮たが、一匹は大きく、一匹は小さかった。兄は何度も鍋を見てはぶつぶつと、「何んたら分けぐるしいべ。」と

言うのだった。弟は思いあたって、皿に盛る時、兄には大きいものを、自分には小さいものを盛ると、情けないことに小狡くて馬鹿な兄はその時ににっこり笑って、「ああ今こそ分けやすくなった。」と言ったのだと伝う。この話は今の世までも語り伝えられ、数や大きさの合わない物を分配する時など、「こりあほんとに分けぐるしいたなご汁だなあ。」と言って笑い合い。それがそのまま言草（ことぐさ）となって残った。

「となり知らずの餅つき」

昔、ある所に、まるでけちな嬢がいた。隣などにも一口の物も分けるでもなく、懐に入れたらしっかりとかこい、手に持ったら二度とはなさず、その意地きたなさに人は、なんたらごど（なんてひどい）と言いつつ合ったが、当人は人の物あ我が物、我が物も我が物、と空とぼけた。

この嬢がある時餅搗きをすることになった。どこの家でも餅搗きというものは杵の音をさせ、あたり近所にも、「おや、隣は餅搗だよ。」と言われながら搗くのが常だが、ここの嬢はちがっていた。臼と杵で搗いたら、あたりの者に聞かれてしまう。何とか音のしないやり方で餅が搗けないものかと思案のあげくに、いい事を思いついたらしく、そそくさと米を取り回しかまどに火をくべて蒸し鍋をかけた。餅米はその内にほんわりと蒸されて、いいかまりがして来た。にこにこ笑いながら蒸れた米を布袋に入れ、柱に向かって立った。

「杵で搗いたら音がする。せっかくの餅を一口だって人になどやるものか。布袋に入れて柱にたたきつけて餅にすべえ。」との計らいで、汗水たらして何度も柱にからみつけ、たたきつけているうちに、餅米は袋の中でだんだん餅になって来た。嬢は嬉しくて、これで誰にも知られずに一人で食えるというものよ、なにになに誰にもただの一口もやるものかと、今ひとふり、それも一回とたたきつけているうちに、布袋はやぶれて障子をつきやぶって、そのまま隣の家に飛び込んでしまった。いかなけちな嬢でも、こうなれば、あんな苦労した餅搗きだったが、やっぱり隣に分けずにはいられなかったと言うことだ。

「神仏（かみほどけ）がかだらばやったあ（いやだ）」

ある時、隣近所さそい合って、女達あ今年獲れたばかりの米と豆で、すつとぎ搗きをするべえどいうことになった。その中にとても欲張りな嬢がいて、「今年は俺の所の唐臼で搗くべし。」と言うのを聞いて、誰かがしぶい顔をした。「おめえん所では、いつも出来た物を分ける前に、これは我が家の神様の分だの、仏様の分だのと取ってから皆に分けるでねえか。今年もいつものようにするのなら、俺あ一緒に何も出来ねえ。」と釘をさした。秋に実った作物で作ったのを神仏に捧げるのはあたりまえの事、神や仏に何も悪い事はねえが、いきた仏がにくらしい。普通の者なら皆、同じに升で量って持ち寄って、作ったものを人数に分けてからなら、神に捧げようが仏に供えよ

うが勝手だが、この家の嬢はいつもずるくて、出来たばかりのものを、こればオガヘイズ様(唐臼場の守り神)、これは先祖と、自分の家の皿に取り分けてから人数に分けたのだと伝う。神仏の事とて言うにも言えずに今まで来たが、「あげて拝んでわしが食う。」と昔の人は言ったそうだが、その通り。生きた仏とは、小ずるいこの家の嬢の事。

「ひとくち拾い噺」

その一 「粟の話」

人が常食とする五種類の穀物を五穀という。米、麦、豆、黍、稗、なのだそう。粟も入りそうなものだが粟は入らない。その訳はこうである。天に御座します神々が人間の住む地上と天上界を行ったり来たりしていた時代のこと、少彦名の神様が天にお帰りになられる時、粟の穂を伝って天に昇って行かれたことから、穀物と言わないそう。

その二 「稗の話」

小豆と稗粒が寄って話をした折、稗の言うことには、「小豆どんも、豆どんも、俺とお前さん達が羨ましい。」と言うもんだから、「何してよ。」と二人が言うと、稗が言うことには、「俺あこぼれでも、誰にも拾われるでもなく足の下に踏みつけられて、かえり見られることもない。お前さん方あ、一粒落ちてでも爪をたてても拾われる。何んたら羨ましいことよ。」と言った。

その三 「梅の木」

梅の木はお城のお姫様の相なのだそう。植えた所によって、たくさん花を咲かせたり、実を成らせたりする。囲りが広く、陽のあたる所に植えると美しく花開くとさ。

その四 「栗の木」

七日(なぬかび)に雨が降れば、栗の木あお天道様にお灸コをされだと言って、へそを曲げて実入りが無いもんだど。

その五 「馬屋と産人」

馬屋が空いだど、部屋に造りなおしても、若い夫婦の部屋にしてはならない。馬どいうものは産が重く、仔が生れる時の苦しみは一通りではねえ。大事な嫁子が馬に似ては一大事だ。

その六 「犬と産人」

先の馬とはちがって犬は産が軽いから、昔から暦の上でも犬の日に嫁に出したり、腹帯なども犬の日を使い、始めて産婆に行く時も犬の日を選んで行くが吉。

その七 「髪の話」

女子は髪をけずった抜毛を火にくべてはならない。髪は人の血を含み、人の一生で

血を火に入れる時は、死んで茶毘にふす時だけである。何処かに出かけて行く時にそんな事をすれば、百難を除けて通れないそうだ。

その八 「お不動さんの大穴」

関口のお不動さんの奥宮には大穴と里人の呼ぶ穴がある。この大穴に遠い昔、誰かが鶏を入れてやったところ、この鶏は山の向うの金沢に出たと伝う。

その九 「八戸穴」

宮古の浄土ヶ浜から海へ出ると、細長く奥深い穴がある。干潮の時は小船をずっと奥へ進めることが出来るが、次第に暗く狭く、やがては穴は船が入って行けないほどである。しかし波は寄せては奥へと進み岩にあたるのか、砂地の浜に寄せるのか、耳をすませば潮騒は岩に木霊するのか、何処とも知れない奥の方、地の底からでも聞こえて来るような気がしてくる。この穴にもずっと昔、鶏を放したのだと伝う。ところが出るも出たり、その鶏は八戸に出た所から、この穴は八戸穴と呼ばれるようになったと。

その十 「山のべんとうの話」

山仕事に昼飯を持って出る時は、べんとうには箸が入ってないのが常だ。皆、山の木の枝を折りとって食べたもんだ。萩の木やトリッコノキ（クロモジ）などは香もよくて喜ばれた。その箸をそのまま捨てる、狐がかんざしにしてさして出るもんだから、二ツに折ってから捨てると言われた。捨てる時も唯捨てるのではなく、立木の枝にひっかけるようになげ、枝にかかると今夜のおかずはうまいもんが出ると言った。

その十一 「胡瓜の食いくらんこ（競争）」

今は、胡瓜なんというもんは、細いのが店にあ並んでいるが、昔、畑で好き放題伸びた胡瓜は、太くて、太きくて、嘘を言うもんだら、枕にするほどなもんだ。土用の暑気よけにあ、流れる清水に入れておいてよく冷やし、味噌をつけて食ったら何とも言えないもんだ。

そんな昔、二人の男が、「俺のくらい、胡瓜の好きな者もおるまい。」と言い合っているうちに、「俺の方が。」「いいんや、俺が。」と、たかが胡瓜のようなもんで意地を張り合った末、「そんだら、食いくらんこをやるべえ。」「おお、よがべえ。ぬしなんとに負けてたまるか。」と、とうとう山と積まれた胡瓜の前に、ねじり鉢巻で座ることになった。が、一人は、「いかな好きな胡瓜といえど、そんなに食えるもんではねえ。」と心の内に思案した。もう一人は、「兎にも角にも、食わねば減るまい。」とばかりにばくついた。しかし、いくら好きでも知れたもの、とうとう半分もいかないうちに両手を上げて降参した。ところが向こうでは、わきめもふらずに食っている様子。胡瓜あだんだん減っていく。「なじょうにすれば、あの様に次々と腹に入っていくものか。」とながめて感心した。つい寄って行って見ると、考えるも考えたり、片手に金おろしで胡瓜をすりおろしては、ごくごく飲み下ろし、とうとう山と積まれたのを平らげたのには、何とも、皆、声もなかった。

その十二 「借金取りを追い払う方法」

昔、男が金借しから金を借りた。期日は来たが男には払う金が無く、たとえにも敵の前ば通んが借金の前ば通られねえと言う通り、金借しに出合う時や、その家の前を通る時は、肩身をすぼめて小さくなって通っていた。そのうちに借金取りは、何がなんでも返してもらおうと居座って動こうとせず、無い袖はふれないといくら言っても聞いてくれない。相手に困り果てた男は、物も言わずに囲炉裏にどかどかと生の薪をくべた。薪は燃えるはずもなく、ぶすぶすとくすぶり続け、終いにあ部屋ん中は煙で目もあけていられない。居ても立ってもいられない煙に、とうとう重い腰を上げて帰ってしまった。男は、それみろと笑って見送ったと伝う。この事から、あまり煙る囲炉裏の火は借金取りを追い払うような煙だと言ったという。

その十三 「目くされ（目病み）と馬鹿の喧嘩」

目くされと馬鹿が喧嘩した。そのうちに、口のへらない目くされに馬鹿はだんだん旗色が悪くなって来た。言いまくられて、終いには言いようのなくなった馬鹿は、「目くされ！」と悪口を言った。すると目くされは、「おお、俺の目くされは薬いつければ治んが、うぬあ、馬鹿あ死なねえば治るめえ！」と笑い飛ばし、馬鹿あぐうの根も出なかったと。

その十四 「へそまがり」

昔、へそまがりな主がいた。ある年の正月のこと、家の嬢はいつもの通り忙しくて、猫の手も借りたいほどだった。囲炉裏の端に餅を並べたが、座って見ている暇も惜しいので、座っている主に、焼けるのを見ていてくれと頼んだら、二つ返事で受けてくれたから、嬢は安心して外へ出た。これで一つ仕事の手がぬけたとばかり、あっちからこっちへと忙しく動いていると、何処かで餅が焦げ臭い。はっと気が付いて慌てて家の中に飛び込んで見ると、主が、煙をあげて焦げている餅を、腕組みをしてながめている。「何んたらこと。」と嬢が言うと、主は、「お前は餅を見てろと言ったではないか。『焼け』とはこのようにするもの。餅は『あぶれ』と言うもの」。聞いた嬢は、あいた口が塞がらなかった。

その十五 「蚕とマユミの木」

蚕を業とする家では、庭にマユミの木を植えたが良い。何故なら、この木を植えれば蚕のマユが、木の実が成るようにざらんざらんと成るであろうと言うのだそうな

その十六 「穀の息」

ずっと昔の飢饉の時に、わらび根堀りに出かけたが、腹は減るばかりだし、思うように力も出ない。今日はこれまでと関口カッチを下り、カクラの神様の所まで来て一休みした。さてぼちぼちと立った時、屁が「ぼん」と出た。すると、屁が出るとはまだ腹ん中に穀の息があったのか。それならもうひとふんばり掘りに行くべえと、又山へ登って行った。食っての力は穀にあるのだそうだ。

その十七 「もへいのおったて石」

織笠の新田の坂の途中に、その昔、道路のまん中に大石が邪魔をして道がそこだけ細くて、馬も人も通る度に難儀なことだと言われていた。ある時、もへいという男が怪力をもってその大石をおったてて街道を広くしたと伝う。その大石が道の端に今もあり、「もへいのおったて石」と呼ばれている。

その十八 「化粧坂」

その「もへいのおったて石」のある所は、ずい分遠い坂になっている。織笠から船越へ、その昔はこの道を通って出通っていた。その頃、船越へ通う女子がいて家で綺麗に化粧して出るのに、この坂があまりに長くてきついもだから、せっかくの化粧がすっかり落ちてしまうものだった。女子はいつも坂の峠で一息いれ、化粧をしなおして船越へ下って行くものだった。いつしか誰言うとなくこの坂を化粧坂と呼ぶようになったと語り伝える。

その十九 「大浦のへっちょ岩」

漣磯に回って行く途中に、切通しになった所があって、その切り崩したちょうどまんなかあたりに大石が出べそのようにつき出ている、人はこの大石を「へっちょ岩」と呼んでいたそうだ。

その二十 「山の話」

山の茸や木の実を取りに行ったら、全部拾い集めてはならない。野山にあ熊もいれば鹿も鳥もいる。そこに住む生き物達の分を残し、後んのは鳥コの分とか熊のめえと言って残すもんだ。そうでなければ山の神様あ怒って、来年は山のものあ何んも採れなくなると。

その二十一 「炭の火」

囲炉裏や、火鉢に炭の火をおこすと炭あ赤くなって、ぱちんぱりと怒って花火のような時がある。そんな時にあ、「山に居だあまねえすんな。」と言いながら、囲炉裏の灰をぱらぱらと三回ふりかけてやれば、不思議に火はおとなしくなるもんだ。

その二十二 「から傘の話」

昔あここらには傘が無かった。蓑や管笠で雨雪をしのいで暮らして来たが、世は移り傘というものを初めて手にした者が、何ともあんばいの良いものだと、しきりに感心して道中を行った。さて、この者が家に入る時、傘の閉じ方を知らなかった。戸口を開けて、さてさて、やっかいなもんだ。こりあ、一間戸を外して入らねばなんねえもんか、と言うと、なにに、傘どいうもんは脈所があって、そこに当たればたちまち細くなるもんらしい、と言うほど知らなかった。この事から後に、新しい物の使い方を知らない時は、脈所さ当れば良いと言うのが言草（ことぐさ）となって残った。

その二十三 「蚊帳」

又、その昔には蚊帳もなかった時代、蚊の飛ぶ夏ともなれば、わらし達あ、昼の内に青草のヨモギなどを刈って外に吊るしておき、生乾きの草を夕方になると家の前でもうもうといぶし、その煙を箕であおいで戸口を全部開けて家の中に入れ、急いで戸を閉めて蚊よけにした。そんな暮らし方をしていた者が蚊帳を手にしたが、蚊帳の吊り方を知らなかった。どうしたもんかと思案のあげく、吊るも吊ったり、裾を上にも吊ったもんだ。ところが今度は入り方が分らない。こりゃあ難儀なもんだと言いながら、跳ねこんで一夜を過ごしたが、さっぱり役にも立たなくて、朝までにはすっかり蚊に刺されてしまった。

その二十四 「大沢のお春こ」

大沢の山屋にあ、お春というおなごぶりの良い女子がいた。どんなに腹が痛くても、この女子をながめていれば心を奪われ、痛みなどいっぺんにぶっ飛んでしまうほどだったそうで、そのうちに人々にもいつしか、「腹が痛がら山屋さ馳せろ、山屋のお春こ腹薬。」と歌にうたわれたそう。お春こは死んでしまっても歌は残り、痛い所があると人々はお春こを思い出し、歌を思い出したと伝う。

その二十五 「火事の時の火よけ法」

昔の火事は、手のつけようもないほど恐ろしいもんだった。風にあおられて、見る間に燃え広がっていく火の手に、人々はなすすべもなく右往左往した。誰が言ったか、そんな時にあ女子の腰巻を棒にゆわえて火よけにふれば、ふった方には火が来ないと言いつたされていた。山田の大火には、今も語り伝えられるほどのが、昭和二十二年十二月二十九日にもあった。この時の火は山田の中心部をなめつくし、北はびはん（屋号）の倉あたりで止まり、八幡様の下のひんまあす（地名）一帯、南は駅前の酒屋の倉で止まったと伝う。この時、やはり伝え聞いていたのであろう。一人の婆がこの酒屋付近で一心に腰巻をふっていたと語り伝える。

その二十六 「奥かっち(奥山)」

関口奥の千体仏の山の峰のあたりにあ、昔から桐の花が咲く所があるそう。見だあ者は、そのあで（あたり）さ登って行け、そして桐の木を見つけたら根元を掘ってみろ、大した宝が埋まってるそう。だが、この桐の木肌は桐の樹とはまったく別なもので、それでなかなか宝あ掘り当てだ者はいねえそう。

その二十七 「命ど食い物の話」

人は皆、生まれて来る時あ、現世で食う分を定められて生まれて来るそう。若くして逝くのも、百になって逝くのも、生まれ落ちたその時から決まっている。もらって来た穀を食い終った時が、命の終りなんだと。そして葬式の時に棺桶に入れる穀の袋は、来世で食う分なのだそう。

その二十八 「イモリ 一」

昔、イモリは若い女子だったそうだ。ある時、親が危篤だと知らせが届いた。兄弟達、みな取る物もとりに合えず馳せ寄ったが、彼の女子だけは、どの着物を着て行こうかと思いをながめて時をつぶし、終いに黒に朱い模様の着物を着て出かけて行ったが、着いて見れば親あ息をひきとった後で、親の死に際にも間に合わなかった。そんな女子を神様あたひへん怒って、何んたら罰当りな奴だ。一生その姿で暮らせと言うなり、あつという間に女子の姿を黒い体に朱い色を付けたイモリの姿に変えてしまったのだと伝う。

その二十九 「イモリ 二」

先のごとく知らせを聞いて馳せ寄った娘は、一番最後で黒羽織姿だった。時は遅く親は事切れ、涙の中にいた人々に、みっか（野ら着）に草履で馳せ寄ったとて笑う者がいるものか、まして黒羽織とは何の事だ恥を知れとなじられて、脱ごうとしても身にはりついてイモリと変じた。

その三十 「首きり道」

小谷鳥から田の浜へ越える牛転ばしの峠へ行く途中にあるそうだ。悪い事をした者の首を、ここではねたのだと伝う。ここに湧き出る水は汚れているから飲んではならないと伝う。

その三十一 「山賊 一」

関谷の山の中にあ盗人沢と名付けられた所がある。この沢を出て見渡せば、馬木戸から釜谷洞一帯が、大沢へ越えて行くあたりまで一望できる。ここから眺めては、旅人から金品を奪ってはこの山に隠れ、追われれば山から山へと姿をくらましたと伝う。

その三十二 「山賊 二」

けかちの時、食い物の無くなった人々は、皆、海を目指したのだと伝う。海にあ魚が湧いていて食い放題だと、誰が言ったか夢が夢を呼び、浜にさえたどりつけば命あつなると、ただただその言葉にすがって一路海へ向かったが、途中で行き倒れ、そのまま道の端で仏になった。町内にも、そんな人々を葬った餓死者供養石が所々にある。関谷は橋の袂、又、如来堂の沢には無縁となって残っているが、自らも飢饉の時代を乗り越えて今がある。

昔語りは、人肉を喰って生き延びたと伝え、誰が言ったか、「食って苦しいは息苦しい、喰んねえで苦しいは死に苦しい。」と残る。食べすぎたら息も出来ないくらい苦しいもんだが、食べないひもじさは言葉にならない苦しみだ。食べないからといって、ぼっくり逝くわけではない。生きたまま苦しまなければならない、の意味だ。どうせ死ぬなら臍のぬけるくらい喰いたいと続け、今は冗談にしか言わないが、事の始めはけかちなのだと聞く。

命はつないだが住む所もない余所者は、やがて村々を回るほいどう（乞食）や、追

剥になった者もいた。たとえにも、ほいどうは三日やればやめられねえと人は言う。一日、二日はこんな者になり下つたと我が身を恥じて嘆きもするが、日を送る内には恥も外聞もかなぐり捨て、首に袋をぶら下げて軒下に立てば飯にありつける。やってみたらば、こんな楽な道はなく、大樹の蔭に身を寄せて、旅行く人から金品をかすめ盗れば生きても行けると、ある者は山賊や蜘蛛助になって街道を股に掛けた。

その三十三 「山賊 三」

鯨山の山中を越えて旅人が往来していた時代の事、その山裾の馬指野の奥にあ山賊の一党が住んでいた。追剥をしたり、女子をさらったりと、その所業は人々に恐れられ、鯨の山を越えて旅する者達が人から人へ語り伝えた言種（ことぐさ）が今の世まで残っている。「鯨館で泊まるとも、泊まるまいぞえ馬指野に。」と伝う。鯨山の山中に宿があったわけではない。街道を往く時にあ、行き暮れたからと鯨山に登って山道深く分け入るのは、熊が出るか狐が化かすかと恐ろしい気もするかも知れないが、行く者も来る者も鯨山の山の中で寝る事があっても、馬指野に宿をとってはいけないよ。あそこにあ山の獣よりもっと恐ろしい奴が居る。

その三十四 「蔵わらし」

ずい分昔、浪板のある家の話と聞く。蔵も二つも三つも並ぶ、大っきな屋敷のまわりで子供らが集まって、かくれにっこ（おにごっこ）をしたりしていつも遊んでいた。その日も皆集まって、大っきいわらしから小さなまで入り混じって、にぎやかなのを大人がながめて気が付いた。見知らぬ顔が一人いる。お前は誰だと聞くと、ものも言わずに一つの蔵にすり寄って立った。皆して見ていると、そのまま後ずさりして蔵の角を曲がって見えなくなった。追っかけて見たがそれっきりで、皆して不思議にしたが、その後いつとはなく、その家は財が次第次第にかたむいて、人はあれは蔵わらしではなかったかと言い合ったそう。

その三十五 「田植の助っ人」

ある家では、毎年のことながら春の作付の頃の忙しさは猫の手も借りたいほどで、何んぼ稼いでも回り立たない仕事の山に主人はのぼせあげ、つい愚痴るでもないが、朝の神仏への祈りの折りに言うともなく、「今日は何がなんでも田植を終えなければならないのに、何と逆立ちしても終りそうもない、なにとぞ、なにとぞ、この難儀をおまぶりあって下しゃんせ（お守り下さい）。」と深々と頭をたれて手を合わせたが、何に祈った所で仕事は思った通りの事しか出来ず、終りそうもなかった。

昼前の小昼（こびり）のあたり、田の畦に一人のわらしが立ち寄って手伝うと言う。見れば、どこの誰なのか近在では見かけないわらしだったが、何せ猫の手も借りたい忙しさ、飯は食わしてやるから手伝ってくれ、有難い、と言う事になった。さて、このわらしの力のあること、稼ぐこと、物も言わずにただただ行きつ戻りつ、手足は泥だらけにして端から端まで飛び回り、大人顔負けの仕事ぶりに皆たまげて、やれ有難い、地獄で仏とはこの事か、いっぺえ食って昼すぎも又たのむと、大盛の飯を前にすすめて何処から来たとも言わなかった。

午後も、そんなこんなで皆目の回るほどの忙しさだったが、日も暮れかかる頃までには何とか仕事も片づいた。やれ有難いと、主人は、お前のおかげだった、寄って夕飯を食ってから帰ってくれと言うつもりで見回したが、何処を見ても姿もなく、皆して呼んでみたが声も無い。ついにあきらめて家路についた。手足を洗って家に上って驚いた。板敷の間から床の間まで、小さな泥の足跡が続いているではないか。彼のわらしこそ、我が家の守り神だったのだと初めて気が付いたのだと伝う。

その三十六 「座敷わらし 一」

ある家では夜中、家の者が寝静まった頃になると、床の間のある奥座敷で小声で話しをしたり、笑ったりするような、人の気配がすることに気が付いた。床の上に起き上って、耳をすまして顔を見合わせ、そっと仕切り戸を細めに開けて覗いて見ても、誰もいるでもなく、ただ静まりかえっているばかり。不思議な事もあるものだと訝しむ夜が幾夜も続き、主は思案して、座敷一面小糠をまきちらした。一夜明けて見ると、何とそこには小さな子供の足跡が無数についておった。これこそ座敷わらしであろうと言われたが、不思議にもその頃からこの家は財が傾いていった。

その三十七 「座敷わらし 二」

昔、ある所に、川をはさんで上下に家があった。上に住む者あ大っきな家敷を構え、下に住む者あ、軒も傾くほどの貧しさだった。上の主は、煙草盆と金持あ貯めれば貯まったけ、きたなくなるのが世の常か、出すもんなら舌も出さない汚い奴で情の薄い者達だった。それに引き換え、下に住む者あ他人とはこうまでちがうものか、人間万事食うと寝るが出来れば良いと、みなりもかまわない男だったが、情に厚い男だったから人にも好かれた。相性の悪さが仇をするのか、流れる川が二人を遠くするのか、ますます二人の男を遠くして、近くに住みながらも交わることもなく暮らしていた。この川に上と下をつなぐ橋がかけてあり、何処へ続くか道が一筋ついていた。

ある日の夕暮、一人の男が馬車を引いて通りかかると、橋の袂に二人の見なれぬ娘わらしが寄りそい合って泣いているのに出くわした。どうしたと聞いても見たが首をふるばかりで、思いあぐねて何処から来たか聞いてみると、上の家を指して見せたが、上の屋敷にはこんな年頃の娘は無い事を知っていたから、男はますます不思議にした。こんな所で何をしている、もうすぐ日もなくなるぞ、何処へ行くのだと問うと、二人の娘は袂で涙をふきながら、今夜あの家が焼けてしまう、恐ろしくて居られないから、これからあの家に行く所だと指したのは川下の家だった。男はたまげて、急いで橋を渡り、川上の家敷へ飛び込んだ。これこれしかじかと訳を語ると、主は、「何を言うかと思えば馬鹿者め、通りほいどうでも物乞いをする時あ、も少しましな事を言うものだ。ぬしゃあ、今日の稼ぎはなかったか。」と嘲って、相手にもせず追い返してしまった。

ところがその夜、ほんとに家敷から火の手があがり、たちまちのうちに紅蓮の炎につつまれ、跡形も無く灰になってしまった。喩え言葉には、「焼け跡は建つが死に後はたたねえ。」と言われながらも、家敷を建てなおすことは叶わず、やがてその地を遠く去って行ってしまったが、不思議にも川下の彼の家は冬が春になり花が咲くように運

が向いたか、暮らし向きも良くなって知らず知らずに長者と呼ばれるようになったけど、彼の二人の娘の姿を見た者は、誰一人としてなかったと伝う。

その三十八 「片松だけの門松」

当地には正月の門松を片松だけで迎える家がある。ずっと古い昔の話、この家の祖先は雫石から来たのだと伝う。何日かけて山田村に着いたのか、女、子供も居た事だろうし、昔の事ゆえに分難儀な道中だったのであろう。やっと当地に着いたのが晦日の夜であった。何はせずとも先ずは神様が先、新年に着いたのが晦日の夜であった。何はせずとも先ずは神様が先、新年を迎える用意をせねばと心せく思いで支度をした。ところが門松を片松打ったところで鶏が鳴いた。この時から、片松だけで正月を迎えることになってしまい、その門松も外ではなく玄関の内に神棚に向って外を背に飾るのだと聞く。

その三十九 「風よけの鎌」

先の三十八の話伝えるお宅には、門松の他にも風よけの鎌というのが立っていた。庭の角に長い竿の先に鎌をくくりつけ、寄らば切るぞと、やませや秋冬の大風をよけたんだと。

その四十 「やだがらす」

大昔、神武天皇東征の折にあ、天道様が赤い色をした鳥が降りて来て、先に立って道案内をして大した難儀を救ってくれたおかげで、熊野から大和へ行き着くことが出来たんだと。そんな時の鳥あ、三本足の八咫鳥という鳥だったそうだ。

その四十一 「明神様」

この世の人間に初めて船を漕ぐのを教えて下さったのは明神様だったそうだ。この神様のおかげで、人は沖へ出て魚をとるようになったんだと。

その四十二 「神々と名前」

生活の中の神々の名前はさまざまある。山の神やオシラ神、牛馬の神はお蒼前様、お水神様は水、大地の神は地の神、と数ある中で、こんな所に御座す神もある。昔、家の中には唐臼場があって、キスネマブリ（穀物守り）をしている、その神様の名を「オガヘイズ（ズは爺の意）」というのだそうだ。御幣は二本で、形はおかめ様のようによく福々しいのだが、目が細い。それゆえ、目の細い丸顔な人のことを、オガヘイズのようだというのも、この御幣の形からきているのだと。

その四十三 「奥の宮（関口神社）」

子が生まれた。親は大事に育てたが、いつまでたっても口がきけなかった。不憫にもわらしは、耳が不自由だった。親は何とかしてやりたいと思ひあぐねて、ついに不動尊への願掛けを思い立った。藁にもすがる思いとはこの事か、わらしを背負うと奥山の遠さも険しさも忘れて、大樹が茂る小暗い細道をひたすら神の膝元へと心は急い

だ。やがて御前に立つと、ひとくさり思いの丈を打ち明けた。せせらぐ岸边に下りて百粒の小石を袂に入れ、背中のおらしを背負い直し、履物は懐に鳥居をくぐった。なにとぞ、なにとぞと、踏んだ御百度の一念は素足に滲む血でさえも気付かなかった。やがて満願みちて、一息ついて腰を下した。苔を褥に樹の根を枕に、さそわれるままに眠りに落ちゆくと、夢で出合った御姿に、河原にて芋をさがせ、その芋を茹でて耳かきをせよ、きっと願いは叶うであろう、と告げられた。こうして、おらしは耳が聞こえるようになったと伝う。この事から、祭りには家々では河原芋を掘り、神に供え食す習わしが出来た。

その四十四 「祭文語り」

昔、関谷に丞之助という男がいて、これが大した川狩り好きな奴、暇さえあれば川びたりだった。ある時、昔から魔物が棲むと人の伝う淵で、大したくらい（ずい分沢山）、鱒の大漁をしたことがあった。帰る街道で、大漁はしたが俺も河童にも引かれなかったし、ふるだ（がまがえる）にもとられなかったと、恐ろしがる者達の前で高笑いをして去った。それから後の夕暮れ時、この男の家に旅回りの祭文語りが立ち寄って、宿を借してくれと願った。よかろうということになり、なにせ何も楽しみとてない小村のこと、皆して集まって、旅回り芸人なる者は何をうたったか、大したいい声でひとくさり。皆、その声の良さや折り節の良さに、口はあけたっきりで聞き惚れた。誰もがその口元を見つめて感心したが、その中に年いき（老人）がいて、このような所にあんな声の良い祭文語りとは不思議なもの、人の魂をうばう化け物ではねえもんか、ここあ一つと、顎をしゃくって隣の男に、ぬしゃあ、コキミ餅（あわもち）を奴に食わして見ろ、化っけの皮あはがれるもんだと、物陰で入れ知恵をした。密かに皆して、言われた通りにすると案の定、丞之助を狙って来た、うなぎのふったつだったそうだよ。

その四十五 「まやかす蛇」

女は昼寝をする時など、香ぐわしいからと千草の間や、涼しいからと人のいない物陰などで休んではならない。昔、夏の暑い盛りのこと、嬢が一人東まくりの板の間で昼寝をした。しばらくして旦那が気が付くと、何を夢見ているのか、時折小さな声で笑う嬢に男も苦笑して、大平楽な奴めとついさそわれた。が、いつまでたっても止まないどころか、奇妙な事に一人芝居をするようなしぐさで板の間を動き回り、「夢とは言え馬鹿者が、この昼日中・・・。」と、赤面する思いで、起こさなければと思いがながら、昔より伝え聞く話を思い出し、針仕事の上に置かれた物差しをつかむと、嬢の寝ている外へ目を向けた。すると、まくりの下のおの上の一匹のヤマカガシが、尾の先だけ地につけた姿で一本の棒のように立ち上がり、右に左にゆれながら口を大きく開け、赤い舌をちろちろと動かして踊りを踊っているではないか。手にした物差しでひと思いに横なぐりに払うと、それきり蛇はその場にへたりこみ、進むことも退くことも出来ず、のたうつ様はたとえようもなく気味が悪かった。ヤマカガシとは恐ろしい蛇で、人の心をまやかすものだと伝う。

*蛇が上体を起こして進んで来た時は、細い棒などで胴体をひとなぐりすると、

あっけないくらい体が折れてしまうと伝う。

*蛇を殺すと死に際に鳴く事があるのだそうだ。すると何処からともなく、たちまち蛇が集まるという。そんな時には、「なが虫の分際で何しに寄って来た。どら、蛇ばせをかけてやる。」と言いながら、そこらの木の枝に殺した蛇をかける
と、不思議と集まった蛇は姿を消すと伝う。

文化庁委託事業報告書
東日本大震災において危機的状況が危惧される
方言の実態に関する調査研究（岩手県）
別冊・被災地の言語文化資料

2013年（平成25年）3月11日 発行
編者 大野真男（岩手大学）・竹田晃子（国立国語研究所）
発行 岩手大学教育学部日本語学研究室
〒020-8550 岩手県盛岡市上田 3-18-33
tel. 019-621-6513
